

YU-APアニュアルレポート2014

目次

I. はじめに

1. 巻頭言 3

II. 山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）事業全体の概要

1. YU-AP事業全体の概要と目的 7
2. 実施体制 8

III. テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）

1. テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）の概要と目的 11
2. ALポイント認定制度の概要 11
3. 正課外教育プログラムの開発とシラバスフレームの構築 22

IV. テーマⅡ（学修成果の可視化）

1. テーマⅡ（学修成果の可視化）の概要と目的 27
2. 山口大学の教育理念 27
3. 直接評価・間接評価統合型学修成果可視化モデルの構築 28

V. 山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）事業関連イベント報告

1. 山口大学・創基200周年記念 共育ワークショップ2014 31
『みんなで山大の教育（共育）について語ろう！』
2. 山口大学・大学コンソーシアムやまぐち SDセミナー2014 55
『大学職員の企画力が大学を変える』
3. 横浜国立大学主催 大学教育再生加速プログラム（AP）推進フォーラム 77
『学生のための、学生を成長させる「学修成果の見える化」とは
—学生の主体的な学びの確立をめざして—』
(共催：宇都宮大学基盤教育センター、徳島大学、長崎大学 大学教育イノベーション
センター、山口大学 大学教育センター)
4. 山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP） 89
『ルーブリック事例報告ワークショップ
—「山口と世界」授業実践などを例にして—』
5. 山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）キックオフシンポジウム 117
『ラーニングコミュニティの創造を目指して
～山口大学・大学教育再生加速プログラムの挑戦～』

VI. アドバイザー会議

1. 第1回アドバイザー会議 155
(海外アドバイザー：Dr. Mary Deane Sorcinelli, Professor Emeritus, Department of Educational Policy, Research & Administration, University of Massachusetts Amherst, USA)
2. 第2回アドバイザー会議 156
(国内アドバイザー：松下 佳代 京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授)
3. 第3回アドバイザー会議 157
(国内アドバイザー：山田 礼子 同志社大学 教育支援機構副機構長・社会学部 教授、橋本 勝 富山大学 大学教育支援センター 教授)

VII. 他大学訪問調査報告

1. 創価大学訪問調査（ラーニングコモンズSPACE、キャリアセンター） 161

VIII. 各種セミナー等参加報告

1. 大阪大学 教育学習支援センター国際シンポジウム 173
『大学カリキュラムの最前線—新しい時代に求められる能力と教養教育—』
2. 大学コンソーシアム関門 学生交流事業 179
『関門サミットin共立』テーマ：「今、できること—持続への課題—」
3. 広島大学 高等教育研究開発センターシンポジウム 181
『大学と学生』（第1回）
4. 新潟大学 教育・学生支援機構大学教育改革フォーラム 187
『学位プログラムの展開と学修成果の質保証強化
—新潟大学学士力アセスメントシステム（NBAS）の導入—』
5. 高等教育研究会 2014年度大学職員フォーラム 191
『日々の業務を通して見える学生の実状をどう捉えるか』
6. 京都ジョブパーク・京都キャリア教育推進協議会 共催シンポジウム 193
『イベントin京都ジョブパーク』
テーマ：「多様化する学生に向き合う大学キャリア教育の現状と課題
～未就職予備軍の^{レジリエンス}回復力をどう引き出すか？～」
7. 大学コンソーシアム京都 第20回FDフォーラム 195
『学修支援を問う～何のために、何をどこまでやるべきか～』

IX. 活動日誌・編集後記

1. 活動日誌 201
2. 編集後記 205

I. はじめに



巻頭言

瀨瀬厚（教育学生担当副学長）

2015（平成27）年のこの年、山口大学は創基200周年を迎えます。教育・研究・地域貢献を三つの柱として、山口大学は新たな変革に果敢にチャレンジしています。その一つとして、2014年の秋、文部科学省 高等教育再生加速プログラム（AP）のテーマⅠ・Ⅱ複合型に採択され、すでに各種の取組がスタートさせています。周知のように本学は、「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」を教育理念に掲げています。また、山口大学憲章では、学生と教職員とが、共に育み合うことの大切さを意味する「共育」の精神を謳っています。

こうした教育の理念や「共育」の精神をベースにしつつ、本学のAP事業は学長のリーダーシップのもと、副学長（教育学生担当理事）の指揮により、大学教育機構が事業計画に基づき、事業を鋭意推進しております。また、大学教育機構に、Y U - A P（山口大学・大学教育再生加速プログラム）事業推進委員会を設置し、その下にテーマⅠ（アクティブ・ラーニング）とテーマⅡ（学修成果の可視化）、さらには自己点検・評価など、それぞれにタスクフォースを設けています。それにより実効性の高い実施体制を敷き、“学生の声”を活かしていくため、学生スタッフを配置し、協働体制を整備しています。

アクティブ・ラーニングの推進では、さっそくALポイント認定制度を開始しており、新しい修学支援システムの構築が進んでおります。また、学修成果の可視化でも、リテラシー・コンピテンシー測定 of 学修到達度調査及び学修関与度測定 of 学修行動調査が行われました。

現在、これら調査の結果を統合分析する直接評価・間接評価統合型学修成果可視化モデルを構築するために、あらゆる努力がなされております。本事業の狙いのひとつは、学生の「学びの好循環」を創出することです。

これは、① アクティブ・ラーニングの効果で、授業外学修時間が増え、より充実した学びが生まれ出され、② より充実した学びを経験した学生の学修成果を可視化し、③ 学修履歴を集積するポートフォリオに基づき、④ 適切なラーニングアドバイス、キャリアカウンセリングを行い、さらに、個別のオプションサポート受けられるようにすることで、学生の成長をさらに促し、より深い学びにつながるアクティブ・ラーニング（次の段階の①）に発展させるというサイクルのことを指しております。

さらなる本学ならではの特征として、本学におけるアクティブ・ラーニングを授業科目による正課教育だけでなく、授業外学修である正課外教育を含む概念とすることが挙げられます。このような考え方は、正課教育と正課外教育の共創により「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」（教育理念）に基づいた、山口大学生が身につけるべき汎用的な能力を育成することを目指すという、本学独自の視点が含まれており、ここでも正課と正課外の好循環が創出されることを意図しています。

今後とも継続性・実効性に富むAP事業展開を進めていくとともに、学生が徹底して学ぶことのできる環境を整備し、教育再生実行会議で示された新たな方針に対して果敢に取り組み、大学教育改革をより一層加速・推進して参りますご理解を賜れば幸いです。

Ⅱ. 山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) 事業全体の概要

1. YU-AP事業全体の概要と目的

平成26年度「大学教育再生加速プログラム」に採択された本学の取組は、正課教育と正課外教育の共創により、共通教育を中心としたアクティブ・ラーニングを組織的に推進し、次の時代を切り拓く人材として必要な力の修得を保証するため、先進的な学修成果可視化モデルの構築を行い、学生の学びの好循環を創出する。


テーマⅠでは、シラバスの可視化を通じたALポイント認定制度導入、AL推進チームによるFD専門集団形成、教員にインセンティブを与えるALベスト・ティーチャー表彰を行う。テーマⅡでは、学修到達度調査・学修行動調査・ルーブリック評価を全学的に推進し、各データを活かした直接評価・間接評価統合型学修成果可視化モデルを構築する。高等教育機関、学協会等と連携し、学士課程教育の質保証の新しい“カタチ”を示すことは、本学の特色や強みの向上だけでなく、我が国高等教育全体に与える影響は大きい。

本補助事業の全体の目的は、正課教育と正課外教育の共創により、共通教育を中心としたアクティブ・ラーニングの推進と学修成果可視化モデルの構築を行うことである。個々の学生に学びによる成長を実感させることを通して、本学が提供する教育内容の質保証と本学の特色や強みの向上を図るとともに、その成果を我が国高等教育全体に波及させていく。

本学では、全学的組織再編による「山口大学改革プラン」を推進しており、本事業を通して、大学改革を一層加速することが期待されている。本事業では、平成25年度に導入した全学部共通履修型の共通教育改革を起点としたアクティブ・ラーニングの全学的な推進・展開のほか、学修到達度調査、学修行動調査、ルーブリック評価を活用した直接評価・間接評価統合型学修成果可視化モデルの構築、さらには、教学マネジメントを支える教職員能力開発（FD・SD）に取り組む。

これらの取組について、高等教育機関、学協会等と連携を図りながら実施することで、学士課程教育の質保証の新しい“カタチ”を示すことを目指す。

本補助事業の平成26年度の目的は、上記の全体目的を達成するために、本事業を円滑に実施できるよう、学長を中心とした事業学内実施体制を整備し、テーマ別タスクフォース及び自己点検・評価タスクフォースの役割分担により山口大学コンピテンシー「**真意・個性・出会い・夢を発見しはぐくみ・かたちに**する人材の育成」(教育理念)や学修成果可視化モデル開発などの具体的な事業実施に向けた準備を整えることである。

平成26年度「大学教育再生加速プログラム」選定取組 

大学名：山口大学
テーマ：テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）・Ⅱ（学修成果の可視化）複合型

【山口大学改革プランを加速】…山口大学は、正課教育と正課外教育の共創により、共通教育を中心としたアクティブ・ラーニングを組織的に推進し、次の時代を切り拓く人材として必要な力「山口大学生コンピテンシー」の修得を保証するため、先進的な学修成果可視化モデルの構築を行い、学生の学びの好循環を創出する。

事業実施体制の整備

◆学長を中心とした体制
下部の事業実施体制を創出し、学長・副学長のほか、学務部長、教務部長、学生部長、学修部長が一体となって教育実践に取り組む。

学長を中心とした委員会(教育担当学長、教職員・学生)

- 【テーマⅠ】 AL推進委員会
- 【テーマⅡ】 学修到達度調査委員会

YU-AP事業推進委員会

プログラムコーディネーター

正課教育(共通・専門教育)、正課外教育

【学びの好循環】

アクティブ・ラーニング

学修・キャリア診断
学修到達度調査
ルーブリック評価

学修到達度調査
学修行動調査
ルーブリック評価

YUポータルフォリオ
正課教育と正課外教育
学修履歴ファイル

テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）

- ◆共通教育を通じてアクティブ・ラーニング(AL)化(2024年度=40科目以上)
- ◆ALポイント認定によるシラバスの見える化、ベストティーチャー表彰によるインセンティブ
- ◆AL推進専門集団「AL推進チーム」の形成

テーマⅡ（学修成果の可視化）

- ◆学修到達度調査を対象に学修到達度調査・学修行動調査を実施
- ◆授業科目別の成績評価基準の標準化のため、ルーブリック評価を実施
- ◆直接評価・間接評価統合型学修成果可視化モデルの開発

山口大学生コンピテンシー「真意・個性・出会い・夢を発見しはぐくみ・かたちにする人材の育成」(教育理念)

- ★真意…世界や社会にいつも誠意を感じ、過去・現在・未来に思いを測り続ける力【課題発見力・発信力】
- ★個性…自分を発見し、はぐくみ、世界でたったひとつの存在になる力【主体性・状況把握力】
- ★出会い…自分を超越してひとに出会い、出会いをはぐくみ、つながりをつくる力【傾聴力・働きかけ力】
- ★夢…過去を受け継ぎ、未来を見ずながら、夢を発見し、夢をはぐくみ、夢をかたちにする力【創造力・実行力】

【成果指標】	19年度	25年度 目標値	26年度 達成率
アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合	22.7%	100%	100%
学生の授業外学修時間(1週間あたり)	3.88時間	4時間以上	5時間以上
アクティブ・ラーニング型の正課外教育プログラムの実施数(全学対象)	10プログラム	15プログラム	20プログラム

【事業の成果】

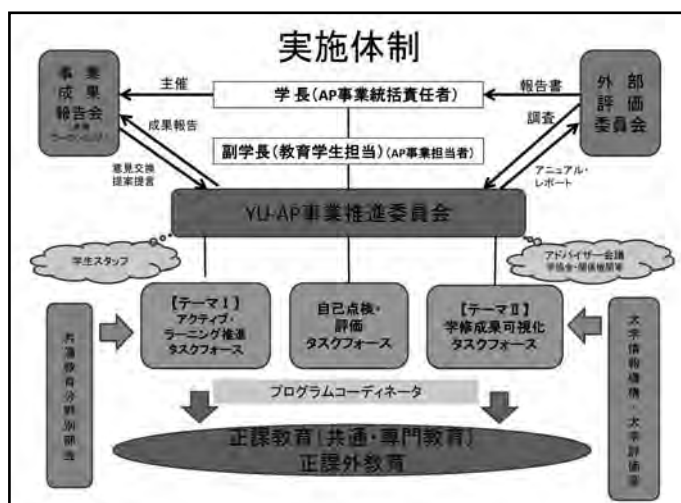
- アクティブ・ラーニングを組織的に推進し、教員の教育力向上と学生の授業外学修時間確保に努め、山口大学改革プランを加速します。
- 個々の学生が学びによる成長を実感できるように、学修成果可視化モデルの構築を行い、学士課程教育の質保証を推進します。

2. 実施体制

① 学内の実施体制

学内の実施体制は、学長を中心に、副学長（教育学生担当）の指揮により、大学教育機構が事業計画に基づき、事業を推進する。大学教育機構に、YU-AP事業推進委員会を設置し、その下に、テーマ別タスクフォース及び自己点検・評価タスクフォースを構成する。専任スタッフとしてプログラムコーディネーターを担う特任教員及び各種事務処理を担う事務補佐員を配置し、事業推進及び補助金の適正執行を行うとともに、“学生の声”を反映させるために、学生スタッフを配置し、協働体制を整備する。

【テーマⅠ】では、共通教育分野別部会を中心に、同一授業科目間の客観的評価基準の開発・検証など、相互研修型FDを図る体制を整備する。また、【テーマⅡ】では、学修データを収集・分析する観点から、大学情報機構、大学評価室との連携を強化し、学生にきめ細かいフィードバックができる体制を整備する。併せて、学修成果可視化モデル開発では高等教育機関、学協会等との連携を行う。学内の実施体制では、実践の場である正課教育（共通・専門教育）及び正課外教育をコーディネートしていくことを重視する。また、国内外から外部アドバイザーを委嘱し、アドバイザー会議の開催を通して各種指導助言を受け、本事業に係る組織的な強化を図る。



② 評価体制

評価体制では、専門家による外部評価のほか、ステークホルダーや学生の意見を取り入れる仕組みを導入し、事業実施のPDCA サイクルが実質化するように工夫する。具体的には、教職員・学生が本学の教育のあり方を対話する場として実績がある「共育ワークショップ」を活用し、新たにステークホルダーを参画させ、事業報告やアンケートを含む意見聴取の場とする。当該ワークショップを毎年開催し、提案された意見等を事業推進に反映し、かつ、改善充実状況をフィードバックする。また、この前後に専門家による外部評価を行い、ワークショップとは違う観点からの評価を与えることで、提案された各種意見等の客観性が担保され、次年度以降の事業推進の目標や課題を明確化できる。

外部評価については、事業2年目から実施する。外部評価委員には事業内容に精通した高等教育専門家のほか、行政・企業関係者を委嘱する。外部評価は、毎年度作成するアニュアルレポート（自己点検・評価報告書）をもとに、外部評価委員が事業の進捗状況や補助金の執行状況の評価する形式で行う。また、最終年度における総合評価に当たっては、事業の成果を明確にするために、申請要件及びテーマ別指標による評価を実施しなければならない。この測定方法の開発について、YU-AP事業推進委員会の下に設置する自己点検・評価タスクフォースで作業を行い、4年目までに公表する。

Ⅲ. テーマⅠ (アクティブ・ラーニング)

1. テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）の概要と目的

アクティブ・ラーニングの対象を授業科目による正課教育に限定せず、授業外学修である正課外教育を含み、より多くの学生・教職員がアクティブ・ラーニングの効果を実感できる環境を整備する。

（1）学生の主体的な学びを促進するアクティブ・ラーニングの実施

- ① 全学部生必修科目『知の広場』『山口と世界』、正課外教育の先駆けである『おもしろプロジェクト』など、学生の発想や行動力を発揮させる教育設計を行っており、共通教育全体のアクティブ・ラーニング化を進める。
- ② シラバスでのアクティブ・ラーニング内容の明記を義務付け、授業及び正課外教育プログラムのアクティブ・ラーニング（AL）度を認定する仕組（ALポイント認定制度）を導入する。併せて、正課外教育プログラム版シラバスフレームを作成し、その学修成果が可視化できるように整備する。
- ③ アクティブ・ラーニングの教育効果について、従来から実施する授業評価アンケートでの授業外学修時間分析のほか、卒業生調査、学生参画型ワークショップの意見等を分析し、改善に活かす。

（2）アクティブ・ラーニング推進のための専門集団の形成

- ① 大学教育機構・学部にFDコーディネータを配置し、アクティブ・ラーニング推進のための専門集団（AL推進チーム）を形成する。AL推進チームの指揮のもと、アクティブ・ラーニングを啓蒙する全学FD・SD研修のほか、スキルアップ向上のためのFD・SDワークショップを実施する。
- ② AL推進体制の整備を通して、アクティブ・ラーニングに関する教育的効果の共通理解や学内におけるグット・プラクティス共有システム（教材・映像共有）を構築する。優れた教育実践を行った教員についてはALベスト・ティーチャー表彰を行う。

2. ALポイント認定制度の概要

本学におけるAL（アクティブ・ラーニング）とは、教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、認知的、論理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図るため、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法（発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等のほか、教室内でのプレゼンテーション、グループワーク等）を指し、その対象として、授業科目による正課教育だけでなく、授業外学修である正課外教育を含む。なお、授業科目においては少なくとも1コマ以上行うものとする。

「ALポイント認定制度」とは、授業時間内で、該当するアクティブ・ラーニングの形態が、どの程度行われているかをポイント化して表示する制度である。授業時間内でのアクティブ・ラーニングの度合をポイント化することで、教員と学生がアクティブ・ラーニングに関する認識を高め、大学教育に求められている主体的な学びの促進に役立てることができる。

ALポイントは、シラバス入力画面にて表示されるアクティブ・ラーニングの6つの形態「グループワーク」「ディスカッション・ディベート」「フィールドワーク（実験・実習、演習を含む）」「プレゼンテーション」「振り返り」「宿題」にチェックを付けることでポイントが算出される。具体的には、「グループワーク」「ディスカッション・ディベート」「フィールドワーク（実験・実習、演習を含む）」「プレゼンテーション」には、授業時間内におけるALが占める時間の割合を示す項目が設けられており、それぞれに【多】＝3点、【中】＝2点、【少】＝1点が設定されている。また、「振り返り」と「宿題」には、それぞれ1点が設定されている。授業各回において、該当するアクティブ・ラーニング形態のすべてをチェックすることとし、各回最大14点となる（複数の形態が同時に行われるとみなす）。授業全体でのALポイントの算出については、【授業各回のAL度の総和 / 授業回数】として、平均値化（小数第一位まで表示、第二位以下四捨五入）として表示する。

ディスカッション・ディベート	【多】＝3点	【中】＝2点	【少】＝1点
フィールドワーク (実験・実習、演習を含む)	【多】＝3点	【中】＝2点	【少】＝1点
プレゼンテーション	【多】＝3点	【中】＝2点	【少】＝1点
振り返り	1点		
宿題	1点		

※【多】、【中】、【少】について

【多】、【中】、【少】は、授業時間内におけるALが占める時間の割合を示す指標である。【多】は、授業時間の50%超、【中】は、授業時間の15%～50%、【少】は、授業時間の15%未満の割合でALが行われていることを表している。

● ALポイント認定制度に関する用語解説

> グループワーク^{1) 2) 3)}

グループワークとは、集団に参加する者が、相互に影響し合う教育的過程であり、集団過程や集団における相互作用など、学修の集団的な側面を強調する学修形態を指す。

> ディスカッション・ディベート^{4) 5)}

ディスカッションとは、集団成員の参加によって、課題について話し合いによる学修を指し、ディベートとは、二組の個人またはグループが一定のルールに従って一つの論題について論争することを指す。

1 日本教育社会学会（編）（1986）『新教育社会学辞典』東洋館出版社

2 細谷俊夫ほか（編集代表）（1990）『新・教育学大事典 第2巻』第一法規出版

3 依田新（監修）（1977）『新・教育心理学事典』金子書房

4 山崎英則・片上宗二（編）（2003）『教育用語辞典』ミネルヴァ書房

5 依田新（監修）（1977）『新・教育心理学事典』金子書房

> フィールドワーク（実験・実習、演習を含む）⁶⁾

フィールドワークとは、ある目的を持ち、一定のフィールドにおいて観察・調査をしたり、資料を直接収集したりする調査活動を指す。ALポイント認定制度では、フィールドワークに、実験室等で行う実験・実習、演習を含む扱いとする。

> プレゼンテーション⁷⁾

プレゼンテーションとは、学修者が他の人々を対象にして行われる言語的・身体的表現活動（模造紙や写真、OHPやビデオ、コンピューターなどのメディアを使った口頭発表のほかにも様々な形態がある）を指す。

> 振り返り^{8) 9)}

振り返りとは、授業内において、その授業の学修内容や学修方法、自分自身の学修状況などを想起し、ノートやワークシート（コメントシートなど）に記入などを行う活動を指す。

> 宿題^{10) 11)}

宿題とは、教員が学修者に対し、一定の学修、作業課題を正規の授業時間以外（授業外学修時間）で行わせ、その結果を定められた期日までに提出するように義務付けたものを指す。

6 山崎英則・片上宗二（編）（2003）『教育用語辞典』ミネルヴァ書房

7 山崎英則・片上宗二（編）（2003）『教育用語辞典』ミネルヴァ書房

8 日本教育工学会（編）（2000）『教育工学事典』実教出版

9 山崎英則・片上宗二（編）（2003）『教育用語辞典』ミネルヴァ書房

10 日本教育社会学会（編）（1986）『新教育社会学辞典』東洋館出版社

11 依田新（監修）（1977）『新・教育心理学事典』金子書房

AL(アクティブ・ラーニング)ポイント認定制度 シラバス入力マニュアル

● ALポイント認定制度の概要

ALについて

ALとはアクティブ・ラーニングの略称です。本学におけるALとは、「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、認知的、論理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図るため、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法(発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等のほか、教室内でのプレゼンテーション、グループワーク等)を指し、その対象として、授業科目による正課教育だけでなく、授業外学修である正課外教育を含む。なお、授業科目においては少なくとも1コマ以上行うものとする。」としています。

ALポイント認定制度について

ALポイント認定制度とは、授業時間内で、該当するアクティブ・ラーニングの形態が、どの程度行われているかをポイント化して表示する制度です。

ALポイント認定制度の導入について

授業時間内でのアクティブ・ラーニングの度合をポイント化することで、教員と学生がアクティブ・ラーニングに関する認識を高め、大学教育に求められている主体的な学びの促進に役立てることが出来ます。

ALポイントの算出方法について

ALポイントは、シラバス入力画面にて表示されるアクティブ・ラーニングの6つの形態「グループワーク」「ディスカッション・ディベート」「フィールドワーク(実験・実習、演習を含む)」「プレゼンテーション」「振り返り」「宿題」にチェックを付けることでポイントが算出されます。

具体的には、「グループワーク」「ディスカッション・ディベート」「フィールドワーク(実験・実習、演習を含む)」「プレゼンテーション」には、授業時間内におけるALが占める時間の割合を示す項目が設けられており、それぞれに【多】=3点、【中】=2点、【少】=1点が設定されています。「振り返り」と「宿題」には、それぞれ1点が設定されています。

授業各回において、該当するアクティブ・ラーニング形態のすべてをチェックすることとし、各回最大14点となります(複数の形態が同時に行われるとみなす)。授業全体でのALポイントの算出については、【授業各回のAL度の総和 / 授業回数】として、平均値化(小数第一位まで表示、第二位以下四捨五入)として表示します。

● ALポイント認定制度の用語について

グループワーク

グループワークとは、集団に参加する者が、相互に影響し合う教育的過程であり、集団過程や集団における相互作用など、学修の集団的な側面を強調する学修形態を指します。

ディスカッション・ディベート

ディスカッションとは、集団成員の参加によって、課題について話し合いによる学修を指し、ディベートとは、二組の個人またはグループが一定のルールに従って一つの論題について論争することを指します。

フィールドワーク(実験・実習、演習を含む)

フィールドワークとは、ある目的を持ち、一定のフィールドにおいて観察・調査をしたり、資料を直接収集したりする調査活動を指します。ALポイント認定制度では、フィールドワークに、実験室等で行う実験・実習、演習を含む扱いとします。

プレゼンテーション

プレゼンテーションとは、学修者が他の人々を対象にして行われる言語的・身体的表現活動(模造紙や写真、OHPやビデオ、コンピューターなどのメディアを使った口頭発表のほかにも様々な形態がある)を指します。

振り返り

振り返りとは、授業内において、その授業の学修内容や学修方法、自分自身の学修状況などを想起し、ノートやワークシート(コメントシートなど)に記入などを行う活動を指します。

宿題

宿題とは、教員が学修者に対し、一定の学修、作業課題を正規の授業時間以外(授業外学修時間)で行わせ、その結果を定められた期日までに提出するように義務付けたものを指します。

【多】、【中】、【少】

【多】、【中】、【少】は、授業時間内におけるALが占める時間の割合を示す指標です。【多】は、授業時間の50%超、【中】は、授業時間の15%～50%、【少】は、授業時間の15%未満の割合でALが行われていることを表わしています。

<参考資料>

細谷俊夫ほか(編集代表)(1990)『新・教育学大事典 第2巻』第一法規出版
日本教育社会学会(編)(1986)『新教育社会学辞典』東洋館出版社
日本教育工学会(編)(2000)『教育工学事典』実教出版
山崎英則・片上宗二(編)(2003)『教育用語辞典』ミネルヴァ書房
依田新(監修)(1977)『新・教育心理学事典』金子書房

● ALポイント認定制度導入後におけるシラバス入力画面の変更点について

- これまでのシラバス入力画面にアクティブ・ラーニングの項目が追加されます。
- アクティブ・ラーニングの各項目ごとに設けられている【□】にチェック(【☑】)を入れて頂くことで、ALポイントが算出されます。

新項目の追加					
AL(アクティブ・ラーニング)					
グループワーク	ディスカッション・ ディベート	フィールドワーク (実験・実習、演習を含む)	プレゼンテーション	<input type="checkbox"/> 振り返り	<input type="checkbox"/> 宿題
<input type="checkbox"/> 多(授業時間の50%超)	<input type="checkbox"/> 多(授業時間の50%超)	<input type="checkbox"/> 多(授業時間の50%超)	<input type="checkbox"/> 多(授業時間の50%超)		
<input type="checkbox"/> 中(授業時間の15%~50%)	<input type="checkbox"/> 中(授業時間の15%~50%)	<input type="checkbox"/> 中(授業時間の15%~50%)	<input type="checkbox"/> 中(授業時間の15%~50%)		
<input type="checkbox"/> 少(授業時間の15%未満)	<input type="checkbox"/> 少(授業時間の15%未満)	<input type="checkbox"/> 少(授業時間の15%未満)	<input type="checkbox"/> 少(授業時間の15%未満)		

	項目	内容	授業外指示	授業記録	
第1週	AL(アクティブ・ラーニング)				
	グループワーク	ディスカッション・ ディベート	フィールドワーク (実験・実習、演習を含む)	プレゼンテーション	
	<input type="checkbox"/> 多(授業時間の50%超)	<input type="checkbox"/> 多(授業時間の50%超)	<input type="checkbox"/> 多(授業時間の50%超)	<input type="checkbox"/> 多(授業時間の50%超)	
	<input type="checkbox"/> 中(授業時間の15%~50%)	<input type="checkbox"/> 中(授業時間の15%~50%)	<input type="checkbox"/> 中(授業時間の15%~50%)	<input type="checkbox"/> 中(授業時間の15%~50%)	
	<input type="checkbox"/> 少(授業時間の15%未満)	<input type="checkbox"/> 少(授業時間の15%未満)	<input type="checkbox"/> 少(授業時間の15%未満)	<input type="checkbox"/> 少(授業時間の15%未満)	
第8週	項目	内容	授業外指示	授業記録	
	AL(アクティブ・ラーニング)				
	グループワーク	ディスカッション・ ディベート	フィールドワーク (実験・実習、演習を含む)	プレゼンテーション	
	<input type="checkbox"/> 多(授業時間の50%超)	<input type="checkbox"/> 多(授業時間の50%超)	<input type="checkbox"/> 多(授業時間の50%超)	<input type="checkbox"/> 多(授業時間の50%超)	
	<input type="checkbox"/> 中(授業時間の15%~50%)	<input type="checkbox"/> 中(授業時間の15%~50%)	<input type="checkbox"/> 中(授業時間の15%~50%)	<input type="checkbox"/> 中(授業時間の15%~50%)	
<input type="checkbox"/> 少(授業時間の15%未満)	<input type="checkbox"/> 少(授業時間の15%未満)	<input type="checkbox"/> 少(授業時間の15%未満)	<input type="checkbox"/> 少(授業時間の15%未満)		
AL(アクティブ・ラーニング)ポイント		6.0ポイント			

チェック(【☑】)をした項目に応じて、ALポイントが算出されます。

シラバス入力画面イメージ

① チェック前の項目は、【□】になっています。

② マウ斯卡ーソルを【□】に合わせて、
クリックをすると【☑】チェック状態になります。

	項目	内容	授業外指示	授業記録	
第1週	AL(アクティブ・ラーニング)				
	グループワーク	ディスカッション・ ディベート	フィールドワーク (実験・実習、演習を含む)	プレゼンテーション	<input type="checkbox"/> 振り返り <input type="checkbox"/> 宿題
	<input type="checkbox"/> 多(授業時間の50%超)	<input type="checkbox"/> 多(授業時間の50%超)	<input type="checkbox"/> 多(授業時間の50%超)	<input type="checkbox"/> 多(授業時間の50%超)	
	<input type="checkbox"/> 中(授業時間の15%~50%)	<input type="checkbox"/> 中(授業時間の15%~50%)	<input type="checkbox"/> 中(授業時間の15%~50%)	<input type="checkbox"/> 中(授業時間の15%~50%)	
	<input type="checkbox"/> 少(授業時間の15%未満)	<input checked="" type="checkbox"/> 少(授業時間の15%未満)	<input type="checkbox"/> 少(授業時間の15%未満)	<input type="checkbox"/> 少(授業時間の15%未満)	
	項目	内容	授業外指示	授業記録	
第8週	AL(アクティブ・ラーニング)				
	グループワーク	ディスカッション・ ディベート	フィールドワーク (実験・実習、演習を含む)	プレゼンテーション	<input type="checkbox"/> 振り返り <input type="checkbox"/> 宿題
	<input checked="" type="checkbox"/> 多(授業時間の50%超)	<input checked="" type="checkbox"/> 多(授業時間の50%超)	<input type="checkbox"/> 多(授業時間の50%超)	<input checked="" type="checkbox"/> 多(授業時間の50%超)	
	<input type="checkbox"/> 中(授業時間の15%~50%)	<input type="checkbox"/> 中(授業時間の15%~50%)	<input type="checkbox"/> 中(授業時間の15%~50%)	<input type="checkbox"/> 中(授業時間の15%~50%)	
	<input type="checkbox"/> 少(授業時間の15%未満)	<input type="checkbox"/> 少(授業時間の15%未満)	<input type="checkbox"/> 少(授業時間の15%未満)	<input type="checkbox"/> 少(授業時間の15%未満)	
	ALポイント	6.0ポイント			

該当する項目【□】をクリックして、チェック【☑】してください。

AL(アクティブ・ラーニング)ポイント認定制度 シラバス閲覧マニュアル

● ALポイント認定制度の概要

ALについて

ALとはアクティブ・ラーニングの略称です。本学におけるALとは、「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、認知的、論理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図るため、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法(発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等のほか、教室内でのプレゼンテーション、グループワーク等)を指し、その対象として、授業科目による正課教育だけでなく、授業外学修である正課外教育を含む。なお、授業科目においては少なくとも1コマ以上行うものとする。」としています。

ALポイント認定制度について

ALポイント認定制度とは、授業時間内で、該当するアクティブ・ラーニングの形態が、どの程度行われているかをポイント化して表示する制度です。

ALポイント認定制度の導入について

授業時間内でのアクティブ・ラーニングの度合をポイント化することで、教員と学生がアクティブ・ラーニングに関する認識を高め、大学教育に求められている主体的な学びの促進に役立てることができます。

ALポイントの算出方法について

ALポイントは、シラバス入力画面にて表示されるアクティブ・ラーニングの6つの形態「グループワーク」「ディスカッション・ディベート」「フィールドワーク(実験・実習、演習を含む)」「プレゼンテーション」「振り返り」「宿題」にチェックを付けることでポイントが算出されます。

具体的には、「グループワーク」「ディスカッション・ディベート」「フィールドワーク(実験・実習、演習を含む)」「プレゼンテーション」には、授業時間内におけるALが占める時間の割合を示す項目が設けられており、それぞれに【多】=3点、【中】=2点、【少】=1点が設定されています。「振り返り」と「宿題」には、それぞれ1点が設定されています。

授業各回において、該当するアクティブ・ラーニング形態のすべてをチェックすることとし、各回最大14点となります(複数の形態が同時に行われるとみなす)。授業全体でのALポイントの算出については、【授業各回のAL度の総和 / 授業回数】として、平均値化(小数第一位まで表示、第二位以下四捨五入)として表示します。

● ALポイント認定制度の用語について

グループワーク

グループワークとは、集団に参加する者が、相互に影響し合う教育的過程であり、集団過程や集団における相互作用など、学修の集団的な側面を強調する学修形態を指します。

ディスカッション・ディベート

ディスカッションとは、集団成員の参加によって、課題について話し合いによる学修を指し、ディベートとは、二組の個人またはグループが一定のルールに従って一つの論題について論争することを指します。

フィールドワーク(実験・実習、演習を含む)

フィールドワークとは、ある目的を持ち、一定のフィールドにおいて観察・調査をしたり、資料を直接収集したりする調査活動を指します。ALポイント認定制度では、フィールドワークに、実験室等で行う実験・実習、演習を含む扱いとします。

プレゼンテーション

プレゼンテーションとは、学修者が他の人々を対象に行われる言語的・身体的表現活動(模造紙や写真、OHPやビデオ、コンピューターなどのメディアを使った口頭発表のほかにも様々な形態がある)を指します。

振り返り

振り返りとは、授業内において、その授業の学修内容や学修方法、自分自身の学修状況などを想起し、ノートやワークシート(コメントシートなど)に記入などを行う活動を指します。

宿題

宿題とは、教員が学修者に対し、一定の学修、作業課題を正規の授業時間以外(授業外学修時間)で行わせ、その結果を定められた期日までに提出するように義務付けたものを指します。

【多】、【中】、【少】

【多】、【中】、【少】は、授業時間内におけるALが占める時間の割合を示す指標です。【多】は、授業時間の50%超、【中】は、授業時間の15%～50%、【少】は、授業時間の15%未満の割合でALが行われていることを表わしています。

<参考資料>

細谷俊夫ほか(編集代表)(1990)『新・教育学大事典 第2巻』第一法規出版
日本教育社会学会(編)(1986)『新教育社会学辞典』東洋館出版社
日本教育工学会(編)(2000)『教育工学事典』実教出版
山崎英則・片上宗二(編)(2003)『教育用語辞典』ミネルヴァ書房
依田新(監修)(1977)『新・教育心理学事典』金子書房

● ALポイント認定制度導入後における履修画面の変更点

- これまでの履修登録画面にALポイントの項目が追加されます。
- ALポイントの項目は、「教員名」と「追加ボタン」の間に表示されます。
- 注意: ALポイントを科目の単位数と間違えないようにお願いします。

● ALポイントの考え方について

Q. ALポイントはどのようなことを示しているのですか？

A. ALポイントは、アクティブ・ラーニングの割合を示すものです。つまり、ALポイントの高い授業ほどALの頻度が高いということになります。ALポイントの高低が当該授業の質に直接的に結びつくものではありませんが、ALポイントの明示を通して、アクティブ・ラーニングを通じた学生の主体的な学びが促進されることを趣旨としています。

履修登録画面のイメージ

火曜2眼											
	学部名	時間割コード	科目名	教員名	AL (アクティブ・ラーニング) ポイント		単位数	選択区分	定員	登録者数	備考
1	共通教育	後期前半 12345	〇〇学	教員 太郎	4.0	追加	1	選択			空きあり
2	共通教育	後期前半 12356	××入門	教員 太郎	5.2	追加	1	選択			空きあり
3	共通教育	後期前半 12323	□□概論	教員 太郎	3.3	追加	1	選択			定員充足

履修登録画面に、その科目のALポイントが表示されます。

シラバスのイメージ

● ALポイント認定制度導入後におけるWEBシラバス画面の変更点

- WEBシラバスの最上部にある基本情報にALポイントの項目が追加されます。
- ALポイントの項目は、授業区分の右に表示されます。
- 注意: ALポイントを科目の単位数と間違えないようにお願いします。
- WEBシラバス、中段にある「授業計画」の欄に【全体】、【週単位】に続いて、【ALポイント】の項目が追加されます。

授業区分の右に、その科目のALポイントが表示されます。

開講年度	開講学部等		
2015	共通教育		
開講学期	曜日時間	授業区分	AL(アクティブ・ラーニング)ポイント
前期	水7~8	講義	6.0ポイント
時間割番号	科目名[英文名]	単位	
1001050001	〇〇〇〇〇学[〇〇〇〇〇〇〇]	1	
担当教員[ローマ字表記]			
教員 太郎 [KYOIN Taro]			
授業科目区分	対象学年	教(学教(障害除く)・実践・情報)・経(221-)・2年次(教(学教(障害)))3年次以上履修不可	対象年次
			1~

授業計画欄にALポイントが表示されます。

【授業計画】

【全体】

学内の各授業科目の授業計画ページにて授業計画を表示する。授業計画の印刷は授業計画ページで印刷可能とする。

【週単位】

項目	内容	授業科目	単位
教1	大要とは	大要で学ぶ意義や目的の大学が置かれた社会状況について学ぶ。	大要時代に適合した内容を学ぶことにより、学生は自ら学習を進め、自ら学ぶ力を身につける。
教2	大学の役割と学生	職業人と大学生の役割の重要性を学ぶ。	職業人と大学生の役割の重要性を学ぶことにより、学生は自ら学習を進め、自ら学ぶ力を身につける。
教3	学内外の連携による学習	学内外の連携が、多くの知識を習得して、社会人として心構え、生き方などを学ぶ。	学内外の連携が、多くの知識を習得して、社会人として心構え、生き方などを学ぶ。
教4	学内外の連携による学習	学内外の連携が、多くの知識を習得して、社会人として心構え、生き方などを学ぶ。	学内外の連携が、多くの知識を習得して、社会人として心構え、生き方などを学ぶ。
教5	キャリア教育	キャリア学習の重要性を学ぶ。	キャリア学習の重要性を学ぶ。
教6	英語、留学、国際交流	国際社会のグローバル化に伴って、英語の重要性を学ぶ。また、留学や国際交流の重要性を学ぶ。	国際社会のグローバル化に伴って、英語の重要性を学ぶ。また、留学や国際交流の重要性を学ぶ。
教7	職業倫理とキャリア	職業倫理の重要性を学ぶ。また、キャリア学習の重要性を学ぶ。	職業倫理の重要性を学ぶ。また、キャリア学習の重要性を学ぶ。

【履修計画】

履修計画は学内の各授業科目の履修計画ページにて履修計画を表示する。履修計画の印刷は履修計画ページで印刷可能とする。

【履修計画】

履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画
履修計画(履修計画)	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画
履修計画(履修計画)	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画
履修計画(履修計画)	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画
履修計画(履修計画)	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画
履修計画(履修計画)	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画	履修計画

3. 正課外教育プログラムの開発とシラバスフレームの構築

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、授業外学修である正課外教育においてもアクティブ・ラーニングを推進している。本年度は、スチューデント・リーダー・プログラム（SLP）と題して、正課外教育を構築し、3月10日（火）と3月26日（火）に行った。第1回目は、富山大学 橋本勝教授（YU-APアドバイザー）を招き、「大学参画型FDってなに？～大学教育を楽しくするには～」をテーマに設定し、アクティブ・ラーニングであるグループディスカッションを活用しながら学生参画型FDについて参加者同士で理解を深めた。第2回目では、新日鉄住金ソリューションズ(株) 中澤二郎氏（外部評価委員）に講師を依頼し、「ジローさんの迫熱教室～できないを『デキル』に変わるには～」と題して、講師、学生双方から活発な対話、意見交換が行われる迫熱教室が開催された。



正課外教育プログラムにおいてもAL（アクティブ・ラーニング）ポイント認定制度を採用し、ALポイント認定制度におけるALポイント算出方法に基づき、各プログラムのALポイントを算出している。第1回SLP及び第2回SLPでは、グループワーク、ディスカッション・ディベート、プレゼンテーション、そして振り返りを用いており、第1回目、第2回目ともに7.0程度のALポイントになっている。

今後の課題として、到達目標に挙げている本学教育理念に基づいた4つの力について、より具体的かつ、学生にも伝わりやすいものにする必要がある。また、ALポイントについても、単純に数値を表示する以外の試みも検討されるべきである。

正課外教育プログラム実施概要（シラバス）			
プログラム名	第1回スチューデント・リーダー・プログラム		
実施日	2015年 3月 10日		
実施場所と定員	共通教育棟2階 演習室21 (定員) 15名		
担当	(部署) 大学教育機構 大学教育センター (Y1-61階連室) (担当者) 林透・河島広幸		
プログラム概要	本学では、教職員・学生が本学の教育のあり方に対話する場として実績のある「共育ワークショップ」が学生の参画を得て開催されてきました。こうした学生参画の取り組みをより有意義なものにするために、富山大学 大学教育支援センター 橋本勝教授からアドバイスをいただきながら、実効性や継続性に富む学生参画の取り組みについて参加者とともに理解を深めたいと思います。		
到達目標に関する各項目の重要度 ◎：非常に重要 ○：重要 無印：考慮する (丸印は計2つまで)	【A】世界や社会にいつも驚きを感じ、過去・現在・未来に問いを発信し続ける力		
	【B】自分を発見し、はぐくみ、世界でたったひとつの存在になろうとする力	○	
	【C】自分を超えてひとに出会い、出会いをはぐくみ、つながりを築く力	◎	
	【D】過去を受け継ぎ、現実を見据えながら、夢を発見し、夢をはぐくみ、夢をかたちにする力		
	ALポイント 認定制度 【70ポイント】	グループワーク	中
		ディスカッション・ディベート	中
		フィールドワーク（実験・実習、演習を含む）	
プレゼンテーション		中	
振り返り 宿題		有	
プログラム詳細 (スケジュール等)	10:00～10:05 ・ 趣旨説明 林透 大学教育センター准教授 10:05～10:35 ・ 講演「学生と楽しむ学生参画型FDの極意、教えます」 橋本 勝 富山大学 大学教育支援センター教授 10:35～11:05 ・ プレゼンテーション「山口大学における学生参画型取組の紹介 ～山大のデキルを創ります！～」 YC-CAM (理学部3年 杉元 茜・経済学部2年 奥田 真也) 11:05～11:55 ・ グループディスカッション 11:55～12:00 ・ クロージング 林透 大学教育センター准教授		
山口大学生スタンダード	このプログラムのALの特徴		
	このプログラムは、グループディスカッションの時間が全体の約40%を占めており、比較的メインのALとなっています。まずは、講演と学生によるプレゼンテーションを通して、インプットと思考の活性化を行い、自分なりの言葉で、参加者（学生）同士の活発なグループディスカッションを展開することをねらいとしています。また、このプログラムは、グループディスカッションなどのALを用いることで、新しい気づきや初めての出会いを促し、「自分を超えてひとにひとに出会い、出会いをはぐくみ、つながりを築く力」を涵養することを非常に重要視しています。		

IV. テーマⅡ（学修成果の可視化）

1. テーマⅡ（学修成果の可視化）の概要と目的

学生の目的や意識の多様化が進み、個々の学生の学修進度やキャリア意識に応じた組織的な学修支援が必要不可欠である。学修成果の多角的な可視化を図り、学修支援及びカリキュラム改善に活かす体制を強化する。

（1）学修成果可視化モデル構築のための多角的取組の実施

- ① リテラシー・コンピテンシー測定 of 学修到達度調査及び学修関与度測定 of 学修行動調査、授業科目間の成績評価基準の平準化を目的としたルーブリック評価を全学的に推進し、これらのデータを統合分析する直接評価・間接評価統合型学修成果可視化モデルの構築を行う。
- ② 学修成果可視化モデルで収集した学生データは、従来から実施する授業評価アンケートでの授業外学修時間分析のほか、卒業生調査、学生参画型ワークショップによる意見等と分析し、ナンバリング等の教育課程体系化の検証に活かす。

（2）学修成果測定を支える教学マネジメントの強化

- ① エンロールメントマネジメント（EM）に基づくIR（Institutional Research）を機能させ、学修データを収集分析し、学修支援やカリキュラム改善に活せる教職員育成（FD・SD）を実施する。
- ② 教学マネジメントの要として、プログラムコーディネータのほか、ラーニングアドバイザー、キャリアカウンセラーを配置し、本取組の実質化を図る。

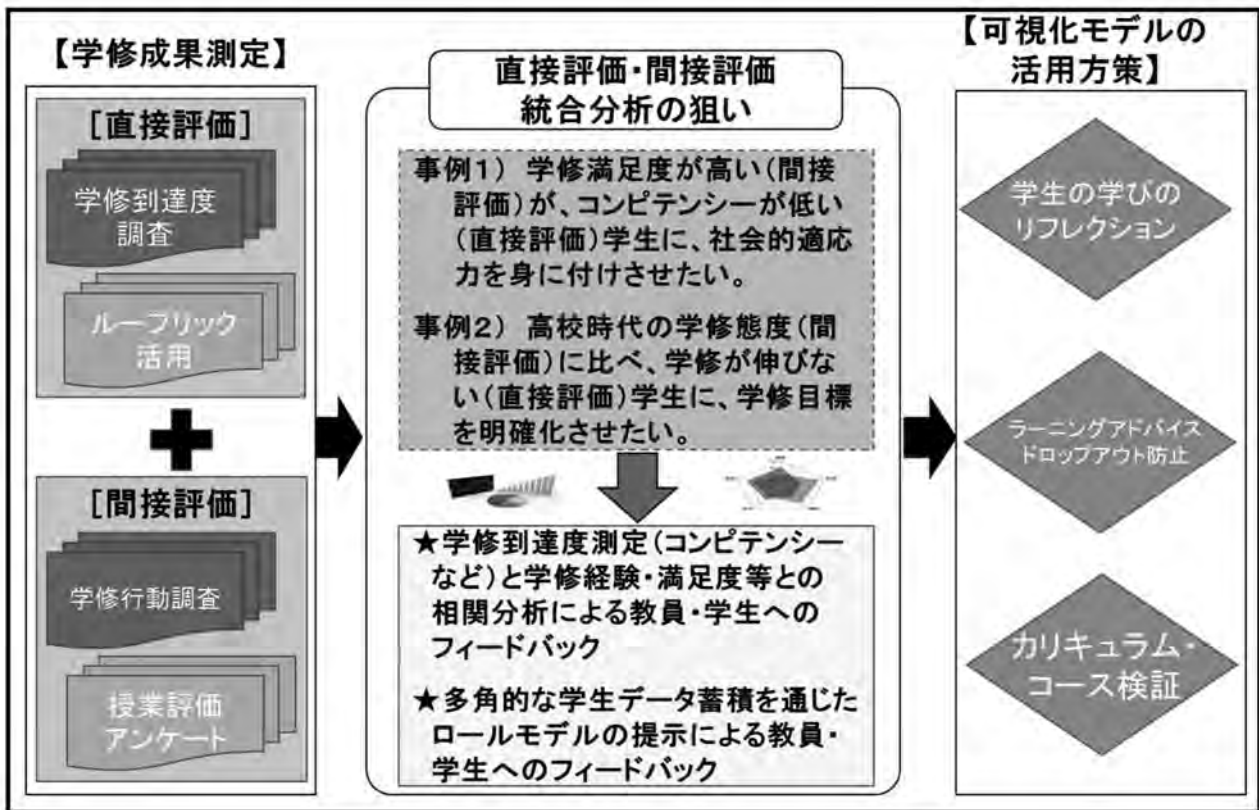
2. 山口大学の教育理念

2008年に公表された経済産業省が定義する「社会人基礎力」や中央教育審議会答申が定義する「学士力」に見られるように、大学教育を通じた汎用的能力（ジェネリックスキル）の育成への期待が高まっている。この背景には、OECDが提唱するDeSeCoのキー・コンピテンシーなど、従来型のディシプリンベースの知識理解を超えて、多様かつ複雑化する国際社会に対応できる知識活用や態度の修得が必要不可欠となっていることが挙げられる。新しい能力の育成として、21世紀型スキルと呼ばれる場合もある。

本学では、ディプロマポリシーに加え、山口大学教育理念に規定された、「驚き、個性、出会い、夢を発見し・はぐくみ・かたちにする人材の育成」に基づき、山口大学生が卒業時に身に付けておくべき汎用的能力（ジェネリックスキル）の規準を明確化する。本学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラムでは、学修到達度調査及び学修行動調査を実施し、学生の汎用的能力（ジェネリックスキル）の修得を可視化することを事業取組に掲げている。

3. 直接評価・間接評価統合型学修成果可視化モデルの構築

テーマⅡ（学修成果の可視化）では、学部生を対象とした学修到達度調査・学修行動調査とルーブリック開発によるパフォーマンス評価の実施を通して、各種学修成果測定データを活かした直接評価・間接評価統合型学修成果可視化モデルの構築に取り組んでいる。具体的には、各種学修成果測定データを活かしながら、学生の学びのリフレクション、ラーニングアドバイス、さらには、カリキュラム改善に活かしていくことを目指している。



**V. 山口大学・大学教育再生加速プログラム
(YU-AP)
事業関連イベント報告**

1. 山口大学・創基200周年記念 共育ワークショップ2014

『みんなで山大の教育（共育）について語ろう！』開催報告

日時：9月22日（月）13:30～17:00

場所：吉田キャンパス・総合図書館アカデミック・フォレスト

参加者：教員12名、職員25名、学生25名、その他4名 計66名

概要

- 13:30～13:35 開会挨拶 岡 正朗 学長
趣旨説明 林 透 大学教育機構・大学教育センター准教授
- 13:35～14:05 基調講演「みんなで創り上げる大学」
一般社団法人KSIA（関西学生発イノベーション創出協議会）
山下貴弘 常務理事
- 14:05～15:10 グループワーク①『YU World Café（ワールドカフェ）』
「発見し・はぐくみ・かたちにする」について考えよう！
※教員・職員・学生の混合によるグループワーク
- [15:10～15:20 休憩]
- 15:20～16:00 グループワーク②『未来新聞づくり』
「グループアイデアをかたちにしよう！」
- 16:00～16:50 全体発表
- 16:50～17:00 閉会挨拶 瀨瀨 厚 副学長・理事

内容

9月22日（月）午後、山口大学創基200周年記念・共育ワークショップ2014「みんなで山大の教育（共育）について語ろう！」が、総合図書館・アカデミック・フォレストにて、教職員・学生60名以上を集め、開催された。冒頭、岡正朗学長より開会挨拶があり、山口大学憲章に刻まれた「共育（共にはぐくむ）」の重要性に言及するとともに、10年後の山口大学ビジョンに向けた積極的な提案への期待を述べられた。また、林 透 大学教育機構大学教育センター准教授より、本ワークショップは教員・職員・学生による共育の場づくりを目的とし、今回は、廣中平祐 元学長が提唱した「発見し・はぐくみ・かたちにする」という教育理念の理解を深めながら、具体的なアクションプランを提案することが狙いである旨の趣旨説明があった。

前半では、一般社団法人KSIA（関西学生発イノベーション創出協議会） 山下貴弘 常務理事より、『みんなで創り上げる大学』と題して基調講演があり、参加者による自己紹介ワークを挟みながら、学生時代にリーダーを務めた学生参画型FD活動の動機や教職員との繋がりから組織が活性化していった実経験を披露し、会場がなごやかな雰囲気になった。その後、一般社団法人参画文化研究会 河島広幸 プロジェクトリーダーがファシリテーターに加わり、グループワークが展開された。グループワーク①「YU World Café（ワールドカフェ）」では、教員・職員・学生混合編成の10グループに分かれ、「発見し・はぐくみ・



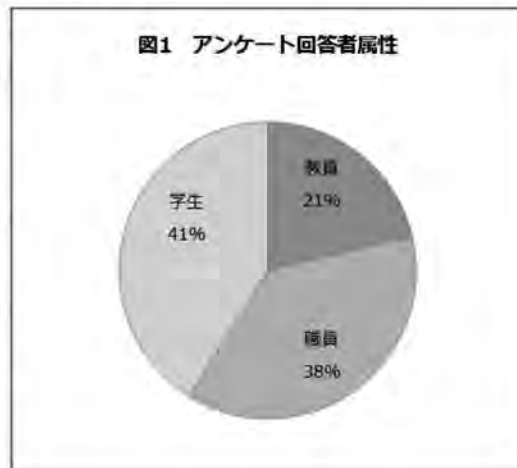
かたちにする」をテーマにした対話を行い、自由なアイデアや具体的な提案などを模造紙一杯に書き込んだ。さらに、グループワーク②「未来新聞づくり」では、ワールドカフェで出されたアイデアを活かしながら、未来の山口大学で期待されるアクションを「未来新聞」のかたちにまとめた。

後半のグループ発表では、まずは、5グループごとの2班に分かれ、班ごとで各グループが未来新聞の紙面を発表し、各班でのベスト未来新聞を選んだ。その後、各班から選ばれたベスト未来新聞の2グループが全体発表を行った。今回は、学生だけでなく、教職員が前向きに発表する姿勢が印象的であり、「山口大学が満足度第1位、山口県サミットを山口大学にて開催」「山口大学を『みんなで大学』に改名、多言語あいさつ運動の進展」など、学生や地域に愛される山口大学の未来が提案され、これからの各種改革等に活かしていくこととした。最後に、額副理事・副学長より閉会挨拶があり、このようなワークショップの機会を通して、「共育」の精神が徐々に実を結びつくことの期待が寄せられた。

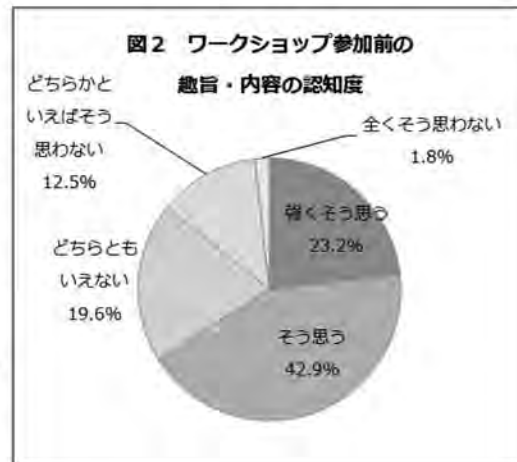


アンケート結果：

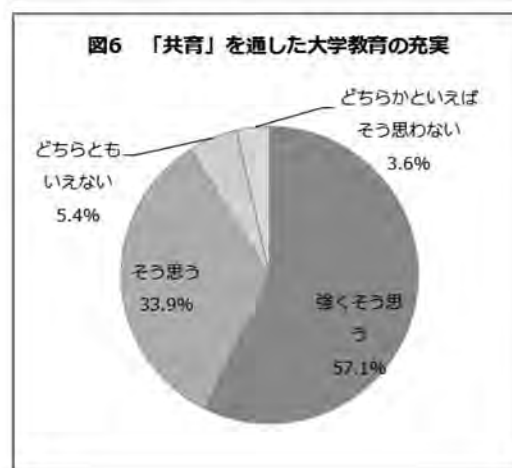
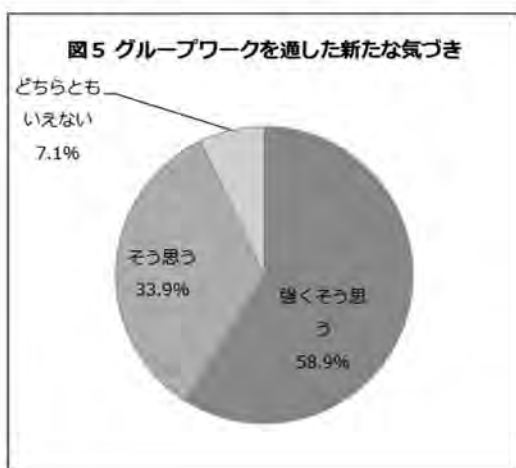
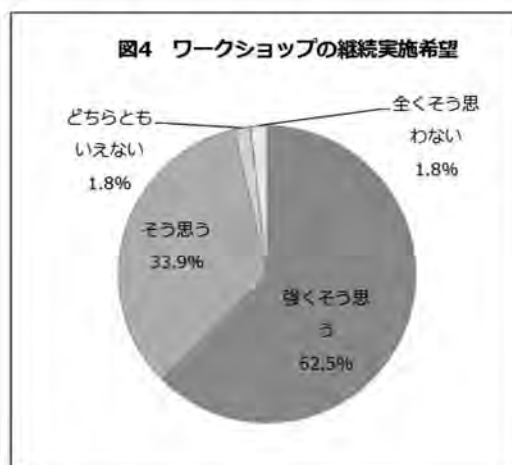
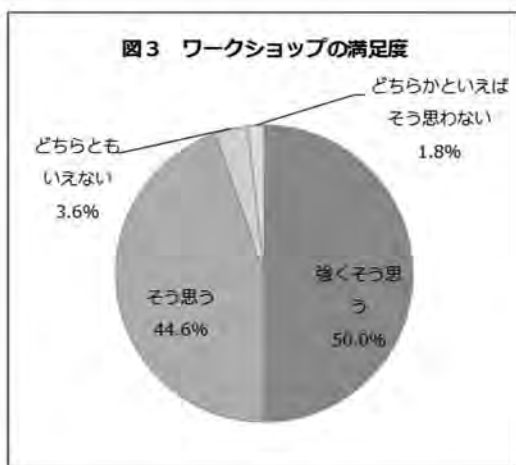
ワークショップ参加者によるアンケートについて、56名（回収率90.3%（その他を除く））から回答を得た（図1）。共育ワークショップ自体が2回目の開催となり、「ワークショップの趣旨や内容についてある程度知った上で参加したか」という設問では、7割近く（昨年度は4割近く）の参加者が趣旨や内容を把握した上で参加する状況となり、認知度が高まった（図2）。また、実際に参加した上での理解度、満足度については、「強くそう思う・そう思う」が9割を超え（図3）、今後も継続していくべきであるという意見が同じく9割を超えた（図4）。



グループワークそのものに関連して、「グループワークを通して新しい気づきがあったか」という設問では、9割以上の参加者が新しい気づきを感じており（図5）、ワークショップ自体のコンセプトである、「共育を通して大学教育がより良くなると思うか」とい設問でも9割以上の賛同が得られた（図6）。



ほとんどの設問において、昨年度以上の数値となっており、組織開発（OD）プログラムとしての共育ワークショップの有効性が改めて窺える結果となった。



まとめ：

山口大学憲章が掲げる「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」の創造を目指して、山口大学を構成する教員・職員・学生が理解を深め、共有することが求められている。今年度のワークショップでは、まさに、「発見し・はぐくみ・かたちにする」をテーマに、教員・職員・学生が抱えているアイデアやイメージを基に対話を行い、山口大学の未来をデザインするというワークに取り組んだ。多様な構成員が一緒になって未来思考を行うことで、今日の複雑化する社会情勢における課題解決の視点を養うことができる。この共育ワークショップという場は、山大の組織力の向上、引いては、山大の教育力の向上を図るための組織開発プログラムであるだけでなく、教員・職員・学生個々に気づきを与え、新しいチャレンジ精神を培う人材育成の機能を果たすものであると考えたい。



今回のワークショップでの新たなアイデアや出会いを大切に、今後の山口大の教育課程・学習支援の充実、教職学協働の強化に努めていきたい。

共育ワークショップ 2014・未来新聞まとめ

グループ・未来新聞名	トピックス
グループ A 『山口茜新聞』	<ul style="list-style-type: none"> ●住民参加型の学生による「自由研究大会」からイグ・ノーベル賞を受賞。 ●山口大学キャンパス移転？ ●心理ゲーム大会参加者募集。
グループ B 『ベンチャー新聞』	<ul style="list-style-type: none"> ●山大発ベンチャーJASDAQ 上場 <ul style="list-style-type: none"> ・ちゃぶ台から始まったサクセスストーリー ・次なる一歩、ソフトバンク買収か？ ●官民の連携活用 <ul style="list-style-type: none"> ・山口大学を特定経済発展校に指定。 ・工業・医療分野での IT 化を推進。
グループ C 『毎 YAMA 新聞』	<ul style="list-style-type: none"> ●山口大学 満足度第 1 位の快挙。 学生、教職員、地域における各部門で満足度第 1 位 ●山口県サミット第 1 回が山口大学にて開催 ●YAMA Café による自由な意見交換、異分野交流。
グループ D 『ひまわり新聞』	<ul style="list-style-type: none"> ●ついに実現！！ 学問の新たなかたち <ul style="list-style-type: none"> ・授業システムの変革（オーダーメイド式）
グループ E 『山大グローバル新聞』	<ul style="list-style-type: none"> ●山大満足だ！ YU システム導入。 <ul style="list-style-type: none"> ・YU システムによる学生満足度大幅アップ。 ・グローバルな出会いの場 ・問題解決に進むシステムづくり ・ワークショップ必修化 ●ゆるキャラグランプリ 2024 第 1 位！
グループ F 『何でも話せる知の広場新聞』	<ul style="list-style-type: none"> ●山口大学に発見環境できる！ <ul style="list-style-type: none"> ・雑多にみんなで出会って言い合いを楽しむのが発見環境 ・創基 200 周年記念館 ●共育ワークショップ年間 100 回開催！
グループ G 『知っちゃる？ 山大共育新聞』	<ul style="list-style-type: none"> ●山口大学、「みんなで大学」に改名か？ ●「ぶち教えちやる！」制度の導入。 教職員、学生に関わらず、意欲のある人なら誰でも講義を行うことができる。 ●学生の声 ～多言語あいさつ運動～ ●求む！！ぶちヤバイシラバス！！
グループ H 『キラキラ新聞』	<ul style="list-style-type: none"> ●2024 年、山口大学が地域のネットワークづくりのセンターに！ ●防災の中心に山大あり ●Table For Two × 地産地消 食堂オープン！ ●第 1 回 山大 秋の大運動会開催！

<p>グループI 『出会い形新聞』</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●山口大学、受験倍率が 100 倍に突破か?! ●サロン発の研究成果 1兆円の収入に!! ●山大サロン
<p>グループJ 『長州新聞 (タイムズ)』</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●山口大学、学費 0 円!! ●ベンチャー企業輩出率世界 No.1 ●クリエイター輩出率 No.1 ●(国政)政治家輩出率 No.1 大臣の半数以上が山口大学出身!

(参考) 『文教ニュース 10月13日号』掲載 (※『文教速報 10月10日号』に同様掲載)

山口大学・創基200周年記念 共育ワークショップ2014

「みんなで山大的教育(共育)について語ろう!」を開催




9月22日、山口大学創基200周年記念・共育ワークショップ2014「みんなで山大的教育(共育)について語ろう!」が、総合図書館・

開会挨拶する岡正剛学長

アカデミックファオレストにて、教職員・学生60名以上を集め、開催された。冒頭、岡正剛学長より開会挨拶があり、山口大学憲章に添えられた「共育(共にほぐむ)」の重要性に言及するとともに、10年後の山口大学ビジョンに向けた積極的な提案への期待を述べられた。また、林道大学教育機構大学教育センター准教授より、本ワークショップは教員・職員・学生による共育の場づくりを目的とし、今回は、慶中平祐元学長が提唱した「発見し・ほぐし・かたちにする」という教育理念の理解を深めながら、具体的なアクションプランを提案することが狙いである旨の趣旨説明があった。

前半では、一般社団法人K.S.I.A.(関西学生発イノベーション創出協議会)山下貴弘堂長理事より、「みんなで盛り上げる大学」と題して基調講演があり、参加者による自己紹介ワークを挟みながら、学生時代にリーダーを務めた学生志願者FD活動の動機や教職員との繋がりから組織が活性化していった実証談を披露し、会場がなかなか盛り上がり包まれた。その後、一般社団法人参画文化研究会河島広幸プロジェクトリーダーがファシリテーターに加わり、グループワークが展開された。

後半のグループ発表では、まずは、5グループごとの2班に分かれ、班ごと各グループが未来新聞の紙面を発表し、各班でのベスト未来新聞を選んだ。その後、各班から選ばれたベスト未来新聞の2グループが全体発表を行った。

最後に、副理事長・副学長より閉会挨拶があり、このようなワークショップの機会を通じて、「共育」の精神が徐々に実を結びつつこの期待が寄せられた。

出所：週間文教ニュース 平成 26 年 10 月 13 日 (月曜日) 第 2312 号 41 頁

山口大学 共育ワークショップ 2014 「みんなで山大の教育（共育）について語ろう！」

●コンセプト

山口大学の教育（共育）について、教員、職員、学生が一緒になり、様々な観点から語り合い、考えてみよう。

大学というコミュニティでは、本来、教員、職員、学生が等しく市民権を有していると考えられるべきではないでしょうか。教員が学生を教えるという場面もあれば、教員が学生から教えられる場面があるというのが大学というコミュニティの醍醐味でしょう。大学教育とは、教員、職員、学生が共に創り上げるもの（共創）であり、かつ、共に育み合うもの（共育）です。

●アプローチ

山口大学では、「発見し・はぐくみ・かたちにする」を教育理念に掲げ、次の時代を切り拓く人材育成に取り組んでいます。

今、改めて、教員、職員、学生の立場に立って、「発見し・はぐくみ・かたちにする」ということの意味を考えてみませんか。ワールドカフェ形式のグループワークを通して、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。所属や立場を超えた参加者同士の対話を通して、「発見し・はぐくみ・かたちにする」ためのアクション・プランを考えてみます。教員、職員、学生の共創を通して、山大の教育（共育）をより豊かなものにしていきましょう。

●開催日時

9月22日（月） 13:30～17:00

※ワークショップの詳細は裏面参照

（終了後に情報交換会（懇親会）を行います）

●場 所

総合図書館アカデミック・フォレスト

●対象及び定員規模

本学の教員、職員、学生（学部生・大学院生） 60名程度



●内容構成

- 13:30～13:35 開会挨拶・趣旨説明
- 13:35～14:05 基調講演「みんなで創り上げる大学」
一般社団法人 KSIA(関西学生発イノベーション創出協議会)
常務理事 山下 貴弘
- 14:05～15:10 グループワーク① 『YU World Café(ワールドカフェ)』
「“発見し・はぐくみ・かたちにする”について考えよう！」
※教員、職員、学生の混合によるグループワーク
- [15:10～15:20 休憩]
- 15:20～16:00 グループワーク② 『未来新聞づくり』
「グループアイデアをかたちにしよう！」
- 16:00～16:50 全体発表
- 16:50～17:00 クロージング・閉会挨拶
- [17:10～18:30 情報交換会(懇親会) ※会費:教職員 1,500円、学生 500円]

【申込方法】

申込は、件名「**共育ワークショップ申込**」とし、「**①氏名、②所属・職名(学生の場合は学年)、③e-mail、④情報交換会(懇親会)参加希望の有無**」を記入の上、E-mail: ga115@yamaguchi-u.ac.jp(担当:教育支援課教育企画係)あてに送信願います(なお、情報交換会(懇親会)参加希望の方は、当日受付にて会費を徴収いたします)。

【申込締切】

8月7日(木)までとします。

ただし、定員となり次第、申込を締め切らせていただきます。

【問合せ先】

大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透

E-mail: toru-h@yamaguchi-u.ac.jp TEL:5067(内線)



2014年度 山口大学共育ワークショップ2014
「みんなで山大学の教育(共育)について語ろう!」

2014年9月22日(月)

Keynote Speech 『みんなで創り上げる大学』

一般社団法人 関西学生発イノベーション創出協議会
山下 貴弘
KSIA

プロフィール

平成26年9月吉日

ふりがな やました たかひろ

名前 山下 貴弘

年	企画名	内容
2009年～ 2011年	学生FD	大学に不満を持った1年生の春、職員さんに誘われて参加したイベントを機に、先生と共に学生・職員・教員が連携した教育改革に取り組み、島門学園大学で、全国から約400人が参加するサミットの運営、他大学の経験交流、学生発案型授業、学後での活動報告を行った。
2010年～ 2013年	ピアサポーター	大学生の大学生による大学生のための団体、ピアという年代の若い学生が、学生に寄り添って、学校生活での悩みや学業支援を行った。
2010年～	京都教育懇話会	京都から新しい教員モデルを立ち上げ、行政と企業と教育関係者、そして学生が参加して講演会の企画・運営を行っている。
2012年～	一般社団法人 KSIA	関西の高・中・生が連携して、学生がイノベーションを興すことで関西の再活性化を目指す。「社会問題解決」にすることをビジョンに掲げ創業支援に参画。 これまで、大阪府受託事業『ウチーワーク!』の開催、岡山北総理を招いた講演会などイベント企画と、現在は大阪府とともに関西の創業文化醸成のために従事。
—	その他	任意団体WARD LDG / 学生団体NEXUS / ALL関西東洋フェスティバル / 西宮神社発立エビス成体実行委員 / 大学発×卒業生のシャリ場 / 出演、コクシヤ(TV)・放送番組(FM)・新聞各社

このお話は…

期待に胸を躍らせて大学へ入学したある学生が、大学の常識に挑んだ4年間の記録である。

大きな壁に対して、学生・教員・職員の協働を通してえられた体験談をもとに、なぜ、どうして、どういったことに取り組んだのかをお話する。

山口大学創基200周年の節目に、改めて教育(共育)理念である「発見し・はぐくみ・かたちにする」ことの意義を学生・教員・職員で捉えなおすことを依頼していただいたことに始まるのである。



学生FDイベント
学生発案型授業実践報告1冊

志願に力での知にゆる
高人な事やご人存等、
心開けに基る事で
知れたい事せんか?え

「これからの
話を聞いて
どうしよう」

2013年11月4日(日)
時間 15:00～16:30 / 会場 山口大学学芸部1号館
参加費 400円(学生は200円) / 申込 083-8477666
お問い合わせ 083-8477666 / 申込 083-8477666
申込期間 10月21日
申込方法 47804000-1000 / 申込 083-8477666

志願に力での知にゆる
第の志願がわかる!

PFMO
学生FD実践報告

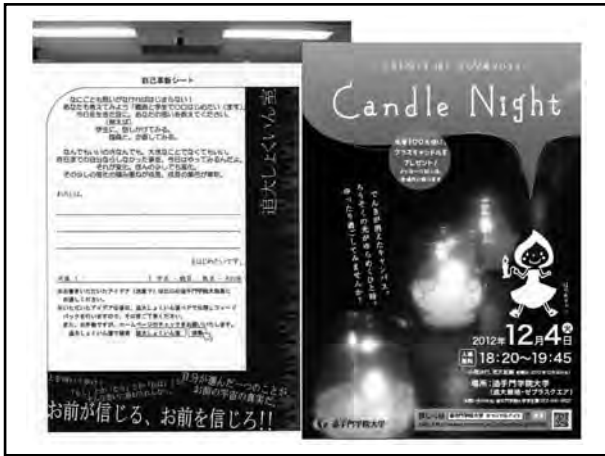
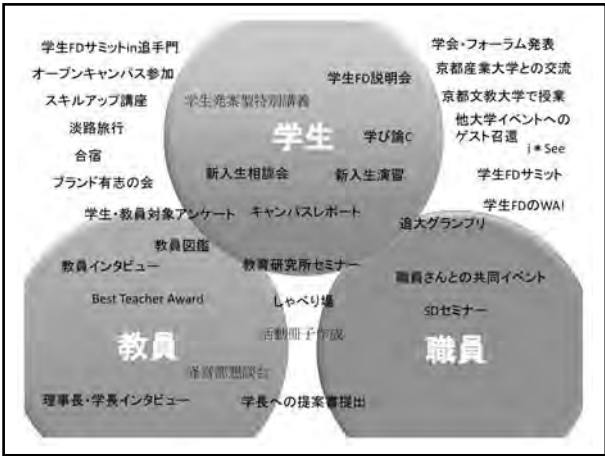
大学を変える、
学生が変わる。

学生FD
Student-Initiated
Faculty Development

新たな旅立ち
授業アンケート
必要? 何のため?

サミット報告集

みんなで
作り上げた
サミットの記録!





学生FD活動が学内に及ぼした変化は？

- ①会議や研修の在り方が抜本的に見直された。
- ②教職員と学生との協働、教職員が学生を称揚、支援する活動、学生の視点や意見を尊重する活動が目立って増えてきた。
- ③「教育開発センター」が独立…規定に「学生FD活動の支援」が明記
- ④自分の大学を好きになる学生が増えた。

学生FD活動が学内に及ぼした変化は？

- ①会議や研修の在り方が抜本的に見直された。
- ②教職員と学生との協働、教職員が学生を称揚、支援する活動、学生の視点や意見を尊重する活動が目立って増えてきた。
- ③「教育開発センター」が独立…規定に「学生FD活動の支援」が明記
- ④自分の大学を好きになる学生が増えた。



学生FD活動が学内に及ぼした変化は？

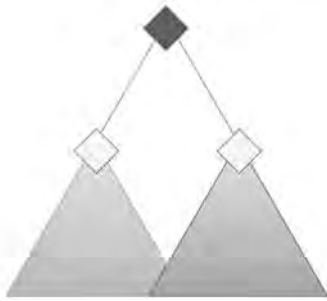
- ①会議や研修の在り方が抜本的に見直された。
- ②教職員と学生との協働、教職員が学生を称揚、支援する活動、学生の視点や意見を尊重する活動が目立って増えてきた。
- ③「教育開発センター」が独立…規定に「学生FD活動の支援」が明記
- ④自分の大学を好きになる学生が増えた。

どんなことをしたいのですか？ やってみたいことはなんですか？

**Q.自分のこと、友達のこと、
あなたは知っていますか？**



Shared vision



Q.どこで身に付けるのでしょうか？



Q.どうやって身に付けましょうか？



【全体の流れイメージ】



・「未来新聞づくり」
・全体発表



・「Keynote Speech」
・「YU World Café」

・総括
・明日へのアクション記入

グループワーク①

YU World Café

“発見し・はぐくみ・かたちにする”
について考えよう！

山口大学憲章

1 「発見し・はぐくみ・かたちにする」 知の広場」の創造

私たち山口大学は、21世紀の多様な課題を「発見し・はぐくみ・かたちにする」、豊かな「知の広場」を創り出します。

私たち山口大学は、この「知の広場」において、自らの役割と実績とを不断に評価しつつ英知の創造をめざします。

2 共同・共育・共有精神の涵養

3 公正・平等・友愛の尊重



ワールド・カフェの流れ



カフェ・エチケット



◆ダイアログを楽しむ

結論を無理にまとめる必要はありません。その場に出てくる話と、仲間との対話を楽しみましょう。

◆話をよく聴く

話すばかりではなく、他の人の話によく耳を傾けてみよう。

◆否定しないで、受け止める

議論の場ではありません。多様な意見を受け入れ、それにわくわくする自分自身を楽しみましょう。

◆テーマにフォーカスする

テーマについて話をするよう心がけましょう。参加者全員がそのテーマにフォーカスすることで、よりエネルギーが高まります。

模造紙を活用しよう！



★思ったことを自由に書いてください

◎絵や図をできるだけ描く

◎模造紙に書いた言葉に関連性がある時は
言葉と言葉を線や矢印で結ぶ

◎自分の手元だけに書かない



ラウンド①「テーマを深めよう！」

あなたは、
「発見し・はぐくみ・かたちにする」
について、
どういうイメージや思い
を持っていますか？

ラウンド②「考えを広げよう！」

あなたは、「発見し・はぐくみ・かたちにする」について、どういうイメージや思いを持っていますか？

ラウンド③「気づきや発見をまとめよう！」

未来に向かって、「発見し・はぐくみ・かたちにする」を目指し、山口大学で、どんなことができる（どんなことをしてみたい）と思いますか？

グループワーク②

未来新聞づくり

グループアイデアをかたちにしよう！

未来新聞をつくらう！



- ・「2020年、東京ではオリンピックが開催されていますが、山口大学では『発見し・はぐくみ・かたちにする』ことを実現した記事が新聞の一面を飾りました」
- ・ワールドカフェで共有した素晴らしいアイデアを、具体的なイメージとして共有しましょう。
- ・綺麗に描く！ことも大事ですが、みなさんに早く情報を伝達することが重要です。
- ・さきほど話し合った内容をすべて掲載するのではなく『ここがミソ！』というポイントを絞ってください。

【未来新聞の例】



全体セッション



重要なポイントをシェアしましょう！

山口茜新聞

発行

(グループ名)

A

二〇二四年
九月二十三日
はれ

自由研究大会から

イグ・ノーベル賞を受賞

“10年前から、山大では「発見はぐくみ・かたちにする」を地域にPRするため、住民参加型の学生による「自由研究大会」が行われていたが、2024年9月22日ついにその成果の一つがイグ・ノーベル賞を受賞することとなった。

心理ゲーム大会

参加者募集



問い合わせ先

山Aチームまで

山口大学移転が

自由研究大会を通じて、山口大学の発展のためには移転が不可避であることが明らかになった。山口市の尽力により、新山口駅前には広大なキャンパス用地を確保、2030年の移転を目指す。

パブ山大先行

オープン決定!!
新キャンパス

予定地

20時～

山大発ベンチャー-JASDAQ

上場

ベンチャー新聞

発行

(グループ名)

B

次なる一歩

ソフトバンク買収が?!

山大発ベンチャー「山口大愛T」がJASDAQに上場することが決まった。山口大愛TはIITを駆使し、協定大学校約10校との双方の遠く講義システムを開発した。長州ファイブから受けた「アタリ」を発見し、子どもが「かたちにする」DNAを世界に普及か?!

茶ぶふムロから

始まった

サクロタスストーリー



官民の連携活用

山口大愛Tの上場の受けた政府は山口大学を特定経済者発展校に指定。今後は地元企業や国立病院との連携を強化し、工業医療分野でのIIT化を推進する。

山口大学

満足度第1位

快報

山口大学は全国幸せ調査機構による調査、集計により全国の大学の中で学生、教員、職員及び地域の各部門において満足度第一位を獲得しました。同年度ですべての部門において第一位を獲得した大学は山口大学が初めて。
山口大学は「発見・はぐくみ・かたちにする知の広場」をモットーとし、さまざまなユニークな試みを展開してきました。

山口大学の歩み

- ・教育ワークショップの全学生参加を必修化
- ・地域住民による講義
- ・事務室カウンター取り払い



根を越える



山口県サミット
第1回が山口大学にて開催

全国でも類を

見ないサミットが山口大学にて行われた。

近年、大学のみなならず

第2の古里として地域をも変えていきたいという学生たちの

熱い思いに県民の方が

引かれた形となった。サミット

では世代を超えた5000人が

500グループで意見を出し合

い世界1の町作りについて話し合

YAMACafe

自由にほごやかに意見交換する
YAMACafeをつづけていく。

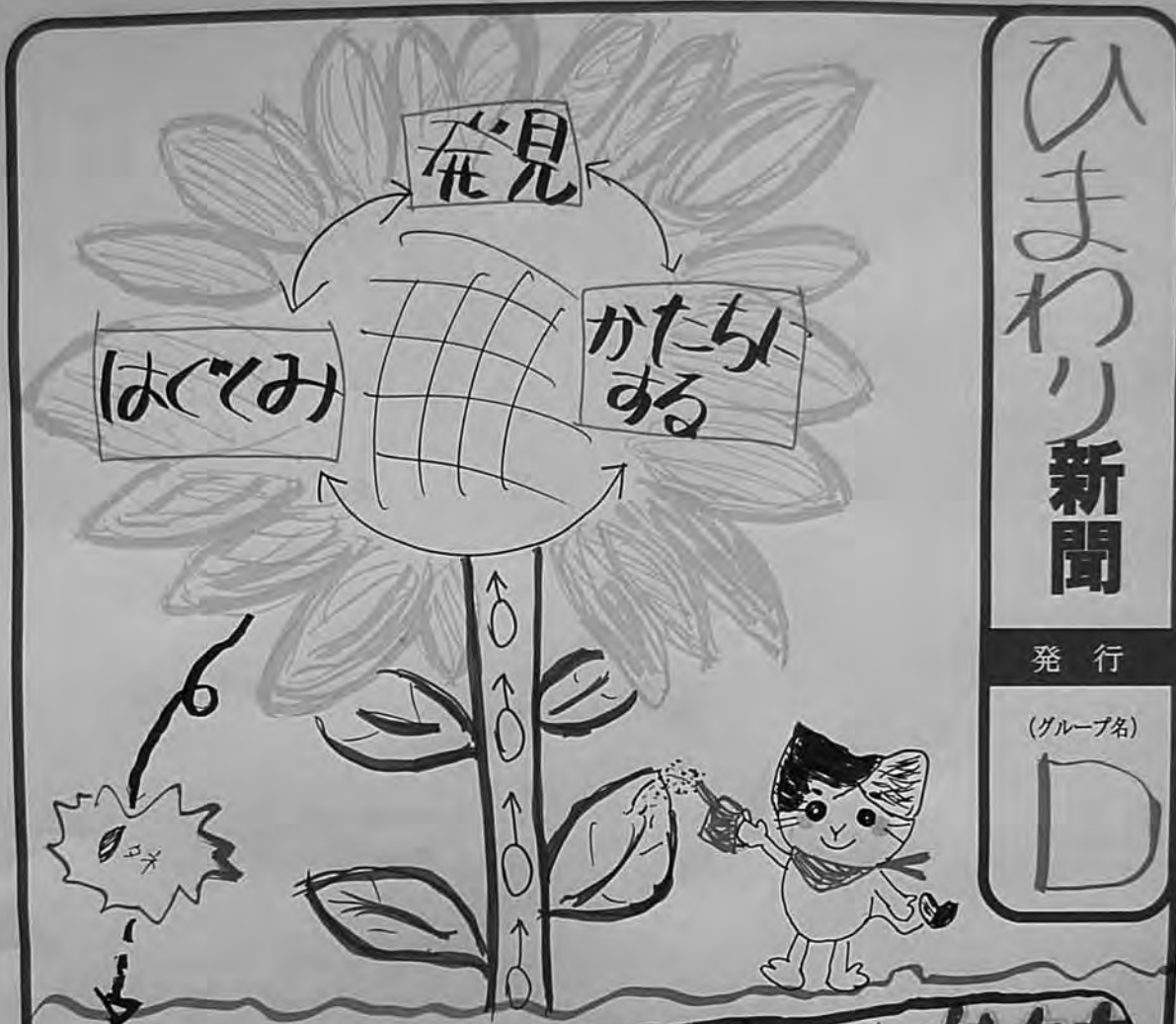
異分野の研究者がつながり新しい
共同研究につながるなど、研究力の向上
を下さえてきた。

ひまわり新聞

発行

(グループ名)

D



ついに実現!! 学問の新たなかたち

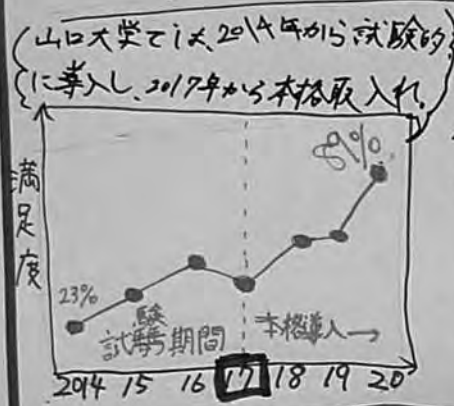
山口大学の授業システムの専変が行われた。従来は学部ごとに授業の上限や選取に制限があった。しかしここでは学びたい人にとって発見の場が少なくなるということではおそれを生かすことになった。システムとしては、学部にとらわれない授業のカリキュラムを自分で組むことができる。オーダーメイド式!! 枠にとらわれない自由な授業形式が、学生たちの発見の場を広げている。また、様々な外国語科目の授業も展開されている。

学生の声として「従来のシステムに比べて、自分の学びたい内容と、枠組みにとらわれないで学ぶので、様々な発見があり、充実しています。」との声があがっている。これらの取り組みは、前例がないということ、各界から期待の声が寄せられている。

2020年3月31日

山大満足だ!

YUシステム導入により...



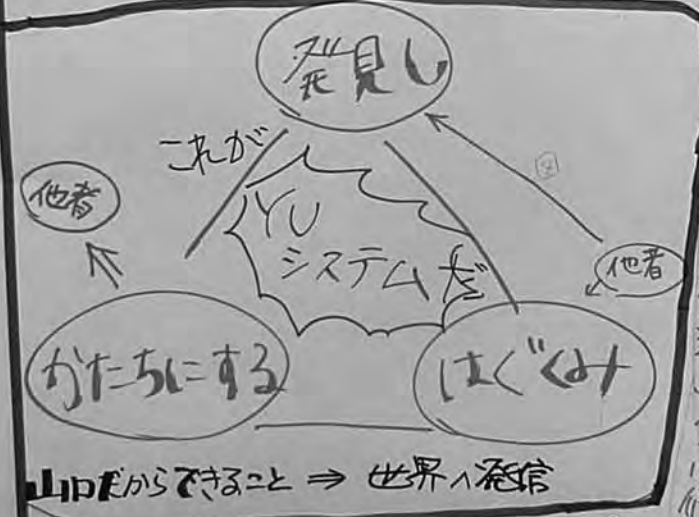
この度、山口大の取り入れたYUシステムにより、学生満足度が十年前より大幅にアップしたことが判明した。

山大グローバル新聞

発行

(グループ名)

E



YUシステムとは...
 グローバルな出会い(田舎と世界)
 フレンドづくり
 グローバルな出会いから新しい発見
 問題解決に進むシステムづくり
 自分を磨け!!
 ワークショップ必修化





ヤマニも参加するよ!

未来新聞

待ちに待った 山口大学 発見環境できる!

向くも話せる
知の広場
新聞

発行

(グループ名)

F

平成36年5月20日(土)に

創設二百周年イベント

として「朝まで生放送」が

山口大学二百周年記念館

で行われますことがわかりました。

同大学は「発見」ほどこ

かたうにする。知の広場の

理念の製法には「学生・教職員

地域住民及び行政とまろニ

イベントと企画した。

ふたが若は夕の代表者20名

はまるもの。職員は、一人

を見込ん。言い合ひも

推多にみてはあか言つて、むのが発見環境カ

共育ワークショップ

年間100回

山口大学では教育について

「諸先生、職員、教員が語り

合う」共育ワークショップが

二年を年間100回のペースで

開催してきました。このノウハウ

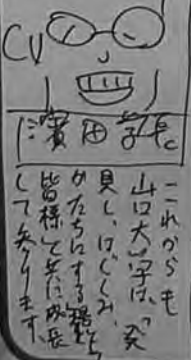
を生かし、先「朝まで生放送」

イベントの実施にこぎつけた。

この共育ノウハウは、今後も

続けていく予定です。

山口大学の



ここに至るまで各人が鍛えてきた力
学生: 質的力 / 教員: 伝達力 / 職員: 場開成力 / 地域の人々: 課題解決力

山口大学、 「みんなど大学」に改命か?

知っ
ちよる？
山大共
去月

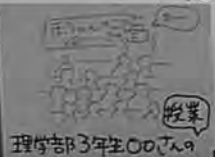
新聞

発行

(グループ名)

G

山口大学は二〇二四年から
教職員・学生に関わらず、
意欲のある人なら誰でも
講義をすることが出来る。
「みんなど大学」制度を
導入する。この制度により教員
職員・学生の垣根をなくし、
理念である「発見し、はぐくみ
かたちにする」を実現できる
大学づくりを目指す。
岡学長は「この制度が実現
したあかつきには『みんな
で大学』に改名しても
よい」と意気込む。



学生の声

山口大学では多言語でのあいさつ
運動が進んでいる。週ごとに異なる
言語で互いにあいさつを交わすこの
運動は二〇二四年に行われた共有
WSに始まり現在までに十年を
経ている。文学部3年生、
星さんに感想心を
きいた。



求む!! ぶちやバイシラバス!!

教職員学生地域の皆様待ってます!!

〒753-8511 山口大学
〒753-8511 山口大学

防災の中心に 山大あり

山口大・行政・住民が
防災計画作成に向け
ワークショップを
開催しました



2024年
山口大学が地域の
ネットワーキングの
センターに！

キラキラ
新聞

発行

(グループ名)

H

第一回

秋の 山大 大運動会 Table for Two

開催した!

消費地産地
食堂オープン

優勝

チーム職員

2位

湯田地区

3位

チーム学生

山大の地球
のみなさんと
楽しく汗を
流しました!



山口でとれた食材を使った
TFTメニューを取り扱った食堂
がオープンしました!

山大農場で採れた
食材も使用してます



オイスカ



出会いは形:新聞

発行

(グループ名)

I

山口大学、受験倍率が

100倍を突破か?!

サロン発の研究成果

1兆円の収入に!!

その秘密は...

山大サロン
ヤマニ
10年前にOPEN

フリードリンクの導入
お茶とおアイディア
コラボレーションがもたらした
カフェスペース

Needs
↓
Seeds.

サロン
・11月20日開催
・開催地
・参加者(学生、教員、社会人)
・定期的なイベント
・お茶の時間
・気軽に交流できる
・人数が増えるにつれて
・発展していく

山大(初)の試みの
成功は...
山口大学
サロンの導入を検討

学外からも
サロンを訪れる
人が
赤坂さんから
おじいさん、おばあさんまで
たくさん来て
入った
留学生という
言葉がなくなる

社会人でも来られる
サロンの存在が
社会に貢献している
という認識が広がっている

かたろ
↑
この文字の意味

は、川上

反転授業
↓
逆転授業
学生が学生に
行う授業
職員同士に
行う授業
学生が
教員に
行う授業
学生が
企業に
行う授業



代表ヤマニさん

山大サロン ヤマニ

山口大学、学費0円!!

長州

タイムズ
新聞

発行

(グループ名)

J

☆ベンチャー企業輩出率世界NO.1!!!!

☆クリエイター輩出率NO.1!!!!

☆政治家輩出率NO.1、大臣の半数が山口大学出身!!!

(国政)

(以上)

① 何故達成できたのか……?

山口大学はベンチャー企業、クリエイターからの寄付金が100億円をこえた!

(注: 山口大学卒業生)

山口大学は卒業生である各大臣の閣議により、特別国立大学に認定され、卒業生からの資金により完全自治を行っている。

その理由は、2014年から始まった「発見し、はぐみかたちにする」を現実化した議論の場・発表の場をもうけることで、学生の実力がひやかく的に引きのばされ、各方面へ著名人を輩出したためである。

☑ 長州タイムズは
全世界300ヶ国で愛読
されている新聞です!

☑ 長州タイムズは
山口大学を応援しています!

2. 山口大学・大学コンソーシアムやまぐち SDセミナー2014 『大学職員の企画力が大学を変える』開催報告

日 時：平成 26 年 12 月 19 日（金） 13:30～17:00

場 所：吉田キャンパス・大学会館 1 階大ホール及び大学会館 2 階会議室

参加者：第一部 164 名（うち学外 42 名）、第二部 81 名（うち学外 37 名）

主 催：山口大学

共 催：大学マネジメント研究会、大学コンソーシアムやまぐち

概 要：

13:30～13:40 開会の挨拶・趣旨説明 学長 岡 正朗

13:40～14:50 第一部《基調講演》

「今、期待される大学職員の企画力」

学校法人梅光学院理事長（大学マネジメント研究会会長、元京都大学理事・副学長） 本間 政雄

「若手職員から育む企画力」

佐賀大学総務部企画評価課係長（IR 主担当） 末次 剛健志

15:00～16:50 第二部《グループワークセッション》

「Let's Challenge - 大学職員の企画力が大学を変える -」

ファシリテーター

大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透

大学教育機構 大学教育センター助教（特命） 河島 広幸

16:50～17:00 クロージング・閉会の挨拶 学理事・副学長 田中 和広

[総合司会：大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透]

内 容：

12 月 19 日（金）に、山口大学・大学コンソーシアムやまぐち SD セミナー 2014 『大学職員の企画力が大学を変える』を、県内の公私立大学はもとより遠くは埼玉大学や大学評価・学位授与機構からの参加があり 160 名以上を集め、本学吉田キャンパスにおいて開催した。本セミナーは、山口大学・大学コンソーシアムやまぐちの共同主催、大学マネジメント研究会の共催で、山口大学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラム（AP）における教学マネジメント強化のための研修の一環として実施された。

冒頭、岡 正朗 山口大学長より開会挨拶及び趣旨説明があり、今回の SD セミナーに大勢の参加者があったことは、本学において、地域において、大学職員の企画力の重要性の認識の表れであるとの説明があった。

山口大学コンソーシアムやまぐち SD セミナー 2014
『大学職員の企画力が大学を変える』

平成 26 年 12 月 19 日（金）
13:30～17:00
山口大学 大学会館 1 階大ホール及び 2 階会議室
山口大学吉田キャンパス内

【参加費】 無 料
【主 催】 山口大学 山口大学、大学コンソーシアムやまぐち
【共 催】 大学マネジメント研究会
【趣 旨】 大学のマネジメント改革の推進について（基調講演） 平成 26 年 2 月（2 日）卒業教育評価大学（5 科）に公表されているように、昨今の大学経営において、大学職員の企画力が大学（科）に求められている。本セミナーでは、「大学職員の企画力の向上」をテーマに、基調講演を行うほか、参加者一同によるグループワークを通じて、大学職員の企画力の向上に向けた実践的取組を促す。
なお、本セミナーは、山口大学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラム（AP）における教学マネジメント強化のための研修の一環として開催いたします。

【趣 旨】 山口大学と大学コンソーシアムやまぐちの共同主催 無 料

13:30～14:00	山口大学長 岡 正朗
13:40～14:50	1. 開会の挨拶・趣旨説明 学校法人梅光学院理事長 （大学マネジメント研究会会長、元京都大学理事・副学長） 本間 政雄 2. 「若手職員から育む企画力」 佐賀大学総務部企画評価課係長（IR 主担当） 末次 剛健志
15:00～16:50	1. 「Let's Challenge - 大学職員の企画力が大学を変える -」 ファシリテーター 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透 2. 「Let's Challenge - 大学職員の企画力が大学を変える -」 ファシリテーター 大学教育機構 大学教育センター助教（特命） 河島 広幸
16:50～17:00	山口大学理事・副学長 田中 和広

【参加申し込みのお願い】 本セミナーは、山口大学・大学コンソーシアムやまぐちの共同主催、大学マネジメント研究会の共催で、山口大学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラム（AP）における教学マネジメント強化のための研修の一環として開催いたします。参加費は無料です。申し込みは、本学事務局（〒753-8580 山口県山口市吉田 4-1-1）または、本学ホームページ（http://www.yamaguchi-u.ac.jp）から行うことができます。

〒753-8580 山口県山口市吉田 4-1-1
山口大学総務部事務局 総務課
E-mail: goshin@yamaguchi-u.ac.jp TEL: 083-923-2222

第一部の基調講演では、まず、本間 政雄 学校法人梅光学院理事長（大学マネジメント研究会会長、元 京都大学理事・副学長）より、「今、期待される大学職員の企画力」と題して講演があった。18歳人口の減少に伴い、大学は自己改革力が試される時代になっている。そのような厳しい時代状況の中で、大学職員は知恵を絞る仕事に従事する必要がある。具体的には、「課題設定力・企画力・実行力」を身につける必要があり、そのためには、高い志や前向きな勉学精神を心がけることが大切であると力説された。

次に、末次 剛健志 佐賀大学総務部企画評価課係長（IR 主担当）より、「若手職員から育む企画力」と題して講演があった。佐賀大学が行う「事務系職員クラブ制度」の紹介があり、プロパー職員の自由な発想・提案が活かされるモチベイティブな職場環境創出の工夫が感じられた。また、佐賀大学版 IR の考え方が紹介され、コンセンサス形成のための情報提供としての IR、厳密性に固執せず、気づきや改善のきっかけづくりとなる IR など、大学運営における IR 機能の重要な捉え方の説明があり、大学職員としての貢献度の重要性も力説された。

第二部のグループワークセッションでは、林 透 大学教育センター准教授及び河島広幸 大学教育センター助教（特命）のファシリテーションにより、「Let's Challenge ～大学職員の企画力が大学を変える～」というテーマでグループワークを行った。会場一杯となる 11 グループでの議論は非常に熱気を帯びた。後半の全体発表では、「現状・課題」「企画提案」「実施体制」「評価（達成度）指標」を明示したグループ・プロポーザルによるプレゼンが行われ、きめ細かい学生支援、前提踏襲的な業務の改善、学生に向けた的確な情報発信、教職協働型プロジェクト、入学者確保の方策、大学運営費の確保などの積極的な提案が行われ、実現可能性の高いものが多かった。

最後に、田中 和広 山口大学理事・副学長より閉会挨拶があり、学内外の大学職員が交流する素晴らしい機会となり、今後もこのような場づくりを行っていくこととした。



第一部基調講演の様子

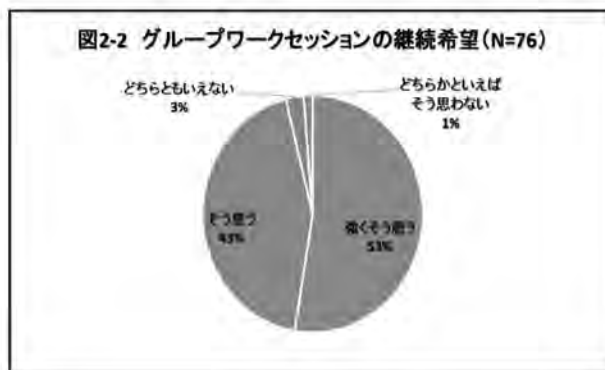
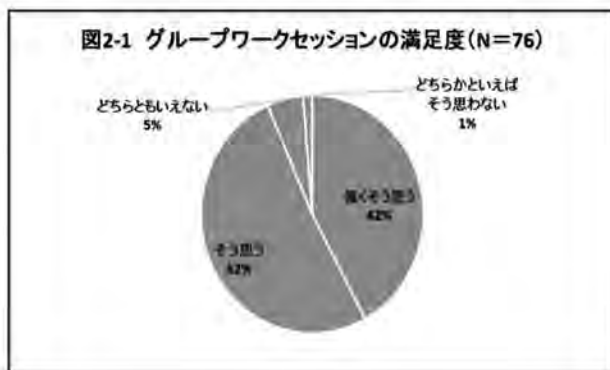
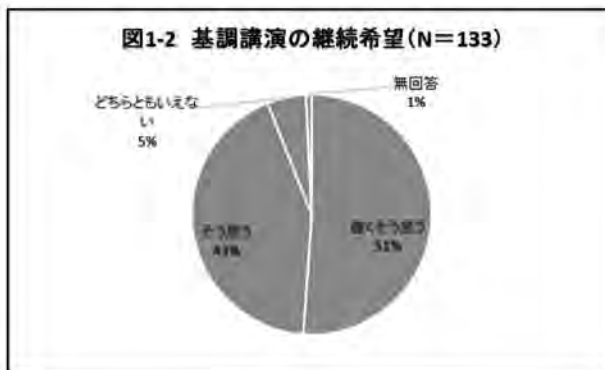
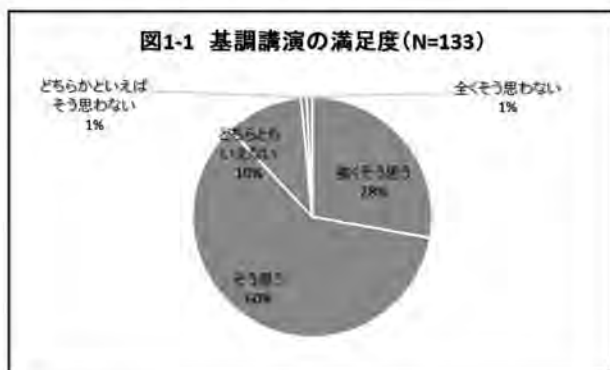


第二部全体発表の様子

成果及び今後の方向性：

当日の参加者の視線や発言から、大学職員の企画力への期待、というテーマについて真剣に聴き取り、考えようとする前向きな姿勢が強く感じられ、参加者アンケートからは、第一部・基調講演、第二部・グループワークセッションともに、満足度が高く、かつ、継続的な開催を望む回答が多数を占めた（図 1-1～2-2 参照）。また、地域ネットワーク（コンソーシアム等）を活用した SD 活動（セミナー、勉強会等）に関する要望を聞いた設問では、「コンソーシアムとして継続的に開催してほしい」「業務の系列に分けた研修や勉強会があれば良いと思う」など、今後の活動展開に向けて前向きな意見が寄せられた。当該アンケート結果を踏まえながら、来年度以降の FD・SD 企画の充実を図っていく必要がある。

大学コンソーシアムやまぐち運営委員会の下に「FD・SD 部会」を設置して初めての企画イベントであったが、地域の大学職員間が一緒になってスキルアップを行う貴重な場づくりとなった。また、文部科学省・大学教育再生加速プログラム（AP）の一環として、教学マネジメント強化の観点から、大学職員の企画力を醸成する有意義な機会となった。



山口大学・大学コンソーシアムやまぐちSDセミナー2014

「大学職員の企画力が大学を変える」

平成26年12月19日(金)

13:30~17:00

山口大学 大学会館1階大ホール及び2階会議室
(山口大学吉田キャンパス内)



【参加費】 無 料

【主 催】 国立大学法人山口大学、大学コンソーシアムやまぐち

【共 催】 大学マネジメント研究会

【趣 旨】 『大学のガバナンス改革の推進について(審議まとめ)』(平成26年2月12日 中央教育審議会大学分科会)に言及されているように、昨今の大学経営において、大学職員の企画力が大きく期待されています。本セミナーでは、「大学職員の企画力向上」をテーマに、基調講演を行うほか、参加者一同によるグループワークを通して、大学職員の企画力の大切さに新たな気づきを得ることを目的とします。

なお、本セミナーは、山口大学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラム(AP)における教学マネジメント強化のための研修の一環として開催いたします。

【概 要】 【総合司会:山口大学大学教育機構大学教育センター准教授 林 透】

13:30~13:40	開会の挨拶・趣旨説明	
	山口大学長	岡 正朗
13:40~14:50	第一部 基調講演	
13:40~14:20	「今、期待される大学職員の企画力」 学校法人梅光学院理事長 (大学マネジメント研究会会長、元京都大学理事・副学長)	本間 政雄
14:20~14:50	「若手職員から育む企画力」 佐賀大学総務部企画評価課係長(IR主担当)	末次 剛健志
14:50~15:00	[休 憩]	
15:00~16:50	第二部 グループワークセッション 「Let's Challenge -大学職員の企画力が大学を変える-」 部課長や係員、他大学からの職員が入り混じったグループごと で、テーマについて討論し発表する。	
16:50~17:00	クロージング・閉会の挨拶	
	山口大学理事・副学長	田中 和広

(17:15~18:30 情報交換会(場所:第二学生食堂「きらら」、会費制:2,000円・ノンアルコール))

【参加申し込み・問い合わせ先】

参加ご希望の方は、12月5日(金)までに、別紙「山口大学・大学コンソーシアムやまぐちSDセミナー2014申込」に必要事項をご記入のうえ郵送若しくはFAXにより、又は、件名を「山口大学・大学コンソーシアムやまぐちSDセミナー2014申込」として、①所属、②職名、③氏名、④情報交換会参加の有無、⑤連絡先をご記入のうえE-mailにより、下記宛てにお申し込みください。

〒753-8511 山口市吉田1677-1

山口大学総務部人事課サービス管理係 (担当:森本)

E-mail: sh029@yamaguchi-u.ac.jp tel: 083-933-5028 fax: 083-933-5024

大学教育再生加速プログラム

山口大学・大学コンソーシアムやまぐち SDセミナー2014申込

ふりがな			
氏名			
職業	機関/大学名	部署名	役職名
TEL	() -	メール	@
情報交換会参加の有無について、 ○をつけてください	<input type="checkbox"/> 参加する <input type="checkbox"/> 参加しない		
ふりがな			
氏名			
職業	機関/大学名	部署名	役職名
TEL	() -	メール	@
情報交換会参加の有無について、 ○をつけてください	<input type="checkbox"/> 参加する <input type="checkbox"/> 参加しない		
ふりがな			
氏名			
職業	機関/大学名	部署名	役職名
TEL	() -	メール	@
情報交換会参加の有無について、 ○をつけてください	<input type="checkbox"/> 参加する <input type="checkbox"/> 参加しない		

※ 情報交換会は、会費制（@2,000 円）、ノンアルコールで行いますので、ぜひ参加してください。

【山口大学へのアクセス】



申込先

国立大学法人 **山口大学**

〒753-8511 山口市吉田1677-1

TEL 083-933-5028

FAX 083-933-5024

sh029@yamaguchi-u.ac.jp

大学コンソーシアム山口職員研修会
(2014年12月19日)
「今期待される大学職員の企画力」

前関東学院常務理事(企画、国際、社会連携担当)
大学マネジメント研究会会長、集光学院理事長
立命館アジア太平洋大学学長特命補佐
本間政雄

講師のプロフィール

学歴:1971年名古屋大学法学部政治学科卒、1977年London School of Economicsで修士号(国際関係論)取得。
職歴:1971年田文部省入省、英国留学、経済協力開発機構、在仏大使館勤務を経て、生涯学習局審議官、総務審議官(局長職、政策調整担当)を歴任。
横国大(97~99年)、京都大学(2001~06年)、立命館(07~12年)、芝浦工大(07~10年)、立命館アジア太平洋大学(10~12年)で事務局長、副学長、理事、大学評価・学位授与機構教授(05~07年)。
教育歴:名古屋大学教育学研究科、埼玉大学政策科学研究科、放送大学、APU。
社会貢献:「大学マネジメント研究会」を設立、会長。明治学院大学外部評価委員長、OECD/AHELO上級専門家等。
著書・論文・講演:高等教育、大学政策を中心に多数。

今日の講演の構成

- 1) 大学を取り巻く環境の激変
- 2) 今後の高等教育政策の行方
 - 3) 今後のシナリオ
 - 4) 何をなすべきか?
 - 5) 改革を先導する「人」
 - 6) 改革を容易にする「システム」
 - 7) 改革を支える「組織」
 - 8) これからの職員の役割

今日の講演の構成

- 9) 職員の育成
- 10) 関東学院改革の中間報告(未完)
- 11) 梅光学院改革の中間報告
- 12) 大学マネジメント研究会

1 大学を取り巻く環境の激変

- 1) 市場の縮小(高校卒業生91年180万人⇒14年108万人⇒31年88万人)と大学間競争の激化(大学89年499校⇒14年782校)。私大170校が閉校とのシミュレーション⇒「経営力」の強化、新たな市場の開拓(留学生、社会人)、国・公立大学の定員抑制・縮減
- 2) 社会・企業の人材需要の高度化(「社会人基礎力」、「G人材」)、産業構造の変化(情報、医療、介護・福祉)⇒「教育力」の強化、新たな人材ニーズへの対応

1 大学を取り巻く環境の激変

- 3) 高等教育政策の転換(規制緩和・自由競争の促進・資源の傾斜配分・外部評価の強化・情報公開・社会的説明責任の強化・ガバナンス改革・・・)⇒「自己改革力」(経営力、教育力、研究力)の強化
- 4) 国立大学改革の進展、公立大学の量的拡大(90年39大学⇒14年86大学)⇒国公・私格差の是正
- 5) 高等教育のグローバル化(留学生500万人時代の到来、国際大学ランキング、IB、PISA、AHELO、ホローニヤ・プロセス・・・)⇒大学の国際化

2 今後の高等教育政策の行方

- 1) 教育の質の向上、国際化への支援と圧力の強化
- 2) 情報公開による「大学の實力の可視化」へ
- 3) 大学評価の実質化(エビデンス・ベース)
- 4) 国立大学改革:実績に応じた運営費交付金配分(3割)、授業料弾力化(標準額の2割まで)、国立大学の種別化(財政制度分科会資料、10月27日)
- 5) 「国立大学の構造改革」第2弾? (統合・再編、ダウンサイジング)

2 今後の高等教育政策の行方

- 6) KPIsを用いたエビデンス・ベースの資源配分へ。
- 7) 大学教育のICT化(MOOCs、電子教材)、ICTを活用した教育改善。
- 8) 社会人学生の受け入れ拡大(学び直し)、生涯学習社会の構築。(25歳以上の成人学生の比率はOECD平均で20%強)
- 9) 3大都市圏の私大定員増抑制と計画的な定員削減、国・公立大学のミッションを明確にした上で、旧帝大の大学院大学化、地方総合大学の大学院重点化と人社系の定員圧縮。地方の中小規模私大への重点助成。

2 今後の高等教育政策の行方

- 10) 「競争原理」による「優勝劣敗」「自然淘汰」による170私大の閉鎖は、経済が疲弊し、若者流出が進む地方中小都市立地の中小私大で顕著。大都市圏の私大は、「競争力」と関係なく学生確保が可能、中小都市立地私大は「競争力」があっても「負け組」に。⇒地方が疲弊し、大都市圏がさらに膨張し、出生率がさらに低下。
- 11) 政府は、交通網整備とICTで広域都市圏を形成し、大学が成り立ちうる人口規模を確保した上で、大学を「地の創発拠点」として地方の産業振興を目論む。

3 今後のシナリオ

- 1) 限られたパイ、市場を奪い合う「ゼロ・サム・ゲーム」がしばらく(5~10年)続く。
- 2) この間、定員割れが3~4割の私大が相当数学生募集停止、大規模私学への吸収という形で消滅。
- 3) 国・公立大学の戦略的ダウンサイジング(大学院重点化、学部定員削減、一部大学の私学化)が始まる。(5~10年後)
- 4) 「均衡のとれた国土形成」の観点から、大都市圏の私学定員削減、地方中小規模私学への特別助成強化。(5~10年後)

4 何をなすべきか?

- 1) 「その場しのぎ、行きあたりぼったり」の漫然とした大学運営、旧例墨守・前例踏襲の大学運営は、早晩行き詰る。
- 2) 環境変化を先取りした積極果敢な改革(=現状の大胆な変更)を、戦略的に展開する大学のみが生き残る。⇒「戦略的¹⁾大学経営」。
- 3) 「戦略的¹⁾大学経営」とは、詰まるところ「人」と「システム」と「組織」。

5 改革を先導する「人」

- 1) ビジョンと情熱と改革マインドを持った「人」を理事長、学長、役員、学部長、管理職に! (川本八郎前立命館理事長を見よ)
- 2) 「人」を育てる⇒「改革」には成功事例から導き出される「法則」「共通項」があり、それらを体系化して集中型研修プログラムを開発・実施。
- 3) 外部人材の登用。
- 4) 「人」を支える組織の創出・強化⇒「経営企画部」「学部企画室」。

6 改革を容易にする「システム」

- 1) 「経営」と「教学」の意思決定システムの一体化(「法人・大学運営会議」)。
- 2) 執行部会議(理事長、学長、常務理事、事務局長、経営企画部長)の設置。
- 3) 教授会の抜本改革⇒全学教授会(Academic Senate)に一本化、教学に関する重要事項のみ審議。教学単位ごと・課題(入試、卒業判定・・・)ごとの委員会を設置。
- 4) 外部有識者の諮問会議、監事の戦略的活用

7 改革を支える「組織」

- 1) 大学経営の「頭脳」としての経営企画部、学部経営の中枢としての「学部企画室」の設置、強化。
- 2) 可能な限り縦割りを排した効率的な事務組織の構築。(グループ化、フラット化、課長裁量の強化)。
- 3) 事務職員の採用基準(大学院卒、海外経験、外国語力)、能力開発システム(職場の課題の分析、解決策の企画、実施)の一新。

8 これからの職員の役割

- 1) 課長級以上の管理職⇒大学、学院のあるべき姿(理想、目標)と現実のギャップを認識する力(課題設定力)、課題解決に向けた政策立案力、説明力。役員・教員の「操縦力」。部下の育成力。
- 2) 課長補佐以下の職員⇒(総務、財務、人事、施設等の管理部門)効率化、教育・研究の活性化を意識した執行、(教務、学生、図書館、研究、国際)学生、教員とのコミュニケーション。課題設定、調査分析、政策立案、政策実行力。(広報、就職、父母会・同窓会、産学連携、社会連携等の対外部門)コミュニケーション、営業力。

9 職員の育成

- 1) 階層別・専門別研修プログラムへの参加。
- 2) 改革型人材育成プログラムへの派遣(立命館アドミニ・プログラム、私大連「業務創造研修」)。
- 3) 国内外先進大学の訪問調査。
- 4) 国内外の関連大学院への派遣(FT、科目等履修生、特別プログラム)。
- 5) 自己能力開発への支援(研究費、資格・検定、学会・研究会参加、グループワーク支援)。

10 「企画力」を身に着けるには？

- 1) 大学の「現実」と選ばれる大学になるための「あるべき姿」とのギャップを認識する力⇒課題設定力
- 2) 有効・実現可能な「解」を考え出す力⇒企画力
- 3) 「解」を実現する力⇒実行力(ファクトとデータ、他大学の例、説明し理解・共感・支持を得るためのコミュニケーション能力)

10 企画力を身に着けるには？

4つの心がけ

- ★「高い志」をもつこと。
- ★常に2～3段階高い視点から考える習慣、相手(教員、管理部門、上司・・・)の立場に立って考える習慣。
- ★身銭を切っても勉強すること。(教養、専門書、研究会、人脈、外国語、資格、大学・大学院・・・)
- ★社会、経済、政治の動向に絶えず目配りすること。

10 関東学院改革の中間報告(未完)

- 1) 10年後の大学・法人ビジョン(「未来ビジョン」)構築プロセスの開始(14・4～)。
- 2) 「法人・大学連絡会」の定期開催(14・1～)。
- 3) 予算編成システムの改革(「未来ビジョン推進5か年事業」予算枠の確保(14・7))。
- 4) 常務理事・学長・学院長の年間重点事項(14・4～)。
- 5) FD/SD開始(若手職員対象の「本間塾」(13・12～)、未来ビジョン構築関連の国内外先進大学調査(14・6～))。

10 関東学院改革の中間報告(未完)

- 6) 学部横断的の全学支援組織の強化。(高等教育研究開発センター、国際センター、情報科学センターへの専任教員の配置(14・10～))。
- 7) 総合研究推進機構の抜本的改組・専任教員の配置による研究力の飛躍的向上(15・4～)。
- 8) キャンパス・デザインの新(デザイン性の高いキャンパス作り、学生の「居場所」作り)。
- 9) 新学部構想、グローバル化、事務改革。

11 梅光学院改革の中間報告

- 1) 新執行部(理事長、学院長、学長、統括本部長)によるトップダウン型の意思決定(12年～)。
- 2) 募集広報の集中展開、高校訪問の強化、授業料値下げによる入学者V字回復(170人台から250人台へ)。
- 3) 学部改組(文、国際言語、こども学部から人文、こどもの2学部5専攻体制へ)⇒教員削減へ。
- 4) 教育改善(セブ島留学、PBL、FD、生協との協働による社会人基礎力育成、ラーニング・commons)。
- 5) 文科省補助金(私立大学総合改革支援事業)2年連続採択、情報設備補助金も。

11 梅光学院改革の中間報告

- 6) 外部人材の登用(立地、処遇上の不利、クリスチアン条項の不利)、職員の能力開発(生え抜き職員が大半、規模の不利)、職員評価制度の導入と給与制度の抜本改革。
- 7) 不要資産(土地)の処分、資産運用(米国コモン・ファンド)、同窓会との関係改善。
- 8) 下関市長と5高等教育機関理事長との定期懇談会(市の中長期計画に私大を明確に位置づけ、市との協力・連携を推進、市大の学部縮小・大学院重点化を働きかけ)。

ご静聴、ありがとうございました！
「マネ研」で一緒に考え、行動しましょう！

- ・本間への連絡は、kokusaihaanalyst@yahoo.co.jp まで。Facebookもご覧ください。友達申請も歓迎。
- ・大学マネジメント研究会(2005年設立、個人会員430名、法人会員57法人、月刊誌「大学マネジメント」購読130法人)
(<http://www.anum.biz/>)
- ・「現場から大学を変える」「本音ベース、胸に落ちる改革実践」「政府と大学の架け橋」
- ・月刊誌刊行(既Pho4号)、「大学政策フォーラム」、「未来フォーラム」、「地域フォーラム」、「サロン」、TMLP、ドイツ大学訪問調査、調査研究等。
- ・会費、個人会員年1万円(月刊誌)、賛助会員年20万円(月刊誌10冊)。各種フォーラム・研究会(含JUAM主催会合)に割引価格で参加。

大学マネジメント研究会



韓国大学職員協会(KUA)が模倣誌を・・



2014年の「大学マネジメント」誌特集テーマ

- 12月号「学長を終えて」
- 11月号「大学にとっての卒業生、同窓会の意味と意義」
- 10月号「MOOCsの検証」
- 9月号「産学連携のこれから」
- 8月号「公立大学の現状と課題」
- 7月号「高等教育のグランド・デザインを考える」
- 6月号「大学の第3の専門職を考える」
- 5月号「大学のマーケティング」
- 4月号「異動官職について」

ドイツ大学訪問調査(2014年10月) ニュルンベルグ大学



ハイデルベルグ大学図書館



訪問調査団員

(事務局矢島、京進立本会長、室工大伊藤副学長、京大山本
総長室課長、関東学院大安田広報課課長補佐)



平成26年12月19日
山口大学、大学コンソーシアムやまぐちSDセミナー2014

若手職員から育む企画力

佐賀大学での取組を通して

佐賀大学総務部企画評価課係長 (IR主担当)
末次 剛健志(SUETSUGU Takeshi)

佐賀大学
美術館
2014年10月開館

はじめに 佐賀大学について

- 平成15年10月 旧佐賀大学と佐賀医科大学が統合
- 学部数 5 (文化教育, 経済, 医, 理工, 農)
- 研究科数 5 (教育学, 経済学, 医学系, 工学系, 農学)
- 共同利用・共同研究拠点 (海洋エネルギー研究センター)
- 学生数 学部約6,100人, 研究科約900人
- 予算・決算の概況 (平成25年度決算ベース: 附属病院含む)
 <収入> 約423億円 <支出> 約425億円
- 実は学生の出身地最多は福岡県
 (平成26年度入学者: 福岡38%, 佐賀25%)

佐賀大学と周辺国立大学の規模等

- 佐賀大 (15,564人) : 文化教育, 経済, 医, 理工, 農
- 九州大 (10,651人) [旧帝] : 文, 教育, 法, 経済, 理, 医, 歯, 農, 工, 芸術工, 農学
- 慶応大 (7,050人) [旧大] : 多文化社会, 教育, 経済, 医, 歯, 農, 工, 環境科学, 水産
- 熊本大 (7,370人) [旧大] : 文, 教育, 法, 理, 医, 農, 工
- 福岡教育大 (2,520人) : 教育
- 九州工業大 (3,904人) : 工, 情報工
- 山口大 (8,602人) 中核地方 : 人文, 教育, 経済, 法, 医, 工, 農, 共同財団, 国際総合科学 (予定)
- 次分大 (11,610人) : 教育福祉13学, 経済, 農, 工
- 国公立大 : 鹿児島大 ● 鹿児島育英大 ● 琉球大

【参考】三大都市圏を除く地域の国立大学の規模等 (地域) (学士課程の収容定員 H25)

北海道	7校 約23,000人
東北	7校 約36,000人
中国	5校 約36,000人
四国	5校 約23,000人
九州沖縄	1校 約63,000人

「企画」「企画力」とは？

【企画】
実現すべき物事の内容を考え、その実現に向けての計画を立てること。立案すること。また、その計画や案。「新製品を—する」

【類義の語に「計画」があるが、「計画」は行わべき物事の内容がおおむね決まっっていて、その実現の方法・手順などを前もって考える意。それに対して「企画」は自新しく好ましい物事の内容を具体的に考え、その実現に向けて手はずを整える意を表す】
出典：weblio 辞書 (<http://www.weblio.jp/>) 三省堂 大辞林

【企画力】
企画に関する能力。卓抜な企画を纏め上げたり、アイデアを具体的な企画とする能力などを指す表現。
出典：weblio 辞書 (<http://www.weblio.jp/>) 実用日本語表現辞典

本日の内容

佐賀大学「事務系職員クラブ制度」

これから求められる企画力と IR

佐賀大学「事務系職員クラブ」概要①

- ・ 成立前史
 - 【制度的には】
 - 事務系職員提案制度 (提案制度自体は別途継続中)
 - 「佐賀大学プロジェクト研究所」制度の創設
 - 【環境的には】
 - 俯瞰的・横断的な業務の増加 (ルーチンに加え, 課題発見・解決やその連絡調整の増加)
- ・ これらに対応するために…
 - 部課を超えた横断的機動的な検討の場を設け, 様々な問題提起とその解決を現場の立場で話し合う
 - 今後の事務職員の活性化とモチベーション向上に資することで, 大学運営に携わる人材育成の一助を目指す

佐賀大学「事務系職員クラブ」概要②

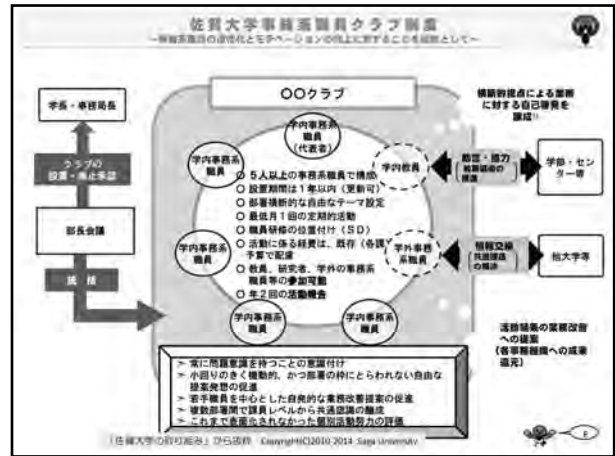
・ 制度検討の視点

- 問題意識を持てること
- 自由な発想・提案ができること
- 若手の能力を引き出せること
- 職階縦断的・組織横断的な取組ができること
- 個別努力に光が当たること



・ 制度の特徴

- テーマ設定は自由（自由な発想・自発的問題提起）
- れっきとした「業務」→→→「成果」を出す（更新審査あり）
- 業務改善の提案が可能
- メンバーは複数部署から（代表は主任～副課長）



【佐賀大学の取り組み】から抜粋 Copyright(C)2010-2014 Saga University

佐賀大学事務系職員クラブ一覧 (H26.11現在)

クラブ名称	代表者(構成員数)	テーマ～キーワード～	設置期間
IT塾	企画管理課 木下保夫 (10名)	「佐賀大学版IT塾」の発展化 IT活用、業務改善、人材育成	平成14年9月～27年3月
Staff Mates 倶楽部 (スタッフマネースクラブ)	国語課 吉野副課長 (8名)	事務職員のマナー(言・様・態度)向上	○
職員英語能力向上クラブ	経済学部 黒木保夫 (8名)	事務職員の英語能力向上	○
佐賀大学「Performance Freerly」マネジメントサークル	研究協力課 松尾保夫 (10名)	社会的責任等の知識習得及び活用	平成25年4月～
技能・技術向上倶楽部	総務課 山口保夫 (13名)	様々な活動を通じた職員の技術・ 技能の向上と愛校心の醸成	平成26年4月～
【活動終了(代表者の所属は終了時点)】			
ICT新活用クラブ	入試課 木下保夫 (7名)	ICTを利した業務改善・効率 向上、人材育成	平成24年5月～25年2月
芸術企画推進連携型クラブ	経営管理課 神川課長 (7名)	芸術文化継承のための取組み	○ ～26年3月
佐賀大学ブランドカレッジ・ブ ロジェクト	学生生活課 江口副課長 (7名)	佐賀大学のブランド力向上	○
佐賀大学版E.M.S (環境マネジ メントシステム) 検討クラブ	企画管理課 川原副課長 (9名)	佐賀大学版環境マネジメントシ ステム構築	○
職員運営カレッジフォーラム	総務課 夏秋主任 (5名)	職員後や職員運営の検討	○
事務系職員アップ企画クラブ	総務課 大石保夫 (8名)	能力ある大学づくりに貢献できる 自律的な事務職員の養成	○

※申請期間出典 「佐賀大学の取り組み」から抜粋 Copyright(C)2010-2014 Saga University

「事務系職員クラブ」活動にあたって

- ・ 制度の立ち上げ当初は、11の設置申請
 - 10のクラブが発足
 - 内容は様々…プロジェクト的なもの、スキルアップ的なもの
 - 意欲のある者は掛け持ち傾向（所属は2つに制限）
 - 学長・事務局長の承認のもとでの活動、一方で、管理職は参加資格なし
 - 開始当初、活動しやすい雰囲気醸成のため、時間確保の配慮を事務組織全体に周知



「IR塾」の取組概要



- ・ 現メンバーは係長4名、主任・課員6名の10名
- ・ 月1回の定例会（成果を披露，意見交換）
- ・ アイデアはメンバーの自由な発意に基づく（ボトムアップ型）
- ・ 業務上の手元のデータを「可視化」する試みや、根拠に基づく分かりやすい資料作成能力の向上
- ・ 組織横断的なスタイルを活かし、課を超えたデータ分析の試行
- ・ IRや大学改革に関する用語等の理解
- ・ (→用語集の検討)



成果と課題①

～代表者の一人として～

- ・ 成果が出ているもの、更にこれからのもの、終了したもの、等々
- ・ 成果が出るか、また継続できるかは、様々な要素が複雑に絡み合う

国立大学法人佐賀大学の平成24年度に係る業務の実績に関する評価結果(抜粋)

(平成25年11月6日 国立大学法人評価委員会)

- 平成24年度の実績のうち、下記の事項が注目される。
- ・ 部署横断的な検討の場である「事務系職員クラブ制度」では、「英語対応マニュアル」を作成するなど、自主的な活動を通して職能開発を進めるとともに問題発見と解決方策の提案等に取り組んでいる。



成果と課題② ～代表者の一人として～

- 少なくとも、プロジェクト的なものとスキルアップ的なものでは、運営方法や適用できる手法は異なる
(試行錯誤…)
- スタートする力と継続する力は、別物
- 目標管理、モチベーション、日常業務との兼ね合い
- 成果を組織・業務改善へ活かす道筋とその進め方



本日の内容

- 佐賀大学「事務系職員クラブ制度」
- これから求められる企画力とIR



IRとガバナンス改革

「大学のガバナンス改革の推進について」(審議まとめ)
(平成26年2月12日 大学分科会)

- 適切なガバナンスを働かせるためには、まず何よりも、学長が各学部の事情を十分に把握した上で、改革方針を策定していくことが必要である。…大学自らの置かれている客観的な状況について調査研究するIRを行い、学内情報の集約と分析結果に基づき、学長の時宜に応じた適切な判断を補佐することが重要である。
- 学長は、…、IR等を通じた客観的・合理的なデータに基づく説明を通じて、直接関係する教員や学生等をはじめ、学内外の理解を得て、最終的には学長が責任を持って、大学の経営方針を踏まえた改革を推進していくべきである。

下線部分の主題(当事者)は誰か?

15



IRとは?

IR: Institutional Research の略

「機関調査」などと訳される

- 米国で1960年代から発展したとされる考え方
- 日本では、近年関心が高まっている
- 大学関係者や研究者の間で共通の理解があるわけではない

大学におけるIR(インスティテューショナルリサーチ)の現状と在り方に關する調査研究報告書(東京大学、2013.3月)

佐賀大学では…

企業でいうところの**情報戦略支援室?**のようなイメージでとらえている

一般的にIRと言えば

Investor Relations (投資家向け情報)

16



IRと意思決定

『原石に過ぎないデータが情報となるには、目的のために体系化され、具体的な仕事に向けられ、意思決定に使われなければならない』



Peter Ferdinand Drucker
『未来への決断』(1995)

+ 実行に移され、自ら検証し、自発的な改善のサイクルをもたらす

佐賀大学版IRの哲学

17



マネジメントにおけるIRの位置づけ



18

佐賀大学版IRの2つの機能

- 情報提供機能
「正しい現状認識、正当な評価、的確な戦略・戦術」を支援する情報を提供する
- 影響機能
「頑張っている人が評価され、さらに頑張れる、やる気がでる、せざるを得ない」というモチベーション向上


IR

19

IRにおける分析の考え方

- ・ 分析の目的は、真理の追求ではない
→ 何も始まらない可能性 **厳密性には固執しない**
→ 普段の問題意識を可視化することからはじめる
- ・ 強み・課題や傾向の可視化(現状把握)により、取組や改善を支援すること
→ 気づきや改善の「きっかけ」を提供

★企画力★



20

企画する際の前提(必須)

現状把握

↓

立ち位置や強み・課題を客観的に整理
→ 納得・コンセンサスへの第一歩

- ・ Check
- ・ Action & Assessment

21

Check

22

どこに、どんなデータがあるか

「既存のものを使うというのが前提」

23

Action & Assessment

24

Plan

IR室 データの可視化 (情報提供機能) 計画策定、意思決定、意思決定の支援

執行部

情報の必要 (戦略構築) 現場・セグメント

25

中期計画策定に向けたIRの活用

■ 第三期中期計画策定 (H28年度～) に向けた準備

- 現状認識 (Check & Assessment) → 現状・課題・強み
- 具体的検討のトリガー

教学部会

- ・ 人材供給の現状 (進路先地域・業種)
- ・ ストレート卒業率や進路決定状況
- ・ 佐賀大学生の多様性

学術部会

- ・ 発表論文数の現状
- ・ 科研費や学部資金等の現状
- ・ 研究促進効果の高い施策事例

社会貢献

- ・ COC事業の取組概要や現状
- ・ 今後に向けたCOC事業の展開や方向性

経営基盤

- ・ 人事給与、施設管理データを踏まえた現状や方向性
- ・ 部局別収支状況を踏まえた現状

議論の出発点を定める
現状報告

26

計画策定のためのたたき台作成

第3期中期目標・中期計画 (たたき台の作成稿)

共有した結果を目標・計画にフィードバック

27

事務職員の企画力に必要なもの

～IRのマインドとスキル～

(IRはIRのためのものではない)

28

事務職員から見たIRの「情報提供機能」と「影響機能」

★ 大学運営上のデータを扱っているのは事務職員


- ・ 「情報提供機能」
意思決定を担う役員等が、データや根拠に基づき、短時間で理解・判断できる資料の提供
- ・ 「影響機能」
本来、人は「良くなりたい」と思うもの
情報を繰り返し提示することで、人は気づいて動く
組織横並び・比較などを用いた見せ方により、情報流通や動機づけを意識した資料の作成・配付

29

見せ方には方法がある


Chart Suggestions—A Thought-Starter

30




これからの事務職員とIR (1)

持続的な“競争力”を持ち、
高い付加価値を生み出す国立大学へ
(国立大学改革プラン 平成25年11月)



- ・ 大学IRは、もはや時代の潮流
- ・ 大学間競争の「静かなるヨーイドン」
- ・ 国公立大学ごとの学校基本調査データの公表(大学ポートレート)等をきっかけとして、多くの大学が、IR体制の構築や他大学のベンチマーキング検討に、一斉に本気で走り始めた
- ・ →大学事務職員にとって、IRのマインドやスキルが当たり前となる時代の幕開け

31



これからの事務職員とIR (2)

大学運営上の手元のデータを活かす
業務改善・スキルアップ！
そこから課題発見と意識改革へ


少子化、財政改革・・・
学内外ともに「べき論」がそのまま通じる時代の終焉？

IRはIR部署だけのものではない
(IRデータ≠IR室データ)

根拠に基づいた大学運営の実現に向け
事務職員の役割は大きい

これからの大学を支える事務職員に
IRのマインドとスキルは必須！

32



まとめ

- ・ 企画の際に必要なのは、まず現状把握(check)、強み・課題の明確化(Action&Assessment)
 - ✓ 現状の根拠(定量的・定性的エビデンス)や指標の提示
 - ✓ スタートライン設定、進捗状況の検証のためにも不可欠
- ・ 大学の現状把握に必要なデータを扱っているのは事務職員
 - ✓ 各種統計や調査もの、システムのデータの活用
 - ✓ 公開情報(オープンデータ)の活用
- ・ 客観的分析に基づいた、情報や認識の共有・合理的議論を経たコンセンサスの形成

↓

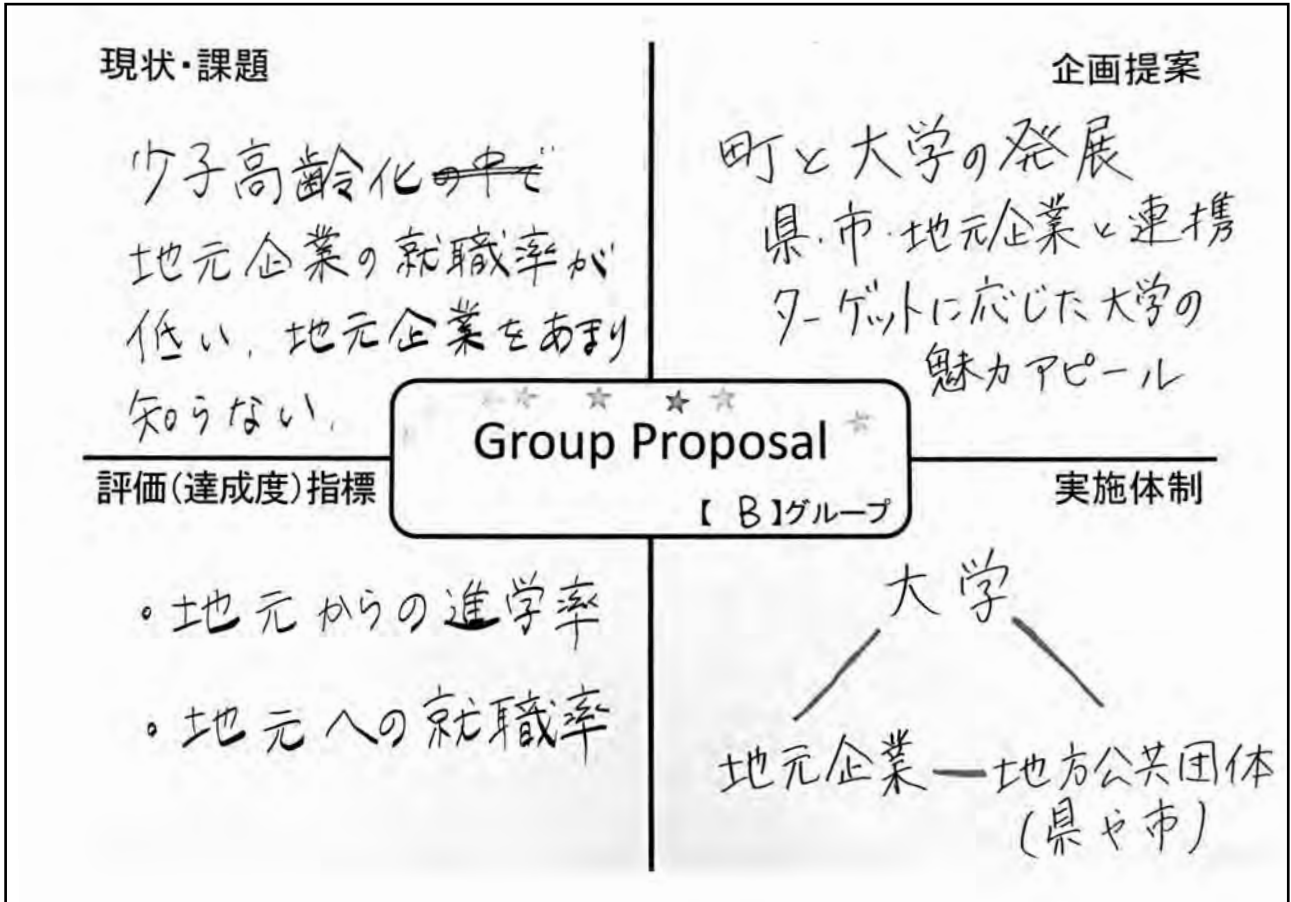
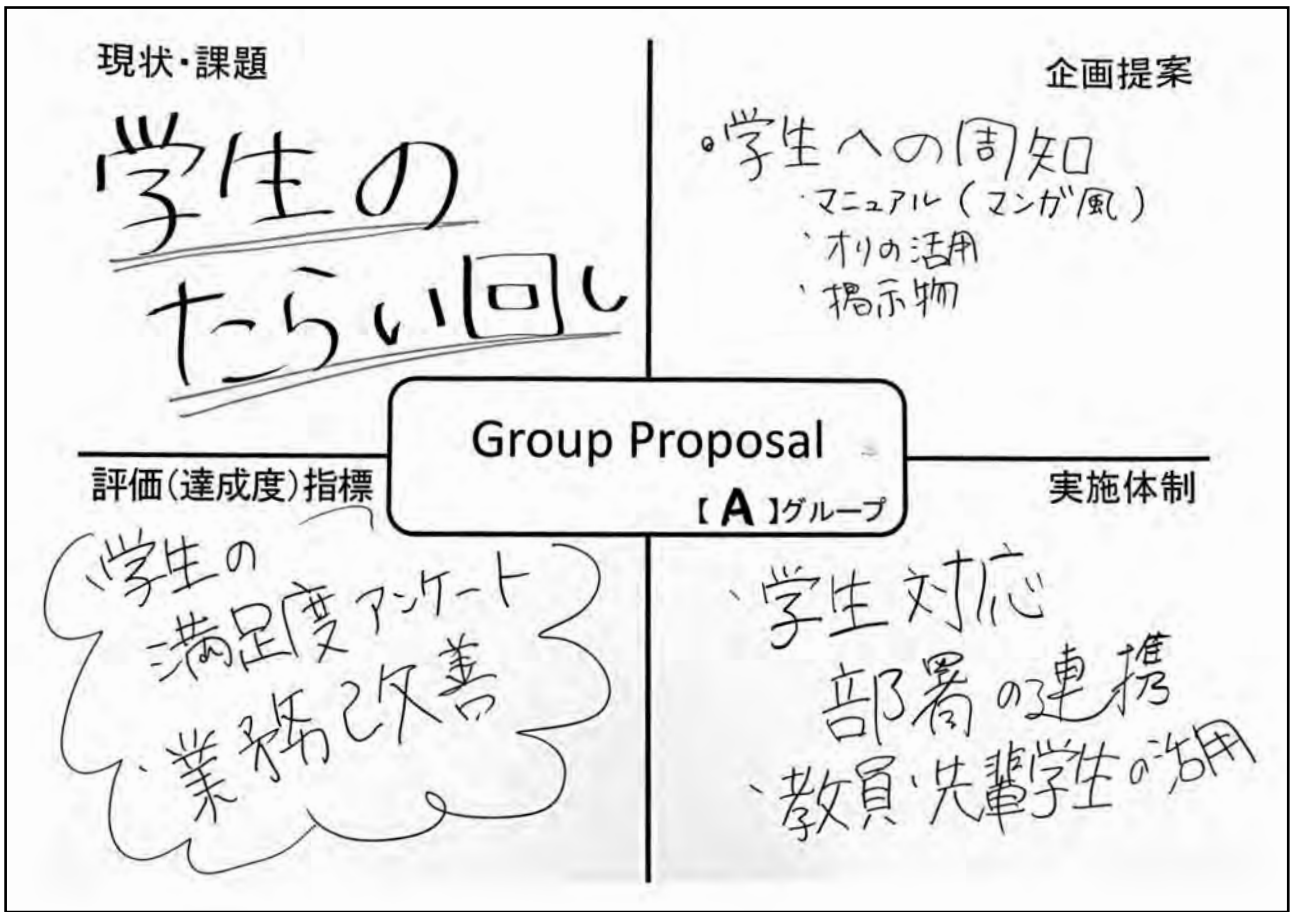
IR

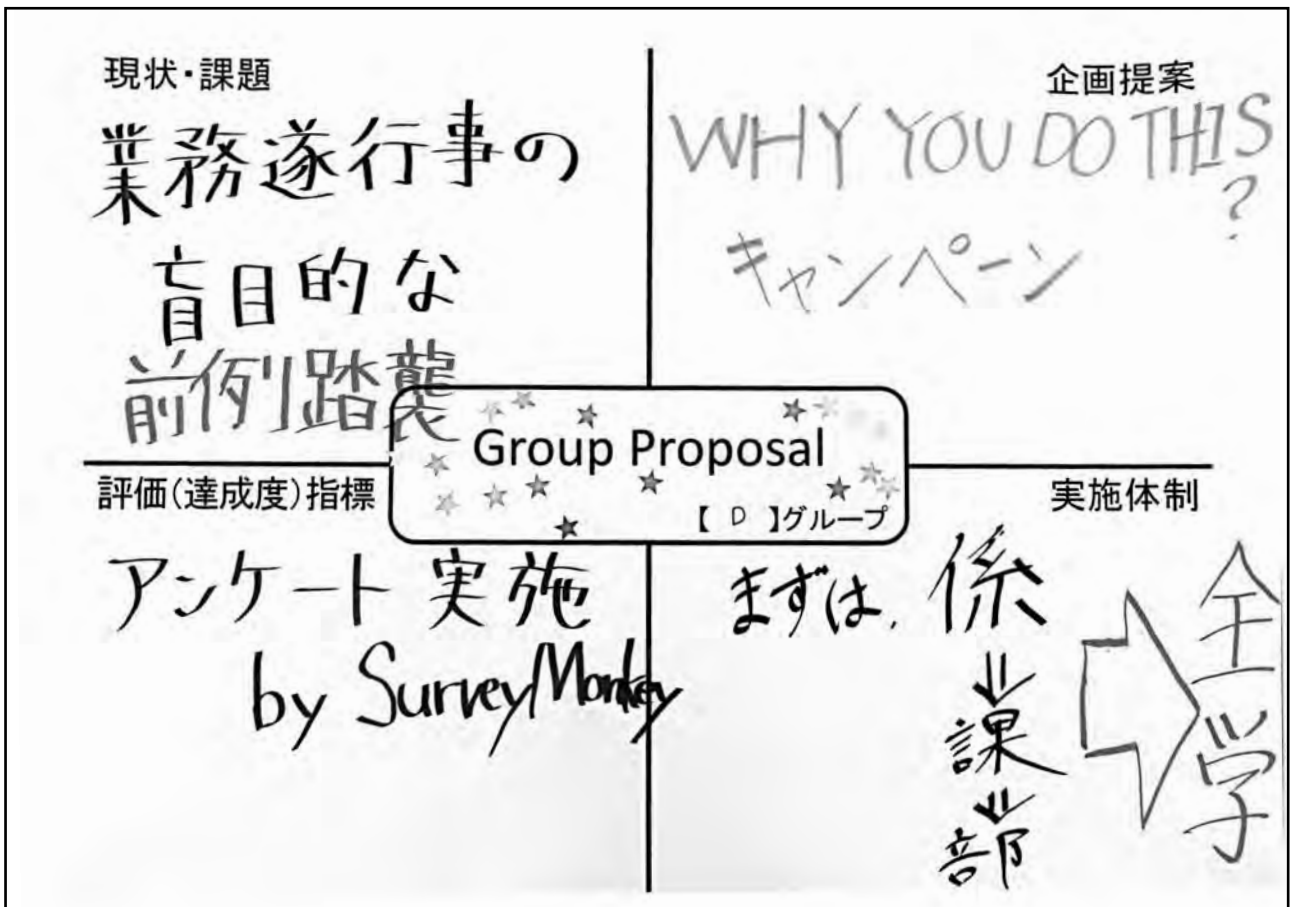
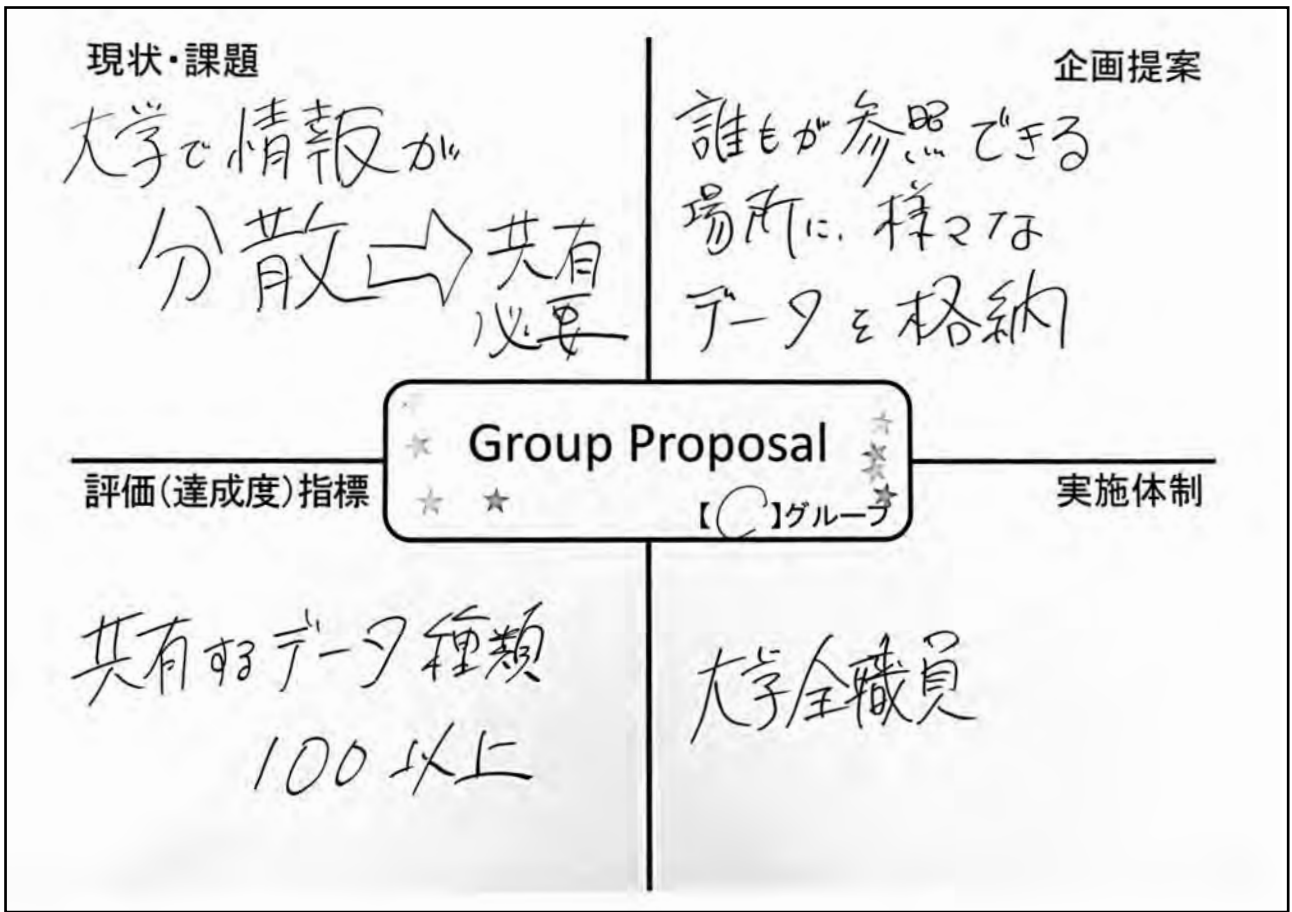
“べき論”や“情熱”だけではない、客観的な現状分析・情報提供スキルを踏まえた提案能力(コンセンサス形成の支援能力)こそが真の「企画力」ではないか

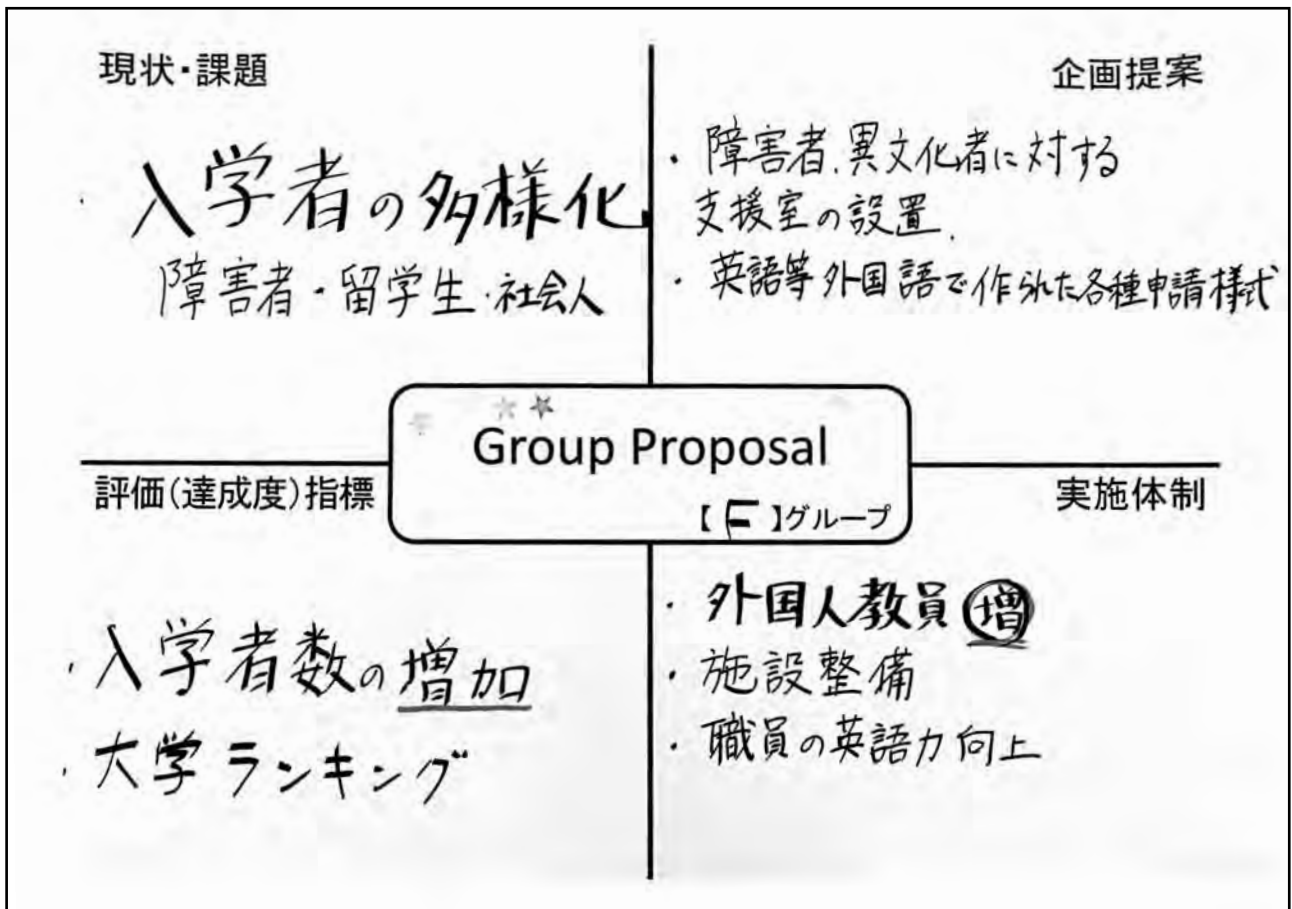
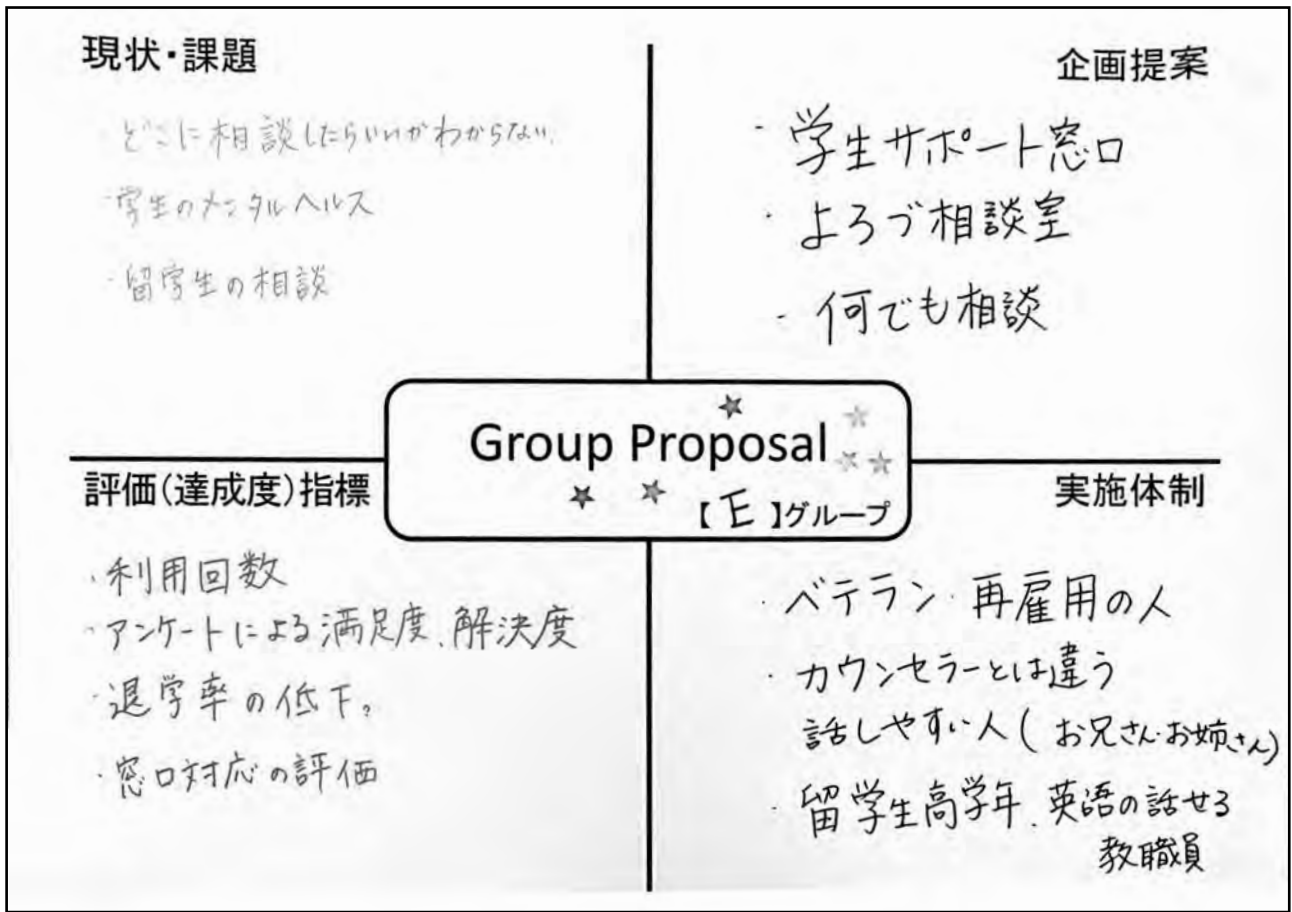
33

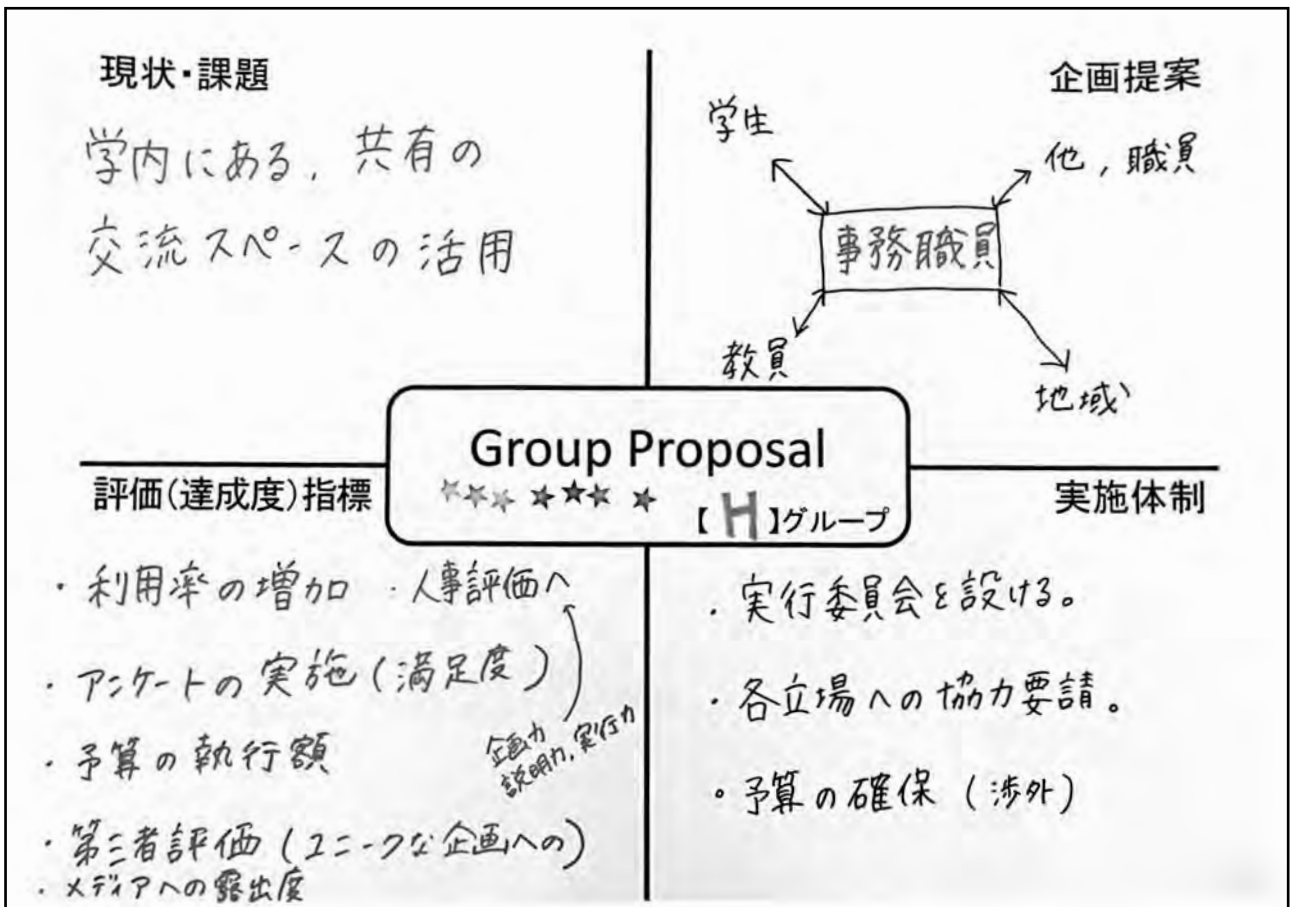
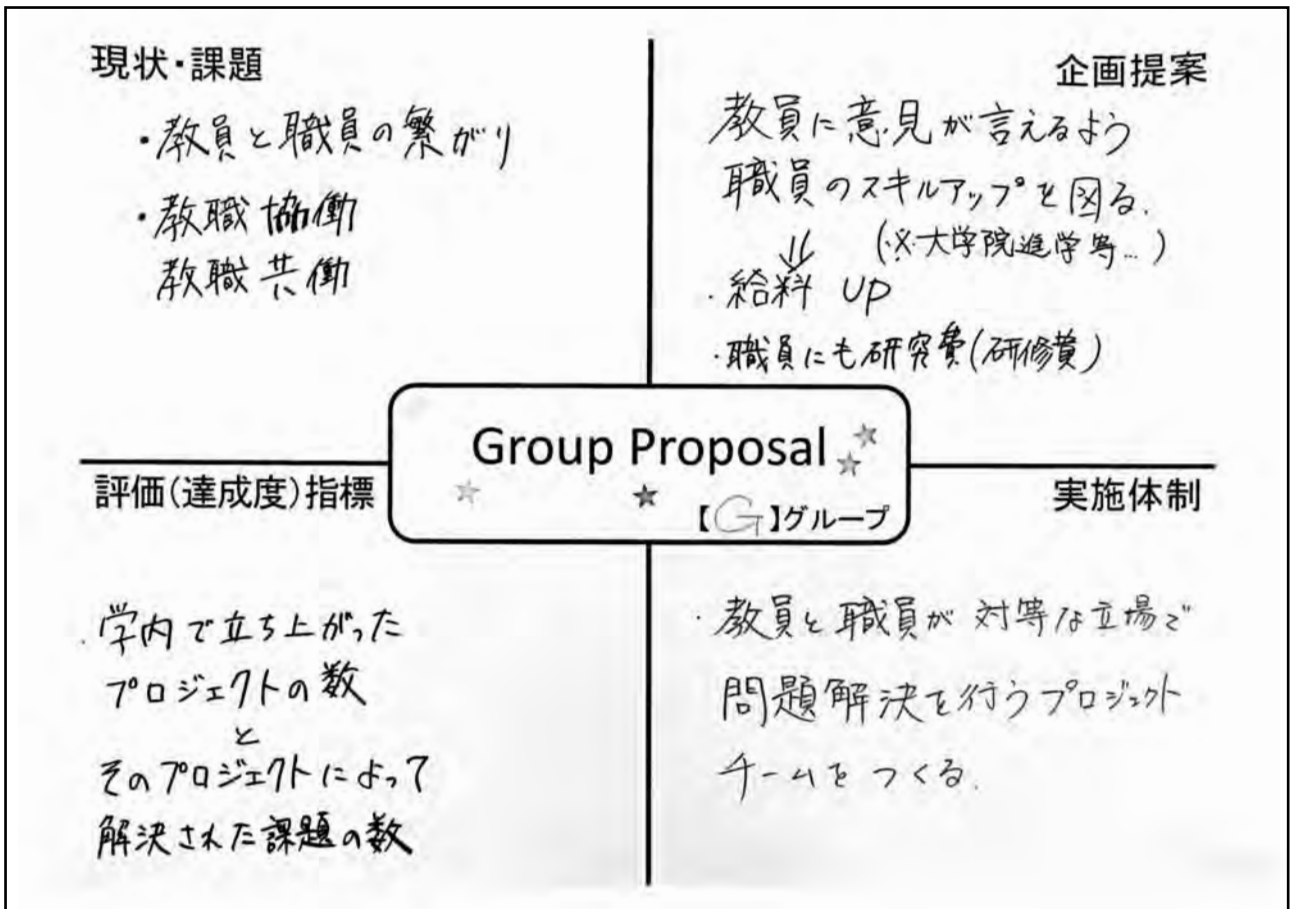


ご清聴ありがとうございました









<p>現状・課題</p> <p>◎ 入試の志願者の減少</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ 学生数の確保 ◦ 学生の質の確保 <p>課題</p>	<p>企画提案</p> <p>◎ 企業が求める人材づくりに基づいたカリキュラム</p> <p>◎ 地域と連携して山口大学周辺を魅力的に</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ 魅力的なパンフレット作成
<p>☆☆☆ Group Proposal ☆☆☆</p> <p>【I】グループ</p>	
<p>評価(達成度)指標</p> <p>入試倍率 2.8 → 5倍 に up ↗</p> <p>就職内定率を 100% に!!</p> <p>😊</p>	<p>実施体制</p> <p>入試</p> <p>／ 〰</p> <p>広報 — 就職</p>

<p>現状・課題</p> <p>学生への情報発信</p> <table border="0"> <tr> <td>履修規程 GPA, CAPを 見直し</td> <td>・200周年の 認知向上</td> <td>掲示板の 掲示の見直し ターゲット 学生</td> <td>学生目録の 立ち上がり</td> </tr> <tr> <td>測定結果の 誤差を減らす</td> <td>外国人の 受入体制</td> <td>大学改革の 職員の意識向上</td> <td>卒業生に対する 情報発信</td> </tr> <tr> <td>医学部の 博士進学者の</td> <td>志願者確保 入試データ活用</td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	履修規程 GPA, CAPを 見直し	・200周年の 認知向上	掲示板の 掲示の見直し ターゲット 学生	学生目録の 立ち上がり	測定結果の 誤差を減らす	外国人の 受入体制	大学改革の 職員の意識向上	卒業生に対する 情報発信	医学部の 博士進学者の	志願者確保 入試データ活用			<p>企画提案</p> <p>SNSによる情報発信</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5人組制度 <p>文章の 画像</p> <p>電話番号を 登録して アタリ</p> <p>見せすこも どうするか</p> <p>メールアドレスの 正確さ</p>
履修規程 GPA, CAPを 見直し	・200周年の 認知向上	掲示板の 掲示の見直し ターゲット 学生	学生目録の 立ち上がり										
測定結果の 誤差を減らす	外国人の 受入体制	大学改革の 職員の意識向上	卒業生に対する 情報発信										
医学部の 博士進学者の	志願者確保 入試データ活用												
<p>☆☆☆ Group Proposal ☆☆☆</p> <p>【J】グループ</p>													
<p>評価(達成度)指標</p> <p>学生の反応</p> <ul style="list-style-type: none"> ◦ 休講なのに来た学生の数 ◦ 既続数・ログ解析 	<p>実施体制</p> <p>核となる学生の確保</p>												

現状・課題

・お金の足りない

理) 運営費 交付金 補助金の削減
由) 学生数減 ⇒ 学費収入減

企画提案

・支出削減 - ペーパーレス化等
・業務の効率化 - 他部署の業務の
みえる化
・学生定員の確保 - サービスの向上
・収益事業 寄付金の増

Group Proposal

評価(達成度)指標

・収入の前年度10%増
・新規事業等の実現

実施体制

- ☆☆☆☆☆
【K】グループ
- ① トップの決断と意見の共有
 - ② 部署で具体的な目標の設定
 - ③ 選択と集中

3. 横浜国立大学主催 大学教育再生加速プログラム (AP) 推進フォーラム 『学生のための、学生を成長させる「学修成果の見える化」とは —学生の主体的な学びの確立をめざして—』開催報告

日時：平成 27 年 2 月 21 日 (金) 13:00~17:00、22 日 (土) 9:00~12:30

場所：横浜ベイホテル東急

主催：横浜国立大学 大学教育総合センター

共催：宇都宮大学 基盤教育センター、徳島大学、
長崎大学 大学教育イノベーションセンター、山口大学 大学教育センター

概要：

【1 日目】

13:30~13:45 主催校代表挨拶

横浜国立大学 理事・副学長 溝口 周二

趣旨説明

横浜国立大学 大学教育総合センターFD 推進部門長 上野 誠也

13:45~14:25 《基調講演》

「学生の主体的な学びについて考える—学生が『学修』する仕掛け—」

富山大学 大学教育支援センター教授 橋本 勝

14:25~14:55 《学生からの意見表明①》

「学生からみた主体的な学び—私たちが主体的な学修へ導く条件とは—」

(1) 山口大学学生

山口大学 理学部 3 年 杉元 茜

山口大学 経済学部 2 年 奥田 真也

(2) 明星大学学生

明星大学 教育学部 3 年 金丸 充

明星大学 教育学部 2 年 大岩 裕哉

14:55~15:15 ファーストディスカッション

テーマ：「さあもっと、勉強しよう！大学での学びにやる気スイッチが入る時」

15:15~15:30 [休憩]

15:30~16:05 話題提供

「教員と学生の共通理解を促すために

—ルーブリックによる評価基準の可視化を通して—」

帝京大学 高等教育開発センター教授 井上 史子

16:05~16:40 《学生からの意見表明②》

「学生が考える、学生が成長し主体的な学びに繋がる成績評価とは」

(1) 岐阜大学学生

岐阜大学 教育学部 2 年 山本 建人

岐阜大学 工学部 2 年 大塚 陽也

(2) 東洋大学学生

東洋大学 文学部教育学科 3年 大森 優也

東洋大学 社会学部 2部社会学科 2年 齋藤 克弥

(3) 横浜国立大学学生

横浜国立大学 教育人間科学部 3年 中里 美咲

16:40～17:00 セカンドディスカッション

テーマ:「学生の学習意欲を高める、大学での成績評価とは?」

[総合司会:横浜国立大学 大学教育総合センター研究員 曾根 健吾]

【二日目】

9:20～11:50 分科会

分科会 1「学習者の目線に立った成績評価とシラバスとは」

座長:榊原 暢久 (芝浦工業大学工学部教授 教育イノベーション推進センターFD・SD推進部門長)

分科会 2「大学における主体的な学習と就業力」

座長:市村 光之 (横浜国立大学 大学教育総合センターキャリア支援部講師)

分科会 3「学生と考える、授業評価アンケートのこれから」

座長:川上 忠重 (法政大学理工学部教授・教育開発支援機構FD推進センターFD推進プロジェクトリーダー)

12:00～12:30 全体会

モデレーター:曾根 健吾 (横浜国立大学 大学教育総合センター研究員)

12:30 《閉会挨拶》

内 容：

【1日目】

● 基調講演と学生の意見表明

AP 推進フォーラム 1 日目は、まず、富山大学 大学教育支援センター橋本勝 教授より、「学生の主体的な学びについて考える—学生が『学修』する仕掛け—」と題して基調講演が行われた。講演は、ペア・ワークやフロアーからの発言を取り入れた講師、参加者双方向型で行われた。講演の冒頭に（授業の冒頭に）その場の雰囲気を設定することの重要性が、参加者を交えた体験型の講演を通してわかりやすく述べられた。「どんなことでも発言していいんだ」という雰囲気を作ることで、より学生が発言しやすい授業環境を作ることで授業の活性化がなされる。「おっ、これは」「これはいつもと違うぞ」と聴講者（学生）に思わせることが重要である。また、アクティブ・ラーニングについても無理なく自然に能動的な学習を誘発する仕掛けとして、楽ティブ・ラーニングという手法も提唱された。

続いて、基調講演を受け、学生からの意見表明があった。最初の意見表明では、山口大学の学生から「私たちの考える主体的な学びとは」と題して発表が行われた。本発表では、主体的な学びを応用力と言い換え、実際に学んだ知識を引き出して使うことができる、自分で選択した学問をさらに深めることができる、このような学びが主体的な学びだと主張された。応用力が身につく授業（教育）には、① アツい教員、② 具体的な成績評価、③ 前のめりに学ぶ学生、以上の3点が重要であると述べられた。また、前のめりに学ぶ学生になるためには「外的刺激」が必要であり、そのためには学内外での経験と学びが重要であるという主張がされた。



続いての学生からの意見表明は、明星大学の学生から「学生からみた主体的な学びとは何か～主体的な学修へ導く条件とは～」と題して発表があった。本発表では、受動的な授業と能動的な授業について学生が現実を感じている意見が述べられた。能動的な授業では、「ためになる！」「これを学ぼう！」「楽しい！」と感ぜられる授業が、能動的な授業であるとの説明があった。また、学生が主体的だと実感する活動、学びについては、課外活動やアルバイト、あるいは趣味などでも主体的な学びを感じることができる主張された。学生を主体的な学修に導く条件として、課題・ねらいが明確であることと必要性・実用性が感じられることが重要であることが主張された。

● ファーストディスカッション

ファーストディスカッションでは、「さあもっと、勉強しよう！大学での学びにやる気スイッチが入る時」をテーマに、ペア・ワークが行われ、フロアからの発言、登壇者からのコメントをふまえて行われた。参加者自身がディスカッションを通して主体的に学ぶということを経験し、参加者それぞれが主体的な学びについての理解を深めることができるものであった。



● 話題提供

話題提供では、帝京大学 高等教育開発センター井上史子 教授より、「教員と学生の共通理解を促すために—ループリックによる評価基準の可視化を通して—」と題して話題が提供された。話題提供の内容は、客観的で公正な評価が求められる背景、評価の機能と役割、そして、ループリック評価について述べられた。現代的な課題として、学生の複雑な能力を評価する必要性が高まっており、真正 (authentic) の評価が重要であることが述べられた。これは、学校の説明責任に対する社会的要求の高まり、教育のパラダイム転換 (学習者中心の教育) などが背景にあることが説明された。こうした状況に合わせてより複雑な能力を評価するために効果的な方法が、ループリック評価であり、学生も自身の学修を振り返ることができ主体的な学びの促進にもなることが述べられた。

続いて、岐阜大学の学生から「もし私が『主体的』な学生ならば」と題して意見表明があった。意見表明では、発表者が普段から感じている大学での学び (主体的な学び) について赤裸々に発表があった。大学では、本当に学びたいと思えることが学べない、厳しく制度化された学びがはたして主体的といえるのかという問題提起がなされた。

東洋大学の学生からは、「学生が考える、学生が成長し主体的な学びにつながる成績評価とは」と題して意見表明があった。意見表明では、現在の成績評価に対する意見、主体的な学びを実現させるために明確にしてほしい事項について発表があった。いわゆる「A」や「優」など一文字の評価では、学修成果が見えず、自身の学修目標なども立てられないことなど学生目線からの問題が提起された。

続いての学生表明では、横浜国立大学の学生から「学生は成績評価をこう思っている！」と題して発表があった。発表では、学生の感じている成績評価に関する問題意識について、学生が授業を選ぶ際には何が基準で成績が付けられているのか、そして、「学び」より「単位」のことを考えていることが主張された。成績評価を主体的な学びにつ

なげるためには、教員と学生の中に多数で多様なコミュニケーションが効果的ではないかという提案がされた。



- セカンドディスカッション

セカンドディスカッションでも登壇者、フロアーの間で、意見交換などが行われた。学生からの意見発表に共通することとして、学生の学び（学修）を部分ではなく、より全体を見た評価にして欲しいという点と、教員とのコミュニケーション（自身の学修に対するコメント、フィードバックなど）の頻度をさらに高めたいという点であったなどの議論がなされた。成績評価を学生の主体的な学びにつなげるためには、学生たちの成績評価の「なぜ？」に具体的に答えていくことも有効である旨のことが議論された。

【2日目】

- 分科会

分科会では、グループ・ワークや個人ワーク、参加者の発表などや登壇者とフロアーとの議論など、どの分科会においても双方向型であることが意識されたものになっていた。分科会3では、「学生と考える、授業評価アンケートのこれから」をテーマにアンケートの現状や改善点について議論された。また、そもそもの授業評価アンケートの必要性についても登壇者、フロアー間で活発な議論がなされた。授業評価アンケートを効果的に活用するためには、大学のIR機能とFD機能が十分に連携されている必要があり、アンケートなどの学生データをアドバイジングに活用することで、教育改善、学修の質向上に役立つことが議論された。

- 全体会

本フォーラムでは、全体会でも教員（分科会座長）だけでなく、各分科会に参加した学生がテーブルにつき、フロアとの意見交換を行った。本フォーラムは、1日目、2日目の両日にわたって学生が前面に出る機会が多いフォーラムであった。学生の率直な意見と実際に高等教育における課題に挑戦する教員の試みが交差するという稀有な機会を提供するフォーラムであり、フォーラムのメインテーマである「学生のための」という考え方の普及に一石を投じるものであった。



横浜国立大学 AP 推進フォーラム

山口大学 学生からの意見表明概要

山口大学 理学部 杉元 茜
経済学部 奥田 真也

1、山口大学の紹介

発表者の自己紹介を兼ねて、これまで山口大学で行ってきたことの紹介をする。学生 FD 活動、AP 事業についての紹介後は、新年度より始動する予定である、新しい団体『YC.CAM』の活動に関して説明する。団体のキャッチフレーズである『山大の「デキル」を創ります』に関して、具体的にはどのような活動を進めていきたいのかについて、今後の展望を紹介する。

(発表スライド内容：番号はスライド番号を指します)

- 2) 自己紹介
- 3) 学生 FD 活動
- 4) YU-AP 推進事業
- 5) YC.CAM としての活動の展望

2、「主体的な学び」とはどのような学びなのか

本フォーラムでの意見表明の本題に入る。まずは、「主体的な学び」の「主体的」とはどのような意味を指すのか。学生ら自身が手や口を動かしながらディスカッション等を通して学ぶこと(=能動的な学習形態)がすなわち「主体的な学び」であるとは断言できず、逆に教員に与えられた知識をひたすら吸収して身に付けながら学ぶこと(=受動的な学習形態)が「主体的な学び」ではないのだと断言することもまた不可能である。なぜなら、主体的な学びを行っているのかどうかは学生自身の感じ方に左右されるものであって、学習形態により左右されるものではないからである。よって、学習形態が能動的か受動的かによってそれが主体的な学びに繋がるのかどうかを判断することは不可能である。

我々は、「主体的な学び」とは教わったことや考えたことをかみ砕き、吸収して自分の力で活用するところまで高められる学び、つまり「応用力の身に付く学び」であると考えた。そのためには座学による知識の享受も、議論の中での思考もどちらも必要なものであり、どちらか一方を欠かすことは出来ない。では、学生に応用力を身に付けさせるためには何が必要となるのか。大学で、特に授業内において学生に応用力を身に付けさせるために必要になる要素とはなんだろうか。

- 6) 「主体的」とは？
- 7) 能動的＝主体的、受動的≠主体的
- 8) 私たちの考える「主体的な学び」とは「応用力の身に付く学び」である！

3、前のめりに学ぶ学生を育てるために必要な

ミクロ(大学内)、マクロ(大学外)での活動

応用力の身に付く授業を展開するために必要な要素は三つ存在する。一つ目は、「アツい教員」。二つ目は、「具体的な成績評価」。三つ目は、「前のめりに学ぶ学生」。授業内で学生を前のめりにする工夫が必要だが、より学生自身から学ぼうとする姿勢を身に付けさせるには、授業外での取り組みも不可欠となる。そこで、前のめりに学ぶ学生を授業外で育てるために必要となるものは『外的刺激』である。そして、学生に外的刺激を与えて成長を促すためにはミクロとマクロ、すなわち学内と学外での仕組みづくりが必要である。

まず、マクロな場(=大学外)に必要な場は『マッチングの場』である。全国の大学間で、学生同士が実際に顔を合わせて互いのレベルの違いを体感し、自分に不足している力や更に伸ばすべき力を知る必要があるのだ。

続いて、ミクロな場(=大学内)に必要な場とは『チャレンジの場』である。新しいことに挑戦することで新しい自分を発見し、更に力を伸ばすためには、その「場」が与えられている必要があるためである。研究室での日々の実験、地域の活性化に繋がるボランティア活動、本学での学生FD活動での先駆けとして行われた「共育ワークショップ」等、これまでの活動で感じたことを元にして具体的にどのような場を設けることが必要となるのかについて考察する。

最後に、ここまでで紹介してきた二つの「場」を学生が循環することによって更に高い効果が得られる。すなわち、学内外両方に学生を成長させる仕組みが存在していることが不可欠なのである。そして、学内での『チャレンジの場』の創造には成長する主体である学生らの視点も不可欠であり、今後の『YC.CAM』の学内でのチャレンジの場を広げようとする試みは、やがて本学の学生の成長に貢献することが期待される。

9,10) 応用力の身に付く授業を作る為に必要な要素

- 11) 前のめりな学生を育てるために必要なものは『外的刺激』
- 12) マクロ=学外に必要なのは『マッチングの場』
- 13) ミクロ=学内に必要なのは『チャレンジの場』
- 14) 共育ワークショップ
- 15) ミクロとマクロの循環
- 16) まとめ



**私たちの考える
主体的な学びとは**

YAMAGUCHI UNIVERSITY

山口大学 杉元 茜
奥田 真也



YAMAGUCHI UNIVERSITY

■発表者自己紹介

杉元 茜
(すぎもと あかね)

理学部三年生
有機化学が好き
弓道が好き
だいたい緑色
鳥が飼いたい





YAMAGUCHI UNIVERSITY

■発表者自己紹介



奥田 真也
(おくだ まさや)

経済学部二年生
経営学を専攻
お茶が好物
最近気になるのは
帝王学




YAMAGUCHI UNIVERSITY

■山口大学での活動

学生FDスタッフとしての活動

F aculty D evelopment

教育改善



YAMAGUCHI UNIVERSITY

■山口大学での活動

AP事業

A cceleration P rogram

大学教育再生加速プログラム



YAMAGUCHI UNIVERSITY

■これから

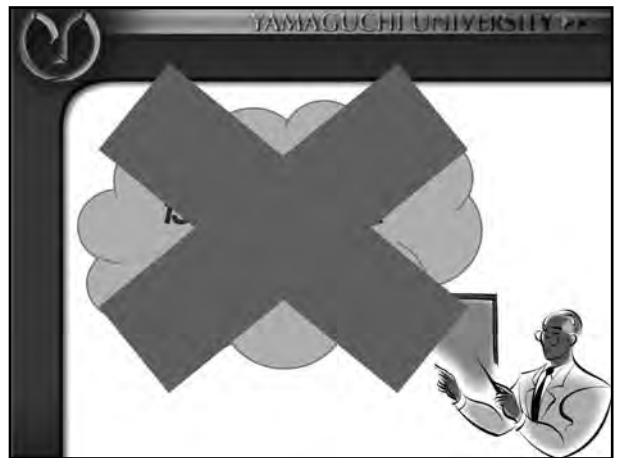
YC.CAM

山大コーディネーター

山大的「デキル」を創ります！

YAMAGUCHI UNIVERSITY

主体であること、主体的であることの意。主体性は現代的概念の一つであり、哲学的に新たな意味でとらえ直されたのは、主観が新カント学派にみられたように認識主観としてその形式的側面が主として問われたことに対して、生の哲学、実存主義哲学、弁証法的唯物論などの現代哲学では実践、行為との関係において問題にされたことによる。(ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典)自分の意志・判断によって、みずから責任をもって行動する態度や性質。(Weblio辞典)自分の意志・判断で行動しようとする態度。(goo辞書)



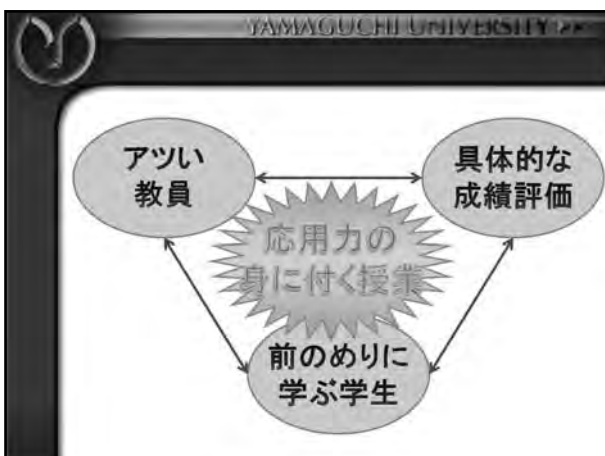
YAMAGUCHI UNIVERSITY

応用力

- 実際に学んだ知識を引き出して使うことができる!
- 自分で選択した学問を更に深めることができる!

YAMAGUCHI UNIVERSITY

必要な要素は三つ!!



YAMAGUCHI UNIVERSITY

学生を育てるために必要なものは...

外的刺激!

YAMAGUCHI UNIVERSITY

大学外で必要なのは...

**マッチング
の場**

YAMAGUCHI UNIVERSITY

朝から朝まで
実験漬け！？
研究室合宿

**チャレンジ
の場**

スポーツチームと
大学生との連携！
地域の活性化

YAMAGUCHI UNIVERSITY

共育ワークショップ



YAMAGUCHI UNIVERSITY

■まとめ

- ・「主体的な学び」とは「応用力」の身に付く学びのことである！
- ・学生が外的刺激を受ける場が学内と学外に必要。
- ・学内外の主体性の循環にうまく学生を乗せることで学生の質を高められるのではないか！？

YAMAGUCHI UNIVERSITY

ご清聴ありがとうございました

質問、ご意見は
山口大学まで
どしどしどうぞ！

(山口大学キャラクター ヤマミイ)

4. 山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP)

『ループリック事例報告ワークショップ』

— 「山口と世界」授業実践などを例にして— 開催報告

日 時：平成 27 年 2 月 27 日 (金) 14:00～17:00

場 所：山口大学 総合図書館アカデミックフォレスト (吉田キャンパス)

参加者：38 名 (うち学外 16 名)

概 要：

14：00～14：10 開会挨拶

山口大学 大学教育機構 大学教育センター長 糸長 雅弘

14：10～15：20 《第一部 事例報告》

(1) 『山口と世界』コモンループリック開発の経緯と課題

山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透

(2) 「学んでほしいことと評価できることの擦り合わせは可能か

～『山口と世界』の事例から～

山口大学 大学教育機構 大学教育センター講師 星野 晋

(3) 「名古屋商科大学におけるループリック活用実践事例」

名古屋商科大学経営学部教授 亀倉 正彦

15：20～15：30 [休憩]

14：25～14：55 《第二部 シェアリングタイム》

(1) 「コメント&アドバイジング」

京都大学高等教育研究開発推進センター教授 松下 佳代

(2) グループ対話

(3) 全体共有及び質疑応答

16：50～17：00 クロージング・閉会の挨拶

山口大学 大学教育機構 大学教育センター長 糸長 雅弘

(総合司会 山口大学 大学教育機構 大学教育センター助教 (特命) 河島 広幸)

内 容：

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、平成 27 年 2 月 27 日（金）に「ループリック事例報告ワークショップ『山口と世界』授業実践などを例にして」を開催した。本ワークショップには学内外から合計 38 名、中国、九州、関西、東北の各地区からの参加があった。本学では、2013 年度から大学教育学会課題研究「学士課程教育における共通教育の質保証」との連携により、初年次教育科目『山口と世界』を対象にしたループリック開発・実践活用を進めてきた。本ワークショップでは、『山口と世界』の事例報告に加え、名古屋商科大学経営学部 亀倉正彦教授から同大学のループリック開発取組を紹介していただき、京都大学高等教育研究開発推進センター 松下佳代教授からのアドバイスをいただきながら、ループリックの活用の方法や課題等について、参加者とともに理解を深めた。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	11	45.8%
良かった	13	54.2%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	24	100.0%

冒頭、糸長雅弘 大学教育機構大学教育センター長より開会の挨拶があり、本学での取組概要や本ワークショップが AP 事業の一環として行われることが説明された。

第一部の事例報告では、林透 大学教育機構大学教育センター准教授より、『『山口と世界』コモンループリック開発の経緯と課題』と題して報告があった。まず、ループリックそのものと全国的な調査に基づいたループリックの導入状況について説明があった。次に共通教育科目『山口と世界』における、ループリック開発の経緯が試作、開発、活用の三つのステップで紹介された。ループリック活用実践報告では、実際に行われている『山口と世界』の授業設計として学生へのループリックの趣旨説明や「共有シート」（個人ポートフォリオ）の活用などが報告された。課題として、ループリック開発にかかる負担などが挙げられたが、開発のプロセス、またループリックの活用による FD の効果があることが報告された。

次に、星野晋 大学教育センター講師より「学んで欲しいこと評価できることの擦り合わせは可能か～『山口と世界』の事例から～」と題して報告があった。報告では、コモンループリックに基づき科目の学習目標や学習内容について説明があり、授業のデザインについて紹介された。本科目では、リーフレットの作成とプレゼンテーションを行うという二つの成果物を評価することで授業が構成されている。ループリックを活用した授業実践を通して、予め学生にどのような学習が求められているかを提示できる、学習目標と方法を教員間で確認・共有できるといったメリットがあることが報告された。一方で、ループリックに基づいた点数化の難しさが上げられた。最後に、新学部（国際総合科学部）における「山口と世界」の位置づけと・発見する、・はぐくむ、・かたちにする、・分かちあう、・振り返る、の学びと創造のサイクルについて説明があった。

第一部の最後の報告として、亀倉正彦 名古屋商科大学経営学部教授より、「名古屋商科大学におけるループリック活用実践事例」と題して報告があった。まず、名古屋商科大学の建学精神である開拓者魂（Frontier Spirit）と同大学の教育質保証について説明があった。次に、初年次ゼミである VPS（Vision Planning Seminar）について、本セミナーの教育理念

である「師弟同行」をはじめとした概要について紹介があり、近年における VPS の抱える課題として同じセミナーである本ゼミとの連動体制や単位認定に相応しい学び（教育）をどう質保証するかなどが挙げられた。また、ルーブリックの 8 分野 16 項目とルーブリックに基づく指導評価表（試行中）について説明があった。最後に、今後の計画、実践におけるルーブリックの活用、そして、「個々の教員は、自分の専門分野への研究や教育には積極的に取り組むが、共通教育分野は他律的なイメージがあるため、共育への情熱が生まれにくい」などの課題への対応などの共通教育におけるルーブリック活用のマネジメントについて報告があった。



第二部では、まず、松下佳代 京都大学高等教育研究開発推進センター教授より、「ルーブリックの開発・活用の課題にどう応えていくかーコメントとアドバイジング」と題して、それぞれの事例報告についてのコメント、アドバイスが共有された。グループワークはグループ評価が原則であることや、貢献度のピア評価、あるいはグループワークそのものではなく、グループワークで学んだことの評価などについて各種のコメントがあった。また、パフォーマンス評価についても、常に広義のパフォーマンス（プロセス）の評価が必要ではなく、適宜、プロダクト（狭義のパフォーマンス）を評価することも重要であることが指摘された。最後に、YU CoB CuS に関連して能力ベース（Competency-Based）評価と『山口と世界』で活用されているコモンルーブリック（プロセスの評価）の違いを認識することについても説明があった。

次に、第二部では、参加者同士によるグループ対話があり、A～Fに分かれて活発な対話が行なわれた。それぞれのグループでの話題は、「評価の目的は何か?」、「評価すべきプロダクトとはどうゆうものか?」、「そもそも評価をどうするか?」などの評価に焦点を当てた議論があった一方で、ルーブリックの活用は、評価の向上よりも教員の教育力（教材作り）の向上（FD）効果が期待できるのではないかといった話題があった。



まとめ：

本ワークショップは、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の一環として行われており、山口大学改革をさらに推進するための教育改善に貢献したといえる。参加者の満足度も高く、また、全国からの参加があったことからルーブリックの開発・活用への関心の高まりがうかがえる。ルーブリックの導入など、近年の大学教育改革には大きな負担がつきものになっているが、一方で、おもわぬFD効果（ルーブリックでいえば評価に関するものの他に教員の教材作りなどにルーブリックが役立つなど）が期待できる取組が多く提案されている。今後も先進的な教育改革に積極的に挑戦し、さらに実りある山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）を進めていく予定である。



山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP) ループリック事例報告ワークショップ —『山口と世界』授業実践などを例にして—



【趣 旨】

本学では、2013年度から大学教育学会課題研究「学士課程教育における共通教育の質保証」との連携により、初年次教育科目『山口と世界』を対象としたループリック開発・実践活用を進めてまいりました。

今回のワークショップでは、『山口と世界』の事例報告に加え、名古屋商科大学経営学部 亀倉正彦教授から同大学のループリック開発取組を紹介していただきます。京都大学高等教育研究開発推進センター 松下佳代教授からのアドバイスをいただきながら、ループリックの活用の方法や課題等について、参加者とともに理解を深めたいと思います。

なお、本ワークショップは、山口大学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)の一環として開催いたします。

日時

**2015 年
2月27日(金)
14:00~17:00**

場所

山口大学総合図書館
アカデミックフォレスト
(吉田キャンパス内)

対象

学内外の教職員

【申込方法】 件名「ループリックWS申込」とし、「①氏名、②所属・職名、③e-mail」を記入の上、
E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp (担当: YU-AP推進室) へて、2月24日(火)までに送信願います。

【問合せ先】

山口大学 大学教育機構 大学教育センター(YU-AP推進室) E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp



【概要】

14:00～14:10 開会挨拶

山口大学 大学教育機構 大学教育センター長 糸長 雅弘

14:10～15:20《第一部 事例報告》

(1)「『山口と世界』コモンルーブリック開発の経緯と課題」

山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透

(2)「学んでほしいことと評価できることの擦り合わせは可能か
～『山口と世界』の事例から～」

山口大学 大学教育機構 大学教育センター講師 星野 晋

(3)「名古屋商科大学におけるルーブリック活用実践事例」

名古屋商科大学経営学部教授 亀倉 正彦

[休憩]

15:30～16:50《第二部 シェアリングタイム》

(1)「コメント&アドバイジング」

京都大学高等教育研究開発推進センター教授 松下 佳代

(2)グループ対話

(3)全体共有及び質疑応答

16:50～17:00 クロージング・閉会の挨拶

【用語解説】ルーブリックってなに？

学修評価の基準の作成方法の一つであり、評価水準である「尺度」と、尺度を満たした場合の「特徴の記述」で構成されます。記述により達成水準等が明確化されることにより、他の手段では困難なパフォーマンス等の定性的な評価に向くとされ、評価者・被評価者の認識の共有、複数の評価者による評価の標準化等のメリットがあります(中教審答申・用語集より)。

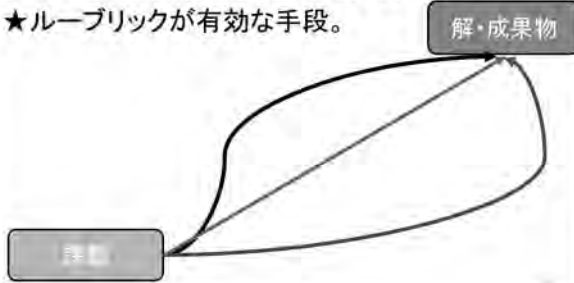
『山口と世界』コモンルーブリック開発の
経緯と課題

山口大学 大学教育機構 大学教育センター
准教授 林 透

前提

プロセスを評価するということ

- ★課題から解・成果物に至るプロセスが多数。
- ★プロセスを評価する規準が必要。
- ★ルーブリックが有効な手段。



ルーブリックとは？

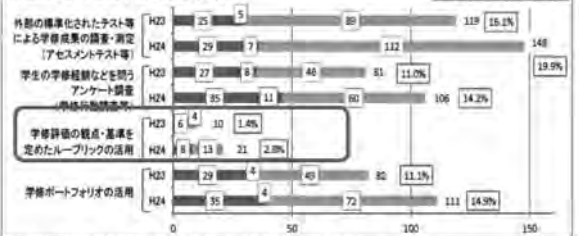
学修評価の基準の作成方法の一つであり、評価水準である「尺度」と、尺度を満たした場合の「特徴の記述」で構成されます。記述により達成水準等が明確化されることにより、他の手段では困難なパフォーマンス等の定性的な評価に向くとされ、評価者・被評価者の認識の共有、複数の評価者による評価の標準化等のメリットがあります（中教審答申・用語集より）。

- 規準（観点）、●レベル、●記述語



ルーブリックの導入状況（1）

【学部段階】学生の学修成果の把握方法



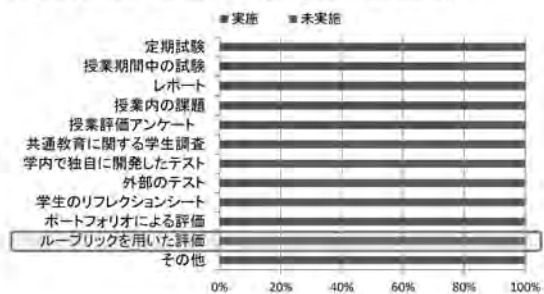
(※)大学院大学23大学(国立4大学、公立2大学、私立17大学)は対象外。

出典 文部科学省(2014)「大学における教育内容等の改革状況について(平成24年度)」

ルーブリックの導入状況（2）

大学教育学会課題研究・全国調査結果より抜粋
(2014年度実施)

- ・ 共通教育において実施している評価方法(複数回答)





『山口と世界』 コモんルーブリック開発の経緯

『山口と世界』の学習目標

一般目標の例

学習の目的

課題探求型の能動的学習を通して、山口県の歴史、文化、経済、産業、自然、教育など身近な地域の特色を知り、地域社会の発展に寄与する能力や態度を身につけるとともに、それらの資質を得意とする地域や国際的環境で活かす力を養う。

到達目標の例

(知識・理解の観点)
(思考・判断の観点)
(関心・意欲の観点)
・地域社会の諸問題に関心をもち、その発展に貢献したいと思うことができる。
(態度の観点)
・主体的に考え、行動することができる。
・グループ活動に積極的に関わることができる。
(技能・表現の観点)
・資料を適切に収集し、的確に分析することができる。
・自分の考えを適切に表現することができる。

- ### 『山口と世界』開設当初の課題
- ★開設当初は一般目標の共有のみ。
 - ★全学必修の初年次教育科目として、学生に保証すべき評価規準が不可欠。
 - ★授業担当者の教育内容・手法を尊重しながら、共通化すべき観点の抽出と共有が必要。
- ⇒『山口と世界』のコモんルーブリック開発

『山口と世界』コモんルーブリック開発

大学教育学会課題研究グループとの協働

- メタルーブリックの開発可能性がある学習成果の領域

関連する学習成果	文章コミュニケーション	問題解決	市民としての社会参加	グローバルな学習
新潟大学歯学部				
鳥栖大学ほか				
名古屋徳科大学				
山形大学				
山口大学				

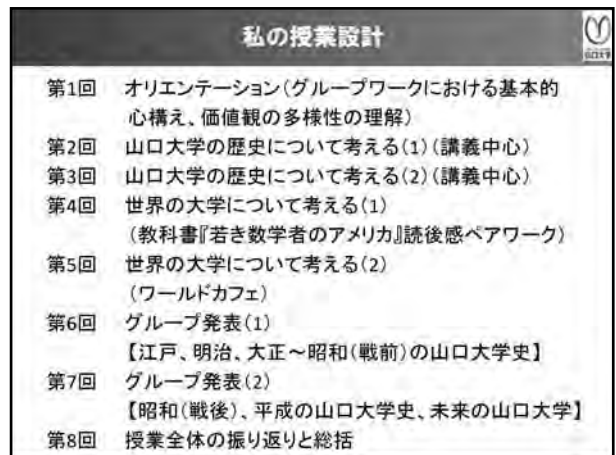
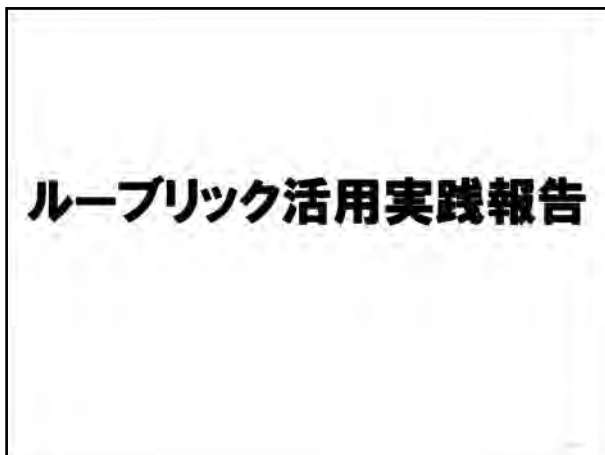
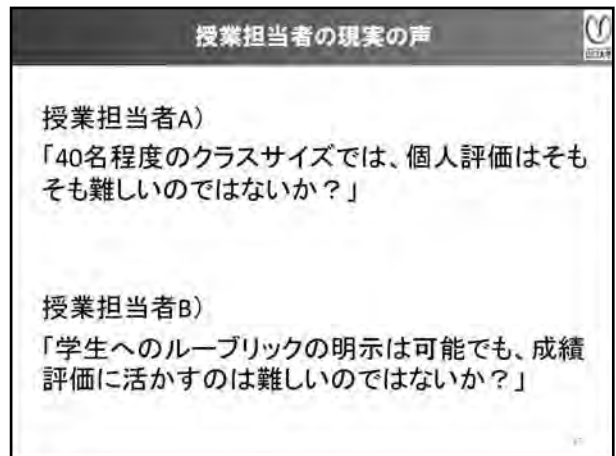
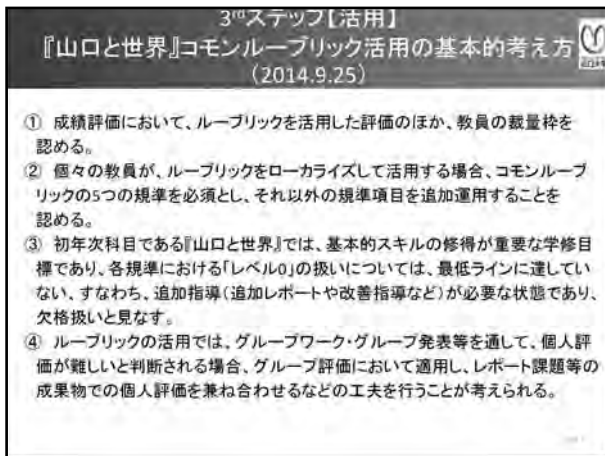
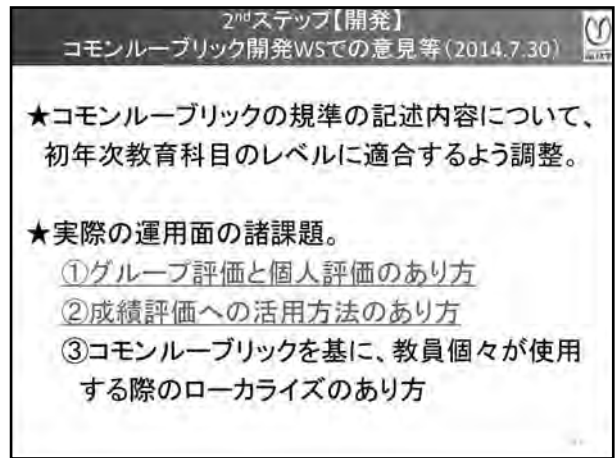
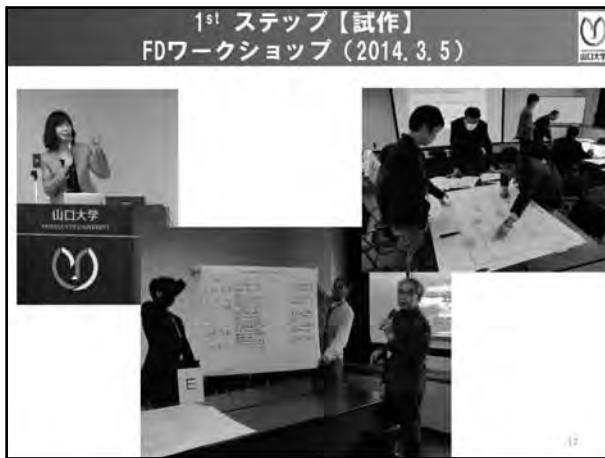
出典：松下(2015)平成25年度大学教育学会課題研究集要報告資料

コモんルーブリック:
特定の大学内で共有されるルーブリック

科目ルーブリック:
個々の授業科目で用いられるルーブリック



『山口と世界』コモんルーブリック開発プロセス

2014年	
3月5日	FDワークショップ(WS) 『山口と世界』コモんルーブリック試作
7月31日	コモんルーブリック開発WS 『山口と世界』コモんルーブリック(案)の提示と意見交換
9月上旬	『山口と世界』コモんルーブリック策定
9月24日	コモんルーブリック活用WS 『山口と世界』におけるルーブリック活用実践準備
10月～	『山口と世界』コモんルーブリック活用
2015年2月	ルーブリック事例報告WS

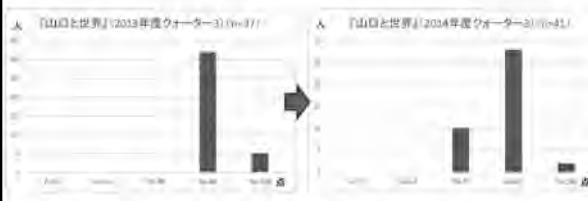


ルーブリック活用の具体

- ★授業第1回でのルーブリックの趣旨説明
- ★グループ発表後(授業第6・7回)での共育シート記入指示(※他者によるグループ評価も実施)
- ★共育シート記入内容に基づくレベル評価のフィードバック(授業第7・8回)

ルーブリック活用に伴う『山口と世界』成績分布の変化 (私自身の授業実践事例から)

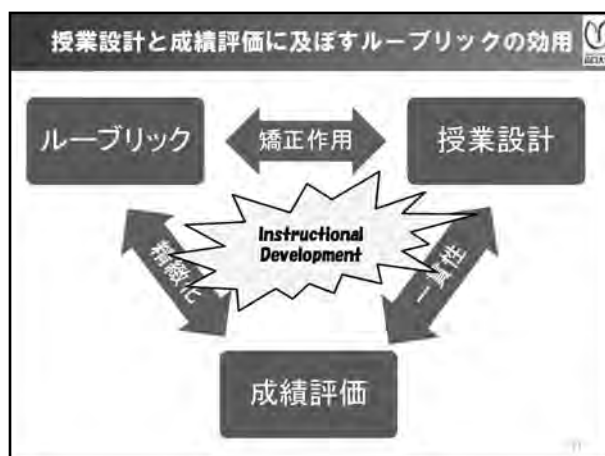


共育シート(個人ポートフォリオ)を活用し、ルーブリックによるパフォーマンス評価(各規準におけるレベル3[19~20点]、レベル2[17点・15点]、レベル1[12~13点]の点数化)を行い、成績評価に反映した。グループワークやプレゼンテーションにおける個々のパフォーマンスを従前よりも適正に評価するために有益である。

シラバスとルーブリック

【シラバスの成績評価基準】
⇒どの手段で評価するかというメジャー

【ルーブリック活用による成績評価】
⇒どのような規準で評価するかというメジャー



課題と展望

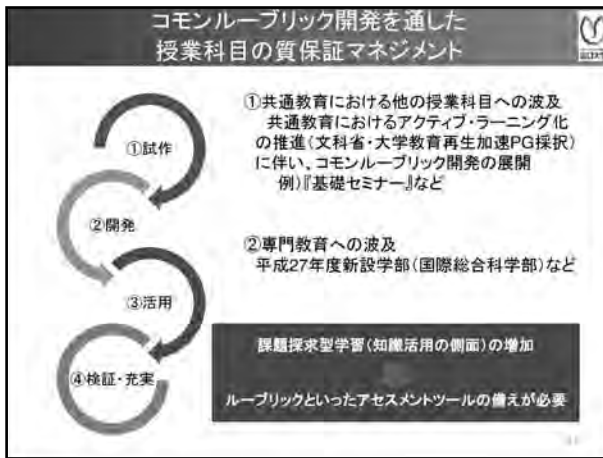
今後の課題

【個人的課題】

- ・教室外学修にかけるウェイトが大きい。
- ・教室内での個人観察に限りがあり、共育シートによる学生の自己評価に頼る側面がある。

【組織的課題】

- ・コモンルーブリック開発には時間的負担を要する。
- ・コモンルーブリック開発やルーブリック活用そのものにFDとしての効果があることを認識すべき。



ご清聴いただきまして
ありがとうございました

「志」つなぎ伝える
二百年

創設200周年
山口大学

Contact me : toru-h@yamaguchi-u.ac.jp

「山口と世界」コモンルーブリック

チームで、山口に関連する課題・テーマを設定し、情報を収集し、分析し、解決策や企画をまとめ、口頭や紙媒体(もしくは映像やWeb)で発表し、地域や国際的環境で活かす力を養う授業。アクティブ・ラーニングを通して、研究や社会実践の基本的なプロセスについて、学習の仕方やリサーチ・リテラシーの基本を学習することが目的である。

規準	内容	レベル3	レベル2	レベル1	レベル0
発見する	山口に関連するテーマ設定、企画立案	山口に関連する課題に応じて、十分な下調べにもとづき、適切かつ独創的なテーマ設定、企画立案ができる	山口に関連する課題に応じて、下調べをした上で、テーマ設定ができる	山口に関連する課題に応じてテーマ設定ができる	レベル1に満たない
はぐくむ	テーマ設定、企画にもとづく情報収集およびコミュニケーション	課題、テーマ設定、企画に必要な情報を最大限に収集した上で、他者との協働作業を通して、学術的に適切な方法でプロダクツの作成につなげられる	課題、テーマ設定、企画に応じた情報収集ができ、それらを分析・考察した上で、他者との協働作業を通して、プロダクツの作成に発展させられる	課題、テーマ設定、企画に応じた情報収集ができ、他者とコミュニケーションを密になりながら、プロダクツの作成につなげることができる	レベル1に満たない
かたちにする	編集、作品化、発表資料、レポート等、プロダクツの作成	収集した情報の分析・考察に基づき、独創性を備え、かつ、地域や国際的観点に立って説得力を持ったプロダクツを作成できる	収集した情報の分析・考察にもとづき、プロダクツを作成できる	期日までにプロダクツを完成することができる	レベル1に満たない
分かちあう	公開、プレゼンテーション、チームワーク	プロダクツを効果的に他者と共有するための戦略を立て、チームワークを発揮して展開し、認知・評価をえることができる	プロダクツに説得力をもたせるため、グループ内での役割分担を明確化して取り組むことができる	グループの活動に参加し、課題の求める形でプロダクツを公表できる	レベル1に満たない
振り返る	他者および自分(たち)の企画およびプロダクツの評価。今後の地域や国際的環境でのく発見する>につながる。	他者および自分(たち)の企画・活動・プロダクツを評価し、その評価をチームで共有し、地域や国際的観点に立った企画・実践にその評価を活かせる	他者および自分(たち)の企画・活動・プロダクツを評価し、その評価をチームで共有できる	他者および自分(たち)の企画・活動・プロダクツについてよかった点、悪かった点をあげられる	レベル1に満たない

区分	研究	商品開発
一 参 考 一 実 用 面 へ の 参 照	先行研究の把握や予備調査・実験等にもとづくテーマ設定と研究計画	ブレ調査にもとづく商品企画
	実験、調査	実験、研究、開発
	データ分析、解釈、論文作成	商品化
	学会発表、シンポジウム、論文公表	マーケティング・リサーチ、広報、営業
	自己評価、他者による評価、次の研究に向けての準備	マーケティング・リサーチ、アセスメント、改良や次なる開発に向けての準備

T.Hayashi
Original Version

(ルーブリックによるパフォーマンス評価のための) 共育シート

授業科目『山口と世界』の共通目標

チームで、山口に関連する課題・テーマを設定し、情報を収集し、分析し、解決策や企画をまとめ、口頭や紙媒体(もしくは映像やWeb)で発表し、地域や国際的環境で活かす力を養う授業。アクティブ・ラーニングを通して、研究や社会実践の基本的なプロセスについて、学習の仕方やリサーチ・リテラシーの基本を学習することが目的である。

【グループ番号】 【所属・氏名】

1

規準	内容	グループワーク・プレゼンテーションを通じた個人ポートフォリオ
発見する	山口大学の歴史に関連するテーマ設定、企画立案	【あなたは、グループにおいて、山口大学の歴史に関連するテーマ設定、企画立案に関し、どのように取り組みましたか、具体的に記入してください。】
はぐくむ	テーマ設定、企画にもとづく情報収集およびコミュニケーション	【あなたは、グループにおいて、テーマ設定、企画にもとづく情報収集およびコミュニケーションに関し、どのように取り組みましたか、具体的に記入してください。】
かたちにする	編集、作品化、発表資料、レポート等、プロダクツの作成	【あなたは、グループにおいて、発表資料等のプロダクツの作成に関し、どのように取り組みましたか、具体的に記入してください。】
分かちあう	公開、プレゼンテーション、チームワーク	【あなたは、グループにおいて、プレゼンテーションやチームワークに関し、どのように取り組みましたか、具体的に記入してください。】
振り返る	他者および自分(たち)の企画およびプロダクツの評価。今後の地域や国際的環境でのく発見する>につながる。	【あなたは、グループにおける企画、発表資料、プレゼンテーションに関し、どのように評価し、振り返りを行いましたか、具体的に記入してください。】

学んでほしいこと評価できることの
擦り合わせは可能か
～『山口と世界』の事例から～

大学教育センター
星野 晋

はじめに

- 共通教育としての「山口と世界」、国際総合科学部の授業としての「山口と世界」、私自身がやりたい「山口と世界」の整合性をいかにとるか
- その条件の下で、どのような授業運営と評価が可能か
- これまでの経緯と今後
 - 平成25年度：「山口と世界」開講
 - アクティブ・ラーニングとしての設計
 - 平成26年度：
 - コモン・ルーブリックの作成と試行
 - 平成27年度：
 - 国際総合学部学生を含むクラスを想定して再設計

区分	規準	内容	レベル3
学習プロセス領域	発見する	山口に関連するテーマ設定・企画立案	山口に関連する課題に応じて、十分な下調べにもとづき、適切かつ独創的なテーマ設定、企画立案ができる
	はぐくむ	テーマ設定、企画にもとづく情報収集およびその分析・解釈・考察	課題、テーマ設定、企画に必要な情報を最大限に収集した上で、その情報を学術的に適切な方法で分析・評価し、課題の達成やプロダクツの作成につなげられる
	かたちにする	編集、作品化、発表資料、レポート等、プロダクツの作成	収集した情報の分析・考察に基づき、独創性を備える。かつ、地域や国際的環境で活きる可能性を伴ったプロダクツを作成できる
	分かちあう	公開、プレゼンテーション、広報、協力者へのフィードバック等	プロダクツを効果的に他者と共有するための戦略を立て、展開し、認知・評価をえることができる
	振り返る	他者および自分（たち）の企画およびプロダクツの評価、今後の地域や国際的環境でのく発見するにつながる	他者および自分（たち）の企画・活動・プロダクツを評価し、その評価をチームや社会で共有し、今後の地域や国際的環境での企画・実践にその評価を活かせる
社会性領域	コミュニケーション	学習上求められるコミュニケーション	他者の異なる意見を認めつつ、自身の意見を表明でき、その相違を調整して、建設的な関係に発展させられる
	チームワーク	小グループ・ワークで求められるチームワーク	メンバーそれぞれの特性を生かした連携によって、チームの力を最大限に発揮できる
	社会性	学習をすすめるにあたっての、社会的なマナーや倫理	研究やコミュニケーションの倫理への配慮を怠らないとともに、協力者や世の中に対して適切なフィードバックができる

規準	内容	レベル3
発見する	山口に関連するテーマ設定、企画立案	山口に関連する課題に応じて、十分な下調べにもとづき、適切かつ独創的なテーマ設定、企画立案ができる
はぐくむ	テーマ設定、企画にもとづく情報収集およびコミュニケーション	課題、テーマ設定、企画に必要な情報を最大限に収集した上で、他者との協働作業を通じて、学術的に適切な方法でプロダクツの作成につなげられる
かたちにする	編集、作品化、発表資料、レポート等、プロダクツの作成	収集した情報の分析・考察に基づき、独創性を備え、かつ、地域や国際的観点に立つて説得力を伴ったプロダクツを作成できる
分かちあう	公開、プレゼンテーション、チームワーク	プロダクツを効果的に他者と共有するための戦略を立て、チームワークを発揮して展開し、認知・評価をえることができる
振り返る	他者および自分（たち）の企画およびプロダクツの評価、今後の地域や国際的環境でのく発見するにつながる	他者および自分（たち）の企画・活動・プロダクツを評価し、その評価をチームで共有し、今後の地域や国際的観点に立った企画・実践にその評価を活かせる

共通教育としての「山口と世界」

<シラバス上の一般目標（例）>

課題探求型の能動的学習を通して、山口の歴史、文化、経済、産業、自然、教育など身近な地域の特色を知り、地域社会の発展に寄与する能力や態度を身につけるとともに、それらの資質を将来所属する地域や国際的環境で活かす力を養う。

<学習目標>

チームで、山口に関連する課題・テーマを設定し、情報を収集し、分析し、解決策や企画をまとめ、口頭や紙媒体（もしくは映像やWeb）で発表し、地域や国際的環境で活かす力を養う授業。

アクティブ・ラーニングを通して、研究や社会実践の基本的なプロセスについて、学習の仕方やリサーチ・リテラシーの基本を学習することが目的である。

学習内容

（コモン・ルーブリックより）

規準	内容	研究	商品開発
発見する	山口に関連するテーマ設定、企画立案	先行研究の把握や予備調査・実験等にもとづくテーマ設定と研究計画	ブレ調査にもとづく商品企画
はぐくむ	テーマ設定、企画にもとづく情報収集およびコミュニケーション	実験、調査	実験、研究、開発
かたちにする	編集、作品化、発表資料、レポート等、プロダクツの作成	データ分析、解釈、論文作成	商品化
分かちあう	公開、プレゼンテーション、チームワーク	学会発表、シンポジウム、マーケティング・リサーチ	論文発表、広報、営業
振り返る	他者および自分（たち）の企画およびプロダクツの評価、今後の地域や国際的環境でのく発見するにつながる	自己評価、他者による評価、次の研究に向けての準備	マーケティング・リサーチ、アセスメント、改良や次なる開発に向けての準備

国際総合科学部を想定した学習 授業設計にあたっての条件

- 自学自習（介入は最低限に）
- チームづくり・チームワーク
- インタビュー取材を含む

授業のデザイン

(1) ミッション：「山口のことを知らない人に、山口を知ってもらおう」

網羅的な情報提示ではなく、くらしや人生やできごとの一コマを紹介することで、山口を身近に感じてもらう
※自治体広報でもwikiでも旅行ガイドでもなく
※家族に乾杯

(2) 方法：取材にもとづくリーフレットの作成およびプレゼンテーション

情報収集=>企画（予備的）=>取材=>整理・分析=>企画・編集・構成
=>成果のシェア（リーフレットとプレゼンテーション）

コモンルブリックの項目との 擦り合わせ

規準	内容
発見する	予備調査（ネタ探し、既存のリーフレットの分析） 山口に関連するテーマ設定、企画立案
はぐくむ	取材・取材結果の整理・編集
かたちにする	リーフレット、スライド、発表原稿の作成 作業シートへの記録
分かちあう	リーフレットの公開、プレゼンテーション
振り返る	他班のリーフレット、プレゼンテーションの評価 自班のリーフレット、プレゼンテーションの改善点について の話し合い

スケジュール

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 ミニ・レクチャー（知る）・企画会議
- 第3回 企画会議
- 第4回 ミニ・レクチャー（シェアする）・企画・編集会議
- 第5回 編集会議
- 第6回 編集会議
- 第7回 報告会
- 第8回 総括・ふり返り

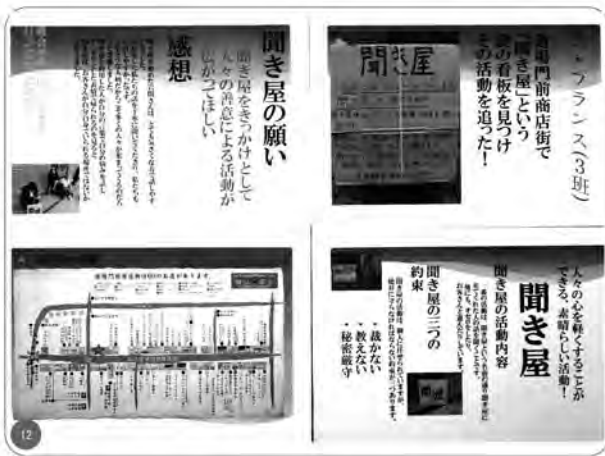
- 第2回～6回は、毎回進行状況を1分間スピーチ

授業の概要

- ミニ・レクチャー
 - 知る：取材の方法・コツ・倫理
 - シェアする：編集とプレゼンテーションの方法・コツ
- 最終提出物
 - リーフレット
 - プレゼンテーションのスライド
 - 発表原稿
 - 作業シート
- 評価：グループ単位
 - 他班のリーフレットとプレゼンテーションの評価
 - 審査員特別賞

作業シート項目

- I. 企画会議
 - 1. 企画・取材計画：
 - (1) テーマ
 - (2) 取材計画（取材対象、場所、時期等）
 - 2. 役割分担（初期段階・計画）
- II. 取材結果（メモ）
- III. 編集会議
 - 1. リーフレット
 - 2. プレゼンテーション
- IV. 自己評価
 - 1. 役割・貢献
 - 2. 振り返り



評価シート

班	チーム設定・再設定 (10%)	取材力 (10%)	内容の整理・編集力 (10%)	リーフレット・プレゼンテーションの作成力 (10%)	質疑応答力 (10%)	発表力 (10%)	コメント
1	リーフレット						
	プレゼンテーション						
2	リーフレット						
	プレゼンテーション						
3	リーフレット						
	プレゼンテーション						

コモンルーブリックの項目と評価の目安

観望	内容	評価(参考)
発見する	予備調査(ネタ探し、既存のリーフレットの分析) 山口に関連するテーマ設定、企画立案	評価シート: テーマ設定・着眼点
はぐくむ	取材・取材結果の整理・編集	評価シート: 取材力
かたちにする	リーフレット、スライド、発表原稿の作成 作業シートへの記録	評価シート: 内容の難度、魅力
分かちあう	リーフレットの公開、プレゼンテーション	評価シート: 工夫・説得力
振り返る	他班のリーフレット、プレゼンテーションの評価 自班のリーフレット、プレゼンテーションの改善点についての話し合い	作業記録

- ### 授業から見えてきたこと
- チームづくり
 - チームづくりがうまくいっている班が、いい成果を生むことが確認された
 - ミニ・レクチャー: 「チームの作り方」が必要か?
 - ワタワタ
 - 楽しんでる班が、いい成果を生む
 - 動機付けの工夫
 - 自発性
 - 自発的に動いている班とそうでない班の差をいかに埋めるか? スプーンフィーディングからの脱却
 - 介入のさじ加減
 - 評価
 - クラスの規模や性格から、個人の観察は不可能
 - グループのアクティビティ等の観察は可能
 - この授業の場合は、個別よりもグループ単位で評価の方が妥当か?
 - ルーブリックの5つの基準を点数化しその総和を評価とすることには違和感。5つの基準を意識しつつ、より上位の総合的評価が求められるか?

- ### ルーブリックを試してみても
- メリット
 - この授業でどのような学習が求められているかを学生にあらかじめ提示できる。学生との目標の共有。
 - 学習目標と方法を教員間で確認・共有できる
 - 疑問点
 - ルーブリックにもとづく点数化の難しさ・違和感
 - 少なくとも項目ごとの点数を決めて加算するのではダメ?
 - 個人の評価とグループの評価
 - 学んでほしいこととルーブリックのずれ
 - ※ルーブリックの設計はこれでよかったのか?

国際総合科学部における「山口と世界」の位置づけ

- 共通教育と専門教育を統合した学士課程
 - 他学部との共通教育としての位置づけと異なる
- ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー
 - (1) 幅広い学識とその活用能力、(2) コミュニケーション能力、(3) デザイン思考と課題解決能力、(4) 科学的思考と調整・統合能力
- 課題解決科目の1つとしての位置づけ
 - 基礎セミナーにつづく「山口と世界」は、地域理解・連携演習を経て、最終的にはプロジェクト型課題解決研究に発展
- 能力基盤型カリキュラム・システム(YU CoB CuS)

18

国際総合科学部コモンルーブリック

科学技術ならびに文化・社会に関する基礎的な知識ならびに高いコミュニケーション能力と課題解決能力を有し、課題解決のためのチームにおいて様々な分野や国籍の人々の多様なアイデアや意見、考えを調整し、一つにまとめ上げることができる。

基準	レベル3
幅広い学識とその活用能力	科学技術や思想・文化、政治・経済のいずれの領域に関しても幅広い学識を有し、多様な状況に応じて、その学識を十分かつ有効に活用することができる。
コミュニケーション能力と共働力	優れたコミュニケーション能力を有するとともに、困難な状況においても、多様な文化的背景を持つ人々の相互理解を促進し、国際舞台で彼ら/彼女らと共働することができる。
デザイン思考と課題解決能力	山口大学の教育理念である「発見し・はぐくみ・かたちにする」というデザイン思考のプロセスを、自律的かつ主体的に適切なやり方で実践することができる。
科学的思考とコーディネーション能力	科学技術が関与する唯一解が存在しない現代的課題に対して最善解を見出すために、自発的かつ適切なやり方で、様々な分野の人々の意見や考えを調整し、ひとつにまとめ上げることができる。

19

YU CoB CuSと「山口と世界」

科目名	単位数	履修年次	履修時期	幅広い学識とその活用能力		コミュニケーション能力		課題解決能力		科学的思考とコーディネーション能力		備考
				基礎	応用	基礎	応用	基礎	応用	基礎	応用	
総合科学入門	1	1	1	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習Ⅰ	1	1	2	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習Ⅱ	1	1	3	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習Ⅲ	1	1	4	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習Ⅳ	1	1	5	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習Ⅴ	1	1	6	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習Ⅵ	1	1	7	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習Ⅶ	1	1	8	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習Ⅷ	1	1	9	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習Ⅷ	1	1	10	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習Ⅸ	1	1	11	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習Ⅹ	1	1	12	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習Ⅺ	1	1	13	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習Ⅻ	1	1	14	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習Ⅼ	1	1	15	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習Ⅽ	1	1	16	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習Ⅾ	1	1	17	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習Ⅿ	1	1	18	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅰ	1	1	19	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅱ	1	1	20	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅲ	1	1	21	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅳ	1	1	22	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅴ	1	1	23	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅵ	1	1	24	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅶ	1	1	25	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅷ	1	1	26	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅸ	1	1	27	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅹ	1	1	28	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅺ	1	1	29	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅻ	1	1	30	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅼ	1	1	31	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅽ	1	1	32	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅾ	1	1	33	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅿ	1	1	34	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅿ	1	1	35	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅿ	1	1	36	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅿ	1	1	37	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅿ	1	1	38	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅿ	1	1	39	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅿ	1	1	40	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅿ	1	1	41	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅿ	1	1	42	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅿ	1	1	43	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅿ	1	1	44	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅿ	1	1	45	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅿ	1	1	46	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅿ	1	1	47	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅿ	1	1	48	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅿ	1	1	49	○	○	○	○	○	○	○	○	
総合科学演習ⅿ	1	1	50	○	○	○	○	○	○	○	○	

○ 履修科目の1つとして、他への履修の要件を明示したときに
 履修する (100%達成)
 △ 履修する (75%達成)
 □ 履修する (50%達成)

課題解決科目のコモンルーブリック

チームで、ある課題・テーマを設定し、情報を収集し、分析し、解決策・プロジェクト・プランをまとめ、口頭や紙媒体（もしくは映像やWeb）で発表する形の授業

基準	レベル3
課題・テーマの設定、仮説・調査・分析のプランの設定	課題・テーマが独創的かつ明確であり、それについての仮説や調査・分析プランがわかりやすく整理されて示されている。
適切な方法での情報収集	課題・テーマに関する情報を複数の情報源もしくは複数の手段で収集し、その旨も適切である。
集めた情報の分析	(脚筋と文系の枠を超えた) 複数の視点から分析を行い、収集した情報を十分に生かしている。また、量的なデータについては統計学的な分析を行っている。
解決策・プロジェクト・プランのまとめ	解決策・プロジェクト・プランが、収集した情報を十分に生かした形で明確性、論理性、具体性を持ったもの、さらに多面への考察が行き届いた総合的、独創的なものとなっていて、実現可能性が十分に検討されている。
チームワーク	的確な自己分析とコミュニケーションにより各自に適した役割分担を振り分けることができる。グループ内で議論を重ねることで、段階分相に基づいて各自が行った部分をさらに発展させる、それを有機的に結合させることで一つのまとまったものを作ることができる (100%達成)。
コミュニケーション	異なる文化的背景を持つ人との間でも十分にコミュニケーションをすること(議論やプレゼンテーションなど)ができる。

21



学習サイクル領域：学びと創造のサイクル

- 相互に関連し合うプロセスからなるセットあるいはサイクル
- 専門科目や卒後の実践、生涯学習の基本型
- 1年生である現段階では、個々の要素・能力よりも全体を体系的に学ぶことに重点がある
- とりあえず1回このサイクルを回してみる。通し慣習

22

何を学んでほしいか

- 自分(たち)で学ぶ学び方の学習
 - 生涯学習のための準備学習
 - 「学びと創造のサイクル」の回し方を体感
 - ワクワク、そして「使えそう」という実感
- チームづくり
- 応用・発展
 - 「チームづくり」が上手くいき、「学びと創造のサイクル」がうまく回るといいプロダクツが生まれることを確認
 - その後の専門科目や社会活動に活用
 - 個々の基準のブラッシュアップ
 - より高度な企画・課題解決プロジェクトに向けて

23

ルーブリックと評価

- コモンルーブリックをあらかじめ学生に示すことは、学んでほしいことの意図と概要を把握してもらう上で意義がある。
- しかし学んでほしいことは、可視化・点数化可能な項目の総和ではない。また基準が目的化してはいけない。あくまでも「目安」である。
 - 5つの基準それぞれよりも、それらが関連し合っとうまく回っていくことでいいプロダクツにつながることを、その際にコミュニケーションやチームワークが不可欠であることを体感し、総合的に学習してほしい
- 他方、可視化せずにおいておく領域も必要では？
- 観察可能なことは、チームづくりに成功しているかということ、そしてグループワークの結果であるプロダクツ（リフレット、プレゼン）

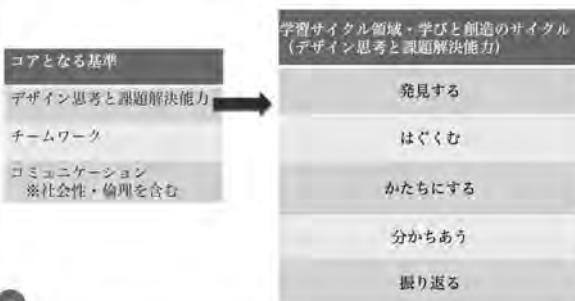
24

フリーライダー対策

- 前提
 - チーム形成、チームワークは学習の主題の一つ
 - 個々人で得意不得意がある
- 方法
 - 授業の最初にグループの全員の得点と同じであることを示す。
 - 得意不得意を勘案しながら、不公平感が出ないように、グループの運営、役割分担、作業の配分等を工夫するように指示する（このこと自体が学習である）。
 - どうしても運営・配分が上手くいかない場合は、相談に応じる。班のメンバーに無断で欠席した場合などは減点。

25

2つの「山口と世界」の統合



26

国際総合科学部を想定した「山口と世界」の評価

- 学習サイクル領域（共通教育としてのコモンルーブリック）をある程度意識しながら、学習プロセス（グループワークの観察・作業記録などから）とその成果物から、「デザイン思考と課題解決能力」を評価する。
- チームの形成と運営を観察し評価する。
- コミュニケーション（社会性・倫理を含む）については、ルール違反が見いだせ注意しても解消しない場合、減点。

27

名古屋商科大学における ルーブリック活用実践事例

2015年2月27日
名古屋商科大学 経営学部・教授
亀倉正彦

本発表の構成

- ①名商大とVPS (初年次ゼミ)
～新入生最初の共通教育とその問題認識～
- ②「AoL-LG16ルーブリック」と「指導評価表」
～ルーブリック活用のマネジメント～
- ③「夢ノート」のパフォーマンス評価
～教員Bの試みとその学内検証～
- ④VPS教員対象アンケート
～学習目標と組織文化の醸成～
- ⑤結語に代えて: 今後の展望
～ルーブリックとマネジメントへの含意～

1. 名古屋商科大学の建学精神

建学精神＝「開拓者魂」



1. 名商大のAoL(教育質保証)

カリキュラムマネジメント

- ・AoL委員会と教務委員会の連携による年次改善
 - ・卒業生と卒業先企業へのアンケート実施
 - ・4年次学生への「学士力」自己評価
- ↓
- ・英語講義の必修化
 - ・リテラシー卒業必修
 - ・チームマネジメントの強化
 - ・教養教育の強化
 - ・「単位の実質化」



AACSB International

- ・5年毎に再認証
 - ・大学教育のMission
 - ・教員要件や研究実績
 - ・学習到達度評価
 - ・教員・学生の多様化
 - など100項目以上
- AMBA
- = Association of MBA
- ・企業との連携
 - ・実務経験歴
 - など60項目以上

1. 「国際的通用性のある人材の育成と教授法の研究」 ～文科省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」(H20-24)



1. VPSの概要

(1)名商大教育におけるVPSの位置づけ

- VPS: Vision Planning Seminar
- セミナー教育理念:「師弟同行」
Enrollment Management; 個の尊重
- 本セミナー所属率: 95%以上
卒業論文がAoLの根幹; 過程での学生指導
- 本セミナー学年: (現行)2～4年
モラトリアム期間における学生の躰きが課題
教務委員会がそうした学生に臨時対応
これを「基礎セミナー」として制度化(2002)
ビジョン形成を付加し、VPSに発展(2006)

1. VPSの沿革と目的変遷

(2) 沿革

- 2002年 基礎セミナー①
- 2006年 VPS②(前期のみ)
- 2009年 第一次改革③(前後期通年化)
- 2012-13年 第二次改革④(産業ニーズVPS試行)
- 2014年 VPS改革シンポジウム(1月)
- 2014年 指導評価表⑤の試験導入
- 2015年 セミナーVPS会議(VPS改革小委員会)(2月~)

〈VPS科目の学習目標の変遷〉

- ①大学導入教育の狙い...「大学に慣れる」
- ②ゆとり教育への対応...「将来の設計思想」と大学での学び
- ③共通実施事項拡充...「夢ノート」・友人作り・VPSサポーター
- ④学外実践の追求...「地域社会連携」実践とその限界
- ⑤共通教育の質保証...VPS本ゼミ一貫教育→第三次改革へ

1. 共通教育としてのVPS

(3)2014年度・共通実施事項

前期	授業	後期
オリエンテーション	1週	オリエンテーション
図書館ツアー(W2-3)	2週	(自由)
セミナー生の自己紹介	3週	(自由)
各種学習制度の説明	4週	(自由)
(自由)	5週	セミナー登録指導スタート
マイフロンティア(Myf)報告会1	6週	学園祭・論文発表会について
Myf報告会・グループ討議	7週	(自由)
(自由)	8週	(自由)
(自由)	9週	セミナー展について
定期試験対策指導スタート	10週	卒業発表会について
(自由)	11週	(自由)
マイフロンティア(Myf)報告会2	12週	(自由)
Myf報告会・グループ討議	13週	(自由)
夢ノート発表会	14週	夢ノート発表会

1. 近年におけるVPSの抱える課題

(4)課題点

- ①AoLにおけるVPSの位置づけ
 - ・同じセミナーである本ゼミとの連動体制。
 - ・単位認定に相応しい学び(=教育)をどう質保証するか。
- ②科目の学習目標
 - ・大学に慣れる(2002)からスタートし、徐々に性格を変えながら発展的に変遷してきた経緯。
 - ・学習目標への教員間認識に混乱が見られる。
- ③教員のVPS教育に臨む態度姿勢
 - ・自分の専門科目と比べて動機づけが難しい。
 - ・VPSサポーターへの丸投げと教育者の責任放棄も。
- ④VPSサポーターと教員の協力関係
 - ・教員と共にVPS作りに関わる主体的態度を奨励。
 - ・コミュニティとしてのピアサポート組織の強化。

2. ルーブリックの8分野16項目

LG到達度評価		LG到達度評価	
LG到達度評価(卒業論文)		LG到達度評価(セミナー学生)	
1. 研究テーマの設定 1.1 問題意識 2. 研究テーマの選定	5. アレクシテーション能力 5.1 アレクシテーションの機軸 5.2 アレクシテーションの実践		
2. 研究対象分野の知識の援用 3. 研究対象分野の理解 4. 研究対象分野の応用	6. コミュニケーション能力 6.1 聴取力・質問力 6.2 説明力・リーダーシップ		
3. 結論の導出 5. 論文の構成・結論の導出過程 6. 結論の明確性・有効性・学術的貢献	7. 情報技術を活用する能力 7.1 インターネット関連 7.2 オフィスソフトウェア・情報機器		
4. 論文の様式と文章表現 7. 論文の様式・文章表現 8. 参考文献・脚注	8. グローバルな視点で思考・実践する能力 8.1 多国籍・多文化の理解・多様性の尊重 8.2 セミナーの内外での実践		

■ルーブリック開発の経緯 → 「教育質保証」(Assurance of Learning)

- 条件①卒業年次に関わるものである。
- 条件②ほぼ全学生に相当するものであること。
- 条件③Mission Drivenなものであること。
- 条件④Curriculum Managementとの密な連携がなされること。

■「本ゼミ」に適用。(左)卒論パフォーマンス評価と(右)過程での能力スキル評価

2. ルーブリックに基づく指導評価表(試行中)

評価項目	評価基準	評価基準	評価基準
1. 研究テーマの設定	1.1 問題意識 2. 研究テーマの選定	5. アレクシテーション能力 5.1 アレクシテーションの機軸 5.2 アレクシテーションの実践	6. コミュニケーション能力 6.1 聴取力・質問力 6.2 説明力・リーダーシップ
2. 研究対象分野の知識の援用	3. 研究対象分野の理解 4. 研究対象分野の応用	7. 情報技術を活用する能力 7.1 インターネット関連 7.2 オフィスソフトウェア・情報機器	8. グローバルな視点で思考・実践する能力 8.1 多国籍・多文化の理解・多様性の尊重 8.2 セミナーの内外での実践
3. 結論の導出	5. 論文の構成・結論の導出過程 6. 結論の明確性・有効性・学術的貢献		
4. 論文の様式と文章表現	7. 論文の様式・文章表現 8. 参考文献・脚注		

2. ルーブリック指導評価表(試行中)

《基本的な設計思想》組織問題の自主的な解決
 ①自由権, ②ルール, ③プロパティ・ライツ(※)(Picot, et al. 2005)
 ※①利用, ②変更, ③収益, ④処分(Furubotn=Pejovich 1972)

《派生的制度》

- ・AoL-LGルーブリック16項目を段階的に達成する。
 1年次=6 → 2年次= +4 → 3年次= +4 → 4年次= +2
 (初年次VPSの6項目は共通化できるか?)
- ・学生の学びへの説明責任を負う。
 (どの程度evidence根拠資料を要求できるか?)
- ・指導の過程における教員の裁量をできるかぎり尊重する。
 (指導用のモジュールを整備し活用できるようにするか?)

- これは(a)大きな指導方針宣言であるとともに、
 (b)学生の成績評価根拠資料となるだけでなく、
 (c)VPSから本ゼミへの教育質保証につながるものとなる。

3. 「夢ノート」パフォーマンス評価－学内検証

《パフォーマンス評価に先立って》

■卒業項目①～⑧/セミナー学生項目⑨～⑫

■①,③,⑤...スキルや能力

■②,④,⑥...卒業作成への実践的適用

■⑦,⑧...文章表現や参考文献など技術的項目

→①③⑤はVPSでも育成スタート可能→「主要3項目」と位置づけ

条件:卒業でなく「夢ノート」に置き換え、趣旨を変えることなく表現を書き替えた。

《調整後VPS評価用のAoL-LGルーブリック:主要3項目》

主要①(問題意識)自分の履歴を振り返りながら、好み/嫌い、得意/不得意などを組み表現できる。3点(詳細)-2点(表現した)-1点(表現しなかった)

主要③(研究対象理解)未来のなりたい自分をキーワードで挙げて、そのキーワードについて調べられる。3点(詳細)-2点(調べた)-1点(調べなかった)

主要⑤(結論導出過程)「①自分の履歴」と「③未来の希望」を結びつけて具体的に論じられる。3点(詳細)-2点(論じた)-1点(論じなかった)

検証:教員BのVPSサンプル17に依拠してパフォーマンスを学内検証した。

3. 「夢ノート」パフォーマンス評価－課題と評価

《「夢ノート」>「未来の履歴書」》

■多くのVPSがこの5年来、PowerPointソフトを使用して「夢ノート」を作成してきた。

■今回、B先生はWordソフトを使用し、「未来の履歴書」を夢ノートの一つの形として試みた。

■課題は3つを尋ねている。(1)今までの略歴(年表)、(2)これからの進路(年表)、(3)自分との対話「なぜこの道に進むのか」、(4)参考文献Wordでひな形を作成しBB(Blackboard)上に公開し活用させた。

■教員Bは、数名の学生を除いて、全員が提出した。これらを「テーマ、対象項目理解、構成力(+文章力)」で評価した。これらはAoL-LG16項目の①③⑤に相当する。これを「元PF評価」と呼ぶ。 ※PF = Performance

学生ID	主要①:2	主要②:2	主要③:1	PF評価+1/+2	元PF評価
学生1	2	3	2		A
学生2	3	2	2		A
学生3	2	2	2		B
学生4	3	2	2		A
学生5	3	3	3		A
学生6	3	3	3		A
学生7	3	2	2		A
学生8	3	3	2		A
学生9	3	2	2		A
学生10	2	2	3		A
学生11	2	3	3		A
学生12	2	2	3		A
学生13	2	2	2		B
学生14	3	2	2		A
学生15	2	2	1		C
学生16	2	3	1		B
学生17	2	2	1		C

3. 「夢ノート」パフォーマンス評価－検証と考察

■学内検証で、4名の教員が学生パフォーマンス現物を読み、議論しながらAoL-LG主要3項目の調整後ルーブリックで評価をし直した。これを「PF評価」と呼ぶ。その結果、3名の学生について元PF評価とPF評価の結果に食い違いが確認された。

■考察する過程で、元PF評価は①文章量という曖昧な基準の中に複数の要素が暗に盛り込まれていたこと、②なぜ履歴書・年表形式での表現をさせようとしたか、学生に意図が十分に伝わらなかった、③Wordのひな形をこうした観点から改善する余地がある、などを話し合った。

4. 教員アンケート

■H27.1-2月実施。14名回答(担当14名) 100%

■事後的なヒアリングも実施、内容を精査。

1. VPS科目の学習目標の混乱した理解
2. 指導成果:パフォーマンス評価への認識不足
3. AoL-LGルーブリックのVPS6項目への認識
4. マネジメントの中核としての「組織文化の醸成」

■最終的には「VPSの10年間～到達点と課題」(仮)の産業界ニーズ報告書を上申する(H27.3月予定)。

5. 結語－①今後の計画

・VPS教員の苦悩や努力をまだ追いつけていないので、継続的に情報収集を図る。

・科目の学習目標は教員間に意見の不一致が確認されたので、論点を整理する。

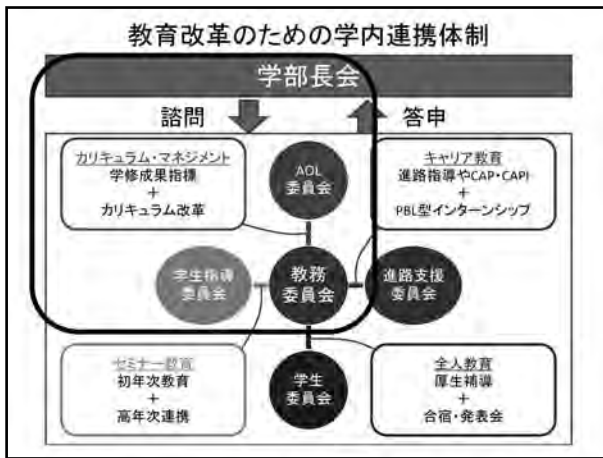
・共通実施項目は名称だけでなく、モジュールとして整備し、学習目標に適合的な教育プログラムの束をFD会等を通じてつくりあげる。

・教員、VPSサポーター、受講生のそれぞれが主役になれる仕組みを検討する。

・「夢ノート」は、1年間VPSの学習と成長の証になる。本ゼミでの指導とも連動性があるため、本学Web Portfolioに記録・保管する方向。

↓

初年次教育部門+教務部門+AoL部門の委員長クラス+教務担当職員による合同の議論が始まった(2月)。3月中に学部長会に第一次答申を提出する。



5. 結語－②パフォーマンス評価

《実践におけるルーブリックの活用》

- ・パフォーマンス評価で教員が「頭の中に」ルーブリックを描かないで採点するケースは現実には皆無に近い。
- ・問題はそのルーブリックがどのように明示・活用されているかである。強く拘束すれば、教員と学生の双方にとって負担になる。信頼度を高める評価を実現するには相応の「共通訓練」も必要になる。
- ・逆に拘束がなければ、個々の教員任せになる。この意味で、共通教育こそルーブリックを必要としている。但し、その明示・活用のあり方は慎重に設計する必要がある。
- ・「学習目標(科目目的)」を達成しようとする過程で、教員は創意工夫をしたのか、学生はしっかり学習目的を理解して学びに取り組んだのか、つまり「生きた教育と学びの実現」が大事である。
- ・要所での形成的評価を行いながら、学習目標の達成に資するようにルーブリックを活用することを提言する。

5. 結語－③マネジメント

《共通教育におけるルーブリック活用のマネジメント》

- ・個々の教員は、自分の専門分野への研究や教育には積極的に取り組むが、共通教育分野は他律的なイメージがあるため、教育への情熱が生まれにくい。
- ・逆に共通教育分野で進むべき方向性があまりに与えられなければ、違った意味での教育の手抜きや放棄が起こりうる。
- ・「学習目的(科目目的)」と「育成すべき能力」が明確になれば、個々の教員の「責任と権限」も明らかになる。ルーブリックは「生きた教育」をするための一つのツールになるかも知れない。
- ・学長や学部長などが会議等でこうした同じ方向を話題にして権威づけることも大事なプロセスの一つである。
- ・コミュニティの形成を行い、多様なステイクホルダーが学習目標達成に資するルーブリック活用のあり方を議論できる、そのような組織文化を醸成することを提言する。

参考文献

- Furubotn & Pejovich (1972), "Property Rights and Economic Theory", *Journal of Economic Literature*, Vol.10, pp. 1137-1162
- Picot, et al. (2005), *Organization* (4th ed.), Schäffer-Poeschel Verlag GmbH. 丹沢他訳『新制度派経済学による組織入門』白桃書房 2007

ご清聴ありがとうございました。

ルーブリックの開発・活用の課題に どう応えていくか —コメントとアドバイジング—

松下 佳代
京都大学・高等教育研究開発推進センター
matsushita.kayo.7r@kyoto-u.ac.jp

1. ルーブリックの共通性と多様性

- コモンルーブリックと各教員のローカライズの在り方 (林報告: 課題③)
- ルーブリックに基づく指導評価表 (亀倉報告)
- 何を共有し、何を各教員の判断にゆだねるか?
 - 「山口と世界」: 目標、ルーブリックの規準、グループワークであるという条件は共有 (ルーブリックの詳細、パフォーマンス課題は多様)
 - VPSセミナー: 基本となるルーブリックの規準を共有 (どの規準を選ぶかは多様) → レベルや記述話のすりあわせは?

2

2. 個人評価 と グループ評価

- グループ評価と個人評価のあり方 (林報告: 課題①、星野報告)
- グループワークは、グループ評価が原則
 - 観察によって個人評価することの困難さ
 - 評価負担の大きさ、「観察者効果」
- 成績評価、フリーライダー問題 にどう対処するか?

3

グループワークにおける個人評価の方法

- 貢献度のピア評価
 - 点数配分の方法: ×ゼロサムゲーム式、○持ち点式
e.g. 6人だったら、5点を持ち点として、どう配分してもOKとする
- ポートフォリオによる自己評価
- レポート評価
 - <グループワークそのもの>ではなく<グループワークで学んだこと>の評価

4

3. ルーブリックによる評価 と 成績評価

- 成績評価への活用方法のあり方 (林報告: 課題②)
 - 少なくとも項目ごとの点数を決めて加算するのではダメ? (星野報告)
- ルーブリックによる評価を成績評価に使えるか?
 - 評語の場合: 各観点の評価をそのまま成績に変換も可能
 - 素点の場合: 各レベルを一定の幅をもった得点に変換
e.g. ユタ州立大学歴史学科: 卒業論文の成績評価 (資料)

5

単純総和 (or 重み付け総和) ではうまくいかないことも

- カットिंगスコアの問題
 - レベルは質的差異を表しているのに、同じレベル内の得点より隣接する別のレベルの得点の方が近くなる場合がある
- 総合印象点と合計点のズレ
 - ルーブリックの観点 (規準) が、評価者が暗黙のうちに重視している観点と異なる
→ ズレの原因を明らかにしながら、ルーブリックを改訂

6

4. プロセス評価 と プロダクト評価

- コモンルーブリックとは別に、パフォーマンス (プレゼンテーションとリーフレット) の評価シートを作成 (星野報告)
- プロセスとプロダクトの関係は？
 - 今回のコモンルーブリックは、プロセス全体を評価
 - 発見するーはぐくむーかたちにするー分かちあうー振り返る
 - =成果物 =実演
 - パフォーマンス(狭義)
 - パフォーマンス(広義)

7

- パフォーマンス(広義) = プロセス
- パフォーマンス(狭義) = プロダクト

- 常に、広義のパフォーマンス(プロセス)の評価が必要とは限らない
 - プロセスの評価は、評価負担大
 - 必要な場合
 - 学習目標が、プロセス全体に対応しているとき
e.g. 協働的な「学びと創造のサイクル」の学習

8

5. 学習目標 と 評価基準 の区別

- 学んでほしいことは、可視化・点数化可能な項目の総和ではない／可視化せずにおいておく領域も必要では？ (星野報告)
- 目標(goal)と規準/基準(criterion)は別の概念
 - criterion-referenced assessment
 - 正確には「目標準拠評価」ではなく「クライテリオン準拠評価」
…『『クライテリオン』に『目標』の含意はない』(鈴木, 2014, p.14)
 - criterion
=「パフォーマンスの形で観察される能力の指標indicator」
(Alverno, 1994, p.30) g

9

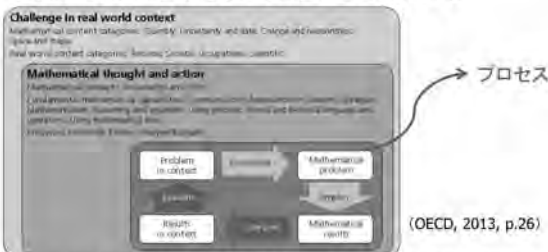
6. 能力ベース(competency-based)とは

- 能力基盤型カリキュラム・システム(YU CoB CuS)における能力目標とコモンルーブリック(星野報告)
- 2つのルーブリック: 能力か、プロセスか
 - 今回のコモンルーブリック: プロセス
 - YU CoB CuSのルーブリック: 能力
- どちらでもよいが、違いは認識しておく必要がある

10

【参考】 OECD-PISAの数学的リテラシー

- 数学的リテラシーという能力が形成・発揮されるプロセス(定式化ー適用ー解釈／評価)を構想
- そのプロセスを下位の能力の組み合わせとして捉える



(http://www.oecd.org/pisa/pisaproducts/PISA%202012%20framework%20e-book_final.pdf) 11

		プロセス		
		定式化	適用	解釈／評価
下位の能力	1. コミュニケーション			
	2. 数学化			
	3. 表現			
	4. 推論と論証			
	5. 問題解決ストラテジーの考案			
	6. 形式的な言語や演算の使用			
	7. 数学的ツールの使用			

(OECD, 2013, p.32, Figure 1.2を一部抜粋し、訳出)

	山口と青井	PISA
能力	目標とされている能力	数学的リテラシー
能力が形成・発揮されるプロセス	発見するーはぐくむーかたちにするー分かちあうー振り返る	定式化ー運用ー解釈／評価
そのプロセスを構成する下位の能力	YU CoB CuSに繋がっている能力	1~7の能力

12

文献

- Alverno College Faculty (1994). *Student assessment-as-learning at Alverno College*. Alverno College Institute.
- OECD (2013). *PISA 2012 assessment and analytical framework: Mathematics, reading, science, problem solving and financial literacy*. OECD Publishing.
- 鈴木秀幸 (2013).『スタンダード準拠評価—「思考力・判断力」の発達に基づく評価基準—』図書文化.

グループB

山口県外の
出身の学生は
いかに多いのか？

ループアップは
特に、地域経済
にどう貢献するの？

山口県外の学生、の数は
増えているのか？
世界第何位？
なぜ、可能なの？

大学が欲しいに
かかるとい
うロケット（？）
だ。

グループアップ
について具体的に
どうお話ししたいか

グループの発達を
促す、モチベーション
をどうやるの？

グループA

ループアップは
教員の教材
作りに有用な
（教材もいも）
↓
ループアップの
目的とは異なる
使い方があつて
よいのでは？

「学生がより
かんばるため」

。修得した能力を
知るため

大学が

YU-COB-CUS
は両者をめざす。

グループD

- グループの作り方、ふんいさぐぐ。
- 理系の科目で「グループ」は有交か？
「ロジカルシンキング」といらのはや、さるけど...
- 「山口と世界」はどのように他の科目に「つながり」があるか？
⇒ 国際総合科学部 学部長に聞いてみたい。
- 成績評価に直結しないと難しいのでは？

グループC

☆ 全学的な取組の可能性

全学的取組の
取り組み
について

学際性
DPの位置づけ
は？

アカデミック
スキル
を
100%
活用
する
には
どう
するか？

組織化

☆ ルーブリックを活用した学習成果測定
の公開性（アカウンタビリティ）

説明責任
のために
結果を公開する

どの範囲で
数値化が適切か？

学習加算
に
あ
ら
ず
あ
ら
ず
あ
ら
ず

AAU
課
程
に
使
い
こ
う
す
か？

☆ ルーブリックによる評価文様？

AAUでは
Rubricは
評価
を
行
う
た
め
に
使
い
こ
う
す
か？

学習加算と
社会性
を
区
別
し
て
考
え
る
こ
と
が
可
能
か？

ルーブリックに
よ
り
何
を
測
定
し
よ
う
か？

☆ ルーブリックと授業設計、学んでほ
しいことの補正、ズレ

ルーブリックと
授業設計の
関係
を
考
え
る
こ
と
が
可
能
か？

ルーブリック
を
使
い
こ
う
す
か？

ルブリックで
 社長を育成
 でき、それが
 グループに

グループ

評価を
 どうするか

山と世界の
 実態可能

観察者の評価
 3.5 - 5.0 年3月 - 4月
 参加者評価

参加者の相互
 評価 → 差が
 つかない

差がつかない

山と世界の
 知名度

教員用の
 評価の仕方

山と世界の
 人数の50%
 MAX 50%
 山と世界

コミュニティ

初年次教育
 車いす教育との関係

プロセス
 評価

他との関係
 連携

5. 山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）キックオフシンポジウム 『ラーニングコミュニティの創造を目指して ～山口大学・大学教育再生加速プログラムの挑戦～』開催報告

日時：平成27年3月9日（月）14:00～17:30

場所：山口グランドホテル 2階（鳳凰の間）

参加者：143名（うち学外69名）

概要：

14:00～14:10 開会挨拶

山口大学長 岡 正朗

来賓挨拶

文部科学省高等教育局大学振興課課長補佐 山路 尚武

14:10～15:25 YU-AP 事業概要説明

山口大学 理事・副学長（教育学生担当） 瀧 厚

14:25～16:00

基調講演 (1) 「アクティブ・ラーニングにおけるパフォーマンス評価の可能性」

京都大学 高等教育研究開発推進センター教授

松下 佳代（YU-AP アドバイザー）

基調講演 (2) 「学修行動調査の可能性～学修到達度調査との連携～」

同志社大学 教育支援機構副機構長・社会学部教授

山田 礼子（YU-AP アドバイザー）

基調講演 (3) 「学生参画型FDの過去・現在・未来」

富山大学 大学教育支援センター教授

橋本 勝（YU-AP アドバイザー）

16:00～16:10 [休憩]

16:10～17:20

パネルディスカッション「ラーニングコミュニティの創造を目指して～山口大学・
大学教育再生加速プログラムの挑戦～」

17:20～17:30 クロージング・閉会の挨拶

山口大学 理事・副学長（教育学生担当） 瀧 厚

（総合司会 山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透）

内 容：

《開会挨拶・来賓挨拶》

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、平成 27 年 3 月 9 日（月）に山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）キックオフシンポジウム「ラーニングコミュニティの創造を目指して～山口大学・大学教育再生加速プログラムの挑戦～」を開催した。本シンポジウムには、学内外より、高等教育関係者、企業などから合計 143 名の参加者が集まり、会場も超満員となり熱気あふれる YU-AP 事業のキックオフとなった。

山口大学では、平成 26 年度文部科学省・大学教育再生加速プログラムのテーマⅠ・Ⅱ複合型に採択され山口大学改革を加速させている。本取り組みでは、AL ポイント認定制度等によるアクティブ・ラーニングの組織的推進及び直接評価・間接評価統合型学修成果可視化モデルの構築を目指している。併せて、当該事業取組みを推進するため、学生スタッフを配置し、学生の声を反映しながら、事業展開を行っていくことを進めている。まさに、教職学協働実践を通して、共に育み（共育）、ラーニングコミュニティの姿をカタチにしてい

Q7. シンポジウム全体について(満足度)

選択肢	人数	割合
非常に良かった	27	31%
良かった	47	55%
どちらともいえない	5	6%
あまり良くなかった	2	2%
良くなかった	0	0%
無回答	5	6%
合計	86	100%

く取り組みである。

冒頭、岡正朗 山口大学長より開会の挨拶があり、参加者、基調講演講師と文部科学省来賓に対して謝意が述べられた。また、昨今の時代状況から大学教育にも変化が求められており、コミュニケーション能力や課題解決力の涵養に力を入れた教育を展開する必要性について述べた後、参加者が本シンポジウムを通して、そうした状況をより深く理解し、また各大学が抱える教育課題を解決するヒントを得ることができる有意義なものになるだろうと力のこもった挨拶となった。また、山路尚武 文部科学省高等教育局大学振興課課長補佐より、来賓の挨拶として、塩見みづ枝 文部科学省高等教育局大学振興課課長の挨拶文の代読があった。併せて、山路課長補佐より、AP 事業は、大学教育改革の本丸であるとの強い期待感が込められた挨拶があった。

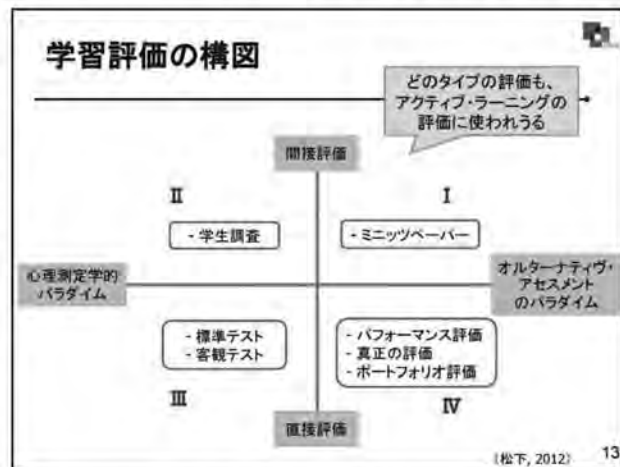
《YU-AP 事業概要説明》

次に、額綱厚 山口大学理事・副学長より、YU-AP 事業の概要説明があった。概要説明では、学長のリーダーシップのもとに進められる事業実施体制について説明があった後、アクティブ・ラーニングの推進、AL（アクティブ・ラーニング）ポイント認定制度の開始、直接評価・間接評価統合型学修成果可視化モデルの構築やルーブリックの開発・活用について説明があった。また、学生との協働体制が整備されていることを杉元茜 山口大学 理学部 3 年（YC.CAM リーダー）の登壇・発表によって説明された。最後に事業担当者（教育学生担当理事）と学生がともに事業の最終目標を唱和し、協働体制が確実に進んでいることが感じられるものとなった。



《基調講演》

基調講演（1）では、松下佳代 京都大学 高等教育研究開発推進センター教授（YU-AP アドバイザー）より、「アクティブ・ラーニングにおけるパフォーマンス評価の可能性」と題して講演があった。アクティブ・ラーニングにおける学び評価の中心的な問いは、1) 誰が、2) 何を、3) 何によって、4) どのように評価するのかというものである。まず、大学のユニバーサル化やグローバル化、知識社会化などの時代状況の変化からアクティブ・ラーニングが求められているという前提から、アクティブ・ラーニングによってどのような知識、能力の涵養が期待されているのかについて言及があった。続いて、学習（学び）と学習活動の理論が紹介され、アクティブ・ラーニングがうまくいかない場合の理論的な解説がなされた。さらに、学習評価の構図として次の図を示して、アクティブ・ラーニングの評価について説明があった。



【松下教授当日配布資料より転載】

上の図のうち、講演題目となっているパフォーマンス評価とは、「ある特定の文脈のもとで、さまざまな知識や技能などを用いながら行われる、学習者自身の作品や実演（パフォーマンス）を直接に評価する方法」のことを指す。パフォーマンス評価のための評価基準として使われるのが、ルーブリック評価であり、ルーブリック単独での活用などはできないことが指摘された。また、本講演冒頭の問いに対しては、教員や学生が、学習成果としてのコンピテンスを、パフォーマンスによって、ルーブリックを使って、評価する、との回答が示された。最後に、山口大学のコモンルーブリックについても言及がなされた。ルーブリック開発には、困難がつきものである一方で、その効果も高く、開発や活用のプロセスがFDとしての役割を発揮することがあり、山口大学でのパフォーマンス評価は、実りある取組として展開されつつあるとして、今後への期待が述べられた。

次に、山田礼子 同志社大学 教育支援機構副機構長・社会学部教授（YU-AP アドバイザー）より、「学修行動調査の可能性～学修到達度調査との連携～」と題して講演があった。本講演の内容は、「教育の質保証のために何をすべきか」、「ジェイ・サーブのあゆみ」、「学修行動調査結果の紹介」、「JCIRP から JSAAP へ：新たな展開」、そして、「学修行動調査と学修到達度調査との連携～」である。機関、国、トランスナショナルレベルの教育の質保証の取組について紹介があった。また、日本の文脈におけるとして内部質保証としての教学 IR

が進展していることが言及された。現在の高等教育では、何を教えるかから何ができるかに発想が転換されており、教育の質保証の一環としてデータが活用されることで、カリキュラムや教授法の見直しが図れるとともに、データ収集のための調査として、学修行動調査は間接評価の代表的な手法であることが説明された。学修行動調査であるジェイ・サーブは、米国で蓄積されてきたカレッジ・インパクト研究の流れをベースに開発されている。現在では、多くの大学の教育改善に活用されており、信頼性のある学修行動調査として開発がなされている。継続データからの示唆として、全体的に少ない学修時間や 1 学期に履修する授業数が多いことなどがわかっている。その他に、とある大学のデータを紹介しつつ、山口大学での調査結果にも言及した。さらに、直接評価との連結で、教学マネジメントの支援、教育の内部質保証のエビデンス、機関評価、認証評価への活用などが挙げられた。

基調講演(3)では、橋本勝 富山大学 大学教育支援センター教授(YU-AP アドバイザー)より、「学生参画型 FD の過去・現在・未来」と題して講演があった。冒頭、会場の雰囲気を和ませる話からはじまり、本題の「学生参画型 FD」の発端となった、岡山大学の「新機軸『学生参画』による大学教育改革」(特色 GP)について紹介があった。まず、2000年6月に出された、いわゆる「廣中レポート」(『大学における学生生活の充実方策について(報告)―学生の立場に立った大学づくりを目指して―』)が示した、「学生中心の大学」への転換について述べられた。続いて、岡山大学が「廣中レポート」に気づかぬまま学生参画型 FD を開始し、特色 GP 申請に向けた理論武装のために「廣中レポート」を活用したことが述べられた。岡山大学が学生参画型 FD をはじめた理由として、FD の新展開には学生参画が不可欠であるとの気づき(先見の明)によるものであり、組織的、継続的に FD 活動に参画したいという学生の要望に応える形で、実際の取組がスタートした。岡山大学の特徴は、制度上の学生参画 FD 組織づくりが特色 GP 採択以前よりはじまっており、自主的活動空間も確保されていたことが紹介された。これまでの成果として、2001年～2004年(特色 GP 採択前)には、学生目線でのシラバスの改善、授業評価アンケートの改善、学生発案型授業の設計、履修相談会である。さらに、特色 GP 採択期間中には、講師を招聘した学生発案型授業の開講、学生参画型 FD の初代メンバーを臨時の職員として雇用、i*See(教育改善学生交流)の開始などである。こうした取り組みは、特色 GP 終了後も引き継がれ周囲の大学にも活動が波及していることが紹介された。さらに、大学評価・学位授与機構や文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室も学生参画型 FD に注目し始めていることを踏まえて、今後の展開について、学生と協働で教育を創り上げる関係を構築することが強調された。



《パネルディスカッション》

本シンポジウムのパネルディスカッションには、講師の3名と総務理事・副学長、糸長雅弘 大学教育機構 大学教育センター長に加えて、学生である杉元さんが登壇した。本格的なディスカッションに入る前に、林透 大学教育機構大学教育センター准教授によるファシリテーションのもと、参加者どうしで対話（アイスブレイク）を行い、活発な議論の下地作りを行うなどの工夫もなされ、会場から積極的な発言があった。



対話は、「みんなで対話しよう！」と題し、3つのテーマに沿って行われた。テーマは、(1) アクティブ・ラーニングにおける学びや評価をどのように活かしますか？ (2) 学生調査による客観的データをどのように活かしますか？ (3) 「スズメの学校」から「メダカの学校」へあなたはどのように考え、行動しますか？の3つであり、参加者同士でつくった小さなグループ内で対話を行った。続いて、「パネラーと話そう！」と題して、林准教授のファシリテーションのもとグループで話題になったことや、パネラーに聴いてみたいことを参加者同士で共有しながら質疑応答を行った。

最初に学生より発言があり、総務理事・副学長に対して、AL（アクティブ・ラーニング）ポイント認定制度について、事業概要説明で示されたALポイントについて、これが高いのか、あるいは低いのか、また、学生に対する評価とALポイントとの関係についてなどの趣旨の質問があった。総務理事・副学長からは、ALポイントの表示は、授業の質を示すものではなく、ALがどの程度行われているかの可視化であり、したがって評価などとの関係性がないこと旨の回答がなされた。



続いて、大学教員から山田教授と橋本教授に質問があり、山田教授に対しては、日米の比較データに関して、その差を説明できるだけのALの差が日米の高等教育にあるのかどうかという趣旨の質問があった。また、橋本教授に対しては、アクティブ・ラーニングと対比して、パッシブ・ラーニングが得意な学生に対して、ALを導入すればそのような学生の“良さ”を失わせてしまうのではないかと趣旨の質問があった。山田教授から、米国では、TAを中心としたALが2005年には、かなり積極的に導入されており、その時点での日米の差について、ALの差が影響していることは考えられるとの回答があった。橋本教授から

は、アクティブに（積極的に）聴く（外見上は受身で聴いているように見える）という形はあり得るのであって、ALのワンパターン化は、学生の学習を阻害する懸念が生じるとの回答があった。また、加えて、登壇者の杉元さんから、主体的な学びとは「応用力」のことであり（または「応用力」の身につく授業のことであり）、能動的か受動的であるかという学習形態（授業形態）に左右されるものではないという意見が示された。その他にも、会場の学生、教員から積極的な発言がなされ、パネリスト（登壇者）とフロアー（会場）の双方向な議論が続き、活気と熱気に包まれたパネルディスカッションとなった。

《クロージング》

最後に、額縁理事・副学長よりクロージングの挨拶とYU-AP事業を共に進める学生たちの紹介があった。冒頭、廣中平祐 元山口大学長の学長時代の活躍に触れながら、学生とともにYU-AP事業を加速させ、また、教職員・学生の協働を進めると同時に、教職員・学生そして市民の希望に応えられる大学づくりを行っていくことが述べられた。

まとめ：

本シンポジウムは、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）のまさにキックオフを全国に示すものであった。テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）、テーマⅡ（学修成果の可視化）を二つの柱として、山口大学の教育改革がさらに推進されることが期待される。そして、それら教育改革を進めることによって、山口大学改革プランがよりいっそう加速され、研究・教育・地域貢献という大学としての使命をよりよく果たしていける大学へと変革していくことが垣間見られた。本シンポジウムでは、学生の登壇もあり、教員と学生の協働が見られ、シンポジウムのテーマにあるように、今後は教員・職員・学生が「知の広場」（ラーニングコミュニティ）を築いていく最初の一步となったシンポジウムとなった。

大学教育再生へシンポ

山口大で県内外から関係者150人

山口大学が新たな人材育成を目指して取り組む「大学教育再生加速プログラム」(YU-AP)のシンポジウムが9日、山口市小郡黄金町の山口グランドホテルであり、県内外の大学関係者ら約150人が参加した。

同プログラムは、大学教育改革を進めるため、国が先進的な取り組みを実施す

る大学を支援する制度。山口大は昨年9月、文部科学省に採択された2テーマ「アクティブラーニング(AI)」 「学修成果の可視化」を2018年度までの予定で取り組んでいる。シンポジウムは、「ラーニングコミュニティの創造を目指して」と題して開催。京都大高等教育研究開発推進センターの松下佳代教授らYU-APアドバイザー

3人の基調講演があった。パネルディスカッションでは3人のほかに、山口大の総務理事や糸永雅弘大学教育センター長も登壇。「AIに消極的な学生への対応」「教員は学修をどう進めるべきか」などの課題について議論を交わした。同プロジェクトは、事業に学生の声を反映させるため、学生スタッフも配置。パネリストの1人として登壇した山口大理学部3年の杉元茜さん(21)は、「応用力の身に付く学びが大事だ」と思う。大学が教職員も学生も一体となって学べる場になってほしいと話した。



山口大の大学教育再生加速プログラムについて話し合われたシンポジウム＝9日、山口市

出所：『山口新聞』2015年（平成27年）3月11日付け3面

大学教育再生加速 プログラム (YU-AP) キックオフシンポジウム

ラーニングコミュニティの創造を目指して
～山口大学・大学教育再生加速プログラムの挑戦～

2015年 **3月9日** (月)
14:00～17:30

会場 **山口グランドホテル**
(鳳凰の間)
山口県山口市小郡黄金町1-1

内 容

- 14:00～14:10 開会挨拶／岡 正朗 山口大学長
来賓挨拶／山路 尚武 文部科学省高等教育局大学振興課課長補佐
- 14:10～14:25 YU-AP事業概要説明／額 厚 理事・副学長(教育学生担当)
- 14:25～16:00 基調講演(1)「**アクティブ・ラーニングにおけるパフォーマンス評価の可能性**」
松下 佳代 京都大学 高等教育研究開発推進センター教授(YU-APアドバイザー)
基調講演(2)「**学修行動調査の可能性 ～学修到達度調査との連携～**」
山田 礼子 同志社大学 教育支援機構副機構長・社会学部教授(YU-APアドバイザー)
基調講演(3)「**学生参画型FDの過去・現在・未来**」
橋本 勝 富山大学 大学教育支援センター教授(YU-APアドバイザー)
- 16:00～16:10 休 憩
- 16:10～17:20 パネルディスカッション
「**ラーニングコミュニティの創造を目指して
～山口大学・大学教育再生加速プログラムの挑戦～**」
松下 佳代 教授、山田 礼子 教授、橋本 勝 教授
額 厚 理事・副学長、糸長 雅弘 大学教育センター長
- 17:20～17:30 クロージング・閉会挨拶／額 厚 理事・副学長(教育学生担当)
- 18:00～19:30 情報交換会(会費3,000円)
- 【総司会:林 透 山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授】

お問い合わせ

大学教育再生加速プログラムキックオフシンポジウム

ラーニングコミュニティの創造を目指して～山口大学・大学教育再生加速プログラムの挑戦～

山口大学では、平成26年度文部科学省・大学教育再生加速プログラムのテーマⅠ・Ⅱ複合型に採択されました。本学では、ALポイント認定制度等によるアクティブ・ラーニングの組織的推進及び直接評価・間接評価統合型学修成果可視化モデルの構築を目指していきます。併せて、当該事業取組を促進するため、学生スタッフを配置し、学生の声を反映しながら、事業展開を行っていくことを進めていきます。まさに、教職学協働実践を通して、共に育み(共育)、ラーニングコミュニティの姿をカタチにしていきたいと考えています。



松下佳代 Kayo Matsushita

京都大学 高等教育研究開発推進センター教授

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程退学。群馬大学教育学部助教授、京都大学高等教育教授システム開発センター助教授を経て、2004年より現職。京都大学博士(教育学)。専門は教育方法学(特に、学習論、能力論、評価論)。能力はどう形成され評価されるのかに関心をもち、初等・中等教育と高等教育の共通性と差異に着目しながら、批判的・実践的研究を進めている。日本教育学会・大学教育学会・日本教育方法学会・日本カリキュラム学会等の理事、日本学術会議連携会員などを務める。

(主な編著書)

『パフォーマンス評価』(日本標準, 2007)、『〈新しい能力〉は教育を変えるか』(ミネルヴァ書房, 2010)

『高校・大学から仕事へのトランジション』(ナカニシヤ出版, 2014)

『ディープ・アクティブラーニング』(勁草書房, 2015)など。



山田礼子 Reiko Yamada

同志社大学 教育支援機構副機構長・社会学部教授

中央教育審議会大学分科会大学教育部会専門委員、国立大学法人評価臨時委員、日本高等教育学会事務局長、初年次教育学会前会長。1978年同志社大学文学部社会学科卒業。1991年カリフォルニア大学ロサンゼルス校教育学大学院博士課程修了。1993年同大学よりPh.D.取得。プール学院大学助教授、同志社大学助教授を経て、現職。

(主な編著書)

『大学教育を科学する—学生の教育評価の国際比較』(東信堂, 2009) (編著)

『学士課程教育の質保証へむけて—学生調査と初年次教育からみえてきたもの』(東信堂, 2012) (単著)

『学びの質保証戦略(高等教育シリーズ)』(玉川大学出版部, 2012) (単著)

『Measuring Quality of Undergraduate Education in Japan: Comparative Perspective in a Knowledge Based Society』

2013年Springer(編著) その他日英論文多数



橋本 勝 Masaru Hashimoto

富山大学 大学教育支援センター教授

京都大学経済学部卒、同大学院経済学研究科博士課程単位取得満期退学。1992年から岡山大学教育学部に経済学担当教員として着任。数年間は一方的講義型授業の平凡な一教員だったが世紀が変わる頃からFDに関わり始め、競争原理とゲーム感覚を重視する多人数討論型授業(橋本メソッド)を開発、普及するとともに、岡山大学が2001年から本格展開した学生参画型FDの推進者を約10年続ける。2011年4月より富山大学に移り、その両方の進化・発展に挑戦している。かつて専門だった経済統計学の授業は現在では担当しておらず、原発再稼働、イスラム国問題等の時事問題を含む現代社会全般を広く広くカバーする授業を担当している。2011年度前期に東日本大震災で15回の授業を迅速に組んだことはマスコミでも取り上げられ話題を呼んだ。



纈纈 厚 Atsushi Kouketsu

山口大学 理事・副学長(教育学生担当)

一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了。政治学博士。山口大学理事・副学長(教育学生担当)、人文学部教授・独立大学院東アジア研究科教授。遼寧師範大学(中国)・開南大学(台湾)客員教授。東亜歴史文化学会会長、日本政治学会理事、植民地文化学会理事。日本近現代政治軍事史・現代政治論専攻。

(主な編著書)

『日本海軍の終戦工作』(中央公論社, 1996)、『近代日本の政軍関係』(岩波書店, 2005)、『田中義一』(天香書房, 2009)、『日本降伏』(日本評論社, 2013)、『侵略戦争』(筑摩書房, 2014)、『現代の戦争』(共著, 岩波書店)他。



糸長雅弘 Masahiro Itonaga

山口大学 大学教育機構大学教育センター長

九州大学理学部物理学科卒。同大学院理学研究科物理学専攻修了。理学博士。九州大学工学部講師、山口大学教育学部助教授を経て、平成13年4月から山口大学教育学部教授。また、大学情報機構副機構長、教育学部附属山口中学校長等を経て、平成24年4月から大学教育機構副機構長、大学教育センター長。さらに、平成26年4月から学長特命補佐として、国際総合科学部の設置に尽力。専門は太陽地球系科学(磁気圏物理学)、情報科学、科学教育。

(主な論文)

『Reflection of shear Alfvén waves at the ionosphere and the divergent Hall current』(Geophysical Research Letters, 1996)

『AKR modulation and global Pi2 oscillation』(Journal of Geophysical Research, 2011)



みんなで対話しよう！



自己紹介しながら、
基調講演等を聴いた感想や気づき
などについて、3人程度でグループ
になって対話しよう！



YAMAGUCHI UNIVERSITY

対話のお題



- (1) アクティブ・ラーニングにおける学びや
評価をどのように活かしますか？
- (2) 学生調査による客観的データをどのように
活かしますか？
- (3) 「スズメの学校」から「メダカの学校」へ
あなたはどのように考え、行動しますか？



YAMAGUCHI UNIVERSITY

パネラーと話そう！



グループで話題
となったこと、
聞いてみたいこ
とをパネラーと
話してみよう！

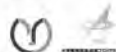


YAMAGUCHI UNIVERSITY

クロージング・閉会挨拶



纈纈 厚 理事・副学長
(教育学生担当)



YAMAGUCHI UNIVERSITY

ご参加いただきまして、ありがとう
ございました。「志」つなぎ 伝える
二百年



YAMAGUCHI UNIVERSITY

2015年3月9日 YU-APキックオフシンポジウム

山口大学 大学教育再生加速プログラム (YU-AP) 【テーマⅠ・Ⅱ複合型】の事業概要

共通教育を中心としたアクティブ・ラーニングの推進と学修成果可視化モデルの構築

事業担当者:
山口大学理事・副学長(教育学生担当)
額 厚

平成26年度「大学教育再生加速プログラム」認定取組

大学等名: 山口大学
テーマ: テーマⅠ (アクティブ・ラーニング) ・Ⅱ (学修成果の可視化) 複合型

【山口大学教育再生加速】・・・山口大学は、正課教育と正課外教育の共創により、共通教育を中心としたアクティブ・ラーニングを積極的に推進し、次の時代を切り拓く人材として必要な「山口大学生コンピテンシー」の修得を確保するため、先進的な学修成果可視化モデルの構築を行い、学生の学びの好循環を創出する。

事業実施体制の整備

【学びの好循環】

【成果の可視化】

【成果の成果】

【成果の種類】	2014年度	2015年度	2016年度
アクティブ・ラーニングを実施する学生の割合	37.1%	100%	100%
学生の教養科目卒業単位数(単位あたり)	3.0単位	3.0単位以上	3.0単位以上
アクティブ・ラーニングが導入された授業科目	117科目	147科目	147科目

テーマⅠ (アクティブ・ラーニング)

共通教育を中心としたアクティブ・ラーニング推進のフローチャート

STEP1 H25

- 教養コア5科目、英語11科目、理系基礎6科目でのAL実施【22科目】
- 共通教育改革によるアクティブ・ラーニングの導入(平成25年度～)

STEP2 H28

- 展開科目、学際的教養科目、キャリア教育科目でのAL実施【34科目に増加】
- ★ 学部専門教育科目でのAL化に波及効果

STEP3 H30

- 人文・社会・自然教養科目でのAL実施【42科目に増加】
- 共通教育すべてをアクティブ・ラーニング化の実現
- ★ 学部専門教育科目でのAL化の増加に波及効果

テーマⅠ (アクティブ・ラーニング)

ALポイント認定制度とその効果

ALポイントによるシラバスの見える化

①多くの教員がアクティブ・ラーニングを担う
②学生の授業外学習時間の増加

ALベストティーチャー表彰制度の創設

AL推進チームの形成

ALポイント認定によるシラバスの見える化

ALポイント = (アクティブ・ラーニング(AL)度の総和) ÷ (授業回数)

テーマⅡ (学修成果の可視化)

直接評価・間接評価統合型学修成果可視化モデルの構築

【学修成果測定】

【直接評価】

- 学修到達度調査
- ルーブリック

【間接評価】

- 学修行動調査
- 授業評価アンケート

直接評価・間接評価統合分析の狙い

事例1) 学修満足度が高い(間接評価)が、コンピテンシーが低い(直接評価)学生に、社会的適応力を身に付けさせたい。

事例2) 高校時代の学修態度(間接評価)に比べ、学修が伸びない(直接評価)学生に、学修目標を明確化させたい。

★学修到達度測定(コンピテンシーなど)と学修経歴・満足度等との相関分析による教員・学生へのフィードバック

★多角的な学生データ蓄積を通じたロールモデルの提示による教員・学生へのフィードバック

【可視化モデルの活用方策】

- 学生の学びのリアクション
- カリキュラム・コース検証

『山口と世界』ルーブリック開発ワークショップ (計4回)

山口大学憲章


1 「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」の創造

私たち山口大学は、21世紀の多様な課題を「発見し・はぐくみ・かたちにする」、豊かな「知の広場」(＝ラーニングコミュニティ)を創り出します。

私たち山口大学は、この「知の広場」において、自らの役割と実績とを不断に評価しつつ英知の創造をめざします。

2 共同・共育・共有精神の涵養

3 公正・平等・友愛の尊重



事業推進のための学生スタッフ

YC.CAM

山大コーディネーター
山大の「デキル」を創ります！



学生スタッフの活躍の場（学内編）

山口大学 共育ワークショップ 2014.9.22



学生スタッフの活躍の場（学外編）

横浜国立大学主催 AP推進フォーラム 2015.2.21-22



事業の最終目標

- ・「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」(ラーニングコミュニティ)を通じた人材育成。
- ・山口大学の教育システムを学生に、社会に質保証できること。
- ・事業成果を積極的に情報発信し、我が国の高等教育全体の発展に貢献すること。

「志」つなぎ 伝える
 二百年



創設200周年
山口大学



YU-AP キックオフシンポジウム
2015.3.9

アクティブ・ラーニングにおける パフォーマンス評価の可能性

松下 佳代
京都大学・高等教育研究開発推進センター
matsushita.kayo.7r@kyoto-u.ac.jp

中心的な問い

アクティブ・ラーニングにおける学びについて

- 誰が
- 何を
- 何によって
- どのように


評価するのか？

2

OUTLINE

- アクティブ・ラーニングにおける学び
- パフォーマンス評価とルーブリック
- アクティブ・ラーニングにおける評価の課題

3



アクティブ・ラーニングにおける 学び

4

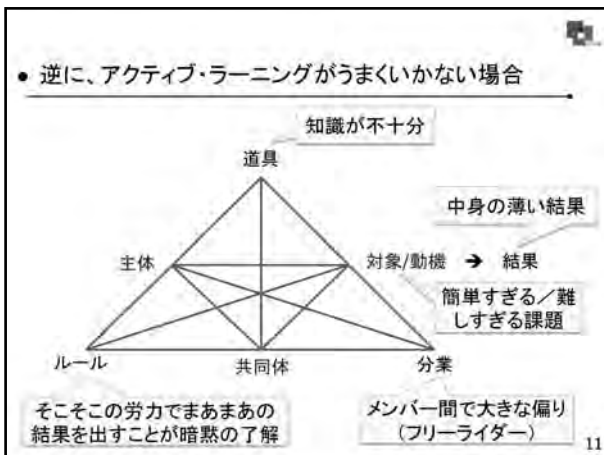
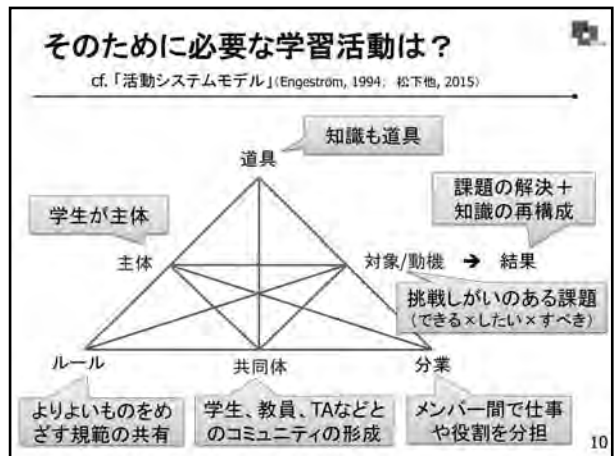
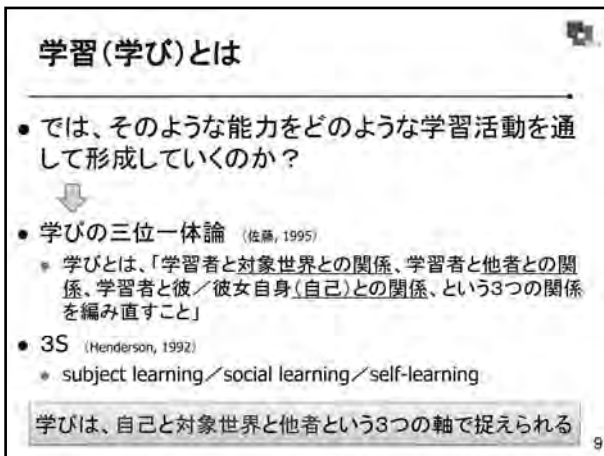
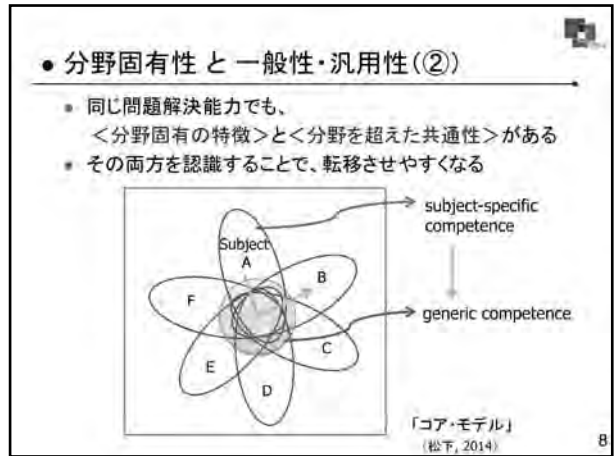
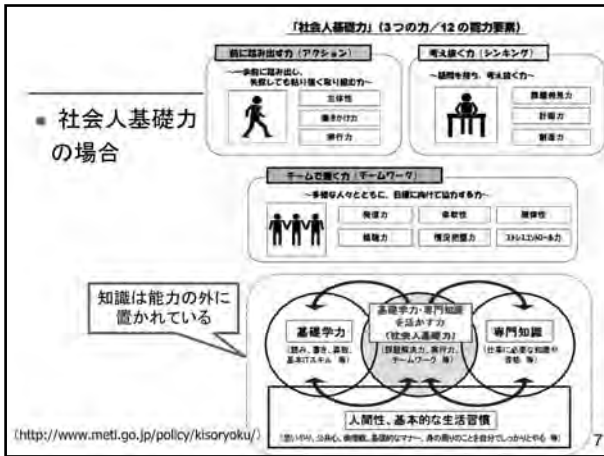
今なぜ、アクティブ・ラーニングなのか？

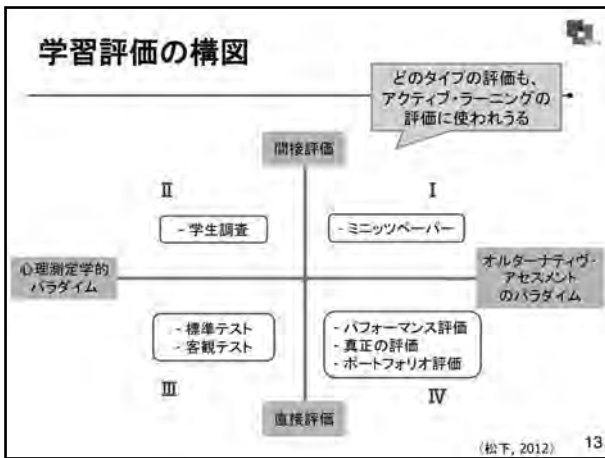
- ユニバーサル化
 - 学力や学習意欲の多様化
 - 講義形式の授業では、90分もたない
- 学生に求められる能力の変化
 - ←グローバル化、知識社会化、リスク化、個人化
 - ①知っている (to know) だけでなく、行える (to do)
 - 認知的側面 + 社会的側面 + 情意的側面
(知識・技能) (対人関係) (意欲・関心)
 - ②分野固有性と一般性・汎用性

5

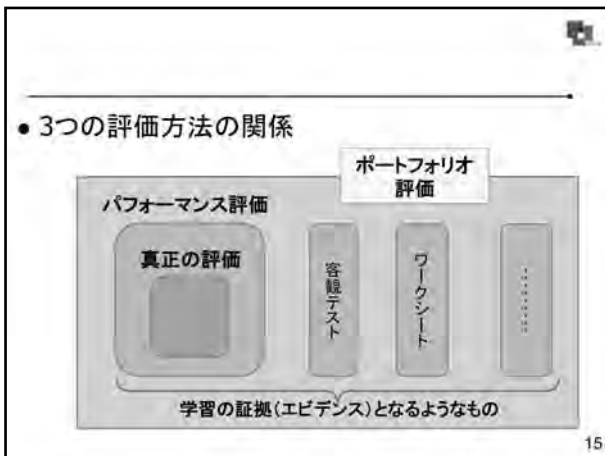
- 認知的側面 + 社会的側面 + 情意的側面 (①)
 - コンピテンス (competence)
 - 「認知的スキルとメタ認知的スキル、知識と理解、対人的・知的・実際のスキル、倫理的価値観のダイナミックな結合」
(OECD, 2009, p.3)
 - ↓ 具体化
 - 学習成果 (learning outcomes)
 - intended/expected — achieved
 - 「学習者が、学習プロセスの終了後に、何を知り、理解して、また何をやってみせる (demonstrate) ことができると期待されているかについての記述」(OECD, 2009, p.3)

6

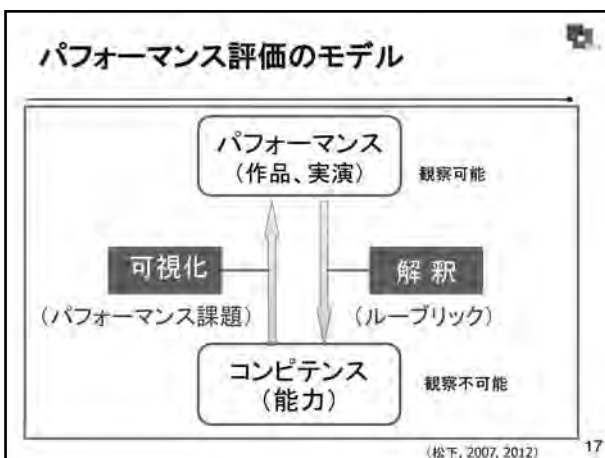




- ### パフォーマンス評価とは？
- パフォーマンス評価 (performance assessment)
 - ある特定の文脈のもとで、さまざまな知識や技能などを用いながら行われる、学習者自身の作品や実演(パフォーマンス)を直接に評価する方法
 - 関連する評価方法
 - 真正の評価 (authentic assessment)
 - ポートフォリオ評価 (portfolio assessment)
- 14



- ### 「ルーブリック評価」？
- パフォーマンス評価 (や真正の評価、ポートフォリオ評価) のための評価基準として使われるのが、ルーブリック
 - ルーブリックだけ一人歩きさせてはダメ
×「ルーブリック評価」
- ↓
- パフォーマンス評価の中でルーブリックを考える
- 16



- | | | |
|---|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 誰が 何を 何によって (何をエビデンスとして) どのように <p>評価するか？</p> | → | <ul style="list-style-type: none"> 教員/学生が 学習成果としてのコンピテンスを パフォーマンスによって ルーブリックを使って <p>評価する</p> |
|---|---|--|
- 18

パフォーマンス課題

- パフォーマンス課題 (performance task)
 - 学習者のパフォーマンスを評価するためにデザインされた課題
 - 様々な知識や技能を総合して使いこなすことを求めるような課題
- 大学教育の現状
 - パフォーマンス課題は多く使われている
 - 実技(医療・教員養成など)、演奏や美術作品(芸術分野)、製作物(PBLなど)、レポート・卒業論文、プレゼン・口頭試問など
 - しかし、評価基準については、ほとんど教員の主観にゆだねられ、教員間で/教員と学生の間で、共有されることはなかった

19

ルーブリック

- ルーブリックとは
 - =パフォーマンスの質を段階的・多面的に評価するための評価基準表
 - 「専門家の鑑識眼」を明示化し、共有できるようにするツール
 - パフォーマンスの質を量的表現に変換する働きも
- ルーブリックへの注目
 - 能力を評価 → 正誤ではない、出来ごあいの連続体の評価

	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1	← レベル
観点 (規準)	観点1	
	観点2	
	観点3	
	観点4	記述語 (descriptor)

20

ルーブリックの例

大学間で、科目横断的に共有

- AAC&U: VALUEルーブリック (Rhodes, 2010; 松下, 2012)
 - 「本質的学習成果」を評価するためのルーブリック
 - 批判的思考、文章コミュニケーション、チームワーク、倫理的推論 など16領域で
 - *Valid Assessment of Learning in Undergraduate Education

全学で、科目横断的に共有

- 関西国際大学: コモンルーブリック (濱名他, 2012)

特定の科目で共有

- 山口大学: 初年次科目「山口と世界」コモンルーブリック

21

山口大学のコモンルーブリック

- 全学必修の初年次科目「山口と世界」のためのコモンルーブリックを開発
 - プロトタイプとしてのルーブリック
 - 個々の教員が、自分の担当する「山口と世界」の内容や、パフォーマンス課題にあわせて、ローカライズする
 - * 研究、商品開発など

22

共通教育としての「山口と世界」

<学習目標>

チームで、山口に関連する課題・テーマを設定し、情報を収集し、分析し、解決策や企画をまとめ、口頭や紙媒体(もしくは映像やWeb)で発表し、地域や国際的環境で活かす力を養う授業。

アクティブ・ラーニングを通して、研究や社会実践の基本的なプロセスについて、学習の仕方やリサーチ・リテラシーの基本を学習することが目的である。

この学習目標にあわせてコモンルーブリックを作成

星野報告資料(2015.2.27)

『山口と世界』コモンルーブリック開発プロセス

2014年		
3月5日	FDワークショップ (WS)	…『山口と世界』コモンルーブリック試作
7月31日	コモンルーブリック開発WS	…『山口と世界』コモンルーブリック(案)の提示と意見交換
9月上旬	『山口と世界』コモンルーブリック策定	
9月24日	コモンルーブリック活用WS	…『山口と世界』におけるルーブリック活用実践準備
10月～	『山口と世界』コモンルーブリック活用	
2015年		
2月27日	ルーブリック事例報告WS	

林報告資料(2015.2.27)

●「山口と世界」コモンルーブリック(規準とレベル)

規準	内容	レベル3	レベル2	レベル1	レベル0
発見する	山口に関連するテーマ設定、企画立案	山口に関連する課題に応じて、十分な下調べにもとづき、適切かつ独創的なテーマ設定、企画立案ができる	山口に関連する課題に応じて、下調べをした上で、テーマ設定ができる	山口に関連する課題に応じたテーマ設定ができる	レベル1に満たない
はぐくむ	テーマ設定、企画にもとづく情報収集およびコミュニケーション				
かたちに する	編集、作品化、発表資料、レポート等、プロダクトの作成	(省略)			
分かち あう	公開、プレゼンテーション、チームワーク				
振り返る	他者および自分(たち)の企画およびプロダクトの評価				

(林, 2015) 25

●「山口と世界」コモンルーブリック(パリエーション)

規準	内容	研究	商品開発
発見する	山口に関連するテーマ設定、企画立案	先行研究の把握や予備調査・実験等にもとづくテーマ設定と研究計画	プレ調査にもとづく商品企画
はぐくむ	テーマ設定、企画にもとづく情報収集およびコミュニケーション	実験、調査	実験、研究、開発
かたちに する	編集、作品化、発表資料、レポート等、プロダクトの作成	データ分析、解釈、論文作成	商品化
分かち あう	公開、プレゼンテーション、チームワーク	学会発表、シンポジウム、論文公表	マーケティング・リサーチ、広報、営業
振り返る	他者および自分(たち)の企画およびプロダクトの評価	自己評価、他者による評価、次の研究に向けての準備	マーケティング・リサーチ、アセスメント、改良や次なる開発に向けての準備

(林, 2015) 26

アクティブ・ラーニングにおける 評価の課題

27

「山口と大学」で見えてきた課題

- 「山口と世界」というアクティブ・ラーニング科目
 - パフォーマンス評価の実践
 - 「研究」「商品開発」などのパフォーマンス課題
 - コモンルーブリック
- 見えてきた課題(2/27のワークショップより)
 - ルーブリックの共有 と 教員の裁量
 - 個人評価 と グループ評価
 - ルーブリックによる評価 と 成績評価
 - プロダクト評価 と プロセス評価
 - 学習目標 と 評価基準 の 区別

28

ルーブリックの共有 と 教員の裁量

- コモンルーブリックと各教員のローカライズの在り方(林報告)
- アクティブ・ラーニングの評価への組織的な取組
- 何を共有し、何を各教員の裁量にゆだねるか？
=何を共通の学習成果として期待するか？
 - 「山口と世界」: 目標、ルーブリックの規準、レベル数、グループワークを行うという条件は、共有
 - パフォーマンス課題やルーブリックの詳細は、各教員の裁量

29

個人評価 と グループ評価

- グループ評価と個人評価のあり方(林報告、星野報告)
- グループワークは、グループ評価が原則
 - 成績評価、フリーライダー問題 に向どう対処するか？
- グループ評価にとどめる
 - 同じグループのメンバーは、同じ得点
e.g. 同じ得点が前提→グループ内での分業やルールを学習
- グループ評価をもとに個人評価を行う

30

グループワークにおける個人評価の方法

- 観察評価は困難
 - 評価負担の大きさ、「観察者効果」
- ⇓
- 貢献度のピア評価
 - 点数配分の方法：×ゼロサムゲーム式、○持ち点式
e.g. 6人だったら、5点を持ち点として、どう配分してもOKとする
- ポートフォリオによる自己評価
- レポート評価
 - 課題やパフォーマンスは協働で行っても、そこからの学びは多様 = 学びの主体性

31

ルーブリックによる評価 と 成績評価

- 成績評価への活用方法のあり方 (林報告・課題②)
 - 少なくとも項目ごとの点数を決めて加算するのではダメ？ (星野報告)
- ⇓
- ルーブリックによる評価を成績評価に使えるか？
 - 評語の場合：各観点の評価をそのまま成績に変換も可能
 - 素点の場合：各レベルを一定の幅をもった得点に変換
e.g. ヌタ州立大学歴史学科：卒業論文の成績評価 (資料)

32

単純総和 (or 重み付け総和) ではうまくいかないことも

- カッティングスコアの問題
 - レベルは質的差異を表しているのに、同じレベル内の得点より隣接する別のレベルの得点の方が近くなる場合がある
- 総合印象点と合計点のズレ
 - ルーブリックの観点 (規準) が、評価者が暗黙のうちに重視している観点と異なる
→ズレの原因を明らかにしながら、ルーブリックを改訂

33

プロセス評価 と プロダクト評価

- コモンルーブリックとは別に、パフォーマンス (プレゼンテーションとリーフレット) の評価シートを作成 (星野報告)
- ⇓
- プロセスとプロダクトの関係は？
 - 今回のコモンルーブリックは、プロセス全体を評価
発見する ← はぐむ ← かたちにする ← 一分からあう ← 振り返る
 - = 成果物 = 実演
 - パフォーマンス (狭義)
 - パフォーマンス (広義)

34

- パフォーマンス (広義) = プロセス
- パフォーマンス (狭義) = プロダクト

常に、広義のパフォーマンス (プロセス) の評価が必要・可能とは限らない

- プロセスの評価は、評価負担大
- 必要な場合
 - 学習目標が、プロセス全体に対応しているとき
e.g. 協働的な「学びと創造のサイクル」の学習

35

学習目標 と 評価基準 の区別

- 学んでほしいことは、可視化・点数化可能な項目の総和ではない / 可視化せずにおいておく領域も必要では？ (星野報告)
- ⇓
- 目標 (goal) と規準/基準 (criterion) は別の概念
 - criterion-referenced assessment
 - 正確には「目標基準評価」ではなく「クライテリオン基準評価」
…「『クライテリオン』に『目標』の含意はない」(鈴木, 2014, p.14)
 - criterion
= 「パフォーマンスの形で観察される能力の指標 indicator」
(Aiverno, 1994, p.30)

36

● **評価のジレンマ**

- 評価できないものの中に大切なものがある
- 大切なことは評価してはならない

vs.

- 評価することによって、学生に何が大切かというメッセージを伝える
- 学生の中に、評価能力(鑑識眼)を育てる

● **「守・破・離」の思想**

- 「型」を守り、破り、離れることで、学びを通じて自由になる
- 「型」 ≙ ルーブリック ≙ 能力の「コア」

(e.g. 「山口と世界」における、協働的な「学びと創造のサイクル」)

37

まとめと今後への期待

- 「山口と世界」でのパフォーマンス評価(コモンルーブリックとパフォーマンス課題)は、実りある取組として展開されつつある

↓

- 「山口と世界」でのパイロット的取組をいかに、他の科目・学年に広げていくか？
 - いわゆる「アクティブ・ラーニング型」以外の授業科目の意味とその位置づけ
- パフォーマンス評価以外の評価方法とどう組み合わせるのか？
 - 評価疲れにならないように
 - 学習の過度なコントロールにならないように

38

文 献

- Alverno College Faculty (1994). *Student assessment-as-learning at Alverno College*. Alverno College Institute.
- Engeström, Y. (1994). *Training for change: New approach to instruction and learning in working life*. International Labour Office.
- Y. エンゲストローム (2010), 『変革を生む研修のデザイン—仕事を教える人への活動理論—』(松下佳代・三輪建二監訳) 鳳書房.
- 濱名篤他 (2012). 「体系的なカリキュラム構築と学習成果の可視化のためのルーブリックの構築・活用」大学教育学会 第34回大会ラウンドテーブル.
- 林透 (2015). 「『山口と世界』コモンルーブリック開発の経緯と課題」山口大学ルーブリック事例報告ワークショップ.
- Henderson, J.G. (1992). *Reflective teaching: Professional artistry through inquiry*. Merrill Prentice Hall.
- 星野晋 (2015). 「学んでほしいこと評価できることの擦り合わせは可能か〜『山口と世界』の事例から〜」山口大学ルーブリック事例報告ワークショップ.
- 松下佳代 (2007). 『パフォーマンス評価』日本標準.
- 松下佳代 (2012). 「パフォーマンス評価による学習の質の評価—学習評価の構図の分析にもとづいて—」『京都大学高等教育研究』第18号, 75-114.
- 松下佳代 (2014). 「学習成果としての能力とその評価—ルーブリックを用いた評価の可能性と課題—」『名古屋高等教育研究』第14号, 209-229.

40

- 松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター編 (2015). 『ティープ・アクティブ・ラーニング—大学授業を深化させるために—』勁草書房.
- OECD (2009). *A Tuning-AHELO conceptual framework of expected/desired learning outcomes in engineering*. Tuning Association.
- Rhodes, T. (Ed.) (2010). *Assessing outcomes and improving achievement: Tips and tools for using rubrics*. Washington, DC: Association of American Colleges and Universities.
- 佐藤学 (1995). 「学びの対話的実践へ」佐伯評・藤田英典・佐藤学編『学びへの誘い(シリーズ 学びと文化①)』(pp. 49-91), 東京大学出版会.
- 鈴木秀幸 (2013). 『スタンダード準拠評価—「思考力・判断力」の発達に基づく評価基準—』図書文化.

41

学修行動調査の可能性

～学修到達度調査との連携～
山口大学・大学教育再生加速プログラム
(YU-AP)キックオフシンポジウム

2015年3月9日
山田礼子(同志社大学)

発表内容

1. 教育の質保証のために何をすべきか
2. ジェイサーブのあゆみ
3. 学習行動調査結果の紹介
4. JCIRPからJSAAPへ:新たな展開
5. 学修行動調査と学修到達度調査との連携へ

教育の質保証のために 何をすべきか

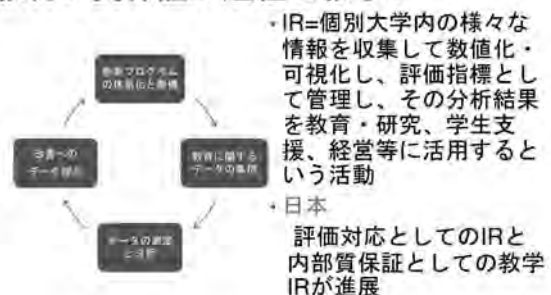
質保証と学習成果志向の高等教育政策

- ・ 欧州諸国を中心としたチューニング・プロジェクトの広がり
- ・ AHELO Feasibility Studyの参加者 23000人、17カ国 250機関の参加
- ・ アメリカにおいては、2015年からのPIRS (Postsecondary Institutional Ratings System)の実施
- ・ 日本学術会議による分野別参照基準の策定
- ・ 日本における大学ポートレートの稼働

機関、国、トランスナショナルレベルの 教育の質保証の取組



教育の質保証の過程と教学IR



7

質保証の一環としてのデータの活用

- 何を教えるかから何が出来るかに発想を転換
- 学生の現状を客観的データから把握
- 学生の高校時代の情報と現状とを関連づけて分析
- アウトカムとカリキュラム、あるいは授業と関連づけて分析
- 授業評価と学生データとを関連づけて分析
- 教員のFDに学生データを活用

↓

カリキュラムの見直し、教授法の見直し

8

アウトカム・アセスメントに関する 直接評価と間接評価の使用モデル

マクロ 大学全体 学部 プログラム	ミクロ 教室内・授業
<ul style="list-style-type: none"> 授業評価 標準テスト (CLA, TOEFL, TOEIC等) ルーブリック 価値評価 学業行動調査 (間接評価の代表的な手法) 	<ul style="list-style-type: none"> 授業評価 ルーブリック ポートフォリオ レポート テスト (個別テスト、標準テスト) 問答調査 授業評価

ジェイ・サープのあゆみ

10

JCIRP研究のこれまでの目的と特徴

- 学生の成長を測定する学生調査の意味、学生の成長を支える高等教育機関の効果の測定の開発
- 研究の特徴: アメリカで蓄積されてきたカレッジ・インパクト研究の流れをベースにアステインのI-E-O(既得-環境-成果)モデルに依拠しつつ、大学生への教育効果・成果について検討
カレッジ・インパクトモデルの検証と発展
- アメリカの学生調査と互換性のある調査の開発と実施

11

開発の軌跡

- 科学研究が基盤となる学生調査の開発
 - 2004~2006年 基盤研究 (B)
目的と成果→カレッジ・インパクト研究の基礎を築く
 - 2007~2009年 基盤研究 (B)
目的と成果→標準型学生調査の開発と定着
 - 2010~2013年 基盤研究 (A)
目的と成果→国際比較の基盤構築 (日米韓)
データベースの構築

↓

多くの大学の教育改善に活用

12

具体的には？

日本における学修行動調査による大学のアウトカム・アセスメントの実現

↔

日米韓を中心としたアウトカム・アセスメントの国際比較

相互に関連

信頼性のある学修行動調査の開発

- カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) の高等教育研究所 (Higher Education Research Institute: HERI) の許諾
- HERIが開発した代表的な全米規模のアセスメント
 - 「大学生調査 (College Student Survey: CSS)」
 - 「新入生調査 (CIRP Freshman Survey: CFS)」
- 日本の大学生の実態を反映して独自に改良
- 2004年のJCSS試行調査を経て
 - 大学生調査 (JCIRP College Student Survey: JCSS)
 - 新入生調査 (JFS)
 - 短期大学生調査 (JJCSS)

JCIRPデータの説明

	JCSS参加 大学・学部 数	JCSS 参加者数	JFS参加 大学・学部 数	JFS 参加者数	JJCSS参加 短期大学数	JJCSS 参加者数
2004*	14	1491				
2005	8	3961				
2007	14	5879				
2008	N/A	N/A	129	19395	9	1966
2009	23	4094	45	8405	30	7244
2010	71	8300	N/A	N/A	23	7369
2011	N/A	N/A	69	10791	34	12151
2012	26	5722	N/A	N/A	29	7102
2013	N/A	N/A	109	15519	37	12916
Total	156	29447	352	54110	162	48748

*試行調査
参加大学・短期大学数: 670
参加者数: 132305人

学部単位で申し込んでいるため、実際には850学部以上が申し込み

質問項目のサンプル

大学生調査のサンプル
あなたは今年度、次の活動に1週間あたりどれくらいの時間を費やしましたか

	0時間	1時間未満	1-2時間	3-5時間	6-10時間	11-15時間	16-20時間	20時間以上
1 授業時間以外で読書や宿題をする	1	2	3	4	5	6	7	8
2 授業や運動に出席する	1	2	3	4	5	6	7	8
3 同僚の友達と交際する	1	2	3	4	5	6	7	8

新入生調査のサンプル
あなたが高校3年生だった時、次のことがらをどの程度しましたか

	ほとんどしませんでした	あまりなかった	まっただけだった	
1 授業中、質問した	4	3	2	1
2 自分の意見を論理的に主張した	4	3	2	1
3 問題の解決方法を模索しそれを他者に説明した	4	3	2	1

学修行動調査結果の紹介

浮かび上がってくる現代学生の共通像

1週間の勉強や宿題時間 (%)

● 0時間 ● 1時間未満 ● 1-2時間
● 3-5時間 ● 6-10時間 ● 11-15時間
● 16-20時間 ● 20時間以上

1週間の趣味としての読書活動 (%)

● 0時間 ● 1時間未満 ● 1-2時間
● 3-5時間 ● 6-10時間 ● 11-15時間
● 16-20時間 ● 20時間以上

・ 学習時間の減少の予兆 継続データにより検証していく必要性
・ 少ない読書時間 読書をしていない学生が現代学生の共通像

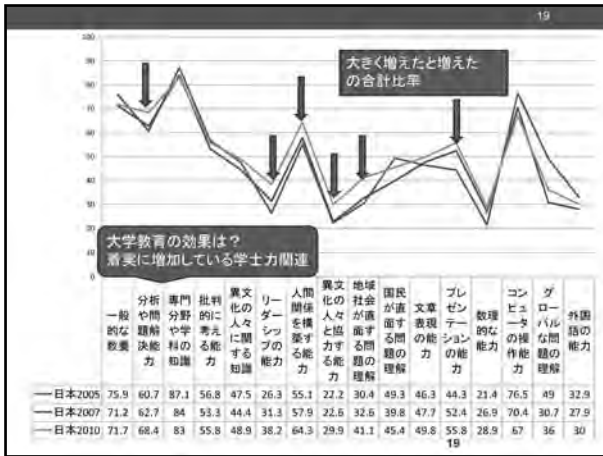
ラーニングアウトカムの自己評価

大きく増えたの比率

大学教育の効果は?

	分析や問題解決能力	専門分野の知識	批判的に考える能力	異文化の人々に関する知識	リーダーシップ構築する能力	人間関係を築く能力	異文化の人々と協力する能力	地域社会が直面する問題の理解	国民が直面する問題の理解	文章表現の能力	プレゼンテーションの能力	数理的な能力	コンピュータの理解	グローバルな視点の理解	外国語の能力
— アメリカ2005	46.1	35.1	59.5	38.7	21	27.5	32.4	10.7	19.5	25.9	30.2	28.1	14.1	27	26.1
— 日本2005	9.5	7.3	23.6	10	6.2	4.7	11.8	3.1	3.6	5.4	6	7	3.3	19.5	5.9
— 日本2007	7.8	8.1	24.1	9.8	7.5	6.2	11.7	3.8	3.7	4.8	6.8	8.7	4.2	16.1	4.7
— 日本2010	7.3	8.2	24.4	8.9	7.8	6.1	12.8	4.6	5.2	5.4	5.8	7.9	3.4	12.9	4.5

継続的データでそれほど変化のない日本の学生のラーニング・アウトカムの自己評価
サンプル大学は異なるけれども一般化できるデータとしての意味?
自己評価の低い傾向のある日本の学生、高い傾向のあるアメリカの学生、どれくらいが適正水準か?

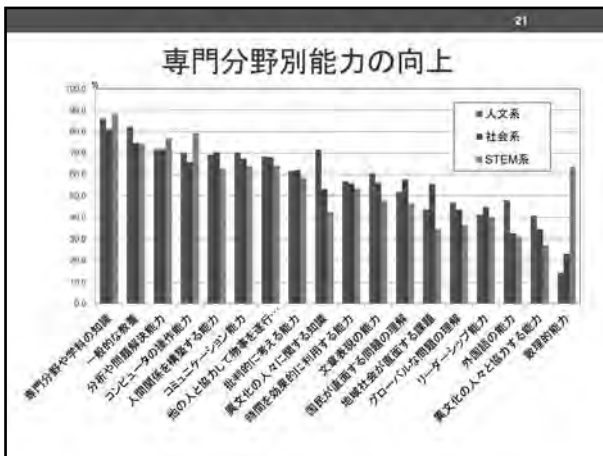


20

継続データからの示唆

- 全体的に少ない学修時間
- 1学期に履修する授業数が多い
- ゆっくりだが着実に学習成果は上がっている
- 国際比較は単純ではない。自己評価には国民性、文化性が反映
- 何が上昇させている要因なのか？

教育方法: アクティブ・ラーニングの効果は？
中教審答申案においても
「アクティブ・ラーニング」の導入の進捗が提示
筆者も多くの大学が今後
「アクティブ・ラーニング」を導入すると期待



22

A大学の学生と大学間と大学内ベンチマーキング

23

分析の対象(JCSS2012)

	大学数	人数
A大学(3-4年生のみ)	1	298
国立大学(3-4年生のみ)	8	2079
参加全体(3-4年生のみ)	25	4092
(参加回答総数)	(26)	(5722)

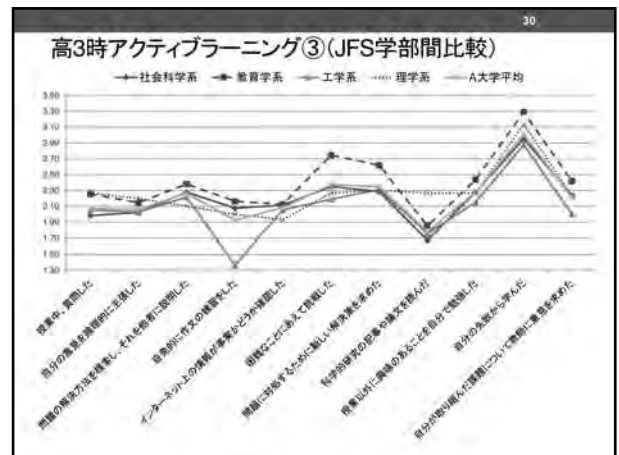
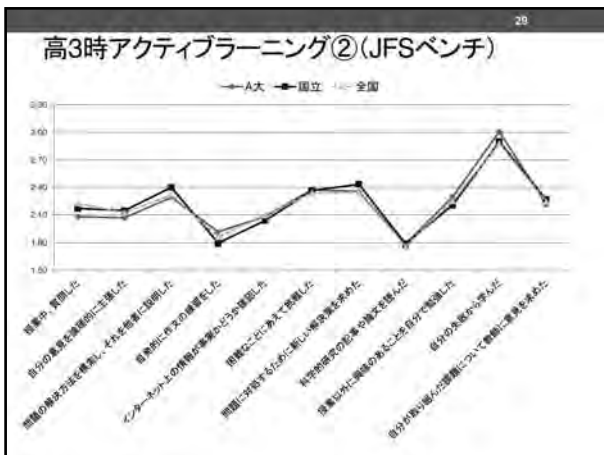
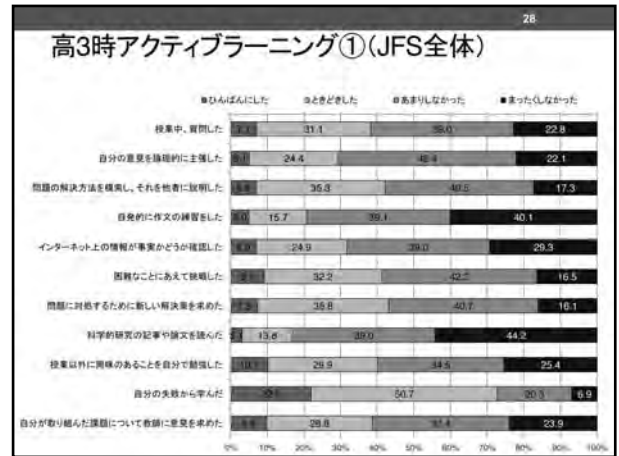
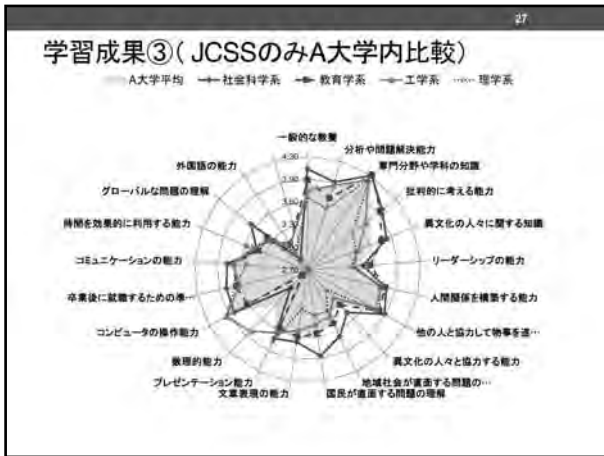
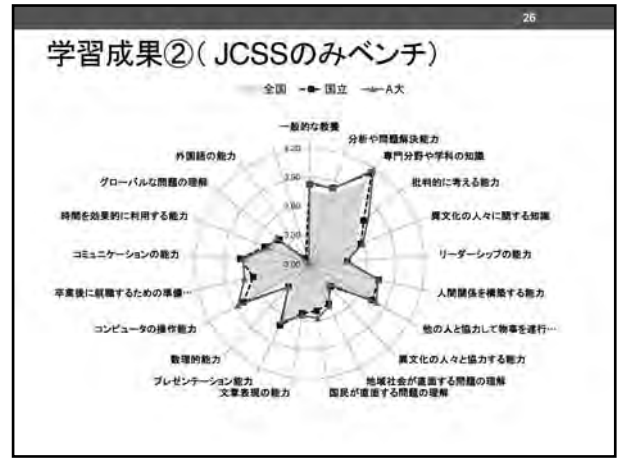
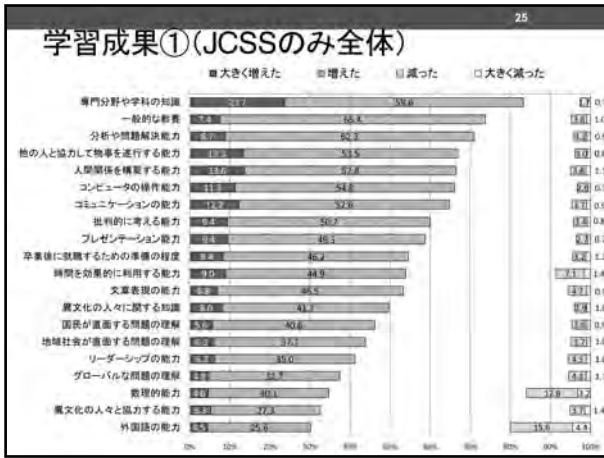
A大学内学部別参加数	人数
社会科学系学部	92
教育系学部	45
工学系学部	126
理学系学部	35

24

分析の対象(JFS2013)

	大学数	人数
A大学(1年生のみ)	1	352
国立大学(1年生のみ)	14	4413
参加全体(1年生のみ)	91	15317
(参加回答総数)	(91)	(15519)

A大学内学部別参加数	人数
社会科学系学部	171
教育系学部	55
工学系学部	74
理学系学部	30
(※ 学部不明は除外)	(22)



JCIRPからJSAAPへ: 新たな展開へ

JCIRPからJSAAPへ 学修行動調査の活用

- ・ JSAAP Joint Student Achievement Assessing Projectとして2015年から
事業化
- ・ 研究結果を実践へ 調査票の大幅改訂へ
- ・ 新入生調査といつでも調査できる大学生調査という2種類
- ・ 質問項目の削減と日本の大学の実情に合わせた項目を厳選
- ・ データベースの完成 →新たなサービスの可能性
- ・ 有料による学修行動調査サービス
そのサービスの内容は？
 - ・ データベースを利用して学生の状況の把握
 - ・ 簡易レポートの排出と利用
 - ・ 学内委員会への対応可能

- ①大学教育改革のために役立つ
- ②入学志願のマーケティングに役立つ
- ③アクレディテーション対策として役立つ
- ④ベンチマークとして役立つ

大学によっては、PROGなどとも連携可能

学習行動調査 データ(JSAAP)

学習過程に関する
間接アセスメント

直接評価との連結

標準テスト あるいは
PROGなど

教育アセスメント
標準性の検証
特色の抽出

教学マネジメントの支援
教育の内部質保証のエビデンス
機関評価、認証評価への活用

ご静聴ありがとうございました

質問は

ryamada@mail.doshisha.ac.jp

をお願いいたします

山口大学APキックオフシンポ
2015/3/9

学生参画型FDの過去・現在・未来

富山大学 大学教育支援センター
(FD部門長) 橋本 勝

プロローグ

ハンドアウトにはない「ここだけの話」をしばし楽しみ下さい。

本日、林先生から頂いたお題は...

学生参画型FDの過去・現在・未来 です。

実は、何を隠そう、橋本はその道でも、「知る人ぞ知る」人物なのです。

今日は時間も短いため、最近使っている「アクティブ型講演」も封印し、頂いたお題に沿った素直な講演で済ませます。

あご髭もあった頃の橋本が、「黄門行脚」と揶揄されつつ全国各地で行ったキャンペーンに近い内容です。

橋本の講演(公演?) という事で事前に妙な期待を持たれていた方は、平凡な講演になりますことを御容赦下さい。

十年一昔

とは、よく言ったものです。

2005年に岡山大が「新基軸『学生参画』による大学教育改革」で特色GPを取得した頃と今ではかなり状況が変化しました。

今日は、今一度その頃に立ち戻って学生参画型FDを総括し、山口大のAPの今後に向けて期待を込める内容です。

では、まず、山口大に大変縁の深い『廣中レポート』あたりから話を始めましょう。

歴史に埋もれかかった『廣中レポート』

●『廣中レポート』とは...

2000年6月に文科省(当時は文部省)から出たレポート

正式名は『大学における学生生活の充実方策について(報告)―学生の立場に立った大学づくりを目指して―』

当時の山口大学学長廣中平祐氏が座長だったためこう呼ばれる。

●歴史に埋もれかかった理由

- 1) 高等教育局医学教育課に設置された調査研究会の答申に過ぎなかったから
- 2) 日本の大学の歴史的経緯や現状を踏まえると優先的に取り扱うかどうかで異論があったから
- 3) 縦割りやトップ人事の交代など文科省の構造的事情から

注目すべき叙述

「学生中心の大学」への転換を図るという観点から、大学教育においては、大学で教育を受ける学生の希望や意見を、適切に大学の運営に反映させることが重要である。また、学生が積極的に大学運営に関わることを通じて主体的に大学生活を送ることは、学生の社会的な成長を促すことを期待できるものである。

学生の意見や希望を反映させる具体的な方法としては、(a) 大学として学生からのアンケート調査を行ったり、学生の実態調査を行うことにより、その希望や意見を聴取する方法、(b) 学生の代表と大学の運営責任者等との懇談会等を実施し、その希望や意見を聴取する方法、(c) 学生の代表を大学の諸機関に参加させる方法などが考えられる。

これまで大学において、学生の希望や意見を反映させる分野としては、正課外教育や福利厚生といった学生が中心となって活動する分野について考えられてきたが、今後は、正課教育の内容のあり方や授業方法、さらに教育条件の改善などの分野についても、学生の希望や意見を適切に取り入れる仕組みを整備していくことが重要である。

歴史に埋もれなかった『廣中レポート』

- 岡山大学が『廣中レポート』の存在に気付かないまま2001年から学生参画型FDを開始
(←FDの行き詰まり感、将来的発展の切り札)
- ※それを内容とする特色GP申請に向けて理論武装するために『廣中レポート』を活用(特色GPには2005年度に採択)
- 各地の大学の学生支援部局なども次第に『廣中レポート』に着目(代表例は愛媛大学など)
- ↓
- I * S e i や学生FDサミット等を契機に学生がFDに関わる活動が急拡大
- ↓
- 近年になってヨーロッパで高等教育の質保証を学生参画という観点から考える動きが活発化

岡山大が学生参画型FDを始めたワケ

- 先にも触れた通り『廣中レポート』の存在には気づきませんでした。それとは無関係にFDの新展開には学生参画が不可欠という先人たちの先見の明によるものです。
- 先人たちは準備だけは水面下で進めておき、学生の中で大学教育改革に関心をもつ者が現れるタイミングをひたすら待ち、様々な仕掛けを用意しました。
- 2000年にそれに同調する学生が複数出てきました。(教育学部と経済学部の2年生)
- 彼らの「組織的、継続的にやってみよう」という声を受け、あっという間にスタート。
- 当時の橋本は成り行きでFDに首を突っ込み始めたばかりの状態でしたが、教員で誰か推進エンジン役が必要という事で白羽の矢があたってしまいました。

当時の学内の状況は

- なぜFD(=教員の教育資質能力の向上のための研修)に学生が関わる必要があるのか!
- 授業調査アンケートでさえ学内で3割程度の教員しか応じない。
- 当然、予算はゼロ(⇒事務の余剰物品の活用、学生の「研修」費用はFD関係教員から2000円ずつのカンパ)
- 但し、公的組織づくりだけは最初からほぼ確立。(=学生・教員FD検討会) ...全11学部から12名の正式学生委員が学部長推薦で選ばれ、教員委員も各学部から選出。総勢50名程を取りまとめるのは学生の委員長。そこでの決定は大学として正式に位置づけ。
- 自主的活動空間も確保(講義棟内)

当時の学外の状況は

- 京都でのFDフォーラムなどに足を運ぶ岡山大学以外の学生は皆無。(「教育改革は学生のため」という結論だけが繰り返されるものの、本当に学生のためになっているのかどうかは不明瞭...)
- 2003年に特色GPで申請した時も最終選考で落選。(主な落選理由は実績不足という事だったが面接では二重の懸念が指摘: 学生紛争の再燃、無気力世代には無理?)
- 例外的に金沢大・京大などが共感、同調の動きを見せるがどちらも長続きせず。
- 大阪市大の木野茂氏が強い関心を持ったもの大阪市大では実現できず。(その後、木野氏は立命館大に移籍し、学生FDスタッフを組織化し活動を展開。学生FDサミットを通じて急激な広まりを見せたことは周知の通り。)

岡山大は何がやれたのか

《特色G P採択以前：2001～2004年度》

- ◆学生目線でのシラバスの改善（編集上の科目順、オフィスアワー欄の設置、不十分記載の改善etc.）
- ◆教員との協働作業としての授業評価アンケートの改善（質問項目数の大幅減：19⇒7、学生提案の質問の採用、全科目実施、実施方法の統一etc.）
- ◆本格的な学生発案授業としての「大学授業改善論」の開始（授業改善を各教員に直談判する内容の教養科目）
- ◆新入生対象の履修相談会（教職員が行っていたオリエンテーションの一部を学生だけで実施。半公的行事として新入生が受け取る公的スケジュールに記載。自由参加ながら参加率は1割⇒9割に急上昇し定着。）
- ◆教員対象のFD研修（桃太郎フォーラム）への参画 など

《特色G P採択期間中：2005～2008年度》

- ◆ゲストも活用した新たな学生発案授業の開講
「知ってるつもり?! コンビニ」...ポブラの社長等と討論
「君は頭が良くなりたか〜発信力〜」...ベストセラー作家を特別講師に文章力アップ etc.
- ◆初代のメンバーをサポート臨時事務職員として雇用
- ◆PCや大型印刷機等の備品の充実
- ◆学生の各地への派遣（研修目的）+橋本の黄門行脚
- ◆i * S e e（教育改善学生交流）の開始
- ◆広報・啓蒙用本格的活動紹介映像の制作
- ◆『ランニング・ティップス』の作成、配布

《特色G P終了後：2009年度〜》

- ◆いくつかの学生発案授業の継続
- ◆2年間は臨時職員を学内措置で引き続き雇用
- ◆履修相談会やi * S e eの継続や各地への学生派遣用に一定の予算獲得（学内での認知度アップ）
- ◆（耐震工事に併せて）活動空間の拡張（2研究室分）
- ◆大学祭での市民・高校生との交流
- ◆学生FDサミットの開催
- ◆学生参画型FD経験者が他大学の職員に
- ◆周囲の大学に活動が波及

今や

橋本は敢えて岡山大学の牽引役を降りましたが、岡山大学の学生参画型FDは定着しています。

また、i * S e eや学生FDサミットのような相互交流・相互刺激を目的にしたイベントや橋本の黄門行脚等で学生参画型FDは多くの大学に広まりました。

山口大学も今後の有望株の一つです。

また、国もこの動きを無視できなくなりました。

「学生からのまなざし」

- 一昨年7月の大学評価・学位授与機構のフォーラムでは正に学生参画がテーマ



こんな調査まで

授業の内容を決定する際に学生の意見を聞く等、授業の運営に学生が参加する取り組みを行っていますか。以下の中から該当するものがあれば選択して下さい。

- a 授業アンケートの結果を組織的に検討し、授業内容等に反映する機会を設けている
- b 大学の授業に関し、学生自治会から意見を聞く機会を設けている
- c 学生を教育改善委員として任命している
- d 学生が課外活動で教育改善活動に参加している
- e 学生企画型、もしくは学生が参加する授業運営委員会を置く授業科目を開設している
- f FD活動に学生が参加している

（文科省高等教育局大学振興課大学改革推進室が全ての大学を対象に毎年行っている『大学における教育内容等の改革状況について』と題する調査の平成25年版、現在集計中。）

橋本はさらに先へ

- 2011年4月、橋本は富山大に電撃移籍
- 富山大には学生参画型FDの素地はゼロ?
- 理解のある教職員でも「うちでは時期尚早」

↓

- ★何とか5年で定着させるべく暗躍(?)
- ……2015年度が5年目!!
- ★同じやるなら、何か新しい要素を!

UDという新発想

富山大での学生参画型FDに呼応してきた学生の一人が社会人学生だったことをヒントに新しい要素として市民参加という要素を加味

(学生、職員、教員の三位一体型+市民参加)

従来型FD・SDではなくUniversity DevelopmentあるいはUniversal Development

想定される市民は

生涯学習意欲の高い市民、周辺住民、保護者、企業など受け入れ側の市民、そして母校に一定の思い入れを持つ卒業生たち(とりわけ学生参画型FDを経験した卒業生)等

UDを軸にした組織構成

- 組織名は…UD Mates
- ランチミーティングは…UD Meeting
- 大型イベントは…UDトーク

↓

意識的に多用することで教職員の何人かに普通用語感覚が芽生え

学生参画型FDの自然浸透・定着

- 2011年9月の学内FD研修に学生5人参加
- 2012年10月の全学FDイベント(『中教審委員 金子元久と語ろう』に学生4名参加)
- 各地のFDイベントに大学として学生を次々と派遣

他大学の巻き込み

- ◎富山県大学連携協議会(現大学コンソーシアム富山)への波及
 - ・2012年8月29日の合同FD&SD研修に学生7名(内1名は高岡法科大学)が参加
- ◎北陸地区国立4大学連携推進プロジェクトに波及
 - ・2012年12月22日大学共創フォーラム2012に学生6名が参加(内1名はUD Matesとは無関係学生、全体では学生が約30名参加)
 - ⇒少なからぬ影響を林、河島両氏に与える

一大イベント

2012年11月25日 UDトーク2012開催
参加者は約50名の内、約30名が学生

- 大学における人材育成のあり方について活発に議論

学生企画・学生運営のイベントに職員10名が正式SD研修として参加し「休日出勤」扱いする前例を作ったことも特筆される。

☞“大学史に残る画期的なこと”
(金沢大学青野透教授コメント)

進化&深化

- 第2回UDトーク
2013年6月9日(日)に参加者214名で開催⇒大幅な知名度アップ
- 第3回UDトーク
2013年11月24日(日)に(少数限定ながら)学外者にも開放して開催⇒対外的知名度もアップ
- 第4回UDトーク
2014年12月14日(日)に参加者実演型というユニークな内容で開催⇒マスコミも注目

学生参画型FDの未来

を作るのは皆さん方です。

↓

教育は「授ける・受ける」ものから協働で創るものに変化しています。

というより、教育とは本質的にそういうものです。

言い古された言葉ですが、

「スズメの学校」から「メダカの学校」へ

大切なのは

- ・教員が学生と一緒に授業を楽しむという姿勢
- ・教育は学生と一緒に創る知的営為という意識

教育サービスの提供者・受容者という関係ではなく、協働で創り上げる関係

学生 = “学びの主権者”

御静聴有難うございました。

山口大のAPがこの方向で発展することを期待しています。

【Q7. シンポジウム全体について】

満足度	<input type="checkbox"/> 非常に良かった <input type="checkbox"/> 良かった <input type="checkbox"/> どちらとも言えない <input type="checkbox"/> あまり良くなかった <input type="checkbox"/> 良くなかった
時間配分	<input type="checkbox"/> 非常に良かった <input type="checkbox"/> 良かった <input type="checkbox"/> どちらとも言えない <input type="checkbox"/> あまり良くなかった <input type="checkbox"/> 良くなかった

【Q7. 山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU・AP）に期待することがあればご記入ください（自由記述）】

【Q8. その他お気づきのことがあればご記入ください（自由記述）】

ご協力ありがとうございました。

山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP)
 キックオフシンポジウム「ラーニングコミュニティの創造を目指して
 ～山口大学・大学教育再生加速プログラムの挑戦～」

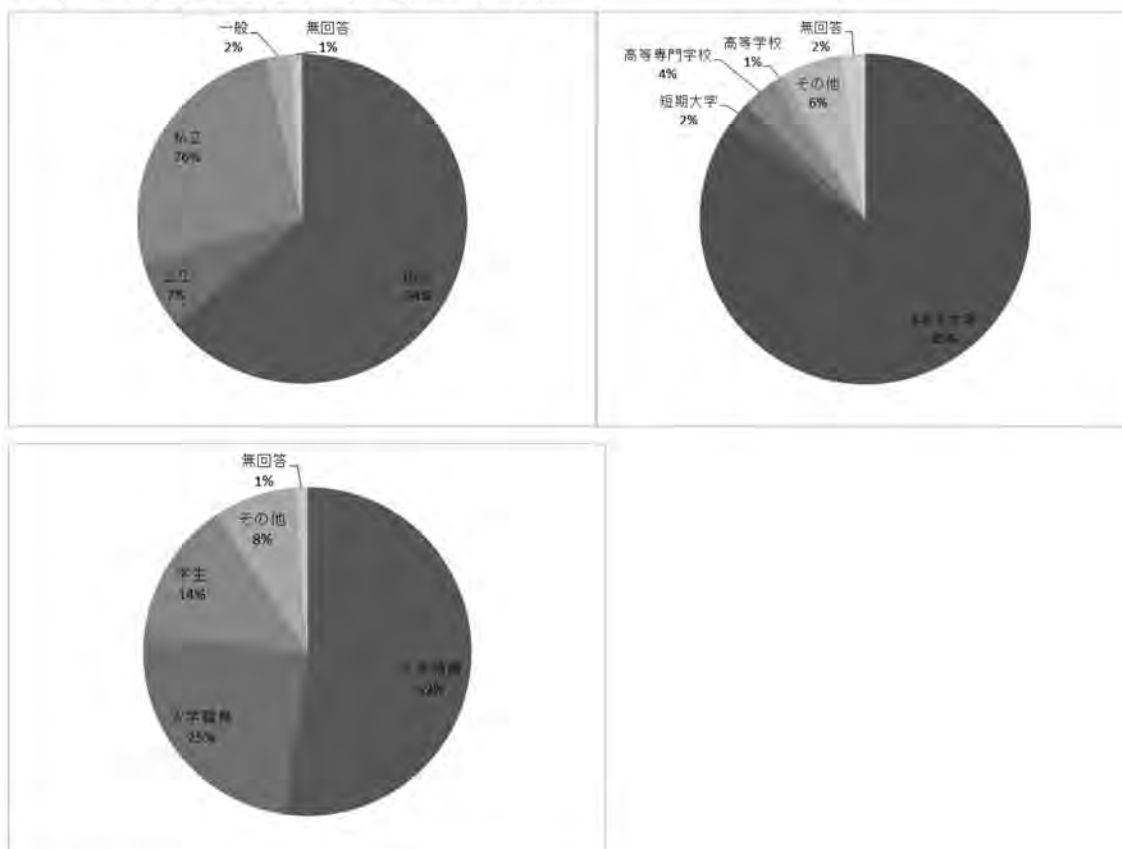
日時：平成 27 年 3 月 9 日 (月) 14:00～17:30

場所：山口グランドホテル 2 階 (鳳凰の間)

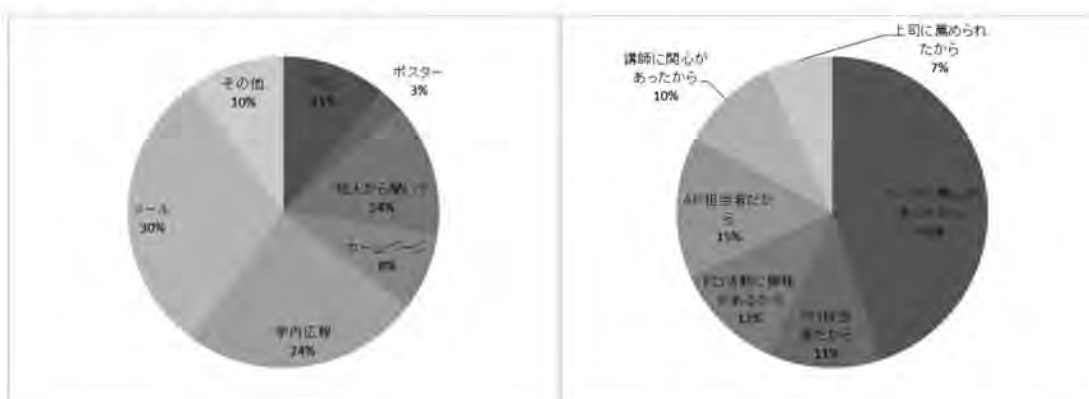
出席者数：143 名

回答者数：86 名 (60.1%)

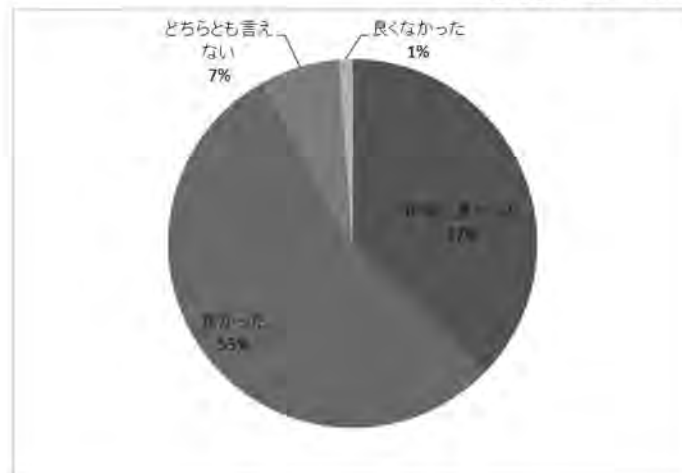
【Q1. ご自身の所属・職種について】



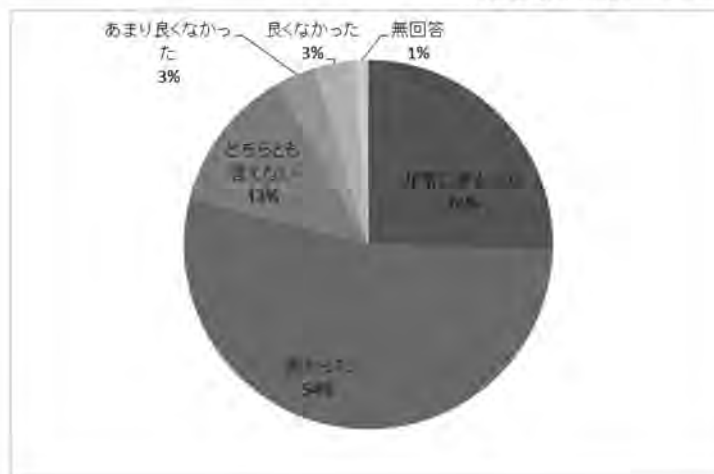
【Q2. 参加経緯について】



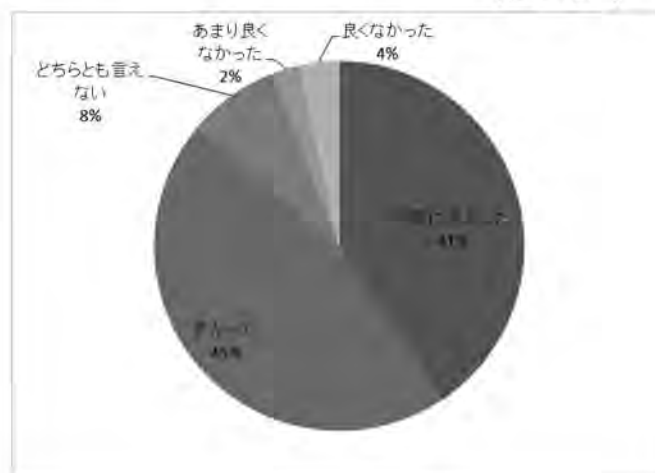
【Q3. 基調講演（1）「アクティブ・ラーニングにおけるパフォーマンス評価の可能性」
（京都大学 松下 佳代 教授）】



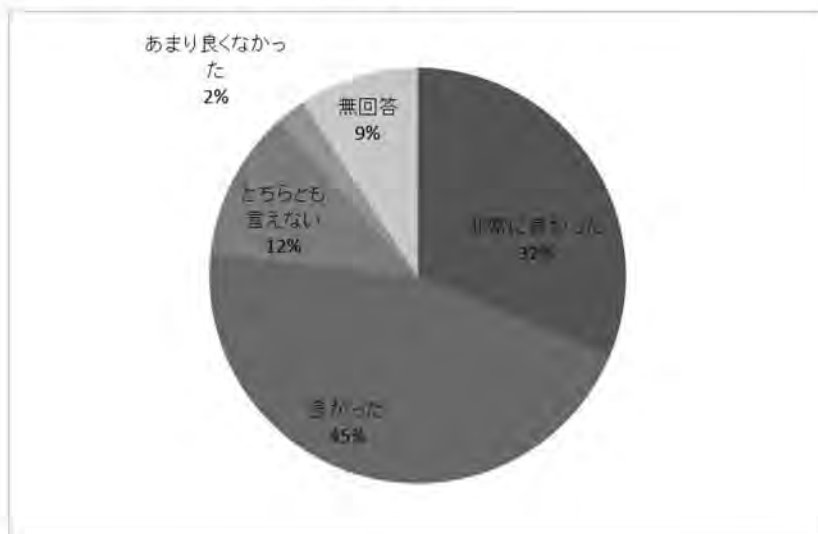
【Q4. 基調講演（2）「学修行動調査の可能性～学修到達度調査との連携～」
（同志社大学 山田 礼子 教授）】



【Q5. 基調講演（3）「学生参画型FDの過去・現在・未来」
（富山大学 橋本 勝 教授）】

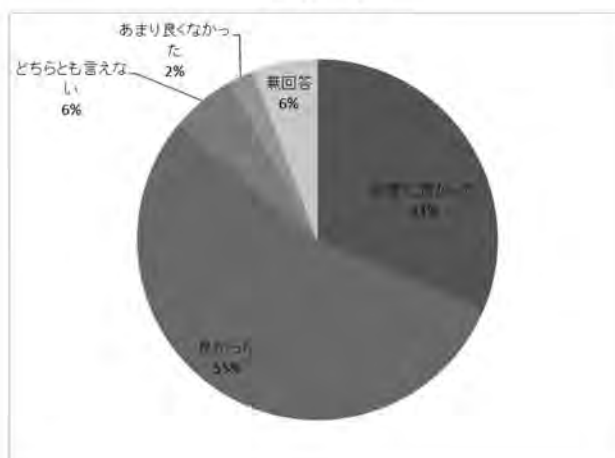


【Q6. パネルディスカッションについて】

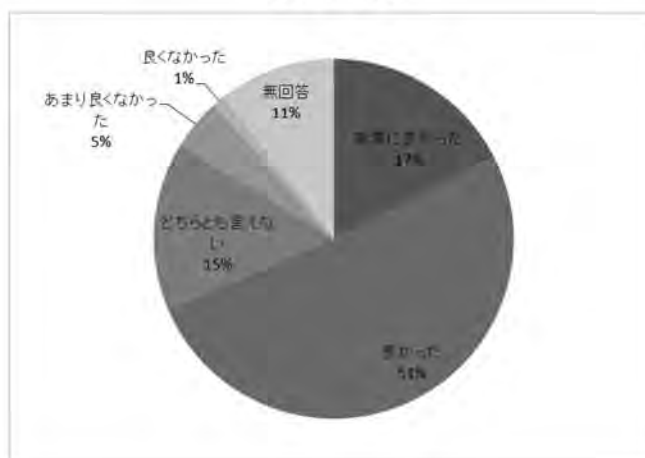


【Q7. シンポジウム全体について】

【満足度】



【時間配分】



Ⅵ. アドバイザー会議

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP） 第1回アドバイザー会議・議事メモ

日時：2015年1月23日（金）12：00～13：00

場所：Marriott Marquis Hotel Washington, DC U.S.A.

出席者：Mary Deane Sorcinelli 名誉教授（Professor Emeritus, Department of Educational Policy,
Research & Administration, University of Massachusetts Amherst, USA）（YU-APアドバイザー）

林透 大学教育機構大学教育センター准教授

河島広幸 大学教育機構大学教育センター助教（特命）

内容：

（1）山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の概要について

① 事業概要

林准教授より、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の概要についてポンチ絵などを通して説明し、テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）、テーマⅡ（学修成果の可視化）についてそれぞれ説明した。Sorcinelli 名誉教授からは、学生の学びについて、現在最も求められている学びは、アクティブ・ラーニングである旨説明があった。アメリカや日本だけではなく、アジア諸国やヨーロッパなど世界中の高等教育におけるテーマになっていることが語られた。

（2）日本の高等教育事情に関して

Sorcinelli 名誉教授は、日本の高等教育事情に関して高い関心を示され、大学教育再生加速プログラム（AP）などの政策が実施されていることについて、非常に好ましいことである趣旨のコメントがあった。今後も継続的に日本の高等教育事情についての情報提供の要請があり、また、本学への来学を希望しており、本学の取組にも大きな期待を寄せた。



山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）

第2回アドバイザー会議・議事メモ

日時：2015年2月27日（金）12：20～13：20

場所：大学教育機構長室

出席者：松下佳代 京都大学高等教育研究開発推進センター教授（YU-APアドバイザー）

亀倉正彦 名古屋商科大学経営学部教授

瀬瀬厚 理事・副学長、糸長雅弘 大学教育機構大学教育センター長

朝日孝尚 理工学研究科教授、林透 大学教育機構大学教育センター准教授

内容：

（1）山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の概要について

① 事業概要

瀬瀬理事・副学長よりYU-AP事業概要資料について説明があった。

松下教授からは、コンピテンシーなどの詳細の能力を規定することによって、個人の属性になってしまう嫌いがあるので注意すべきとの指摘があった。

また、ルーブリックの本来の趣旨は、パフォーマンス評価にあり、学習者が与えられた課題を通して、どのような力が表れているかを評価することが主眼である。

② ALポイント認定制度の概要

林准教授よりALポイント認定制度の概要について説明があった。

松下教授より、講義、演習、実験・実習すべての授業形態を対象とするのかとの質問があり、学習において、知識を与える場面を経て、知識を組み合わせるなどの作業を通して、発表などの機会が設定されるべきである。いわゆる、知識の「内化」と「外化」があってはじめて学習が成立するとの指摘があった。授業時間内の割合（ウェイト）が大切であり、「講義」と「外化」との組み合わせが重要であり、ALポイント認定制度において入力する事項は、「外化」のみが重視されている懸念があるとの指摘があった。

糸長センター長より、ALポイントの数値については、あくまで一指標と捉えており、ALポイントの高低だけでの授業の質を判断することは考えていないことを部局に説明している。ただ、ALベストティーチャー表彰制度の創設も考えており、ALポイントの数値を重要視せざるを得ない状況がある。また、部局からのニーズとして、理系基礎系科目でのALの事例紹介を求める声大きい旨の説明があった。

松下教授からは、UCLAの化学の授業での500人クラスでのレポート評価における学生ピア評価の実践事例、MITでの学生選択制のティール型授業と講義型授業の事例紹介があった。300～500人程度の大人数クラスでも、Student Engagementをいかに高めるかが大切である。ベストティーチャー表彰の観点として、学生が最高のパフォーマンスが出せる授業こそが大事であろうとの指摘があった。

（2）山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）キックオフシンポジウムについて

林准教授より、3月9日（月）開催のYU-APキックオフシンポジウムについて確認事項等を説明した。

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）

第3回アドバイザー会議・議事メモ

日時：平成2015年3月9日（月）11：00～13：00

場所：山口グランドホテル2階（ダイヤモンドの間）

出席者：山田礼子 同志社大学教育支援機構副機構長・社会学部教授（YU-APアドバイザー）

橋本勝 富山大学大学教育支援センター（YU-APアドバイザー）

瀬瀬厚 理事・副学長（教育学生担当）、糸長雅弘 大学教育機構大学教育センター長・教授、葛崎偉 教育学部教授・アドミッションセンター長、宮田浩文 大学院医学系研究科（農）教授・学生支援センター長、白澤文吾 大学院医学系研究科（医）准教授、林透 大学教育機構大学教育センター准教授、大西真次 学生支援部長、庄野英二 教育支援課長、鷹岡亮 教育学部教授、笠野裕修 理工学研究科（理）准教授、辻多聞 学生支援センター講師、平尾元彦 学生支援センター教授、朝日孝尚 大学院理工学研究科（理）教授、伊東明美 教育支援課副課長、河島広幸 大学教育センター助教（特命）

内容：

（1）山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の概要について

① 事業概要

瀬瀬理事・副学長より、YU-AP事業概要資料について説明があった（資料1）。

林准教授より、補足説明として、配布資料に基づき、出席者と国内外アドバイザーの紹介があった。

橋本教授からALポイントの点数の付け方についてと、指標の可変性について質問があり、瀬瀬理事・副学長及び糸長大学教育センター長よりAL（アクティブ・ラーニング）認定制度の基本的事項（資料2）に基づき簡単な説明があった後、詳細は「議題（2）ALポイント認定制度の概要について」において説明する旨回答があった。

（2）ALポイント認定制度の概要について

① ALポイント認定制度の概要について

林准教授より、ALポイント認定制度の概要について説明があった（資料2）。ALについては河合塾が実施した全国調査などを参考にして、ALの形態を指標として採用した旨説明があった。また、WEB上の履修登録画面、シラバス閲覧画面資料（資料2）に基づき運用についての説明があり、27年度以降は、全学的な調査を踏まえて改善点などを見出していく方向性を検討していることが説明された。

糸長大学教育センター長より、補足説明として、ALポイントは、授業中にどの程度のALが行われているかを可視化するものであることが強調された。

山田教授より、ALを進める上ではTA（院生）の存在が非常に重要であり、特に共通教育においては不可欠の存在になるとの助言があった。ALにおけるTA（院生）は、単なる授業の補助ではなく、フューチャー・ティーチャーとして、また、学部生のリーダーとして授業に関わるこ

とが求められている米国の事例について紹介があった。

橋本教授からは、TA自身がALの良さを実感していなければ、制度を整えてもうまくは機能しないことが指摘され、問題はペイ（報酬など）よりもTAを育成する長期的な視野を持てるかどうかであることが指摘された。

系長大学教育センター長より、第一志望で入学していない学生やコミュニケーションに難がある学生などに対するALに関する質問が橋本教授に対してあった。

橋本教授からは、ALの濃さを落とし、気軽に楽しめるALを展開し、非アクティブな学生をアクティブにする授業を行うことに軸足を置いて授業設計をすると効果があることが紹介された。

(3) その他

① ジェイサープ（学修行動調査）データの提示について

林准教授より、ジェイサープデータの学生への提示の仕方について、マスデータと個別データの提示に関する質問が山田教授に対してあった。

山田教授より、基本的にはマスデータのみでの提示で十分であるが、個別学生に対する学修支援（アカデミック・アドバイジング）に活用できることが紹介された。

平尾教授より、データに基づいた個々に対するアドバイジングに関して質問があった。

橋本教授からは、AP事業のなかで全学的な体制を整えて実質化することが望ましい旨の助言があった。

② 正課外教育の教育効果について

林准教授から正課外教育の教育効果について質問があった。

橋本教授からは、正課・正課外教育（活動）ともに関わりたくないという学生がいる状況では、かつて正課外活動（サークルなど）が持っていた楽しさ、魅力、部活のような感覚を授業に導入することも効果的であるという主旨の回答があった。



Ⅶ. 他大学訪問調査報告

訪問調査報告

創価大学 訪問調査

日 時 : 平成 27 年 1 月 8 日 (木) 10 : 00 ~ 15 : 30
 場 所 : 創価大学 ラーニングcommons SPACe、キャリアセンター
 担 当 : 総合学習支援オフィス・学習支援課 副部長・課長 池ヶ谷 浩二郎

スケジュール

時間	担当者	内容
10 : 00 ~ 10 : 30	総合学習支援オフィス・学習支援課 池ヶ谷 浩二郎 副部長・課長	ラーニングcommons SPACe 見学。
10 : 30 ~ 12 : 20	CETL (教育・学習支援センター) センター長: 関田 一彦 教授 清水 強志 准教授	ラーニングcommons全般。 アクティブ・ラーニング、学修成果 の可視化の取り組みについて。 教学 IR 関係。
12 : 50 ~ 14 : 00	キャリアセンター キャリア・就職支援課 前原 一美 部長	「就業力」と PROG の対応。 「就業力テスト」(PROG) を活用し たキャリア支援。 学生によるキャリアサポート関係。
14 : 00 ~ 15 : 30	総合学習支援オフィス・学習支援課 池ヶ谷 浩二郎 副部長・課長 総合学習支援 副センター長: 山崎 めぐみ 准教授	アカデミック・アドバイジングの取 り組みについて。 ラーニングcommons SPACe の学生 ボランティア、学生アルバイト、院 生アルバイト及び学部 SA に対する 教育・研修プログラムについて。

1. はじめに

1.1 創価大学の概要

1971年に創立された私立大学。現在は、8学部（経済学部、経営学部、法学部、文学部、教育学部、工学部、看護学部、国際教養学部）、4研究科（工学研究科、文学研究科、法学研究科、経済学研究科）と2つの専門職大学院（法科大学院、教職大学院）を有する総合大学である。学部生と院生を合わせた学生数は8005名（2014年5月1日現在）である。

1.2 創価大学の全学的な教学関係組織について

創価大学の共通教育及び全学的な教学関係の取り組みを担うのが、学士課程教育機構である。当機構は、共通教育の提供・運営を行う「共通教育運営センター」、外国語運用能力と多文化共生能力の涵養を担う「ワールドランゲージセンター（WLC）」、主に教育活動を支援する「教育・学習支援センター（CETL）」と学生向けサービス（各種学習支援）を総合的に提供する「総合学習支援センター（SPACE）」の4つのセンターからなる組織である。なお、「総合学習支援センター（SPACE）」は、2013年9月からの新設であり、新校舎（中央教育棟）に設置されているラーニングコモンズ SPACEを運営している。

1.3 訪問調査にあたって

創価大学は、大学教育再生加速プログラム【テーマⅠ・Ⅱ複合型】（AP）及びスーパーグローバル大学創成支援【タイプB：グローバル牽引型】（SGU）に採択されている。また、2013年9月にオープン、運用開始となった新校舎（中央教育棟）には、入試、教務、学生、学部事務、キャリアなど事務オフィス関係、ラーニングコモンズ、各種ラウンジ、教室、研究室などを集中させており、学生の学びやキャリアを総合的に支援できる拠点としての機能を有している。最新の設備が導入されている施設、これまでの取り組み（各種GP）による経験の蓄積に加えて、AP【テーマⅠ・Ⅱ複合型】に採択されている当大学の取り組み（施設含む）を訪問調査することは、本学AP事業に資する知見を得られると考えられる。

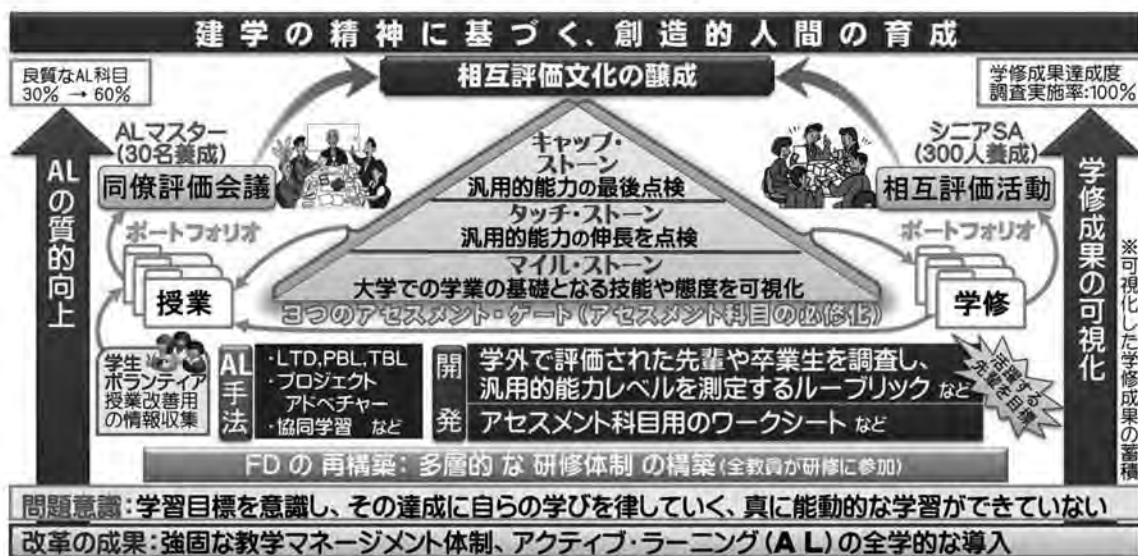
また、本訪問調査にあたっては、AP事業に携わる池ヶ谷 総合学習支援オフィス副本部長、関田 教育・学習支援センター長をはじめ、教学、教育・学習、キャリア支援などを担当する教職員の方から、本学AP事業とも深く関わる4つのトピック、①「教学マネジメント」、②「アクティブ・ラーニング」、③「学修成果の可視化」、④「学生参加」について話を伺った。



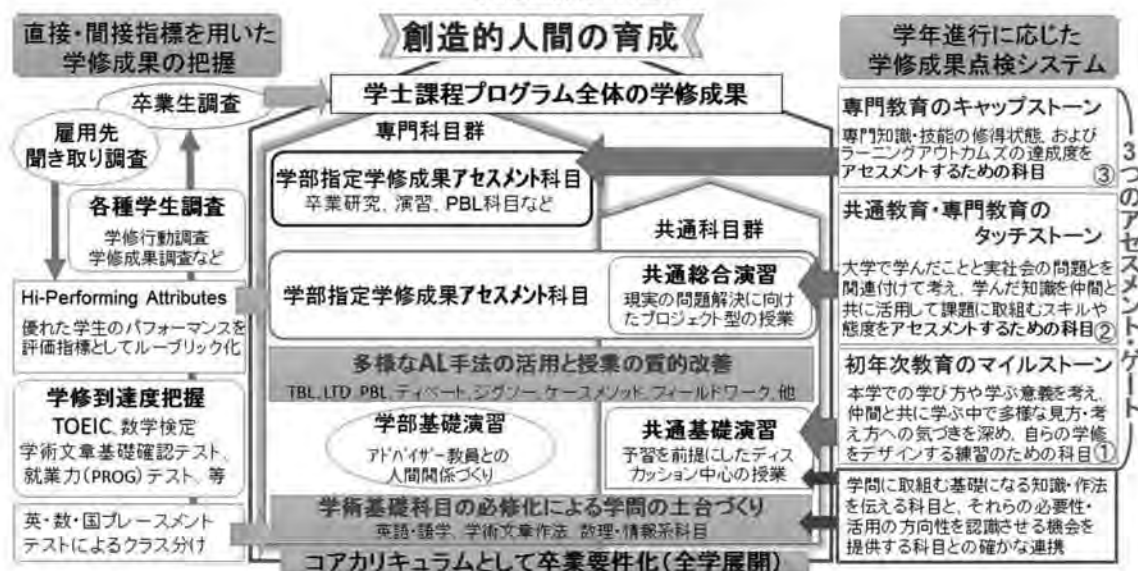
共通教育、学部専門教育が行われている新校舎（中央教育棟 GLOBAL SQUARE）

地上12階と9階のツインタワー、地下3階、教室数116室。116の教室の内約半数がアクティブ・ラーニング対応教室となっており、可動式の机、椅子が配置されている。エントランスホールは、吹き抜け3階になっており開放感がある。エントランスホールには、デジタルサイネージ（電子看板）が設置されており、学内情報に簡単にアクセスできる。このため、紙ベースのお知らせ類はほとんどなく、いわゆる掲示板に張り出されている紙ベースのものは、キャリア関係のチラシ・ポスターや学生サークルなどのアピールに限られている。ラーニングコモンズ SPACe やキャリアセンターなどの学生支援関係、教務や学事（学部事務室）などの事務関係などが集中しており、経済学部、文学部、経営学部、国際教養学部、学士課程機構、日本語・日本文化教育センター所属教員の研究室がある。他に比して、最新、最大規模の総合的な教育・学修施設であることが伺える。

創価大学 AP 概要



学修成果の把握



2. 教学マネジメントについて

創価大学では、全学的な人材育成として「創造的人間」の育成を掲げており、以下の通り DP (ディプロマ・ポリシー) を定め、全学 DP と整合性を有する共通教育のラーニングアウトカムズと各学部の DP を定めている。学部 DP に関しては、学部が DP を策定すること自体が FD (ファカルティ・デベロップメント) であるという認識のもとに取り組みを進めている。共通教育をコアとした学士課程教育を展開することで、全学的な教育目標である「創造的人間」の育成を目指している。

創価大学は建学の精神に基づき「創造的人間」の育成を教育目標に掲げている。創価大学が目指すべき教育は、「知力」と「人間力」を向上させ、学生一人ひとりが有している可能性としての「自分力」を発見し、それを開花させるものである。そこで、創価大学では 4 年間の学士課程教育を通して全学生が身につけるべき学士力として、以下の二つの方針を掲げる。

1. 「知力」の向上
「読む・書く・聞く・話す」という基礎学力の強化をとおして、「分析する力、統合する力、創造する力」を主体的に磨くことができるようになること
2. 「人間力」の向上
「信念を実践的に継続する力」を磨き、他者との差異を尊重し、協同ができるようになること

創価大学は共通科目における教育目標として「自立的学習者になること」「多文化共生力の育成」「真の教養を身につけること」を掲げている。この教育目標を具体化したものとして、以下の 8 項目のラーニングアウトカムズを明示している。

共通教育のラーニングアウトカムズ

◆ 知識基盤（学生が何を知っているべきか）
1. 人文・社会・自然科学、健康科学領域の基礎知識を理解する。
◆ 実践的能力（学生が何ができるようになるべきか）
2. 多面的かつ論理的に思考する。
3. 問題解決に必要な知識・情報を適切な手段を用いて入手し、活用する。
4. 日本語による多様な表現方法を習得し、明瞭に論じ述べる。
5. 英語と母語以外の他外国語でコミュニケーションを図る。
◆ 教養ある市民としての資質（知識と能力を用いて何を行おうとするか）
6. 学びの意味や社会的責務を考え、自らの目標を設定し、自立（律）的に学ぶ。
7. 自他の文化・伝統を理解し、その差異を尊重する。
8. 人類の幸福と平和を考え、自己の判断基準をもつ。

2.1 各種事業の申請体制について

AP 事業においては、総合学習支援オフィスと先導学部である経営学部・経営学部事務室（学事課）が主体的な立場で取り組んでいる。また、申請にあたっては、教育・学習支援センター（CETL）が具体的なフレームを準備し、ポンチ絵などの作成においては、外部業者を活用するなどの融合型の体制をとっている。

3. アクティブ・ラーニングについて

学修の空間と学修支援を提供する SPACe は、アクティブ・ラーニング（能動的な学習）の拠点にもなっており、必修の言語系科目の学修過程では WLC を利用することが組み込まれており、かつ WLC を利用するためには、物理的に SPACe（学修空間）を通らなければならない。また、自然と学生自ら学修に取り組むことを促す空間デザインがなされている。また、その他の科目全般においては、各種の課題作成（レポート、プレゼン資料作成）のためにコンピュータールームを利用しなければならないが、やはり、そのためにも SPACe 内に入らなければならない。また、初年次教育、基礎ゼミ体制を通して自ら積極的に学修する態度と SPACe の効果的な利活用について学ぶことができ、これらの仕掛けによってアクティブ・ラーニングを推進する形になっている。

授業科目におけるアクティブ・ラーニングについては、いわゆる学生授業評価アンケートの「授業時間外学修について」、「能動的な学習があったか」、「授業科目で設定している目標を達成できたか」の3項目について高い数値（5件法で4～5）を示した授業を「良質なAL科目」としており、具体的な教授法や指導法、授業形態について、いわゆるアクティブ・ラーニングといわれているものであるかは問わない方針を採っている。

アクティブ・ラーニングの教育効果については、専門知識（リテラシー）の獲得などよりも、大学生としての基礎的な力（自ら調べる、話す、書く、協同するなど）、学修に対する態度（コンピテンシー）を涵養することに主眼を置くものと捉えて、授業内だけでなく、SPACe などの授業外で行われる各種学修活動（ラーニング）が能動的（アクティブ）になるよう、授業科目に SPACe の利用を組み込むことや自然と SPACe を学生が利用できる

ようにデザインされた施設、さらに SPACe が提供する各種の「学習セミナー」や SPACe 学生スタッフが、学生の普段の学びをよりアクティブなラーニングへと促している。

教員に対するアクティブ・ラーニングの普及については、アクティブ・ラーニングをテーマにした FD を行うとともに、各教員の要請に応じて、授業のアクティブ・ラーニング化をサポートする体制をとっている。

3.1 ラーニングコモンズ SPACe について

SPACe には、プレゼンテーションのための各種ツール、インターネット用機器、書籍、メディアが用意されており、能動的な学修を行うための学修空間として設計されている。また、自主学习室（静かに自習が行えるエリア）やコンピュータールーム、語学系専用の学習室と「ワールドランゲージセンター (WLC)」などが設置されており、あらゆる学修ニーズに対応する環境が整えられている。



ライティングルーム、ディスカッションエリア



アリーナ型の多目的学修空間



ピアラーニングのためにデザインされた空間

4. 学修成果の可視化について

当大学 AP 事業では、「アセスメント科目」を設定し、学修成果達成度調査（専門教育のキャップストーン【ラーニングアウトカムズの達成度をアセスメントするための科目】）を実施することによって、学修成果の可視化、把握を行うこととしている。最終的な学修成果達成度調査は、各学部が各学部の特色や設定した DP に合わせて、具体的な調査方法を選定することとしており、全学共通の調査手法によるものは計画されていない。一方で、学修成果を測るための具体的な指標としては、共通教育で指定している 8 つのラーニングアウトカムズのうち 5 つ程度と学部が定める DP に基づくラーニングアウトカムズを加えたチェック項目が用意されており、これを活用したルーブリック評価が行われるようになってきている。このルーブリック評価や学部が定める達成度調査などを行うことで、調査率 100%を目指している。

4.1 教学 IR について

創価大学の教学 IR に関するデータの収集については、4 年計画で総合データベースを構築することが計画されている。以前から活用している e-portfolio のデータや、これまで、形式の異なる「面談シート」を統一形式にするなどして、総合データベースの構築を目指している。データベースは、教務課データ、キャリアデータ、学生課データ、入試課データ、学事課データなどを統合して構築される。また、アカデミック・アドバイジングの際に使用する「面談シート」は、教務課、学生課、ゼミ（指導教官）、総合学習支援オフィス等で行われる学生面談の面談記録として保管され、総合データベースを構築するデータとして活用される。また、e-portfolio については、これまで活用されていたいくつかのものを統合して、一括した学修ポートフォリオを構築することを目指している。各種データへのアクセスについては、厳しい制限があるものの、総合学習支援オフィス、教育・学習支援センター（CETL）のアドバイザー（教員）については、学生のメンタルに関する情報を除き、必要なデータにアクセスすることが可能になっている。

4.2 アカデミック・アドバイジングについて

こうしたデータに基づいたアカデミック・アドバイジングを進めるとともに、より深刻な学修状況の学生（卒業が危うい学生など）に対しては、学生とアカデミックア

ドバイザー（指導教官）、学生と学部長、そして、保護者を含めた三者面談を行うなど段階的な面談指導体制を敷いている。このような学生の発見と学部への通知は、総合学習支援オフィスが行っている。また、学修の他に専門的な支援（メンタル面、学習障害など）を必要とする学生には、臨床心理士と連携を取ることにしている。

総合学習支援オフィス、また、教育・学習支援センター（CETL）としては、各学部に対するFDプログラムや各教員のためのアドバイジング・スキル向上プログラムなど取組を用意しているが、それらを義務的に学部・教員に対して実施する方針から、学部・教員の求めに応じて各種のプログラムを提供する方向性に転換している。



ラーニングコモンズ SPACe にて

4.3 「就業力」と PROG の対応について

創価大学では、PROG テストを「就業力測定テスト」と呼んで実施されている。「就業力測定テスト」は、1年次後期に全学で実施されている。創価大学では、まず、創価大学における「就業力」を制定し、次に、リアセックにその「就業力」の内容を伝え、「就業力」と PROG が示す、リテラシーとコンピテンシーに対応させている。学生が受け取る結果は、あくまでも「就業力」の数値である。これは、リアセックが PROG の結果を「就業力」として出力するようカスタマイズしている。これまで、3回実施されており、実施率は2012年度＝96%、2013年度＝95%となっている。2014年度に関しては、現在実施中である。また、キャリアセンターで活動する、企業からすでに内定を得ている4年生のピアサポーター（CSS、RSS）も「就業力テスト」を受けている（100名程度）。1年生と4年生（ピアサポーター）の結果については比較分析などを行ってはいないものの、4年生の結果は1年生に比べて、いずれの項目においても高い値を出していることがわかっている。

4.4 「就業力測定テスト」（PROG）を活用したキャリア支援（アドバイジング）について

「就業力測定テスト」の結果は、創価大学が独自に作成した「就業力強化書」と「MYMAP」を用いてキャリア支援（アドバイジング）に活かしている。「MYMAP」は、「就業力測定テスト」の結果を受けて、各学生が自身の学修・学生生活について考え、「就業力測定テスト」の結果をもとに伸ばすべき力について、ワークシート（MYMAP）を用いて具体的な目標や計画を立てる取組である。各学部において「MYMAP」を作成

するワークショップの時間が設けられており、キャリアセンターの担当者がそれらワークショップを運営している。学部ごとの特色として、経済学部では、MYMAP の提出、面談がゼミ選考を行う際に活用されている。また、法学部では、専門科目（必修）の中に MYMAP 作成ワークショップ、解説・活用の回が組み込まれている。



キャリアセンターにて

5. 学生参加について

5.1 キャリア支援

創価大学キャリアセンターには、CSS（キャリア・サポート・スタッフ）と RSS（リクルート・サポート・スタッフ）というボランティアのピアサポーターが学生のキャリアサポートに従事している。本年度で 11 年目となる取り組みで、毎年約 50 名の CSS と 100 名の RSS で構成されている。CSS は 1～4 年生のキャリア全般について、RSS は 3 年生の就職活動についてサポートをする。CSS と RSS は、その活動期間内は常にトレーニング（コーチングなど）を受けており、サポート活動の質の向上が図られている。また、キャリアデザイン基礎、キャリアビジョン I などのキャリア系科目においても主要な役割を担っており、約 300 名が受講するキャリアデザイン基礎では、受講者全員との面談を 2 回行っている。また、1、2 年生を対象に毎年行われているキャリアイベント（500 名以上が参加）の企画・運営を担っている。

5.2 学修支援

キャリアに関するピアサポート（CSS、RSS）の他に、学修に関するピアサポートがある。ラーニングコモンズ SPACe では、ピアサポーター（学部生については 2 年生以上）として 30 名の学部生ボランティア、15 名の学部生アルバイト、そして 12 名の院生アルバイトが活動している。ピアサポーターは、1 週間の研修を受けることが義務付けられており、内容は、ラーニングコモンズの機能などについて、ピア・アドバイジング、コーチングなどの講義と実践を行っている。学部生アルバイトのピアサポーターは、履修相談の理論や徹底したロールプレイを通して、より高度な学修に関するアドバイスが可能になるようトレーニングを受けており、さらに院生アルバイトに関しては、アカデミックライティングとコーチングの技法を複合的に活用して、単なる文章指導にとどまらないアドバイスを展開できるようにトレーニングを受けている。SPACe で活動する学部生ピアサポーター（ボランティア）は、全学的なトレーニング（学期

中3回)と学部ごとのトレーニングを受けることで今後展開される学部SAとしても活動できるようになっている。創価大学AP事業では、ピアサポートの経験とトレーニングを積んだ学部上級生をシニアSAとして展開することを進めている。

6. その他

創価大学では、AP事業を進めるにあたり、アクティブ・ラーニングやPBL(課題解決型学習)をさらに推進し、学生参画型の教育を展開するために仮称サービ斯拉ーニングセンターの設置を進めている。

サービ斯拉ーニングとは、「教育活動の一環として、一定の期間、地域のニーズ等を踏まえた社会奉仕活動を体験することによって、それまで知識として学んできたことを実際のサービス体験に活かし、また実際のサービス体験から自分の学問的取組や進路について新たな視野を得る教育プログラム」である。「サービ斯拉ーニングの導入は、①専門教育を通して獲得した専門的な知識・技能の現実社会で実際に活用できる知識・技能への変化、②将来の職業について考える機会の付与、③自らの社会的役割を意識することによる、市民として必要な資質・能力の向上、などの効果が期待できる」(中教審2012答申)。

6.1 所感

まず、2013年にオープンした「中央教育棟 GLOBAL SQUARE」の規模や設備に圧倒されつつも、最新の設備とそれらを最大限活用しようと尽力する学生・教員・職員の姿が非常に印象的であった。近年、大学教育において「学生参加(参画)」という概念がにわかに関心を浴びはじめている。創価大学における学生参加(参画)は、キャリア支援、学修支援の双方でピアサポートが量的にも質的にも充実しており、教員、職員だけでは成し得ない支援を可能にしている。これは、非常に強力な先輩・後輩関係(人間関係)によって、ボランティアながら(一部アルバイト含む)ピアサポーターの組織と活動を継続的かつ効果的なものにしており、注目すべき事例だと考えられる。

VIII. 各種セミナー等参加報告

1. 大阪大学 教育学習支援センター 国際シンポジウム

『大学カリキュラム改革の最前線—新しい時代に求められる能力と教養教育—』

日 時	：	平成 26 年 11 月 15 日（土）10：00～16：30
場 所	：	大阪大学 豊中キャンパス 基礎工学研究科 シグマホール
主 催	：	大阪大学 教育学習支援センター
共 催	：	大阪大学 全学教育推進機構
協 賛	：	関西地区 FD 連絡協議会
概 要	10：00	開会挨拶
	10：05～10：10	趣旨説明と講演者紹介
	10：10～11：00	基調講演
	11：00～11：50	事例講演 1
	11：50～12：50	昼食休憩
	12：50～13：40	事例講演 2
	13：40～14：15	事例講演 3
	14：15～14：35	ティータイムセッション
	14：35～14：50	基調講演と事例講演の解説
	14：50～15：00	大阪大学における共通教育
	15：00～16：25	パネルディスカッション
	16：25～16：30	閉会の挨拶

1. はじめに

平成 26 年 11 月 15 日（土）に大阪大学（豊中キャンパス）にて、国際シンポジウム「大学カリキュラムの最前線—新しい時代に求められる能力と教養教育—」が開催された。本シンポジウムにおける大きな問いは、次の 2 点である。

- 新しい時代に生きる大学に求められる能力とはどのようなものか？
- 教養教育においてそれらをどのように育成したらよいか？

さらに、この問いに付随した次の問いについて、講演とパネルディスカッションが行われた。

- 国内外で注目される教養教育カリキュラムの内容とは？
- それはどのような教育方法で教えられているのか？
- それはどのような組織で運営されているのか？
- 各大学ではどのように教養教育のカリキュラム改革をしていけばよいか？
- 教養教育と専門教育をどのように有機的につないでいけばよいか？

こうした問いに対して、登壇者からは示唆に富む講演がなされた。まず、基調講演では、「新しい時代」を今日的状況における知識の有りようや、捉え方、また、知識そのものの

変化に着目した切り口で俯瞰された。また、こうした「新しい時代」における教育のあり方について言及された。

事例講演1では、学生が Co-Creator として教育環境を創るというフィンランド アールト大学の先進的な事例について講演があった。事例講演2では、米国内でも先進的かつ最も成功したと言われているカリキュラム改革が実施された、ポートランド州立大学の事例について紹介された。最後に、事例講演3では、我が国の教養教育の変遷を踏まえて、教養教育改革のこれからについて京都大学の事例が報告された。

2. 基調講演の概要

英国 Durham University の Ray Land 教授より、「未踏の地への挑戦—不確実性の高い世界に学生をどういざなうのか—」と題して基調講演があった。

本講演では、Uncertainty・不確実性がキーワードになっている。Land 教授によれば、現代は、不確実性の時代であり、高等教育もそうした時代背景に適応して、こうした不確実性の世界に学生たちを送り込まなければならない。現代的状況の特徴、つまり不確実性の時代のそれは、Speed (速度)、Complexity (複雑性)、

Digital Age	Analog Age
• Process	• Artefact
• Fragmentation	• cohesion
• Exploration	• Exposition
• Visual	• Textual
• Volatility	• Stability
• Fast Time	• Slow Time
• Consensus	• Authority
• Openness	• Containment

そして、Risk (危険性)である。現代は、これまでに【出所】当日配布資料より作成
ないほど、あらゆるもの(ヒト、モノ、カネ、情報・知識など)が、ほとんどリアルタイムの速さで動いている時代である。こうした時代においては、Knowledge (知識)も、とてつもない Speed で世界中に広がり、そして、今日の最先端は、明日には、すでに古めかしいものになるという現象が起きている。Learning (学び)や高等教育も、こうした Speed に応じて、進取と革新を不断に行っていく必要がある。「新しい時代」にふさわしい、新しい思考、新しい行動によって新しい存在へと変化していかなければならない、そうした時代が、本シンポジウムのテーマにある「新しい時代」である。

3. 事例講演1の概要

フィンランド Aalto University の Martti Raevaara 副学長より、「教授・学習・教育の再考—フィンランド アールト大学の事例—」と題して事例講演があった。

アールト大学は、旧ヘルシンキ芸術デザイン大学、旧ヘルシンキ商科大学、旧ヘルシンキ工科大学の三つの大学が2010年に合併してできた新しい大学である。アールト大学を創立するにあたり、重要視したのが、「どのような未来を学生たちと創りたいのか?」、「私たちは何が得意なのか?」、「私たちは何のためになるのか?」という点である。つまり、未来を考えて大学をつくる、未来に向けたカリキュラムを創るということである。

以下が、アールト大学の教育を変革している要素である。

Student as co-creators	<ul style="list-style-type: none"> ● Increasingly project based courses with real-life cases from the industry. ● Students as co-creators lead to new openings, increased motivation and self-confidence.
Crossing borders	<ul style="list-style-type: none"> ● Risk taking and diversity as resource ● Multidisciplinary Master programs (IDBM, CS), Aalto mobility courses between disciplines, Factories, Aaltonaut program. ● International links and collaboration.
Alignment of studies and gaining work experience	<ul style="list-style-type: none"> ● Comprehensive set of transferable skills for working life. ● Integrating summer internships and external projects to the studies. ● Systematic coordination of thesis projects.
Entrepreneur-ship	<ul style="list-style-type: none"> ● Startup Sauna, Aalto Ventures Program, Aalto Center for Entrepreneur-ship in collaboration with Stanford University. ● Entrepreneurial culture, mindset and skills. ● Business acceleration. ● Ecosystem creation.

【出所】 当日配布資料より作成

こうした要素に加えて、副専攻として設置されている Aaltonaut¹や Aalto Ventures Program²などのグッド・プラクティスの変化をさらに促進している。こうしたカリキュラムに共通するのは、Learning by Doing、つまり現実の世界で実際に行う、実施することによる学びという特徴がある。

アールト大学の学生は、教育サービスを受ける顧客ではなく、大学というラーニング・コミュニティの Co-Creator（共創者）である。また、Startup Sauna という学生たちが起業をする取り組みは、現在では大きなビジネスになっており、学内の学習環境も、建築系の学生のみならず、多くの学生が学際チームを立ち上げて、学習室（Learning Space）を設計・建築し、その後のメンテナンスも行っている。

また、現代的状況における大学教育と学生について、現代の学生は、デジタル文化に生まれ、生まれながらデジタルあるいはゲームに慣れ親しんでいることを前提として考える必要性について述べられた。さらに、こうした世代の学生は、ソーシャルメディアを使って協同的な知識の共有や構築が非常に得意であり、キーワードは、Play、Joy、Passion、Mashup であり、学生たちが慣れている Informal Learning と大学が提供する Formal Learning をどのように協調的な運用していくかが課題であることが報告された。この課題に取り組むにあたって、これからの教育者（教員）の役目は、Sense-making と Coaching であることが述べられた。

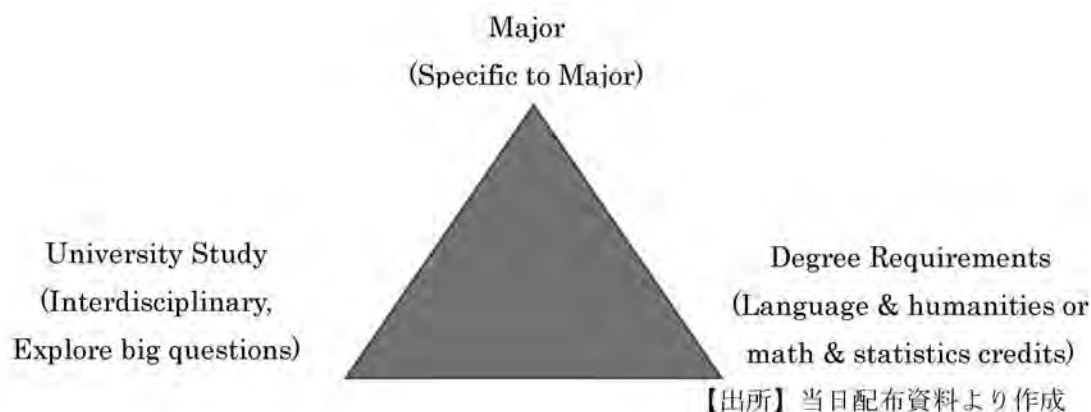
¹ Aaltonaut は、Problem-Based learning（PBL）に基づいたコース設計と、学際（学部、専門間）チームで取り組む副専攻課程である。このコースでは、商品開発と起業家精神、学際性、コミュニケーション・スキル、チームワークそして、国際的なコンピテンスを涵養することを目的としている。

² Aalto Ventures Program は、ベンチャー・プログラムの名の通り、新しい事業を創出するための能力や手法、ネットワークなどを提供している。

4. 事例講演2の概要

米国 Portland State University の Yves Labissier 准教授より、「都市型大学における、学生の学習を支援する共通教育カリキュラムの改革—米国ポートランド州立大学の事例—」と題して事例講演があった。

ポートランド州立大学では、教育のあり方を専攻科目（専門教育）、必修科目（言語、人文学、数学と統計学）そして、同大学の特徴である「大学科目（学際的学問、より大きな問題の探求）」の三つの面に基づき構築している。この基本教育構造によって、全学のカリキュラムを設定している。



大学科目では、学年ごとに Student Experience 向上のための細かな体制が敷かれている。例えば、初年次では、一クラス35人程度で学部の垣根を越えたチームが作られている。また、ほとんどの場合 E-Portfolios（電子ポートフォリオ）が活用されている。さらに、二年次では、院生のメンター（ピアサポーターの類）による指導があるなどサポート体制も充実している。

電子ポートフォリオは、学生個人、コース、プログラム、そして教育機関の評価について非常に強力であり、また、学生の学びに対しても大変に有効である。特に、電子ポートフォリオを活用した学習の振り返りは、個々の学生が目標を達成することに貢献していることが報告された。

5. 事例講演3の概要

京都大学 国際高等教育院の喜多一副院長より、「京都大学における教養・共通教育改革」と題して事例講演があった。

本報告の概要は、次の通りである。

- 日本の大学の構造的課題としての教養教育
- 京都大学 国際高等教育院の設立
- 新しい教養教育カリキュラムの検討
- 英語教育と教育の国際化
- 学内組織との協力と教育環境整備
- 今後の展望

特に注目すべきは、全学共通教育の企画、調整及び実施等を一元的に所掌する全学責任組織として2013年に発足した国際高等教育院である。2016年度には、現行カリキュラムの見直しや時間割の再編が計画されている。また、総合科学系科目の新設が検討されており、内容としては、環境・エネルギー、生命と社会、人口動態と社会などの現代社会が直面する課題について、多角的に考察する科目である。また、「英語を学ぶ」から「英語で学ぶ」への転換による国際化の促進や、初年次教育を充実させる試み、教育環境の整備について報告があった。最後に、デジタル教材や ICT 活用など新技術による学習環境の変化に対する期待について展望が述べられた。

6. 考察

本シンポジウムのテーマにもなっている「新しい時代」は、社会全体に影響を及ぼしており、大学（大学教育）も例外なくその影響を受けている。すなわち、「新しい時代」に応じて、これからの大学をつくっていかねばならない（あるいはカリキュラム改革を進めなければならない）との点においては一定の説得力があると考えられる。

新しい大学教育において、特筆すべき点は、英国、フィンランド、米国のいずれの場合においても学生を、Co-inquire、あるいは Co-creator といった、ラーニング・コミュニティにおける「協働者」として捉えた教育改革、カリキュラム改革を行っていることである。我が国の高等教育機関においては、ティーチングからラーニングへ、教員中心から学生中心へのパラダイムシフトが注目されており、学生に焦点が当たりはじめているが、学生をどのように捉えるのか、あるいは捉え直すのかといった議論は出ていないように感じる。

今後、日本の大学教育改革・改善においても、学生を「協働」の「何者」であるのかという学生観の再構築が必要になるであろうし、そうすることによって教育観が変わり、大学教育の改革・改善がさらに加速・促進されるのではないだろうか。



2. 大学コンソーシアム関門 学生交流事業

『関門サミット in 共立』テーマ：「今、できることから持続への課題～」

日 時	：	平成 26 年 11 月 29 日（土）13：00～17：00
場 所	：	九州共立大学 深耕館 1 階 S132 教室
主 催	：	大学コンソーシアム関門
概 要	13：00～13：15	オープニング
	13：15～14：05	各大学紹介プレゼンテーション
	14：20～16：00	しゃべり場
	16：10～16：45	発表
	16：45～17：00	エンディング

1. はじめに

平成 26 年 11 月 29 日（月）に九州共立大学にて、学生交流事業「関門サミット in 共立」が開催された。テーマは、「今、できること～持続への課題～」である。大学コンソーシアム関門の 6 大学と山口大学の合計 7 大学から、学生 43 名、教職員 12 名の合計 55 名が参加した。本学からは、教員 2 名、学生 4 名が参加した。当日のタイムスケジュールは上記の通りである。

2. 大学紹介

大学紹介では、各大学の学生が登壇し、大学紹介とそれぞれの組織（いわゆる学生 FD¹組織など）の活動について紹介があった。

九州共立大学、西日本工業大学、北九州市立大学では、いわゆる伝統的な学生組織である自治会・学友会系の団体がよりよい大学づくりのために各種の取り組みに力を注いでいる。本サミットに参加した西日本工業大学の学友会総務会委員長は第 47 代、九州共立大学の学友会総務委員会は第 51 代となっており、非常に歴史のある学生組織であるといえる。そうした、伝統的な学生組織の主な取り組みは、学生大会（学生の意見を吸い上げて、大学側に反映させることを目的とする）や組織の財務状況の報告会、地域への貢献運動（防犯パトロールなど）、さらに新入生へのオリエンテーションなどである。

下関市立大学、梅光学院大学、そして本学では、「学生 FD」委員会・スタッフ型の組織であり、その活動内容は、主に教育（授業内容）に関するものである。下関市立大学では、単位認定はないものの学生が提案し、構成した講義（自主講義、講座）が開講されている。これらの大学に共通するのは、大学の FD 委員会や大学教育センターなどの学生部組織であるという点である。

九州国際大学の大学紹介では、UNGL（大学間連携協働教育推進事業）が提供する教育プログラムが紹介された。UNGL では、教職員と学生が協働で教育プログラムを開発しており、九州国際大学では、災害を想定したプログラムを開発、提供している。

¹ 「学生 FD」とは、学生とともに進める FD、学生参画型 FD と言われている活動。



3. しゃべり場

「しゃべり場」とは、教員・職員・学生が立場を超えて、また、胸襟を開いて率直な意見を交換し合う場である。本サミットのしゃべり場のテーマは、「学生 FD 委員会が大学に与えるメリット・デメリット、その後の展望」である。まず、各大学で大学に貢献していると考えられる学生組織について、いくつかの組織・団体をしゃべり場のメンバー間で共有した。その後、メンバーが所属している組織・団体が大学に対して与えているメリット・デメリットについて意見交換がされた。

筆者が参加した、しゃべり場グループでは、筆者以外、全員学生であったためか、学生が教育改善や授業内容に関する提案をすることに対して「デメリットがあるとは考えられない」という意見がほとんどであった。

興味深い学生の意見として次のような意見があった。ある大学の学生組織が取りまとめた、授業や教育に対する学生の不満や改善点によれば、リフレクションシート（いわゆる振り返りシート、ミニッツペーパーの類と思われる）を成績評価に加えてほしくないという学生の意見が大きく、その声を大学側に伝えたことがあるという意見であった。近年、能動的学習やそうした学習を通じた、深い学び（ディープ・ラーニング）が注目されており、そのなかで「振り返り」は重要な要素として挙げられている。しかし、学生（学習者）の目線（実体験）から導き出されるのは、振り返りによる、深い学びではなく、成績評価にまつわる不満感であったことは傾聴に値する意見であると感じた。

4. 考察

いわゆる「学生 FD」系のサミット（行事）では、国内最大級の規模となるのは、2009年に立命館大学からはじまった「学生 FD サミット²」であると考えられる。大規模かつ、多方面からの参加があるため、密度の濃い情報交換の機会を得ることが難しいが、コンソーシアム型のサミットであれば、情報交換だけで終わるのではなく、その後の大学間連携につながる可能性も前者に比べて大きいと感じた。閉門地域の「学生 FD」は伝統的な学生組織が担っている場合の他、近年の「学生 FD」活動の流れからの組織もあり、それらの相互作用も期待できると感じられるサミットであった。

今回のサミットで得られたものを今後は学生と共に本学に還元していきたいと考える。学生たちには「自分たちもやってみよう！」という強い気持ちが芽生えており、それをより有意義な方向に伸ばしていきたい。

² 50大学、450名を超える参加がある。

3. 広島大学 高等教育研究開発センター シンポジウム 『大学と学生』（第1回）

日 時	：	平成26年12月6日（土）13：00～17：30
場 所	：	広島大学 東広島キャンパス 高等教育研究開発センター授業研究開発室
主 催	：	広島大学 高等教育研究開発センター
概 要	13：00～13：10	開会行事
	13：10～14：50	講演
	14：50～15：05	休憩
	15：05～16：05	学生による事例報告
	16：05～16：20	コメント
	16：20～17：20	討論
	17：20～17：30	閉会行事

1. はじめに

本シンポジウムは、21世紀の高等教育における学生の在り方や大学と学生の関係等について検討することを目的としている。今回のシンポジウムでは、大学の諸活動への学生参加を主題に取り上げており、学生参加に関する研究者や実際に大学運営等に参加している学生が講演・事例報告をした。学生参加の現状や課題、今後の方向性が議論された。

2. 講演1

講演1は、帝京大学総合教育センターの井上義和 准教授より、「参加の時代から参加型の時代へ—大学と学生の変容—」と題して講演があった。我が国の歴史、社会、文化の変化に伴い、学生参加は、“参加”から“参加型”へと変遷しているという知見について説明があった。1960年代末からのスチューデントパワーの時代においては、学生たちは、学生の“自治”を守ること、学生だけの空間を維持することが主目的であり、当時の学生にとって大学運営に意見や提案をすることは興味・関心の範疇にはなかった。こうした時代背景の中で語られた「学生参加」は、もっぱら大学の自治や管理運営への“参加”をどの程度許すのかという管理者としての論理であった。

1990年代末から2000年代にかけては「学生参加型の時代」であり、これは、教育改善の文脈で語られていることが説明された。学生参加型とは、例えば、今注目されているアクティブラーニングなどの講義型の授業と比して、より積極的に学生を授業に参加させようとする各種の教授法などや授業改善の一環として学生に対して行われている、授業評価アンケートなどである。

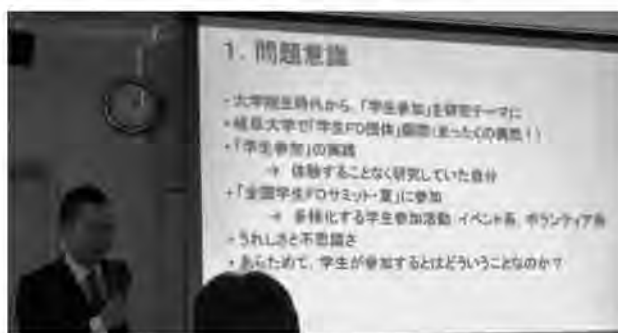
また、学生・教師・大学・社会の四者問題として、「他者をどう制御するか」という問題は、12世紀、中世イタリアのボローニャで起こった、大学の起源とされる学生組合（ユニベルシタス）と教師組合（アカデミア）の時代からの永遠の課題であることが指摘された。

3. 講演2

講演2は、岐阜大学教育推進・学生支援機構、地域協学センター（兼任）の廣内大輔 准

教授より、「学生が参加するとはどういうことか?」と題して講演があった。本公演の主な論点は、「学生とはなにものか」と「参加とはどういうことか」の2点である。

学生と大学の関係は、我が国においては法的な定めがあるわけではなく、学生の地位や権利は明確になってはいない。同時に、我が国の“学生”の特徴は、諸外国と比べると平均年齢が非常に若く、その構成も成年と未成年が半々になっており、こういった点も参加を考える上で論点となっている。



学生参加を議論するうえで、さらに論点となるのが、学生が参加をするレベルの問題であり、そのレベルは、大学のガバナンスレベルとマネジメントレベルがある。法的な枠内の可能性だけを論じれば、法律上、学生を学長、副学長などに任じてはならないという記述がない点から、ガバナンスレベルへの参加が検討できる可能性が考えられるが、いずれも議論が進んではいないことが説明された。最後に、今後の学生参加の方向性として、大学コンサル会社のようなかたちの学内ベンチャーの起業や法制度化など幅の広い可能性や方向性を見据えることも可能であることが示された。

4. 事例報告 1

事例報告 1 では、筑波大学 全学学類・専門学群代表者会議の長城沙樹 議長（同大学情報学群情報科学類 3 年）より、筑波大学での取り組みが報告された。筑波大学では、学長決定により、各クラスにクラス会議を置き、各クラスの代表で構成されるクラス代表者会議とさらにその上位の会議体として全学規模の全学学類・専門学群代表者会議（全代会）が設置されている。

クラス代表者は、教育（授業内容）に関する事項に限らず、大学の設備や諸制度についても大学側に提案、要望を出しており、全代会では、6 つの委員会（「総務委員会」「学内行事委員会」「教育環境委員会」「生活環境委員会」「調査委員会」「広報委員会」）を置いて、学生の総意を大学に反映される仕組みができています。

しかしながら、現状の問題点として、クラス会議やクラス代表者会議が機能していない部分もあり、学生の総意を形成しているとは言い難い面があり、全代会においても組織の形骸化を感じざるを得ない点があるということが説明された。今後は、形骸化の問題の解決、よりよく学生の声を大学側に伝えられる方法などについて取り組んでいくことが報告された。



5. 事例報告 2

事例報告 2 では、名古屋大学 PECS（理学部物理学科学生教育委員会）の居石直久さん（同大学理学部物理学科 3 年）より、名古屋大学理学部物理学科の取り組みである PECS の活動について報告があった。PECS は、理学部教育委員会の下部組織であり、物理学科

教育委員会と同等の組織として同大学に設置されている。学生教育委員会の代表者は、物理学科教育委員会においても議決権をもち、学科の意思決定を担っている。現在の PECS の構成は、大学院生 8 名と学部生 14 名となっている。PECS の活動は、教育分野に特化したものであり、その活動例は次の通りである。

- 教育委員会による討議
- 授業アンケートの実施
- Café Quante の運営
- 4 年生研究室配属の担当
- 理学部図書館開館時間の延長
- 新歓企画“サイエンスカフェ”の運営
- FD サミットの参加
- 学生主催の講義・セミナー

こうした、取り組みが円滑に機能しているのは、物理学科の教員と学生の人間関係が、他にはない特徴的な文化を形成していることが背景になっている。物理学科においては、学生は、教員を「先生」と呼ばず、〇〇さんという言い方で呼んでおり、教員側も学生に対して、授業を受けに来た子どもと捉えておらず、対等なコミュニティーの一員として学科に迎えている。この特徴的な組織文化と物理学科内のみという限定された活動範囲などが相互に影響しあうことによって学生と教員の学びのコミュニティーが形成されている。

6. 事例報告 3

事例報告 3 では、岡山大学 学生・教職員教育改善専門委員会（通称：SweetFood）の後藤千尋さん（同大学薬学部 3 年）より、岡山大学の教職学協働の組織である SweetFood の活動について報告があった。

岡山大学における FD の考え方は、「知的共同体の構成員全体が、しっかり関わらなければ教育改善の実効性が上がらない」（当日配布資料より引用）というものであり、SweetFood の構成にもその考え方が反映されていることがわかる。SweetFood は、学生 45 名、教員 15 名、職員 1 名で組織されおり、大学を構成する教職学のいずれもが委員として活動している。SweetFood は、同大学の教育開発センターに置かれている FD 部門の委員会であり、大学の正式な組織である。委員長は、学生委員の互選で選出され、教員が副委員長として、委員長（学生）をサポートすることになっている。具体的な活動は、3 つのワーキンググループ（WG）によって行われており、それぞれの活動内容は次の通りである。

ワーキンググループ	内容
学生交流 WG	<ul style="list-style-type: none"> ● 毎年 1 回行われる学生 FD の普及・促進を目的とした、学生 FD フォーラム「i*See」の企画・運営。 ● 新入生のための履修相談会の開催。
システム改善 WG	<ul style="list-style-type: none"> ● 学習環境（校舎、設備関連）や修学上の制度等の改善に関する活動。 ● FD 研修会での話題提供など。
授業改善 WG	<ul style="list-style-type: none"> ● 学生発案型授業の創作。 ● 授業評価アンケートに関する調査・改善。

（当日配布資料より作成）

全国の各大学と比較して、特に特徴的といえる SweeTFooD の活動は、学生発案型授業の創作である。この授業は、単位認定もされるものであり、現在は、3 つの授業が開講されている。この SweeTFooD は、“学生の声”を迅速に伝える場としては、十分に機能しているが、現状では、大学が進める各種の事業を共に進める担い手とはなっていないが、それらの事業の実施前段階での意見交換や意思決定へ参加する機会は少ないことが説明された。

7. 事例報告 4

最後の事例報告 4 は、北海道医療大学 学生キャンパス副学長（SCP）の清水綾さん（同大学歯学部 5 年）より、北海道医療大学の特徴的な制度である SCP について報告があった。

本制度は、2008 年より開始され、「学生と教員が一緒により良い大学づくりを目指して各種プロジェクトの企画立案・実施を行う取り組み」（当日配布資料より引用）である。SCP は、各学部から 1 名選出され、大学より SCP の証であるブレザー、専用の居室（活動室）そして、活動費として 30 万円が支給される。2008 年から 2014 年までの主な活動は、次の表の通りである。

本制度の特徴は、学生が活動資金を支給され、その予算の範囲内で、かなり自由度の高い活動が可能になっていることである。SCP は、各プロジェクトを運営するために必要な人員（学生）を独自に募集し、必要な予算を活動費から捻出している。薬物乱用防止キャンペーンでは、札幌薬剤師会が主催するキャンペーンへ参加し、FM 局 CM での呼びかけや、小中学校での講演などを行っており、ひとつのプロジェクトを進めていく上でも幅広い活躍を見ることができる。他にも、学生間、大学間交流とより良い学生生活の実現を目指した、カンファレンスを開催するなどしており、SCP の活動の範囲は、学内外、また大学教育分野に限定されないものであることが報告された。



プロジェクト

食堂改善	メニューの改善、内装等の変更、フェアの実施、業者折衝。
ブランド商品の開発	本学薬草園の生薬を用いた化粧品の開発。
HP の開設	学生自ら構築、情報発信・受信として活用。
薬物乱用防止啓発	学生意識調査の実施、啓発、施策提案、薬物乱用防止キャンペーンへの参加
地域交流	当別阿蘇雪祭りの企画・参加、当別町役場との交流

学内行事への参加など

オープンキャンパス	参加者案内、懇談。
学内委員会	構成員、またはアドバイザーとして参加。
各種取材等	新聞等の取材、外部研修会での講演。

（当日配布資料より引用）

8. コメント・全体討論

まず、山口大学大学教育機構大学教育センター林透 准教授より、講演と事例報告についてコメントがあった。「学生参加」という現象をよりの確に捉え、かつ理論的に整理するためには、さらなる議論と研究の蓄積が必要であるという主旨のコメントがあり、各事例報告に対しても、それぞれの活動における長所・短所別にコメントがあった。最後に、全体討論に向けた問題提起がなされた。

全体討論では、まず、講演者と事例報告をした学生に対する質問からはじまり、活発な討論がなされた。学生参加を実践している学生からは、活動の実態について飾りのない応答がなされ、制度や事業のうえでの学生参加と現実に“参加している”学生の肌感覚とは、やはりそれなりのギャップがあることについて議論がなされた。また、全体討論では、参加の概念についても議論がなされた。学生が参加するという場合、参加の度合い、その仕組みなどによっては、意識的に「参加」の概念を明確にするべきであることなどについてフロアでの討論があった。本シンポジウムに参加した学生（事例報告者以外の学生）からの発言が、比較的少なかったようであったが、学生と教員（研究者）が「学生参加」について議論する場としては、充実した全体討論であったと言える。



9. 考察

本シンポジウムは、「大学と学生」をテーマに、講演と事例報告がなされた。また、今回の主たる論点は、「学生参加」についてであった。我が国においては、「学生参加」あるいは、大学に学生が参加する、学生が大学に意見する等の各種の活動は、学生運動、スチューデントパワーの文脈で語られること場合がある。しかし、本シンポジウムで取り上げている「学生参加」は、学生が大学教育に対していかに関わっていくのか、大学に対していかに貢献していくのかという文脈での議論であった。これは、現代的な大学改革の流れ、つまり、ティーチング（教える）からラーニング（学び）への大学教育の質的転換が注目されるなかで、より学生の立場を意識した大学教育（大学）の確立を目指そうとする機運が全国的に高まりつつあることを意味しているのではないかと感じた。今後の「学生参加」のあり方として、諸外国のように、学生を本格的な評価者と定めて、大学教育の質保証を担い合うことができるのか、または、学生を建設的なパートナーとして、あるいは大学というラーニングコミュニティにおける協働の探求者・クリエイターとして学生を捉え切る事ができるのか、そうした議論も今後はなされていくのではないかと考える。

4. 新潟大学 教育学生支援機構 大学教育改革フォーラム

『学位プログラムの展開と学修成果の質保証強化

—新潟大学学士力アセスメントシステム (NBAS) の導入—

日 時	：	平成 26 年 12 月 8 日 (月) 13 : 30 ~ 17 : 00
場 所	：	新潟大学附属図書館ライブラリーホール
主 催	：	新潟大学 教育・学生支援機構
概 要	13 : 30 ~	開会挨拶
	第一部	
	13 : 40 ~ 14 : 10	基調講演
	14 : 10 ~ 15 : 00	成果報告
	15 : 00 ~ 15 : 15	休憩
	第二部	
	15 : 15 ~ 17 : 00	パネルディスカッション
	17 : 00 ~	閉会挨拶

1. はじめに

平成 26 年 12 月 (日) に新潟大学にて、大学教育改革フォーラム「学位プログラムの展開と学修成果の質保証強化—新潟大学学士力アセスメントシステム (NBAS) の導入—」が開催された。本シンポジウムでは、到達目標達成型の教育プログラムによる学士課程教育の実質化に取り組んでいる新潟大学の成果報告が行われた。

2. 第一部

【基調講演】

文部科学省高等教育局国立大学法人支援課 吉田光成企画官より、「国立大学改革における学習成果の質保証と学位プログラム」と題して基調講演があった。本基調講演では、これまでの国立大学改革としての学士課程教育の質的転換の取り組み状況について講演があり、これからの国立大学改革として国立大学改革における教育改革の取り組みと今後の課題について講演があった。大学改革のこれまでの主な動きとして、平成 23 年度に設置された大学改革タスクフォース、平成 24 年度の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」答申や平成 25 年度の国立大学改革プランなどについて確認された。こうした、改革の中で、組織的な教育の実施や学位プログラム中心の授業科目の編成などに取り組む大学を学士課程教育の質的転換への方策として示し、予測困難な時代において高等教育段階で培うことが求められている「学士力」の重要性について言及された。

今後の国立大学改革における教育改革の取り組みにおける重要な観点は、次の通りである。

- 強み・特色の重点化
- グローバル化
- イノベーションの創出
- 人材養成機能の強化

さらに自主的・自立的な改善・発展を促す仕組みの構築として次の事項が挙げられた。

1. 社会の変化に対応できる教育研究組織づくり
2. 国際水準の教育研究の展開、積極的な留学生支援
3. 大学発ベンチャー支援、理工系人材の戦略的育成
4. 人事・給与システムの弾力化
5. ガバナンス機能の強化

さらに今後の大学院教育の在り方に関する論点として、「学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）」「教育課程編成方針（カリキュラム・ポリシー）」「入学者受入れ方針（アドミッション・ポリシー）」の設定・公表とコースワークから研究指導へ有機的につながる体系的な大学院教育の確立について講演があった。

【成果報告 1】

成果報告 1 では、新潟大学 大浦容子理事（教育担当）より、「新潟大学における教育改革と新潟大学学士アセスメントシステム」と題して成果報告があった。報告の内容は、大学教育の動向と新潟大学の教育に関する基本方針、これまでの教育改革の流れ、最後に、教育改革における「NBAS」の役割と期待である。まず、「教育者中心」から「学習者中心」へ、同じく「学部教育」から「学士課程教育」への大学教育のパラダイムシフトについての言及があった。

新潟大学の理念として、自律と創生（自立的学修者の育成）があり、この理念に基づいた、学位プログラム化が行われていることが報告された。これは、伝統的学問体系から人材育成を基盤とした教育への転換であり、“到達目標達成型”の“主専攻プログラム中”への転換である。平成 18 年以降には主専攻プログラム化が進み、平成 22 年から新潟大学学士力アセスメントシステム（NBAS）が開発され現在に至っている。

最後に、主専攻プログラム化の課題として、カリキュラムマップの実質化とディプロマポリシーの再定義が挙げられ、NBAS 導入によってこれらの課題を乗り越えていくことが期待されていることが報告された。

【成果報告 2】

成果報告 2 では、新潟大学 教育・学生支援機構 後藤康志 准教授より、「新潟大学学士力アセスメントシステム（NBAS）について」と題して成果報告があった。本報告は、NBAS の概要について述べられたあと、NBAS 開発の全学的取り組みについて報告された。NBAS は自律的学習の支援を促すため、学習者が教育プログラムの理解し、学習デザインを行えるように設計されている。NBAS によって学修成果が可視化されている。可視化された学修成果の了解性は、成績の良い学生は特徴的に高い到達度を示すなど教員が受ける印象と概ね一致し、学習（学修）の過程も可視化されることで、解説することも可能である。また、専門分野の特徴が現れることもわかっている。今



後の課題として、教育実践から学修成果の可視化を通して、リフレクションと次期学修デザインを構築し、さらに教育実践を行うという継続的な議論の積み重ねによる質保証が挙げられた。

【成果報告3】

成果報告3では、新潟大学 自然科学系 [農学部担当] 村上拓彦 准教授より、「新潟大学学士力アセスメント導入の実際」と題して、成果報告があった。本報告では、生産環境化学科がめざすものを前提として、NBAS の検討と NBAS 運用の成果と課題について報告があった。生産環境科学科は、JABEE 認定の取り組みからの積み重ねを踏まえて、2010年11月より、カリキュラムマップの重み付け作業が行われ、2013年4月より NBAS が開始された。NBAS では、4領域の到達目標が設定されており、それら4領域と JABEE 学習・教育目標の対応がなされている。また、併せてコースのカリキュラムマップがつけられている。学修成果の可視化は、レーダーチャートやバークラフなどで示されており、教員からのコメントが記載される項目が紹介された。NBAS 運用の成果として、次のことが挙げられた。

- 学生の振り返り（リフレクション）を促す仕掛けとして、NBAS に大きな期待がある。
- セメスターアセスメントを通じた、学生と教員とのコミュニケーション。
- 学士力アセスメントを通して、「専門性を通じた汎用的能力の醸成」とは何なのか、教員に考えるきっかけを与える。
- 実習、演習についても、チームワークやコミュニケーション能力などの側面を意識するようになる。

さらに、課題としては、セメスターアセスメントの実質化、教育プログラムが目指す人材増を、より一層反映したカリキュラムマップ、ポートフォリオ機能と授業記録の強力なリンクなどが挙げられた。

3. 第二部

パネルディスカッションでは、まず、岡山大学教育開発センター 佐々木健二 教授による「岡山大学における学士課程教育構築システム (Q-cum) の活用」と題して、話題提供があり、続いて、前新潟大学理事 絹川正吉氏より講演があった。どのようにすれば、学生の質的保証が可能となるのか、といった議論があり、DPに基づいてカリキュラム・教育内容の見直しを行うとともに、個々の学生の能力を最大限引き出す教育プログラムを導入し、学生の学士力を向上させる仕組みを構築することの必要性が挙げられた。さらに、学生に提供する教育の内容と成果を可能な限り客観的な指標を用いて可視化することが、きわめて重要であると考えられていることが述べられた。





4. 考察

現在の日本の大学の課題として、学修成果の可視化は大学教育の潮流であるが、これは難しい課題であり、その方法は模索段階にあることである。新潟大学の主専攻プログラム・NBAS の試みはこの課題に応えようとする意欲的な取り組みであると考えられる。新潟大学の挑戦は、カリキュラムマップの作成や、各授業科目の学修到達目標への寄与を数値化するなど多岐にわたっており、多くの示唆を得ることができる。NBAS によって学生の学びに影響を与えることは、大きなねらい（自律的学習者の育成）のひとつであるが、このシステムを導入することで、従来型学問教育からの意識転換を教員に促すことができるという効果があることは注目すべき点である。今後ともこの先進的な取り組みから学ぶことは大きいと考える。

5. 高等教育研究会 2014年度大学職員フォーラム

『日々の業務を通して見える学生の実状をどう捉えるか』

日 時	：	平成27年1月10日（土）13：30～17：00
場 所	：	京都私学会館
主 催	：	高等教育研究会
概 要	13：30～	大学職員フォーラム世話人あいさつ
	13：35～	基調報告
	14：35～	話題提供1
	15：20～	話題提供2
	15：45～	話題提供3
	16：10～	質疑・応答、パネルディスカッション
	17：00～	終了

1. フォーラムの趣旨

本フォーラムの趣旨は、次の通りであり、話題提供では、大学職員の見線から見た学生の実状について多くのことが語られた。

この間、大学に入学したものの、学業への意欲をなくし、休学や留年または中退する学生が増加しています。その理由は経済的な問題だけでなく、大学での「居場所」を作ることができず、精神的な不調に陥ったり、引きこもりとなってしまいうようなケースも増えており、多様化する学生への対応に苦慮する大学の現場において、若者をめぐる社会的な状況や構造的な問題を踏まえながら、今の学生をどう見るのか、学生とどう向き合っていく必要があるのか、本フォーラムでの議論を通して考えていきたいと思えます。基調報告では、著書（『搾取される若者たち』（集英社新書）、『働きすぎる若者たち』（NHK生活人新書））などで、現代の若者問題を様々な角度から論じておられる甲南大学の阿部真大先生をお招きし、阿部先生の現在の研究対象である働く現場（ケアワーカー）を通して見える今の若者の特徴などを明らかにしていただきながら、今後の日本社会が若者を支えるために何が必要であるのか問題提起をしていただきます。

阿部先生からの問題提起を踏まえた上で、現場で学生に対応する大学職員の方々から、日々の業務を通して見える学生の実相や、大学としての組織的な対応をどう進めていくのかについて話題提供をしていただき、全体での議論を深めたいと考えています。

2. フォーラムの要旨

まず、基調報告では、「マジメでなければ生きていけない、就職できない」学生たちの実状や貧困、搾取、過労自殺などの若者を取り巻く諸問題に言及しつつ、ほどほどに現状に満足している若者たちの人生観などについて種々の見解が報告された。その他、話題提供

では、多様化する学生を主なキーワードに展開された。多様な学生に対応するために有効とされているのが、ピア・サポートであるということに言及された一方で、本当に以前と比して学生は多様化しているのかという問題意識も提起された。さらに学生支援に関する今後の課題についても多くの事項について議論がなされた。

3. 考察

多様化する学生への対応として、ピア・サポートが挙げられていたが、「大学における、ピア・サポートは、学生の主体性を尊重する『課外活動』に近い」という大学ピア・サポートの特徴が述べられていたが、このような考え方は、本学の正課教育と正課外教育の共創という観点にも有意義であろうと考える。



6. 京都ジョブパーク・京都キャリア教育推進協議会 共催シンポジウム
『プレイベント in 京都ジョブパーク』
テーマ：「多様化する学生に向き合う大学キャリア教育の現状と課題」

～未就職予備軍の^{レジリエンス}回復力をどう引き出すか～

日 時	：	平成 27 年 1 月 31 日（土）10：00～17：00
場 所	：	京都私学会館
主 催	：	京都ジョブパーク・京都キャリア教育推進協議会
後 援	：	大学コンソーシアム京都
概 要	【午前の部】	
	10：30～11：30	施設見学ツアー
	【午後の部】	
	13：00～13：10	開会挨拶
第一部		基調講演
	13：10～14：00	
	14：00～14：30	事例紹介 1
	14：30～15：00	事例紹介 2
	10 分	休憩
第二部		パネルディスカッション
	15：10～16：20	
	16：20～17：00	名刺交換会・交流会（含む、閉会の辞）

1. シンポジウムの概要

本フォーラムの趣旨は、多様化する学生とそれら学生を取り巻く諸問題についてキャリア教育という観点から、就職の問題や学生支援の課題について議論を行い、学生がおかれている現代的な状況について理解を深めることにある。

2. シンポジウムの要旨

シンポジウムは、「多様化する学生を前に真価が問われ始めた大学キャリア教育の現状と課題」、「ファシリテーションの定着による個の活性化と自律への取組み」そして、「教育情報公表義務化とリメディアル教育—学生目線に立った対話とフィードバックのある授業を目指して—」と題してそれぞれ基調講演と事例報告が行われた。キャリア教育では、いわゆる 2・6・2（実態は 1・8・1 かもしれない）層問題において、特に中間層の分散が大きいゆえに個別的なサポートが必要であることなどについて言及された。また、ファシリテーションを通じた教育プログラムが学生を変える事例を元受講者で現在は、当該教育プログラムのコーディネータを勤める方からの経験などが語られた。さらに、教育情報（退学率など大学にとって都合の悪い情報など含む）を公開することによって、より、学生に向き合った形の教育を再構築する必要性などについても議論がなされた。

3. 考察

本シンポジウムでは、キャリア教育を考えることが議論の中心であった。単に、就職活動（就社：職に就くというより、会社に入るといった考え方）のための教育ではなく、レジリエンス問題（立ち上がる力）としてキャリア教育を捉え直すことが重要であるように感じた。この意味においては、いわゆる汎用的な能力（社会人基礎力など）を涵養することを目的とする教育プログラムや専門教育であっても、いわゆる人間力のようなものの育成を謳う教育などの見直しを図る際には、多様化する学生の存在に鑑み、広い意味でのキャリア教育という観点でもプログラムの構築をしていく必要と重要性があるのではないかと考える。



7. 大学コンソーシアム京都 第20回FDフォーラム

『学修支援を問う～何のために、何をどこまでやるべきか～』

日時：平成27年2月28日(土)～3月1日(土)

場所：同志社大学

主催：公益財団法人 大学コンソーシアム京都

後援：文部科学省・京都府・京都市

概要 【一日目】

13:00～13:10 開会挨拶

13:10～17:10 シンポジウム

シンポジスト：

日向野 幹也 (立教大学 経営学部教授・リーダーシップ研究所所長)

溝上 慎一 (京都大学 高等教育研究開発センター大塚教育学研究科教授)

浜島 幸司 (同志社大学 学習支援・教育開発センター准教授)

岡部 晋典 (同志社大学 学習支援・教育開発センター助教)

コーディネーター：

村上 正行 (京都外国語大学 マルチメディア教育研究センター准教授)

【二日目】

10:00～15:30 分科会：

第1分科会

「大学教育における『対話』の可能性」

第2分科会

「キャリア教育再考！～今こそホンネで語り合おう～」

第3分科会

「学生FDと大学マネジメント」

第4分科会

「障がい学生支援FDの背景、現状および課題」

第5分科会

「反転授業により学生の能動的な学びへの転換をはかる」

第6分科会

「自校教育を通じた『建学の精神』の具現化」

第7分科会

「大学の英語教育の課題と対策」

第8分科会

「時代が求める新たな教養教育

～『活用』と『探求』をキーワードとした教職協働～」

第9分科会

「学びあうコミュニティをつくる

～学修支援とピア・サポート～」

第10分科会

「知識と思考のクラウド化にどう対応するか」

第11分科会

「全学的FD推進組織の現状と課題」

第12分科会

小規模大学における学修支援

第13分科会

「大学図書館からの学習支援の工夫～連携を視座に～」

第14分科会

「モチベーションクライシスと向き合う」

1. シンポジウムの内容

まず、開催校（同志社大学）より、開会の挨拶があり、その後、コーディネーターの村上正行 京都外国語大学 マルチメディア教育研究センター准教授の全体進行によりシンポジウムが行われた。会場は850名（最大1000名）を収容できる同志社大学の寒梅館ハーディーホールで行われ、ほぼ満席状態の大変に熱気のあるシンポジウムとなった。シンポジウムの趣旨は、次の通りである。



「グローバル化や経済状況などの社会の変化、大学に入学する学生の多様化を背景として、大学ではさまざまな学修支援が行われるようになってきている。大学として学修支援の充実は重要な課題であるが、一方で主体的な学びを促すことも求められており、学修支援のあり方が問われていると言える。

今回のシンポジウムでは「学修支援」を捉え直すことを目的として、いくつかの事例を概観した上で、学生の主体性を育みながら、その学びをどのように支援していくかについて議論していきたい。」

シンポジウムは、まず、四名の講師より講演があり、後にパネルディスカッションが行われた。最初に、日向野幹也 立教大学 経営学部教授・リーダーシップ研究所所長より「大学でのリーダーシップ教育」と題して講演が行われた。講師は、現在注目されているプロジェクト型授業などの概念を知らずにすべて実行していたという話題から、立教大学で行われている、BLP（ビジネス・リーダーシップ・プログラム）、GLP（グローバル・リーダーシップ・プログラム）について説明があった。上記のプログラムでは、1年次生に対してウェルカムキャンプなどを開催しており、学生は学部への帰属意識が高く、学部に対する提案や実際





に提案を実行するなど活発な学生の多さが特徴的であることが述べられた。本講演では、現役の学生とリーダーシップ・プログラム修了者で学部卒業と同時に教育機関コンサルティング会社を立ち上げた松岡洋佑氏が登壇するなど、現役生、卒業生の活躍が同プログラムの成果として紹介された。

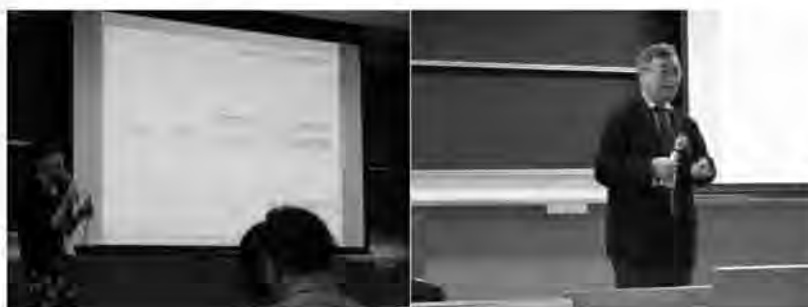
次に、溝上慎一 京都大学 高等教育研究開発推進センター大学院教育研究科教授より、「学修支援なのか、学習支援なのか？—単位制とトランジションをどう折り合わせるか—」と題して講演があった。本講演のメインになっている議論は、「学修」とは単位制（学習時間）に基づく与えられた枠（正課教育）内の学習のことであり、現在求められている学生のより積極的な学びを前提にするならば、こうした枠を超えた学習の必要性について文科省の文言を通して説明があった。学修よりも概念の広い学習において、どのような支援が望ましいのかという「学習支援」の議論が重要であることが述べられた。

最後に、岡部晋典 同志社大学 学習支援・教育開発センター助教と浜島幸司 同志社大学 学習支援・教育開発センター准教授より、「同志社大学良心館ラーニング・コモンズにおける学習支援体制と現状」と題して講演があった。講演内容は、1.良心館ラーニング・コモンズの紹介、2.実際のデータ、3.人的支援体制、4.今後「何をどこまでやるべきか」である。まず、ラーニング・コモンズの紹介が動画などを交えて行われ、学生の施設利用データなどが紹介された。通年で利用者の多い学年は1年次生で、夏季休暇中の利用で最多の学年は3年次生であるなど、利用状況の特徴が紹介された。また、学習相談のリピーター率も39.2%となっており、利用者の4割程度が積極的にラーニング・コモンズを利用していることがわかる。人的支援体制では、アカデミック・インストラクター（教員3名）、ラーニング・アシスタント（大学院生11名）、情報探索アシスタント（図書館から1名）であることが紹介された。最後に、ラーニング・コモンズでの学習支援の範囲は、あくまでも正課外での学習の支援であり、教えるのではなく、アドバイス、助言というかたちが望ましいことが説明された。

2. 第5分科会の内容（参加分科会）

第5分科会では、「反転授業により学生の能動的な学びへの転換をはかる」をテーマに、土持 ゲーリー 法一 帝京大学 高等教育開発センター教授、森朋子 関西大学 教育推進部准教授、大浦弘樹 東京大学 大学院情報学環特任助教より報告があった。本分科会のテーマにあるように、大学教育は、「教える」から「学ぶ」への転換が求められており、学生が自ら学ぶことができる環境づくりの一環として、ICTの活用やそれに関連して反転授業が効果的であることが報告された。また、MIT方式（学生が作る）試験問題の活用やコンセプト・マップを活用したラーニング・ポートフォリオなど、それぞれを複合的に授業に導入することで、学生の学びが能動的な学びへと転換されていった実践事例についても紹介があった。また、反転授業における対面授業の重要性について、授業外の学修である動画を通じた学修や事前学修よりも対面授業において上記のようなMIT方式試験やラーニング・ポートフォリオなどの工夫がなされていることが必要であると説明があった。また、反転

授業の設計には 2 種類があり、概念理解やスキル習得を教育目標として対面授業を個別演習や指導に充てる「完全習得学習型」といわゆる PBL（プロジェクト学習）といった実践的な学習を対面授業で行う「高次能力学習型」であることが述べられた。「完全習得型学習」では、成績の伸びが確認されているが、「高次能力学習型」では、綿密な授業設計が不可欠であり、学習理論に詳しい専門家が必要であることが説明された。



3. 考察

本シンポジウムでは、大学教育のパラダイム転換（教育から学修（学習）へ）という昨今の大学を取り巻く状況の変化に対応する各種の教育上の取組の多くが紹介された。特に、アクティブ・ラーニング（能動的学修）の概念を「能動的学習」と捉える場合に、「プロ・アクティブ・ラーニング」と表現し直して考えるべきであるという主張は示唆的であると考える。学生が自ら進んで学ぶことと、大学が設計し、提供する教育との折り合いをどのようにするべきか。つまり、学修支援（学生にしっかりと単位を取らせる、あるいは学士課程教育を受けさせる）という文脈での支援と、学修の枠を超えた、あるいは授業（教室）の外にある学生の学びをどう支援するのかという観点との違いを認識したうえで、今後の大学教育における学生の学びの支援を捉える必要性を感じることができるシンポジウムであった。

Ⅸ. 活動日誌・編集後記

活動日誌

(2014年9月1日～2015年3月31日)

年 月 日	記 事
2014年 9月22日	山口大学・創基200周年記念 共育ワークショップ2014 『みんなで山大の教育（共育）について語ろう！』 場所：総合図書館アカデミック・フォレスト 対象：本学教職員・学生 【開会挨拶】 13：30～13：35 【基調講演】 13：35～14：05 「みんなで創り上げる大学」 山下 貴弘（一般社団法人K S I A 常務理事） 【グループワーク①】『YU World Cafe』 14：05～15：10 「“発見し・はぐくみ・かたちにする”について考えよう！」 【グループワーク②】『未来新聞づくり』 15：20～16：00 「グループアイデアをかたちにしよう！」 【全体発表】 16：00～16：50 【閉会挨拶】 16：50～17：00 （総合司会 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授）
2014年 9月26日	大学教育再生加速プログラム事業推進委員会（YU-AP委員会）（準備委員会）
2014年10月20日	テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）タスクフォース第1回会議
2014年10月27日	テーマⅡ（学修成果の可視化）タスクフォース第1回会議
2014年11月18日	テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）タスクフォース第2回会議
2014年11月25日	テーマⅡ（学修成果の可視化）タスクフォース第2回会議
2014年12月 2日	テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）タスクフォース第3回会議
2014年12月12日	第1回大学教育再生加速プログラム事業推進委員会（YU-AP委員会）
2014年12月19日	山口大学・大学コンソーシアムやまぐちSDセミナー2014 『大学職員の企画力が大学を変える』 場所：山口大学学生会館1階大ホール及び2階会議室 主催：国立大学法人山口大学、大学コンソーシアムやまぐち 共催：大学マネジメント研究会 【開会挨拶】 13：30～13：40 【基調講演】 13：40～14：50 「今、期待される大学職員の企画力」 本間 政雄（学校法人梅光学院理事長） 「若手職員から育む企画力」 末次 剛健志（佐賀大学総務部企画評価課係長） 【グループワークセッション】 15：00～16：50 「Let's Challenge 大学職員の企画力が大学を変える」 【閉会挨拶】 16：50～17：00 （ファシリテーター 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授 河島 広幸 大学教育機構大学教育センター助教（特命））

年月日	記 事
2014年12月22日	テーマⅡ（学修成果の可視化）タスクフォース第3回会議
2014年12月24日	テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）タスクフォース第4回会議
2015年 1月19日	テーマⅡ（学修成果の可視化）タスクフォース第4回会議
2015年 1月20日	テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）タスクフォース第5回会議
2015年 1月23日	第1回アドバイザー会議 （アドバイザー：Mary Deane Sorcinelli名誉教授（(Professor Emeritus, Department of Educational Policy, Research & Administration, University of Massachusetts Amherst, USA)）
2015年 1月30日	第2回大学教育再生加速プログラム事業推進委員会（YU-AP委員会）
2015年 2月18日	テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）タスクフォース第6回会議
2015年 2月18日	自己点検・評価タスクフォース第1回会議
2015年 2月24日	テーマⅡ（学修成果の可視化）タスクフォース第5回会議
2015年 2月27日	第2回アドバイザー会議 （アドバイザー：松下 佳代 京都大学高等教育研究開発推進センター教授）
2015年 2月27日	山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP） 「ループリック事例報告ワークショップー『山口と世界』授業実践などを例にしてー」 場所：大学会館2階会議室 【開会挨拶】13：30～13：40 【事例報告】13：40～14：50 （1）「『山口と世界』コモンループリック開発と授業実践」 林 透（山口大学 大学教育機構大学教育センター准教授） （2）「『山口と世界』授業実践とループリック活用」 星野 晋（山口大学 大学教育機構大学教育センター講師） （3）「名古屋商科大学におけるループリック活用実践」 亀倉 正彦（名古屋商科大学経営学部教授） 【シェアリングタイム】15：00～16：20 （1）「コメント&アドバイジング～成績評価への指針～」 松下 佳代 （京都大学高等教育研究開発推進センター教授） （2）グループ対話 （3）全体共有及び質疑応答 【閉会挨拶】16：20～16：30 （総合司会 河島 広幸 大学教育機構大学教育センター助教(特命)）
2015年 3月 9日	第3回アドバイザー会議 （アドバイザー：山田 礼子 同社大学 教育支援機構副機構長・社会学部教授、橋本 勝 富山大学 大学教育支援センター教授）

年月日	記 事
2015年 3月 9日	<p>山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP） キックオフシンポジウム『ラーニングコミュニティの創造を目指して～山口大学・大学教育再生加速プログラムの挑戦～』</p> <p>場所：山口グランドホテル 対象：大学関係者（教職員・学生）、一般の方</p> <p>【開会挨拶・来賓挨拶】 14：00～14：10 【概要説明】 14：10～14：25 【基調講演】 14：25～16：00</p> <p>(1) 「アクティブ・ラーニングにおけるパフォーマンス評価の可能性」 松下 佳代 京都大学教授（YU-APアドバイザー）</p> <p>(2) 「学修行動調査の可能性～学修到達度調査との連携」 山田 礼子 同志社大学教授（YU-APアドバイザー）</p> <p>(3) 「学生参画型FDの過去・現在・未来」 橋本 勝 富山大学教授（YU-APアドバイザー）</p> <p>【パネルディスカッション】 16：10～17：20 「ラーニングコミュニティの創造を目指して ～山口大学・大学教育再生加速プログラムの挑戦～」</p> <p>【閉会挨拶】 17：20～17：30 （総合司会 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授）</p>
2015年 3月10日	<p>第1回スチューデント・リーダー・プログラム（SLP） 『学生参画型FDってなに？～大学教育を楽しくするには～』</p> <p>場所：共通教育棟2階演習室21</p> <p>【趣旨説明】 10：00～10：05 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授</p> <p>【講演】 10：05～10：35 「学生と楽しむ学生参画型FDの極意、教えます」 橋本 勝 富山大学教授（YU-APアドバイザー）</p> <p>【プレゼンテーション】 10：35～11：05 「山口大学における学生参画型取組の紹介～山大のデキルを創ります！～」 YC-CAM：理学部3年 杉元 茜、経済学部2年 奥田真也</p> <p>【グループディスカッション】 11：05～11：55 【クロージング】 11：55～12：00 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授</p> <p>（総合司会 河島 広幸 大学教育機構大学教育センター助教（特命） 朴 玲 経済学部2年（YC.CAM））</p>

年月日	記 事
2015年 3月26日	<p>第2回スチューデント・リーダー・プログラム (SLP) 『ジローさんの迫熱教室～できないを「デキル」に変わるには～』 場所：共通教育棟2階演習室21 【趣旨説明】 15：00～15：05 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授 【ショート・プレゼンテーション】 15：05～15：20 「できないを『デキル』に変わるには」 古谷 涼 人文学部2年、井本 圭祐 理学部1年 【ジローさんの迫熱教室in山口大学】 15：20～16：55 中澤 二郎 新日鉄住金ソリューションズ (株) 【クロージング】 16：55～17：00 林 透 大学教育機構大学教育センター准教授 (総合司会 河島 広幸 大学教育機構大学教育センター助教 (特命) 井本 圭祐 理学部1年 (YC.CAM))</p>
2015年 3月27日	<p>第1回外部評価委員会 (外部評価委員：高橋 哲也 大阪府立大学学長補佐、中澤 二郎 新日鉄住金ソリューションズ(株)人事部専門部長、伴 浩一 山口県立山口高等学校長)</p>

山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)アニュアルレポート 2014

発行 : 山口大学
大学教育機構大学教育センター (YU-AP 推進室)
〒753-8511 山口県山口市吉田 1677-1
TEL. 083-933-5261
2015年3月 発行
